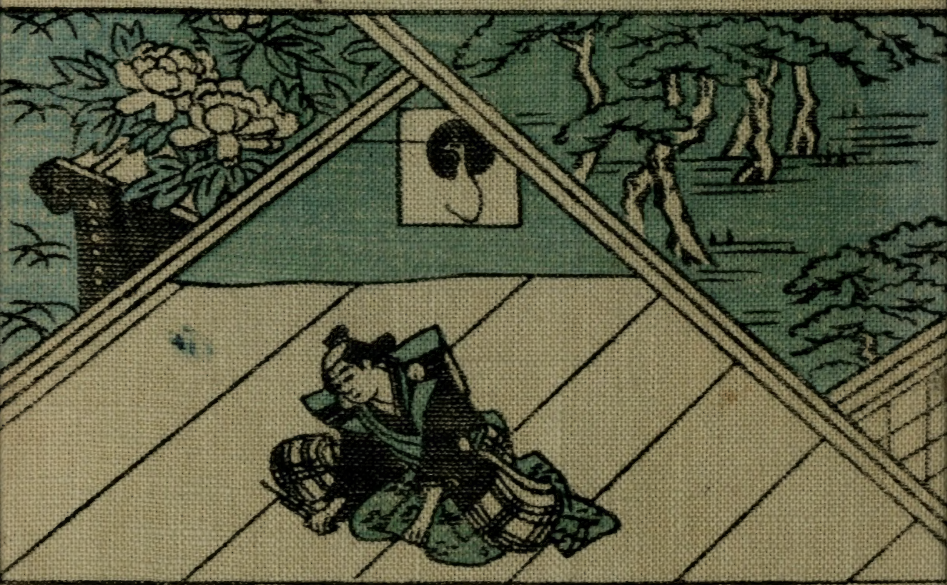
第二巻

つくしのいへづと
苅萱道心石童丸筑紫轢

やへぎりくるわばなし
八重桐廓噺

たまものまへみちはるやかた
玉藻前道春館

よしつねこしごえじやう
義經腰越状

しんうすゆきものがたり
新薄雪物語

時代狂言傑作集

第一卷

春陽堂發行

河竹繁俊
濱村米藏
渥美清太郎
共編

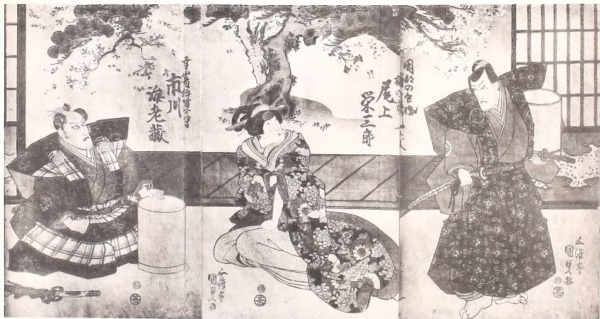
第二卷

時代狂言傑作集

東京
春陽堂發行

市川海老蔵

市川
海老蔵
尾上
栄三郎

解說

「添削筑紫轢」の原曲は「苅萱桑門筑紫轢」と云つて、並木宗輔の作、享保二十年八月十五日から、大阪豐竹座の手摺りにかゝつた義太夫節である。

加藤左衛門重氏と石童丸との親子の哀話については、信州善光寺の親子地藏の說を始め、種種に傳へられるが、畢竟は架空の人物である。この哀話の主相をなす苅萱發心の因は、藤澤山遊行寺の緣起に傳へられる、一遍上人の事蹟の聞き傳へであるといふ。即ち上人が未だ俗界にある時、二人の妾を抱へたが、その二人は双六盤を枕にまどろむと、その二人の女の髮の毛が小蛇になつて咬み合ふのを見て、忽ち發心をしたといふのがそれである。

その他この作は、他の種々の作の影響を受けてゐる。有名な苅萱石童の親子が生き別れをする「山の段」は、近松門左衛門の貞享元年の作「伊呂波物語」の四段目で、中納言藤原の光照が入道して、はる〴〵訪ねて來た妻のいろはの前に、わざとすげなく別れる件り。も一つは、やはり近松の天和元年頃の作「戀塚物語」の四段目に、入道した渡邊渡が、わざ〳〵訪ねて來た我が子の爲若に、名を名乘らずに別れて、その後爲若もやはり僧侶になるといふ件がある。高野山の「山の段」がこの二作に負つてゐる事は疑はれない。殊に前の「伊呂波物語」の場合

は、同じ高野山に於て起つた事件である。

桑原女之助が夢の中で御臺所に挑む、慈尊院境内の場は、やはり近松の作「百合若大臣野守鑑(ゆりわかだいじんのもりかゞみ)」(寶永七年)の、牛頭天王の場の飜案である。又石童丸といふ名は、平家物語などにある維盛入水の場に出て來る小姓、石童丸を借り來つたので、高野山といへばその當時有名なのは、維盛と瀧口入道との話でその維盛に關係のある、殊には稚兒である所から、この石童丸を使つたのであらう。

上に述べたやうな雜多な事件を、とり込んで出來上つたのが「苅萱桑門筑紫𨏍」であるが、この作の世に出る前に、苅萱の事を脚色したものが尙二つほどある。一つは說經節の正本で名題を「苅萱道心」といふ。寛文二年八月の刊行で、六段物である。大體の筋は、加藤重氏はやはり筑後筑前肥後肥前大隅薩摩六ヶ國の大守であるが、十九歲の春御一門花見の折、櫻の花の散るのを見て、無常を觀じ發心して、黑谷で僧になる。ある夜國許の夢を見て、高野山に上る。御臺所は重氏發心の時七月の身重であつたが、その子の石童が十三才の時、姉の千代鶴だけを國へ殘し、二人して黑谷へ行くが、父は高野にありと聞いて、高野へ上る途中學文路(かむろ)の宿でお山の由來を聞き、女は叶はぬといふので石童だけ山へ上る。七日目に石童は父苅萱に逢ふが、父はこの世にないと聞き、敎へられた墓碑を持つて、學文路の宿へ歸つて見れば母は死ん

でゐるので宿屋の主人與次夫婦の助けにより、國へ歸ると姉千代鶴も亡くなつてゐる。石童は六ケ國の大守と仰がれるが、遂に決心して高野に上り、苅萱の弟子になる。後に苅萱だけは信濃善光寺へ行つて、八十三歳で入寂する。と同時に高野山では石童のたうねんも六十三で入寂した。これが善光寺の親子地藏の緣起であるといふのに終つてゐる。有名な「昨日剃つたも今道心、一昨日剃つたも今道心、今道心にては知れがたし」のセリフと同巧の文章が、この中にもある。「あらをかしの物の問ひやうかた、五年十年去年ことし、五日十日きのう今日剃つたるも今道心なり、御身がやうに尋ねては三年三月尋ねても、逢ふまいは治定なり」といふのである。「筑紫𨏍」はこれに大分負つてゐるのである。も一つの作といふのは宇治加賀椽の正本に「苅萱道心物語」といふものがあるといふが、これは未見の書であるから、これについては何とも云へない。恐らくはこれも前と同じやうな物で、親子生き別れをするには違ひないが、たゞ重氏發心の場合に櫻の花だけであるか、或ひは髮の毛の蛇になつた執念話を、持つて來たかどうかゞ疑問である。

宗輔には「筑紫𨏍」を書く場合、これ等の前の著作にも注意をしたらしい。玉屋の與次といふ人名を出したり、髮の毛の蛇になる前に、櫻の花の散るのを見て無常を觀じさせたりして、古色を殘してゐる。「宮守酒」の件は、全く宗輔の創案になるものである。

本卷に收めた舞臺使用の臺本と、原曲とは少し違つてゐる點があるから、それに就いて少しく述べよう。序幕紫宸殿の場へ、大内之介義弘の名代に大江刑部左衛門といふ人が出て來るが、原曲では大江といふ人物はなく多々羅新洞左衛門が出て來る。これはこの臺本を演じた時、座頭の澤村源之助が、加藤重氏と新洞左衛門と、與次と三役を勤めてゐた關係から別の人物になつたわけである。大詰の幕切れは親子の別れで終りになつてゐるが、原曲では石童が歸る跡を、苅萱が見えつ隱れつ追つてゆき、女人堂まで來ると、御臺は臨終である。苅萱は顔を見ずに立ち去らうとするが、與次が目早く見つけるので御臺と一目對面する。そこへ監物太郎が大内之介に繩かけて出ると、新洞左衛門が來て命乞をする。そこで苅萱は「都へ行きて奏問とげ、命乞して得さすべし、それを我が子石童が、筑紫へ送る鰈」と云つて終るのである。これが名題の出所である。この外は殆んど原作通りである。

この狂言を演じて大評判を取つたのは、五代目の澤村宗十郎である。宗十郎はこの當時まだ源之助であつたが、彼が上阪中に院本によつて工夫したもので、殊に高野山の場が大好評であつた。文政十二年源之助が二十八歳の時、七世團十郎に招かれて江戸河原崎座へ九年目で歸つたが、間もなく河原崎座が燒けて、團十郎が上阪した後獨りで孤壘を守つて、天保元年二月に「千本櫻」の七役と法界坊を出した後、三月にこの「添削筑紫鰈」を出したのが大好評で、五十

三日間興行の大入を取り、河原崎座の破損を修繕する事が出來たから、「木挽町まづ苅萱で屋根を葺き」といふ落首があつたとさへいはれる。この狂言で源之助の位置も固まつたのである。爾來この狂言は澤村家の藝となつて、現今の宗十郎も改名の折はこれを演じてゐる。

こゝに收めた臺本は、實に五世宗十郎の初演當時の臺本であつて、役割は、

加藤左衛門重氏後に苅萱道心、多々羅新洞左衛門、玉屋の與次（澤村源之助）、桑原女之助（市川市十郎）、橋立（坂東佳朝）、黒塚藏人、義絲坊（桐島義右衛門）、大内之助、宗悦坊、大江刑部左衛門（成田屋宗兵衛）、駒澤一角（澤村雄次郎）、重氏御臺牧の方（中村琴糸）、櫻木、通陽門院（岩井七之助）、監物太郎、安心坊（嵐七五郎）、千鳥（嵐龜之助）、娘夕しで、與次女房おらち（岩井紫若）等。

この作中では何と云つても「宮守酒」の段が一番勝れてゐる。他は前にも云つたやうに、前に同じやうな作があつて、功を一人に歸するわけにも行かない。多々羅新洞左衛門の皮肉な、つむじ曲りの性格は一寸特異なものである。夕しでなどもよく書けてゐて、男に心をゆるすあたりは特にうまい。女之助も一旦は決心しながら、又心の鈍るなども、意志の弱い、人間らしい性格に出來てゐる。

「八重桐廓噺」は通常「山姥」とか「しやべり」とか呼ばれてゐる。この原曲は、近松門左衛門の作「嫗山姥」で、正德二年七月竹本座上場の淨瑠璃である。山姥は元來支那の書物の傳へる所のものであつて、山中に住む鬼女の類で、丈高く色黑く赤眼黃髮、深山の樹木の間に鳥の巢のやうな物を造つて住み、夜人家を叩いて物を求め、或ひは老嫗の妻になつて、猿のやうに山谷を飛び、人の子を盜むなどといふのである。佛教の方で山姥といふのは、山とは世界、姥とは凡夫の意で卽ち一切衆生輪廻止む事なく、生死に沈淪するのを「よし足引の山姥が、山廻り」と寓意して、謠曲の「山姥」が作られたので、この謠曲から又近松の「嫗山姥」が產れたのである。「嫗山姥」は本來五段物であつて、源頼光と四天王との事を脚色したものである。

初段の口は、小夜中山の宿屋の場で、清原右大將高藤と源頼光との宿爭ひがある。頼光は相手になるのを厭がつて、別に宿端れに宿をとる。中は高藤の旅宿内。高藤の所へ平正盛が訪ねて來て、自分の家來物部の平太といふ者は敵持ちであるから、匿まつてくれといふ。高藤は承諾する。この宿の女中小糸は平太に殺された坂田忠時の娘で、平太の來たのを幸ひ、戀人の下男喜之助を語らひ、平太を殺す。切は小糸實は白菊と喜之助實は碓氷荒童とが頼光の宿へ逃げこんで、小糸は家重代の刀を頼光に獻上する。頼光は嘉納し喜之助を武士にしたて、碓氷の貞光と名をつけてやる。折柄攻めて來た高藤の家來を、貞光は渡邊綱と共に打ちこらす。

第二段は、本卷收錄の廓噺の場である。

第三段では、源賴光が高藤正盛等の讒言で、美濃の國の能勢の判官仲國は累代の被官筋である所から、そこへ身をさける。口は燈籠の段で賴光を慰めるために燈籠を飾る。切は高藤方から仲國の所へ、賴光の首を討てと云つて來る。仲國の妻は初め小侍從と云つて　賴光の父滿仲に宮仕へしてゐたが滿仲の胤を宿し、美女御前といふ子を儲けたが、美女御前は出家になるのを嫌つて、滿仲の意に背き、首を討たれる所を仲光の情によつて命長らへ、母と共に仲國の所へ來てゐるのである。母は賴光の代りに美女御前を討たうとするが、卑怯未練に逃げ廻るのを、仲國と共に首を討つ。と髮の毛の間から書置が出た。それには卑怯未練に逃げ廻れば、親達は恩愛をはなれ討ち易からうと思つての仕業だとしてあつた。

第四段の口は、源賴光の道中。賴光が綱、貞光を連れて道行をする所。中は伊吹山中で盜賊に逢ひ、これを懲らす。と盜賊は今迄賴光ほどの人を見た事がない。どうぞ家來にしてくれと云ふので家來にして卜部の季武といふ名を與へる。切は山姥の住家で、山姥の山廻りの振りがあつて、わが子の事を賴む。賴光は心よく引受けて家來にして、名を金時と賜はる。姥は藏人の子であるから坂田である。これで賴光の四天王は揃つたわけである。

第五段は、賴光が四天王を連れて、鬼退治をして都入りをして、高藤正盛始め惡人輩を討伐

する。兼冬公の息女澤潟姫は目でたく輿入れする。源氏の所領は悉く頼光の手に戻る。

近松門左衛門がこの作を作るに當つて、二段目の八重桐の廓噺に、當時の名女形荻野八重桐をモデルにして、その藝風をとり入れて作した事は、かくれもない事實である。出て來る太夫の名前までも同じく荻野屋八重桐としたのでも知られる。近松門左衛門といふ人は、義太夫節ばかりの作者でなく、歌舞伎の脚本も書いたのである。坂田藤十郎のためにも、近松は幾多の脚本を書いてゐる。かうした歌舞伎脚本も書いた事が、この「嫗山姥」に八重桐といふ人物が出て來た原因である。

この作の歌舞伎にかゝつたのは、安永九年三月市村座で、初代瀨川路考の卅三回忌の追善に「山姥(やまんば)四季英(しきのはなぶさ)」といふ名題で、二代目の路考が山姥を勤め、又、文政七年九月、中村座の二番目狂言に「嫗山姥」を上場してゐる。役割は、

煙草屋源七(源之助)、妹白菊(瀨川菊次郎)、八重桐(瀨川菊之丞)、澤潟姫、怪童丸(岩井粂三郎)等である。源之助は五世宗十郎、菊之丞は五代目、粂三郎は六代目の半四郎である。

「八重桐廓噺」は近松の作中でも、度々演ぜられるものであるが、その價値は廓噺の馬鹿げた大騒動の、物語やうの振りにある。「しやべり」といふのは、廓話しをしやべり物語るからの唱へである。四段目の山廻りも、後世の歌舞伎の山姥物に大なる影響を與へてゐる。

「玉藻前曦袂」は寛延四年正月に、大阪豊竹座の操りにかゝつたもので、作者は浪岡橘平、淺田一鳥、安田蛙桂三人の合作であるが、これは現今行はれて、こゝにも收めた「道春館」のある物とは違つてゐて、現今行はれるのは、この作より後五十五年を經過した、文化三年五月に鶴澤伊之助座にかゝつた「増補玉藻前曦袂」である。作者には近松梅枝軒、佐川藤太南名の添削とある。

玉藻前の、謠曲の「殺生石」などにも作られた傳說は、「海藏寺開山傳」、「神明鏡」などに見えるが、近衛院の御宇に容顏無双の美女が宮中に化來して、その身から眩い程光をはなつので玉藻前と名づけた。やがて后になつて帝を惱ますので、陰陽博士阿部清明が占ひ奉ると、これは狐の精で、支那の周の幽王の后になつては褒似といひ、後夏の桀王の后になつては妲妃といひ、殷の周王の后になつては末妃と稱して、國々を惱まし後我國へ渡來したのであるといふ。晴明がこれに幣を持たせて祈ると、忽ち七色の狐となつて下野那須野ケ原に飛び去る。上總之助、三浦之介が之を狩つて射止めたが、その血は滴つて殺生石となり、人ばかりでなく空を飛ぶ鳥地を走る獸まで惱ますのを、相州海藏寺の開山、玄能和尚の法力で石を破碎したといふ。

「玉藻前曦袂」はこの傳說に依據したものである。人皇七十四代鳥羽院の御宇である。皇子二

方まします中、兄宮薄雲皇子は日蝕の日の御誕生である所から、弟宮が寶祚をお繼ぎになる。薄雲皇子は右大辨時澄などを語らひ、謀叛の企を起す。丁度その折、帝には御惱があつたので、右大臣藤原通忠卿は、陰陽博士阿部泰成に命じてその原因を探らせると、今御行方の知れぬ玉藻前は三國傳來の狐の精で、今は那須野ヶ原にあるといふので、早速三浦之助義明、上總之助常廣兩人に命じて之を討ちとらせる。兩人は命を奉じて關東へ下向する。後で泰成は皇子方に味方して、東國へ行つて謀叛し給へと建言する。皇子は關東へ行き、三浦上總兩人さへ討ち取れば恐るゝものなしと關東へ行く。それが即ち通忠泰成等の計略なので、玉藻前が那須にありといふのは僞りで、皇子を那須野へおびき出し、三浦上總に討ち取らせるためなのである。遂に皇子は敗戰し、鷲塚金藤次は諫言して切腹する——といふ筋で、これに那須與市の筋なども加はつてゐる。道春館に當る段は二段目の切であるが、これは道春でなく通忠卿の館で、通忠は存生であり、且つ初花姫は參內して玉藻前になるなどゝいふ事はない。金藤次もこゝでは死なゝいで上使の歸りに扇を殘してゆくが、それに桂姫が自分の子といふ事が書かれてある趣向である。采女之助は泰成の弟で、桂姫の死後發心して玄翁和尙と名乘るのである。双六をして死を爭ふ件りは、この作にもあるが、通忠も居るので、萩の方が增補の方ほどいゝ役になつてゐない。

「増補玉藻前曦袂」は、前の作より組立てが大きい。梗概を記すと。

初段は天竺の段で、沙牟呂山の麓に馬忠子といふ農夫があつた。ある時矢の立つてゐる鶴を捕へたが、不便に思つて矢を拔いて助けてやると、その翌日馬忠子の所へ女が來て女房にしてくれといふので、夫婦になつて暮すうち、妻は夫の貧乏なのを見て鶴裳といふ絹を織つて上げたいが、出來上るまで仕事場を見てはいけないといふのを、好奇心からのぞいて見ると、妻は鶴の姿に變じて自分の羽を拔いて織つてゐたが、それをさとつて何處かへ飛び去る。跡には鶴裳が殘つてゐたが、馬忠子は妻戀しさに方々を尋ね歩く內、所の領主で慈悲深い普明長者に出逢ひ右の話をすると、長者は不便に思ひその衣を價よく買つてやらうといふ所へ、一陣の風が來てその衣を吹き飛ばす。馬忠子、長者は驚いてその跡を追ふと、一人の女がそれを着て獨言を云つてゐるのを聞くと、その女こそ天地開闢以來生息する狐で、この衣さへ手に入る上は女の姿に化して、この土を魔界にしようといふ。長者が獅子王の刀をふり上げれば姿は消える。こゝに南天竺天羅國の班足王は、新に花陽夫人が來てからは打つてかはつた惡政振り、正妻の采妃夫人の目鼻を的にして、花陽夫人が弓を射るといふ所へ、一頭の獅子があばれ込む。花陽は驚いて逃げるが、それは普明長者の刀獅子王のなす業で、花陽は狐となり逃げてゆく。普明采妃兩人の力によつて、國は治まり、班足王は發心して僧となる。

第二段は唐土で、殷の紂王の所へ輿入れする妲妃の行列の途中、狐が乗物へ乘り込んで妲妃を殺し、紂王の后になるが人は知らない。紂王も班足王同樣の惡政を行ひ、家來の文王に文王の子の肉を食はしたりするが、文王は太公望の智略によつて紂王を弑する。妲妃は樓門まで逃げて、飛び來る矢を物とせず爭ふが、降魔の名鏡に恐れをなし遂に切り殺されると、その屍から一脈の陰氣が立ち上り、それが金毛九尾の狐となつて東へ飛ぶ。

第三段から日本になる。三段目の口は清水の場で采女之助桂姫の見染め。切が即ち道春館の場。「玉三」と稱して義太夫の語り物としても、著名な所謂三の切である。

第四段の神泉苑では、初花姫をとり殺し、變つて宮中へ入りこんだ玉藻前と、薄雲皇子とが出逢つて、薄雲と玉藻とは密通し、その代り皇子が天子になつたら、佛法王法ともに滅ぼして日本を魔界にしてくれと薄雲に賴む。廊下の段で、美福門院はじめ玉藻のために君寵を奪はれた女御達が、狐である事を知つて、玉藻前に切りつけるが、目的は達せられない。十作住家になつて、那須野ケ原に十作といふ農夫があるが、この頃そこの娘おやなが二人出來て、どちらが本統のおやなか分らない。そこへおやなの夫大六が都方の道春卿に仕へてゐたが、久し振りで歸つて來るが、これもどれがおやなであるか見分けがつかぬ。そこで都でとり沙汰の金毛狐が那須野へ來たといふから、一人は狐であらうと獅子王の刀を出すと、一人の女が狂ひだすので

切り殺すが、十作はその獅子王は贋物、贋物で生をあらはすのは狐であるまいと云ふ。大六はそれをたてに獅子王の刀を十作に渡せといひ、今殺したは本統のおやな、も一人は津の國の傾城龜菊といふ者で、面體が似てゐるから、獅子王の刀を取るためにかく計らつたといひ、前からこの家に入り込だ三浦之助、上總之助も出て詰めよる。十作は薄雲方の者であるから中々渡さないが、龜菊が自分の子で、しかもおやなと瓜二つなのも道理、双子で捨子した者だと判明し、切腹して死ぬ時、刀を龜菊に渡す。大六は妻を忠義のために殺したので發心し玄翁と名乘る。
第五段の祈りの段で、玉藻前は阿部泰成に祈られて本性を顯し、那須野ケ原へ逃げる。薄雲皇子は一命を助けられ、四國の地へ遠流される。那須野ケ原の段で三浦、上總が狐を殺すが石となつて生類を惱ますのを玄翁和尚の教化によつて、石が碎ける。
少し筋書が長くなりすぎたが、大體かうした仕組みである。この狂言はいつの頃から上演されたものかは判然としないが、こゝには現行の舞臺本を採用しておいた。
この作の價値は、やはり道春館で、二人の姫が双六をして死を爭ふ繪のやうな場面にある。金藤次は無論類型的の人物であるが、身替り芝居としては、最も著名にして代表的なものである。四段目の十作の家も「双面」を取り込んだ所がちよつと面白いが、しかしこの趣向は遠く近松門左衞門あたりからあるものである。

「義經腰越狀」は原曲名を「南蠻銅後藤目貫」といひ、並木宗輔の作である。享保十八年八月と寫本にあるといふが、外題年鑑に見える所では、享保二十年二月、豐竹座上場の「南蠻鐵後藤目貫」とあるが最初である。作者は同じ並木宗輔であるが、この二作は双方共版本としては傳はつてゐず、寫本として傳來してゐるのみであるが、一篇の組立てには少しも變りなく、多少字句の相違があるのみである。版本として傳はらなかつた原因は、此の作が大阪陣の事を取扱ひ後藤又兵衛基次の事蹟を脚色したものであるが、その四段目で家康に擬せられた足利尊氏を五斗の女房闘女が、鶴ヶ岡で狙撃する件りが餘り露骨すぎたからである。かうした問題を起した作であるから、延享元年には「後藤伊達目貫」と改題され、更にその後江戸の肥前座では「泉三郎伊達目貫」と改題して演ぜられてゐる。忌諱に觸れた作である所から、題名だけなりと變へてその筋をごまかしたものであらう。尙延享元年には江戸肥前座で「義經新含狀」として興行してゐる。「泉三郎」の名題の方は年代未詳である。この「義經新含狀」が更に寶曆四年七月、並木永助によつて增補されて、「義經腰越狀」となつたのである。

このうち、「南蠻銅」と「南蠻鐵」とは世界が頼朝、義經時代ではなくて、南北朝時代である。卽ち、足利尊氏を德川家康に、拘田左衛門利行を眞田幸村に、後藤又次を後藤又兵衛に、新田

義興を秀頼に　それ〴〵擬してある。それ以後の物は、頼朝は家康、泉三郎は眞田、五斗兵衞は又兵衞、龜井六郎は木村重成に、それ〴〵擬したものになつてゐる。

而して亦、現今行はれる「義經腰越狀」の原由は、大體次のやうである。

初段の口は頼朝の御座所の場で、頼朝は弟義經が謀叛の企のあるのを洩れ聞いて、評定のある所へ、義經方の使者として、鎌田の後家貞松尼と、佐藤忠信の母佐藤の局と、權の頭兼房とが來て、謀叛心のない證據として義經の妾靜を鎌倉へ渡せとの難題を、兼房獨り承知して歸るが、即ち兼房は片桐且元、貞松、佐渡の二人の女は大藏正榮の二女に當つて、大阪陣をその儘である、中は東山で義經酒宴の場で、切が、權の頭の獨り娘鵜鷹（うたか）は龜井六郎と戀仲であるが、龜井は君の上意を受けて兼房を問責に出かける、これは二人の女が先へ歸つて權頭の專斷を申上げたからである。兼房は自分の思ふ事のならないのを知り、後事を龜井に托し伺鵜鷹を妻にしてくれと頼んで死ぬ。（これは餘事であるが、龜井は奥女中に「男は好いが氣にむらがある」と云はれる。即ち木村重成の事を匂はせたのである。）

第二段の口は、大津の街道で五斗兵衞といふ目貫師が、酒を飲んで寐てゐる所を、鎌倉の臣、本田次郎近經が通りかゝつて、唯尋常な男でないとにらんで、鎌倉方につけようと話すが、五斗はごまかして去る。後へ父を尋ねて來た五斗の子大三郎をよい人質と欺して連れて行く。

切は五斗の家で、大三郎が居ないので大騷ぎ、其中へ、泉三郎が義經方の使者に立つて、味方に招くので五斗は鎌倉に舊怨あるとて味方する所へ、大三郎が鎌倉の臣となり五斗を味方につけるために、賴朝の狀を以て來る。五斗は鎌倉へ奉公すると、大三郎を欺いて先へ歸し、自分は義經方へ味方する。大三郎が殺される事は、五斗は旣に心中に覺悟してゐるのである。

第三段は、こゝに收めた義經の御前から、泉の邸まで。

第四段は、鬬女の道行があつて、鬬女は鶴ヶ岡で賴朝の乘物と思つて打つたが、それは賴朝でなく本田近經で、鬬女は引立てられるが、本田の情で養子になつた大三郎の手へ無事に渡される。

第五段は、賴朝義經の和睦。

この院本は確かに三段目までは、先づ原曲通りであらうが、四段目は少し穩かに改作したものである。原物の鐵砲の段は、もつと露骨であつたものであらう。

この作は寬政三年の八月江戶の市村座で演じてゐる。その時の役割は、

五斗兵衞（初世淺尾爲十郞）、泉三郞（三世澤村宗十郞）、義經（三世坂東彥三郞）、鬬女（中山富三郞）、德女（岩井粂三郞）、高谷（嵐喜代太郞）等で、粂三郞は後の五世半四郞である。

その狂言は爲十郞が上方へ歸る御名殘で、三番叟鐵砲の段古今の大評判大當りであつたといふ。

「新薄雪物語(しんうすゆきものがたり)」は寛保元年の五月、大阪竹本座上場の操り淨瑠璃で、作者は文耕堂、三好松洛、小川半平、竹田小出雲の合作である。これは寛文九年再版された「薄雪物語」といふ假名双紙によつて書いたものである。院本は、六波羅館、同園外、新清水、園部左衛門詮議、園部館合腹、薄雪姫道行、鍛冶正宗內、敵討といふ組立である。

江戸の歌舞伎に始めて上演されたのは、延享三年五月、中村座であつて、役割は、

園部兵衛、百姓五平次、正宗(藤川平九郎)、幸崎伊賀守、園部左衛門(二世中村七三郎)、奴妻平(二世中村傳九郎)、薄雪姫(玉澤才次郎)、五平次女房(瀨川菊次郎)等で、大當りであつたと傳へられてゐる。

こゝに收めたものは文久三年八月市村座で、「竹春比虎溪三笑(たけのはるこけいのさんせう)」といふ名題の下に演ぜられた時のもので、役割は、

園部兵衛、刀鍛冶正宗(市川團藏)、奴妻平(澤村訥升)、園部の左衛門(市村家橘)、刀鍛冶團九郎、葛城民部(市川九藏)、幸崎伊賀守(市川小團次)、園部の奥方梅の方(尾上菊次郎)、薄雪姫(坂東三津五郎)、腰元まがき、幸崎の奥方萩の方(中村歌女之丞)、秋月大膳(片岡十藏)等であつた。

この狂言は、大役が澤山あるので、餘程の大一座で、役者の顏が揃はなければ出せぬものとされてゐる。中にも園部兵衞の內の場の三人笑ひの件などは、歌舞伎劇の中でも最も澁いものとして算へられ、餘り花やかな場ではないが、よく〳〵味はつて見ると、武士氣質を極めてよく寫しだした、味のある舞臺情調を持つてゐる。

この集には、「苅萱」と「五斗」と並木宗輔の作が二つまでもあるから、その略歷を述べておかう。宗輔といふ人は別に千柳とも號した人で、豐竹座にあつて作する時は宗輔と稱し、竹本座にあつては千柳といつた人である。舍柳、市中庵はその別號。浪花の人で西澤一風の門人である。享保十一年の一風の作「北條時賴記」に始めてその名が見える。この人は中々の大作者であつて、傑作として算へられる物も少くない。竹本座にあつては、竹田出雲の補助となり顧問となつて、例の古今の傑作「菅原傳授手習鑑」、「假名手本忠臣藏」、「義經千本櫻」などは、皆彼によつて名作となつたものである。例へば「忠臣藏」の由良之助の出場などは、立作者の出雲が困じはてゝしまつた時、千柳が四段目の判官切腹をきつかけに出しては如何と注意したと云はれてゐる。出雲の傑作と稱せられる「菅原」の寺小屋の段の幕切れの有名ないろは送りなども、宗輔が他の作ですでに書いたもので、あれ程洗練されてはゐないが、宗輔の創意である。

からして見ると竹田出雲は座元といふ關係から、立作者の位置には座つてゐたものゝ、その大部分の組立ては宗輔の發案であつたかも知れない。宗輔といふ人は實に趣向を立てる事の旨い人であつたからである。その例には彼の絶筆「一谷嫩軍記」を見るといゝ。こゝに收めた「高野山」でも、狐川の場で淨曲の方では二人の無名の人物を點出し、それらの人々の力によつてめでたく收まる、といつた風に、無駄のない實に旨い組立てぶりをしてゐる。出雲が大作者として世に傳へられるのには、宗輔の力のあづかる所甚だ多いやうに思はれる。寛延三年の九月七日に宗輔は此世を去つたが、彼の死後豐竹座に上場せられた「一谷嫩軍記」は、三段目までは彼の筆になつたものである。彼の傑作として後世まで傳へられるものは「苅萱桑門筑紫轢」、「那須與市西海硯」、「釜淵双級巴」、「道成寺現在蛇鱗」「本朝壇特山」、「夏祭浪花鑑」、「一谷嫩軍記」などである。

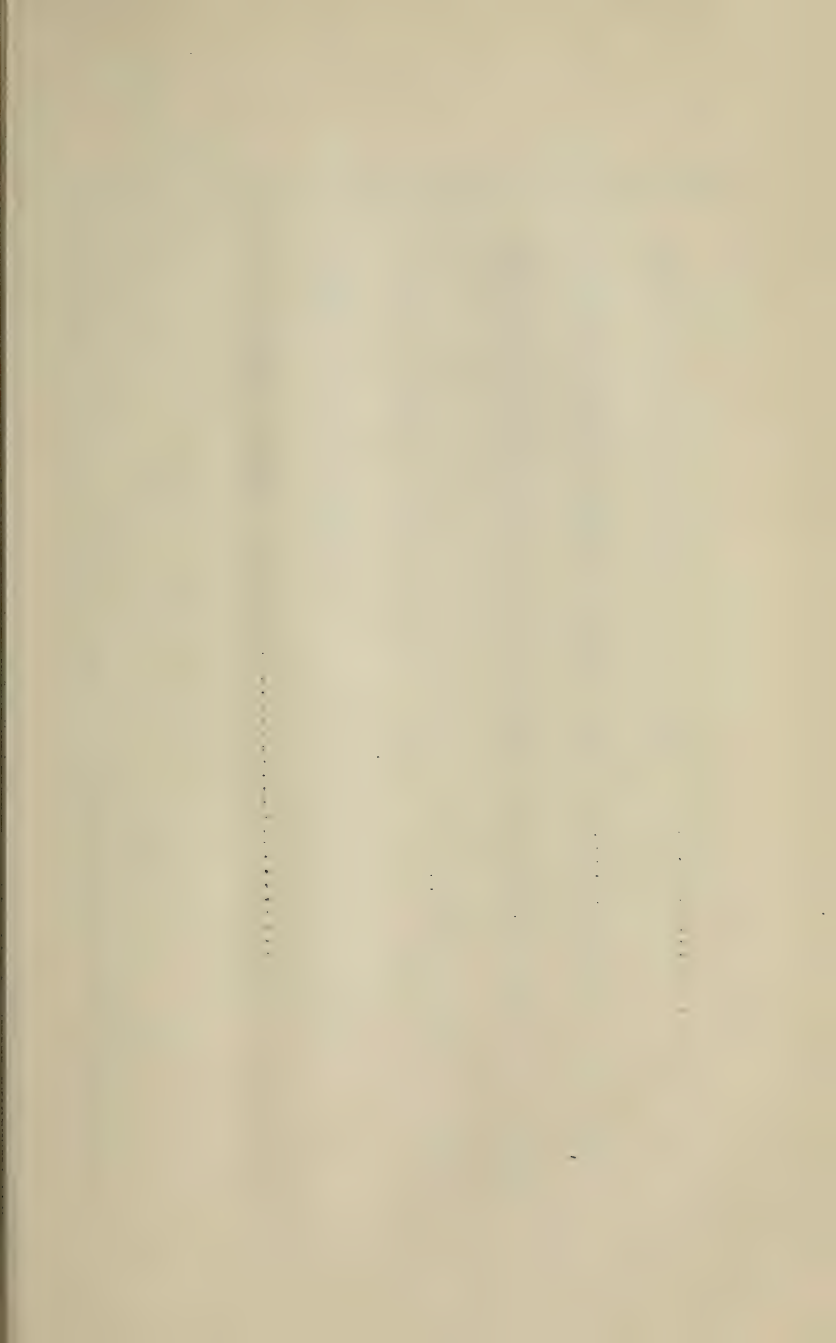
（例によつて、本巻の校訂、解説に際しては、文學士間民夫氏の援助、研究に俟つ所多いことを附記しておく。大正十四年十月初旬、河竹繁俊しるす。）

目次

挿繪の目次と說明

添削筑紫苞
てんさくつくしのいへづと

添削筑紫𨏍（高野山——七幕）

序幕

內裏紫宸殿の場
高尾山岩窟の場
狐川の場

役名　加藤左衛門重氏、關白良基公、松倉主水、五島平馬、監物太郎信俊、大江刑部左門黒塚鬼藏人、大內之介義弘、大佛信藏、駒形一角、樋口戸平、外山左內、玉屋與次。通陽門院、腰元紅梅、早蕨、桔梗、小柳等

本舞臺三間の間高足、擬欄間、高欄階きりきざはし、正面に簾を掛け、すべて紫宸殿の體、左右のつま狐格子、階下の左右に篝火、こゝに五島平馬、松倉主水烏帽子龍神卷きにて、仕丁大勢控へ居る。

天王立にて幕あく。ト鳴物打上げると、大序吉例の東西聲あつて、

へ大道すたれて仁義起り、國家亂れて忠臣をあらはす、この語をもつて鑑みれば、道にも又誠の本道あり、その誠の源をたづぬれば、戀慕愛着に如くは

なしと、豐葦原の陰陽神さぐり給ひし天の逆鋒、種ひろがりし世々の祈り、後小松の院の御治世從ひなびく君子國、時めく春の榮なり。（ト又東西の聲あつて）當今いまだ御幼稚なれば、御母通陽門院殿しばらく寶祚を預り給ひ、踏歌の節會の御行事、嚴重にこそ見えにける。

主水　當今後小松院は、未だ御幼稚なれば、御母公通陽門院しばらく寶祚を預り給ひ、

平馬　卽ち今日禁庭にて踏歌の節會の御行事あるによつて、宵よりつめる我々兩人、

主水　唯今打ちしは六つの時計、御番がはりの時刻でござらう。

平馬　しからば重氏殿參內次第、相かはるでござりませう。

へ禁庭守護の武士は、筑前の國の住人加藤左衞門重氏卿、宵よりつめて宿直守り、假りにさづかる官職に在京のその間、右大將の烏帽子狩衣、花やかなりし出立なり。

ト此內序の舞にて、加藤左衞門重氏、烏帽子裝束にて出て來る。

主水　これは〳〵重氏殿、唯今參內、

兩人　めされたか。

重氏　すなはち君を守護するこの重氏。

主水　最早番がはりの時刻でござれば、

平馬　これにて役目は、

兩人　お讓り申さう。

重氏　しからば後刻面談、

三人　仕るでござらう。

〽皆々うちつれ入りにける。（トこれにて舞臺の皆々はひる、重氏は舞臺へ來る。）

〽出で來る衞士に奥女中、御母公の召使ひ千鳥といへるしなものが、すつきりとした下げ髪に似合はぬ烏帽子裝束も、派手な風俗柳腰男欲しがるくせものとは、目元のあいに知られたり、重氏卿の後に立ちどうやら何ぞ云ひたげに、うぢ〳〵すれば振りかへり。

ト此內下座より千鳥の前下げ髮振袖衣裳の上に、白丁めかす烏帽子をかけ出て來り思入、重氏見て、

重氏　これはしたり千鳥御前、風流なお姿、さては今宵の篝火はその許がお勤めか、ハテしやれた衞

士、焚いてもらふ篝りめは果報なやつナ。

〽中にちつくり色もたすしやれは物師のしるしなり、千鳥の前は先とられ何と答へも恥かしく、顔をあかめてゐたりしが、てんぽの皮と御手を取り。

千鳥　七年餘りの御在京、御參內の度每に御簾のすきより垣間見て、ひよつと燃えつく戀の篝火、思ひの煙り絕えぬ故、つゆほどなりとこの心、申し上げたき願ひにて。

〽形をやつす衞士の役、胸の焚く火に焦れ死ぬ。

命を助けて給はれよ。

〽御弱腰に抱きつく、もとより好む色男子、いなにはあらぬいな船の漂ふ心を押ししづめ。

重氏　志は過分ながら禁中在番の某、御所の女中に不義あるなどゝ風聞あつては後日の難儀、折もあらん。

〽折もあらんと云ひすてゝ、ふり切り給ふを。

千鳥　恥かしい事のありたけを、云はしておいて胴慾な、お上の事は公なればこんな詮議はごさん

せぬ、よしお咎があるならば、罪を私が一人して受けませう、その段には氣遣ひなく、どうなとせうとツイ一口、うれしいお詞聞かしてたべ、さうなうてはなんぼでも放しませぬ。

〽放しはせぬととりつくを。

重氏　イヤ〳〵それは勝手料簡、こゝ放されよ。

〽ゆるし給へと振り放し、あなたこなたへはづしても、なほも放れずつきまとふ。

ト兩人いろ〳〵こなし、この時内にて、

呼ビ　出御。

〽折もこそあれ御簾を巻き上げ、御母通陽門院、關白良基公をはじめとして、公卿を伴ひ出で給へば、二人は庭に敗亡の逃げもやられず平伏は、あやまり入りし風情なり。

トこの内さがり葉にて御簾を巻き上る、内に通用門院十二單衣のなり、關白良基冠装束、この左右に公卿二人つきそひゐる、重氏千鳥これを見て、双方へ別れ平伏する。

公一　ヤア加藤重氏、禁庭守護の身をもつて、女性を捕へみだら千萬。

公二　殊に今日踏歌の節會、かりにも右大將の裝束にて大內を汚す事、無禮千萬。

公一　とく〳〵この場を。

兩人　さがられよ。

良基　さなせそ兩卿、門院よりの勅諚あつて、すなはち出御、つゝしんで承はれよ、加藤重氏、

〽國母御聲うるはしく。

門院　苦しからず、遠慮なせそ。深くも思ひそめたりし色をばいかでさますべき。これ重氏、國に妻子を殘しおき枕の伽も七年餘り、懈怠なき勤番の褒美に千鳥をとらすべし、淋しき閨の友とせよ、そのいにしへの近衞の院、源三位賴政に下されしは、池の眞菰に水增して引きぞわづらふ菖蒲の前、それにはひきかへ戀風に吹きたてられし波の上、なき騷いだる千鳥ぞや、長く比翼の羽がひ打ち交せよ。

〽宣旨あれば重氏公。

重氏　コハ有難う存じまする。

〽千鳥も直ぐに喜びの、胸おちつけど心はせき。

千鳥　またも御意の變らぬ内、私はお屋敷へお先へ參つてツイ待ちませう。あなたは後から御歸館をあそばしませ。

良基　とく〳〵用意致してよからう。

千鳥　有難う存じまする。

〽はやしこなせし妻氣質、いそ〳〵立つて入りにけり、〔ト千鳥こなしあつて花道へはひる。

〽折から知らす朝嵐、人の面も白々と、明け渡りたる四方の空。

呼ビ　御番のかはり。

〽御番のかはりと聲かけて、豐前の大領大内の家臣、大江刑部左衞門階下間近く頭を下げ。

ト序の舞になり、大江刑部左衞門、白髮立烏帽子素袍にて出て來り。

刑部　ハツ、今日の勤番は主人大内之介義弘が役目の所、この程より所勞によつて某が名代、御赦免仰ぎ奉る。

〽奏すれば重氏立ちより。

重氏　病氣とあれば餘儀なき仕合せ、天子にも勅許あるべし、イザ役目を譲り代らん。

〽立ち出でんとしたまふ所へ、執權監物太郎信俊奏聞の事あつて、訴へ出で丶庭上に畏り。

トバタ〳〵になり花道より、監物太郎上下股立にて走り出て來り。

監物　御注進〳〵〳〵。

良基　あわたゞしい奏聞、樣子はなんと。

監物　ハツ、さても高尾の御山は、觀音薩埵の靈驗あつく。

〽諸人の信心日々にいやまし、歩みを運ぶ靈地なるに、十日ばかり以前より身に香染の袈裟をかけ、おどろの髮をふり亂し。

高足駄にて異形の行人、夜は洞穴にとぢこもり晝は山を徘徊して往來をなやますよし、この夜更けに及んでの注進、いかゞはからひ申さんや。

〽關白良基公笏とり直し。

良基　出家ならば佛意を慕ひ難行苦行に身をこらし、道をためす教へもあれど有髮の行者は心得ず、殊に往來をなやますよし、何にもせよ聞き捨てになりがたし、帝都の騷ぎにならざるやう汝無に

行き向ひ、都の內を追拂ふか、異議に及ばゞ召捕つて窮命せよ。

〽仰せの內より承はると立つ所を、刑部左衞門呼びとめ。

刑部　ヤレしばらく。ハツ、夜前までは彼が主人重氏の勤番、今朝よりは手前の主人大內義弘が役目、この相手某に仰せつけ下さるべし。

監物　イヤ大江殿、高尾山は北嵯峨に相つゞき主君重氏が預り場所、その拙者が承はる役目横合から手前にとは近頃我儘千萬。

〽云はせもはてず。

刑部　ヤア、武の道から武を望むを、我儘とは舌長し、是非この相手は某に。

〽云ひすて立つゝ。

監物　ヤアどこへどこへ、人の役目をよい年してから落さうとは大人氣なし、似合うたやうに圓座の上髭を數へてゐめされさ。

〽詞あらして驅け行くを、はしりかゝつてしつかと捕へ。(ト太郎行きかけるを、刑部ひきとめ)

刑部　ヤア年はよつても刑部左衞門、まだ腕先に覺えがある。行かれるならば行つてみよ。

〽ひきとゞめたる力瘤。

監物　シヤ小癪な老耄、そこ退け。

〽小癪な事をともぎ放せば、摑みついて刑部左衛門、詞もよそにふりはなし。

ト兩人ちよつと立廻り、太郎きつとなり、

良基　はや行け。

監物　ハツ。

〽飛ぶが如くに駈けり行く。（ト花道へ走りはひる。）

刑部　うぬ、何處までも。

〽何處までもと刑部左衛門、式も作法も白砂を踏み散らしてぞ追うて行く。

ト思入あつて素袍の袖と裾を小柄にて切り、こなしあつて同じく花道へはひる。

〽通陽門院叡感あり、

門院　大内にては歌爭ひ、武士は武を爭ふ、その家々の習ひとて勇ましき有樣かな、いさむ心に迎ひを待たず嫁入り急ぎし千鳥の前、さぞ館にて待ちかねん、宿の塒を暖めて友がきにせよ重氏。

〽御褥を立ち給ふ、御たはぶれは常陸帶、結ぶ契りは千代八千代かはらぬ國の。

ト重氏こなしあつて立ちかゝり眞中へ來り、さがり葉になり、この道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間向う山幕、正面櫻の立木、日覆より釣枝、上の方に藤のからみし松の大樹すべて高尾山の體、山おろしにて道具納まる。

ト鳴物入り花やかなる出の唄になり、花道より絹羽織の侍油單つきの挾み箱　うち物をかつぎ出る。後より鋲打の乘物を對の六尺かつぎ出る。後より桔梗、紅梅、早蕨、小柳いづれも腰元にて、中間、侍附添ひ出で來り、直ぐに舞臺へ來て、

小柳　なんと皆さん見やしやんせ、今を盛りの御山の櫻、私らばかり、眺めうより御乘物を暫く立てて、

桔梗　ほんにそれ〳〵、櫻のばゞのこの花見、

紅梅　祇園も及ばぬ風景、櫻のもとでのお氣晴し、

早蕨　ちと御覽遊ばしませ。

〽今日ぞ雲井の眉とけて、立ち出で給ふ千鳥の前、花を隈どる御姿いま吹きかへす戀風も、憂きとや人は羨まじ、ト乘物の戸を開ける、中より千鳥の前打掛け衣裳に

て眞中へ出る。）

小柳　あれ見やしやんせ皆さん、小面の憎いあの松に、取りついてゐる藤わいなあ。

桔梗　それはなう、千鳥樣もこのやうに重氏樣の手を取つて、ゐでなさるであらうわいなう。

紅梅　またあんな器量のよい殿御をお持ちなさるといふは、御果報にあやかりものぢやないかいなう。

早蕨　それはさうと、思ひ思うて嫁入り遊ばす千鳥樣、今までは御所住居、やもめ烏の飛びたつやうに思しめし、少しも早う御屋敷へござる筈、それに氣疎い廻りして觀音參りは心得ぬわいなう。

小柳　それいなう、こりや大方思はせぶりのおもたせであらうわいなう。

〽尋ぬればうち笑み給ひ。

千鳥　樣子知らねばさう思ふもことわり、云ひ出すも恥かしい事ながら、重氏樣に惚れたのは今更の事ならず、とうから惚れてゐるわいの、お國には石童君とて若君まである御臺樣、れツきとしてござるとは知りながら思ひ染めては忘られず、焚きつけてゐる衞士の篝火、姿もくろむ濡衣、ツイ門院樣に見つけられハツと心に思ひの外、お氣の通つた粹な勅諚、これといふも白が年月念ずる心の誠、偏に觀音樣の御利生と思ふから、道よりしての御禮參りぢやわいなう。

〽ヲヽ恥かしとばかりにて、御乘物にめし給ふ。

小御　それなれば御尤、いよ／＼大悲の御力でいずむずのないやうに、晩からはねびえの段々よい戀枕、うん／＼雲雷くうせいでん、雷に臍取られぬ内、行かうぢやあるまいか。

皆々　それがよからうわいな。

〽行きかゝりたる向うより、惡者づくりの深編笠供先押し割りのつさ／＼、のさばりながら立寄つて。（ト山おろしになり下座より黑塚鬼藏人深編笠浪人にて出て來り）

藏人　アヽイヤしばらく、御乘物へチト御訴訟のござる者、まづお待ち下さりませ。

侍　ヤア願ひ訴訟があるならば記錄所へ行かぬか、うろたへた素浪人下りをらう。

藏人　うぬらの知つた事ぢやないわ。（ト云ひながら笠を取る、千鳥、前見て立たうとするをとめて、）コリヤ妹見ぬ顏するは手が惡い、兄黑塚の鬼藏人見忘れはせまいがな、最前から樣子を聞けばそちは今日重氏殿へ嫁入りをするとの事、それならば無心がある、某を屋敷へ連れ行き私しが兄でござるおとりたてを願ひますと、たつた一言口添へなば義理にも重氏殿世話せにやならぬ、さすれば兄が身の上にありつくといふもの、又それも出來ぬなら思案があるわえ。

〽妹に向ひ居合腰刀ひねくりおどせしは、大人氣なくも面憎し、當惑ながら千

鳥の前。

千鳥　珍らしや藏人殿、まだ息災でこの世にござるか、エ、お前はナア、云ふに及ばぬ事ながら父上黒塚郡領樣は代々續く禁裏の博士、君の覺えもめでたき家柄、男の子供はお前一人跡目を相續する身をもつて十年以前、清凉殿のお能の時酒興の上人をあやめ直ぐにそれよりお前は駈け落ち、そのお咎めにて父上は浪人したまひ貧しき世渡り、悴故に家をつぶし先祖へ對し云譯なし、必らず何處で逢ふとても兄と思はゞ共に勘當と御遺言、貧家の死をばなされしぞや、それに今更妹よ千鳥よとは、どの顏下げて對面ぞや。

〽恥ぢしめられてさしもの惡者、おしうつむいて詞無く、砂にのの字を書きさゐたり、千鳥の前は涙を押へ。

ア、恨むまい返らぬ事、皆の衆の手前も思はず、よしなき昔の長話、日もたけてさぞや重氏樣もお待ちかね。サア腰元ども。（ト行きかゝるを又とめて）

藏人　イヤ妹、さうはぬけさせぬ、いづくまでも。

〽立ちかゝるを家來ども

侍　ヤア樣子を聞けば大泥坊、兄めでも大事ない、この場をきり〳〵退きをらう。」

藏人　さうはやらぬ。
ト駕籠の傍へ行かうとする、侍皆々つきのける、此内千鳥の前は駕籠へはひる、藏人傍へ行きかゝる
駕籠の戸にて脇腹を當て、ウンとなる、千鳥の前見て思入。

千鳥　乘物やりや。

皆々　ハヽア。
ト山オロシ行列三重になりとの一件殘らず下座へはひる、藏人心づき起き上り、

藏人　罰當りの妹め、この分ですまさうか、歸りを待つて、それ。
ヘ駈け出す後の方。

義弘　しばし〳〵。
ヘしばし〳〵と留むる行相、香の衣を身にまとひ、亂髪逆に生ひしげり一丈餘りの桂の杖、高足駄ふみならし悠々として立ち出づる、さしもの藏人肝をけししばし詞もなかりけり。
トこの内こだま山おろしになり、下座より大内之介義弘香染の衣、つゆをとり、荒縄にて腹を卷き、
珠數を持ち異形の杖をつき出て來る、藏人見てこなし、義弘思入あつて。

義弘　ホヽ目馴れぬ姿不審は尤、我この程より大願の仔細あつて當山に分け入り身をこらせど、胎

金剛部の峰も慕はず、赤木の珠數をおしもんでは四海を胸にたゝむ妙術、汝妹が緣を賴みに重氏に仕へんとは廻り遠き分別、某が幕下につけば高祿を得せしめ先途を見屆けとらすべし、返答いかに。

〽さも横柄なる言葉つき、何がなかきつく猿智慧の、おし直つて頭を下げ。

藏人　何がさて落つく島もなき某、いかやうともお目がねに預りたう存じまする。

義弘　ホヽヲ賴もしゝ〳〵、いで〳〵汝が高祿出世の判じ物、これを見よ。

〽歩みより、松にからみし藤かづら若葉はこゝぞと杖とりのべ、てう〳〵と二枝三枝なぎ落して。（トこの內義弘上手の松にからみし藤を杖にて打ち落し）これ見よや、加藤は元來藤原氏、その藤原をまつこの如く切り放す、この心をば早く察せよ。

藏人　ムヽ近年の謎したり〳〵、その藤原の藤の枝を切り給ふは、この藏人に重氏が首。

義弘　コリヤ聲高し、ひそかに〳〵、すりや判じたる心底は。

藏人　成程、討つ氣ではござれども、いまだ君の御名をも明かさねば、はツと得こそは申すまじ、まづ御姓名をお聞かせ下さるべし。

義弘　ヱヽかく胸中を見せし上は何をかつゝまん、もと某は當山に住む者ならず、九州に隠れなき

大内之介義弘といふ者、そも〳〵この山に艱苦する事我多年にして天下を望む、日夜朝暮大玄谷神の祝詞を唱へ、又は諸國の安否を窺ひ國家を揺る企なせども、合點のゆかぬは重氏一人、助けおいては大望の妨げ、それ故にこそ人知れず。

藏人　首討ちとらばその時は。

義弘　汝をとりたて國取り大名。

藏人　立身出世は近きにあり。

義弘　大望成就はまたゝくうち。

兩人　アラ〳〵嬉しや、喜ばしやなア。

ト この時揚幕にて轡の音する、兩人きつとなる、

義弘　ヤア心得ぬ人馬の音、見咎められては一大事、我は岩窟に身を隠さん、汝も忍べ。

藏人　ハツ。

〽云ひ含めて引き別れ、茂りの内へ入りにける。

ト兩人思入あつて山おろしになり、下座へはひる

〽夕日にそむきて向ふ高尾山、勇の鈴もはなやかに馬上ゆゝしく乗つたるは監

物太郎信俊、身は腹巻に小手臑當、暫時に驅ける沛艾馬、鞍に引添ふ譜代の郎黨大佛新藏、家來引具し驅來り。

ト此内一セイになり、監物太郎着込み凛々しく馬に乘り出る、後より大佛新藏、同じく凛々しきなりにて手勢付添ひ出て、直ぐに舞臺へ來る、よき時分揚幕にて、

刑部　ヲ、イ〳〵。

〽と聲をかけ、はるか下つて刑部左衛門、頭に星霜ふり積れど、身體は忠義の韋駄天走り、かち立ちになりて驅け來り。

ト山オロシになり、刑部左衛門以前の儘走り出て來り。

ヤア曲もなや監物太郎、朝廷にても爭ひし今日の討手、是非某がなり代る、その方はひそかに歸つてくれ。これ頼む〳〵。

監物　ヤア心得ぬ御邊の胸中、さまでの討手にもあらざるに、いきすぢはつての所望、但しその曲物に由緣あるや、心底明かさば品により料簡もあるべきが、無禮に望むはいぶかし〳〵。

刑部　成程それも尤、何を隱さう閑居して異相に見ゆる行人は、我が主君大内之介義弘殿。

監物　ヤ、何と。

刑部　サヽ驚きは尤、かくうち明ける上からはこゝが互ひの料簡づく、この所を聞きわけてこの討手某に。

監物　さう聞いてはなほの事、禁裏表は所勞と僞りこの山に隱れ住むは何のため、それを明かさばともかくも、サアその仔細は。

刑部　サアその儀は。（トつかへる。）

監物　サア仔細はどうぢや。

〽さしつまつたる返答に、しばし詞もなかりけり。

ヤアうろたへたる一言、家來の身として主の心推察せずに仕へめさるか、善なら善、惡ならば何故諫言を加へぬぞ、不覺な事を。

〽云ひ捨てゝひき直す、膳づらをとつてひきとめ。

刑部　ヲヽ尤なり、汝が主の重氏殿とはことかはり、主君大内は古今の猛將、思ひ込んだる初一念、中々家來の諫めも聞かず、存じつきたる大願ありと仔細を云はず山籠り、禁庭へは所勞の云ひ立て、萬一この事あらはれては上をかすむる大罪人、大内の家の滅亡、さるによつて某が無體に追手の役目を願ふ、主持つた身は相見互ひ、一生覺えぬこの親仁が手を下げる。聞きわけ

てくれ、コレ頼むと云ふはこゝの事。

監物　イヤ、洞穴に壇をきづき不及の望なす者多し、かりそめならぬ勅命を受け善とも悪とも仔細を聞かず、私に料簡する事まかりならぬ。コリヤ〳〵大佛、時刻が移る、者共引具し山の手をおつとり卷き、大内之介をとり逃がすな、早く〳〵。

大佛　心得ました。者共つゞけ。

捕手　ハヽア。

〽一度に勇み入りにけり。

ト山オロシになり、大佛先に捕手大勢皆々はひる。

刑部　ヤア奇怪なる監物太郎、六十に餘る某に樣々の口たゝかせ、その上主君の名を明かさせ、無得心なる畜生侍、いツかなこの場は動かさぬ、動かれるなら動いて見ろ。

〽乘つたる馬の尾筒おつとり引戻せば乘り出し、互ひの忠義に情も弱り、勞れを見こみ監物太郎、奥山さして駈けり行く。（と又早苗になり道散に下手へはひる。）

監物　エヽしなしたり、彼奴をやつては一大事。それ。

〽追駈けて行く一筋道、通りかゝりし鋲打乘物、向う見ずの刑部左衞門供先押

分け駈け行くを、つき〴〵の侍立ちふさがり。

トこの時下手より以前の乗物侍付き添ひ出る、刑部左衞門おし分けて行く、侍立ちかゝつて、

侍　ヤア無作法なる老耄め、この乗物にめしたるは、忝なくも禁中より、重氏卿へ賜はりし千鳥の前樣、そこ下りをらう。

〽片より下れとののしつたり、刑部左衞門心づきこれこそは監物に、ほで合させる質物と乗物の棒しつかと捕へ。

刑部　ハテよい所へ千鳥の前、乗物を踏み破り駈け通るは易けれども此方に少し入用な、もとの所へ舁き戻せ、宰領はこの親仁。

〽力にまかせ押し戻す。

侍　ヤア慮外な耄碌、それ。

ト山オロシになり皆々刑部左衞門にかゝるを、張りのけ〳〵乗物に手をかけ差し上げる、皆々双方よりとりまく、とこの見得、かけりにて、

〽深山路さしておし登す。

トこの道具ぶん廻す。

本舞臺三間の間一面の岩組、眞中よき所に誂への岩窟、出入りあり、松の釣枝、すべて高尾山祀頭の體、山オロシ靜かなる禪の勤めにて道具納まる。トやはり右の鳴物にて花道より以前の大佛新藏、捕手に乘物を擔がせ出て來り、皆々に囁き思入あつて岩窟の前へ來り、

大佛　イカニ我が君義弘公、今日禁庭の風聞、當山に於て隱れ住のやから急ぎ誅せよとの勅諚にて、即ち討手向ふの評定、この儀ひそかに達せよと主人新洞左衞門が注進によつて、すなはち家來岩淵平馬お迎ひに參上仕つてござります。

〽と呼ばゝれば、洞の戸を押し開き、義弘は寛々とさあらぬ體にて歩み出で。

トこだまの合方になり大内之介義弘出で來り。

義弘　なに新洞左衞門が家來迎ひに參りしとな、大事を起す某、小事の害を待たんより一先づこの場を立ち退かん。

大佛　それお乘物。

〽乘物引きよせ飛びうつれば、しすましたりと鐵の網、双方よりうちきすれば。

ト義弘何心なく駕籠の内へはひる、大佛こなしあつて乘物へ網ふかける。

ハツ、仰せの通り計ひましてござりまする。

〽監物太郎駈け來り。（ト下手より監物太郎出で來り。）

監物　出かした大佛、ヤア〳〵大内武士の山籠り、不審を晴らせとの勅諚にて、加藤左衛門重氏の家來監物太郎向ふたり、云譯あらば天奏にて申し開かれよ。

〽云ふを聞くより大内之介、五體をゆするうなり聲。

義弘　さては新洞が迎ひと僞り欺かられたか、ヱヽ殘念、口惜しやナア、黒塚はゐぬか、藏人々々

〽齒嚙みをなせしその折から、刑部左衛門追ひたて來る鋲打乘物。

トこの間山オロシになり、下手より刑部左衛門以前のなり、乘物を舁がせ出で、

刑部　ヤレ待て監物、その乘物こそたしかに主君大内殿、さこそと知つて此方もぬからぬこの乘物は、汝の主人重氏へ禁中より下されし千鳥の前、奪ひ取つたは汝へ面當、主人大内を戻せばよし、さなくば恨みの刃この乘物へつき通すが返答いかに。

〽いかに〳〵と聲かけたり、南無三寶と監物太郎。

監物　ヤア勅命下りし千鳥の前、殺さば汝は朝敵同然。

刑部　ヤア主を虜にするからはやぶれかぶれ、サアその乘物此方へよこすか。

監物　サアそれは。

兩人　サア〳〵〳〵。

刑部　返答せよ、監物太郎。

監物　左程忠義をたてる性根を無下にするも本意ならず、殊に主人の寵愛殺されるも残念、理を非に曲げて乘物ぐるめうちかへて得させん、さりながら勅命受けて生捕りたる曲者、私に助けては禁庭への聞え、この儀に當惑。

へ云はせもはてず。

刑部　ヤアそれは一途の料簡、高尾の行人追ひ拂へとは最初の勅諚、生捕れとは異議に及ぶ時のこと。

監物　成程、乘物表だち渡してやらう。ヤア〳〵刑部たしかに聞け、洛中洛外追放の行人網を着せて渡すぞ、いそぎ生捕られよ。

へ双方一度にとり返し。

ト両方とも乘物を取り交して、監物太郎は鋲打乗物に付き添ひ、東の假花道へかゝる、刑部左衛門は網乗物に付き添ひ、花道へかゝり双方思入。

刑部　また幾千代を友白髪。

監物　祝ふ嫁御の色直し。

刑部　雲井のかをり。

兩人　蘭麝の乘物。

へ伴ひ歸る忠臣義士、ためし少なき君が代に、揚ぐる譽は高尾山、勇みいさむる夕間暮。

兩人　さらば。

へ別れ別れになりにける。

ト兩方とも思入あつて東西へはひる、これにて舞臺へ淺黃幕をふり落す、やはり山オロシになり東西の口より、思ひ〳〵の仕出し出てはひる、知らせにつき淺黃幕切つて落す。

本舞臺三間の間正面小高き土手、後八幡山崎の遠見、上の方渡し場の體、狐川と記せし傍示杭建てあり、渡し場に小船一艘、船頭一人ついてゐる、麥つき唄にてこの道具とまる。

ト右の唄にて東西の花道よりいろ〳〵の仕出し出て渡しを渡ることあつて、よき時分時の太鼓になり花道より外山左内上下股だちにて後より中間足輕箱提灯を持ち出る、東の假花道より横口戶平着つけ袴股だちにて出て、同じく足輕箱提灯を持ち、双方舞臺にて行き合ひ、

外山　これは〳〵横口戶平殿、いづれへお出でござるな。

横口　左樣仰せらるるは外山左内殿、シテ貴殿には。

外山　拙者儀は殿のお迎ひ、最早黄昏にも及びますれば、提灯の用意致して唯今参つてござる。

横口　それは御苦勞千萬、しかし貴殿が忠義顔に提灯のお迎ひのと、お髭の塵をとりめされても當時お羽振りのよい拙者、どうして／＼及ばぬこと。

外山　ヤア己が心にひきくらべお髭の塵とは何のたわ言、銘々主人へ奉公なれば、たとひ命をめさるとも、忠義の道に二つはござらぬ。

横口　ハヽヽヽ、なに忠義、なんぼ忠義の奉公のとぬかしても、日の暮れるまでお迎ひにも参らず、今まで何をうぢ／＼、コレこの通りこの戸平が、とうに用意致してござるわえ。

外山　スリヤあの貴殿が。

横口　ヲヽ御奉公といふは、ざつとこの位なもの、なんとして及ぶ事ぢやねえ。

外山　イヽヤ拙者がとくよりも。

横口　イヤ身共が。

兩人　何を。

〽双方いがみ争ふ折から。（トこの時揚幕にて、）

大勢　ハイホウ。

ト兩人きつと向うを見て。

外山　たしかにあれは。

横口　殿の乘物。

ト兩人思入、行列三重誂への鳴物になり、花道より加藤左衛門重氏、袴羽織大小にて、後より侍足輕大勢つき、ずつと後より乘物をつらせ出て來り、

外山　殿樣には唯今お越し。

横口　あそばしましたか。

重氏　兩人大儀、イヤ家來ども、都は洛中洛外も、いづれをいづれと云はれぬ風景、分けて男山の昔を尋ぬるに、豐前の國宇佐の郡より勸請ありし正八幡宮、御鎭座も改まり紀州きやら山とも云つつべき御山、入日に輝く風景、イヤはやどうも、かやうに方々の眺めに心浮かれ、思はずも日が長け、はや暮に及ぶ、見れば渡し舟も向ふへ漕ぎ行き、戻るを待つも退屈、堤づたひに參るべし、案内せよ。

横口　ハツ、この道は登り舟の引場道のでくぼく、中々歩まるゝ所ならず、殿には御乘物にもめされうが家來は何となるものぞ、渡しをお待ちなさるゝがよろしうござりませう。

重氏　いかさま、三里廻つて本街道と云へば、惡所を行くは不興、サ所の名さへ狐川、化かされぬ用心せよ。

外山　まづ〳〵殿には、これへ。

兩人　お越しなされませう。

ト右の鳴物にて本舞臺へ來り二重の上へ住ひ、兩人左右へよろしく住ふ。

横口　それ御提灯。（トこれにて中間ばら〳〵と提灯を並べる。）

〽日暮を急ぐ旅人の五人七人一連れに、乘り遲れじとたちあつまる、漕ぎくゝる舟も人のすし、渡し場せばしと賑はへり。

ト又麥つき唄になり、仕出し來て渡しを渡る事あつて、花道より駒形一角浪人のなり、竹笠脚袢草鞋大小にて出る、舟の内より玉屋與次、やはり旅なりの浪人大小にて出て來る。

〽揉み合ふ中を浪人と覺しき武士が上りがけ、又此方より乘る人も同じ風なる侍が、せり合ふ中を摺り合うて、何とかしけんたしなみの大小、もぢり合ひ急ぎ行きける拍子に、一方の脇差ぽつきと折れにける。

ト兩人の侍ゆき合ふはずみに、一角の脇差折れる、與次思入あつて行きかゝる。

〽はつとばかりに折られし侍、面目なさに笠傾け佇む内に相手の浪人、行き
かゝるをこたへかね。

一角　イヤお侍、暫くお待ち下されませう。

與次　待てと仰せらるゝは、拙者が事でござるかな。

一角　いかにも。
〽急ぐ身なれど是非なくも立留りし互ひのきつ相、すは事こそと見えにける、
重氏卿も乗り遅れさながら逃げても退かれねば、詮方煙草くゆらしてうち眺
めてぞおはします、件んの侍折れたる脇差拾ひ持ち、相手に向つて詞をあ
らゝげ。

ト與次舞臺へとつて返す、重氏思入、一角右の脇差をとり與次の傍へ來て、

一角　誠に恥を申さねば理が聞えず、拙者めは遠州もの、長々の浪人故尾羽打枯し詮方なく餓死せん
よりはと存じ、武士にあるまじき一腰を賣代なし、奉公かせぎに西國へ罷り下る時のあやまち、
とは申しながらこなたとすり合ひに、この如く指添を折られ、あれにお歴々も見てござれば、
面目の雪ぎやうなく難儀に及ぶ、何卒料簡のつけべき儀ならば料簡つけてお通り下され、それ

とも御思案に及ばずば御相手になり、打ち果して下されうや、御返事次第。

〽御返事次第と相述ぶる、相手の侍ちつとも臆せず。

與次　成程御尤、手前粗相者故思はずも不調法、然しお詫は申さぬ、指添が竹光故面目ないとは御胸中が小さい。

一角　アイヤ、指添でも武士の魂、竹光でも苦しうないとはナ。

與次　一筋なお心故これしきを恥辱と思し召すも御尤、イデ某が大恥かいてお目にかけん。

〽刀抜き出し兩手に握り、遠慮會釋もさや越しに、ぽつきと折つて目先へつきつけ。

ト刀をぬき思入あつて折る事あつて見せ。

これ御覧なされ、手前もこの通り、拙者めは播州浪人、都方へ奉公稼ぎの路銀につまりその許は指添拙者は刀、恥辱は倍増し、武士の魂折つて見せたは外聞を共にあらはす御腹癒せ、それとも討果す義に違背は致さぬ、お相手にならうかと申して好みも致さず、又逃げも仕らぬ、いかやうともお勝手次第、サ御返答承りたい。

〽膝たて直せば。

一角　ハテそれは此方も粗相、夜中故お顔も見えず、御縁もあらば又重ねて。
與次　左樣致さう、然らばこの儘。
兩人　お別れ申さう。
　ヘ互ひの禮儀砂うち拂ひ、立別るゝを橫口戸平、大口あいて高笑ひ。
　ト一角は東の假花道へ、與次は花道へかゝる、　口戸平こなしあつて、
橫口　いかに浪人すればとて、折れる物を腰に挾み、奉公稼ぎとはしぶとい和郎たち、武士の風上にもおかれぬ奴等、面付きが眺めらるゝわえ。
　ヘ重氏はつたとねめ付け給へば、主の威光にうづくまる、行き過ぎたる二人の
侍　ツカ〳〵と立ち戻り。
　ト兩人これにてつか〳〵と戻り、重氏の傍へ來て顏を眺めこなし、本釣鐘謠への合方になり、
一角　誠にその許には刀を折り我が心をなだめ下されたれども、今お聞きの通りあれなる御家來、何かと惡口せられ、何ともこの場を濟しがたし、御思案極め下されい。
與次　いかさま、あの通りに沙汰あつては、お互ひの身上ありつきの妨げ、一端すんだる事なるに、よしなき匹夫の口先故うち果す事近頃殘念、と申してあれしきを相手にも大人氣なし、又その主

人にとやかく云はゞ浪人の糧につき、物どりなどゝ蔑せられんも口惜しく、この上は潔ぎよく差しちがへて、最期を共に致さうではござらぬか。

一角　成程、拙者もその覺悟、ハテ命冥加な下郎めが。

〽双方覺悟の身ごしらへ、重氏外の家來を招き何か囁き給ふにぞ、相心得て乘物より御差替への大小を、やがて取り出し差し上げる、その間に兩人座をしめて。

ト重氏外山左内に囁く、左内心得乘物より誂への大小を出す、この内兩人きつとなつて、

與次　御用意よくば、イザ。

一角　イザ。

兩人　イザ〳〵〳〵。

〽すでにかうよと見えければ。

ト兩人さしちがへんとする、重氏眞中へはひり。

重氏　御兩所、まづしばらく。（ト兩人こなしあつて、）

一角　兩人がこの場の仕儀。

與次　お止めなされしは。

一角　仔細ばし。

兩人　ござつてかな。

重氏　いかにも、最前より御兩所の心底尤さこそあるべき儀、然し大功は細瑾をかへりみずと申す、僅かな恥に命を捨て何處の誰とも知らざれば、犬死も同然、又お腰の空いたるは、さびたれども某が差し替へにて塞ぎたし、異議なく受け給はゞ大慶に存ずる。

〽はつとばかりに平伏し。

ト双方へ大小を差し出す、兩人こなしあつて、

一角　コハ有難きお計ひ、違背申すは憚りながら。

與次　いづくいかなるお方とも存ぜず、まして御恩うけるすぢもなし。

兩人　その儀は御免下さるべし。

重氏　ホヽ一理あり至極せり、某ことは筑前の住人加藤左衛門重氏と申す者、即ち當所は禁庭より馬の飼領に下しおかれし拙者が領分、その場に於て御兩所が横死あつては後の難儀、その難儀を遁れんためのこの兩腰、心よく受け給はゞ悦喜ならん。

〽のつぴきならぬ仁者の詞、はつとばかりに押し戴き。（ト一腰づゝ取つて、）

一角　こは冥加に餘る御情。

與次　いつの世にかは報じ申さん。

兩人　我々は。

重氏　アイヤ、お名を承つては恩にかけると申すもの、志が無足致す、顏も知らず名も知らず重ねてお目にかゝつても、お近付きではござらぬぞ、急ぎの道、サお越しなされい。

〽慈悲に慈悲ます御詞、兩人餘りの有難さにかへす詞もなき中に、なほも手をつき。

一角　かくまで深き御情、申すは恐れ多けれども。

與次　とても の事に御家來衆へも御沙汰なきやう。

兩人　願はしう存じまする。

〽願へば重氏卿。

重氏　コリヤ横口戸平、その方に用事あり、これへ參れ。

横口　アノ拙者めに。

重氏　参れと申すに。

横口　ヘイ。（ト合方になり重氏の傍へ來て、）シテ拙者めに御用の筋はな。

重氏　そちに用事は別儀でない、唯今見る通り御兩所にはさしちがへんとなされしが、武士はかくありたきもの、その御心底のあらはれしはみなその方より事起ると申すもの、なりやその方は主へ對してなか／＼の手柄者、その手柄にその方へ褒美を遣はす。

横口　何とおつしやります、アノいま拙者めが申せし一言より、御兩所の御心底のあらはれしは、拙者が忠義手柄とあつて、御褒美を下しおかれんとナ。

重氏　いかにも。

横口　ヤレ／＼まづは大慶、シテその御褒美は。

重氏　そちへくれるその褒美は。

横口　その御褒美は。

重氏　刃がねをくれる。

横口　エヽ。

トびつくりと立つ所をつき廻しポンと首を討つ、見事に横にかへる、重氏刀を拭ひ鞘へ納める。

重氏　重氏が政道はかくの通り。
與次　何から何まで御厚情。
　　ト重氏外山左内が持ちし目綠の金包みを取り双方へ投げ出す。
重氏　南無三、とり落した。
外山　それお提灯。
　　ト中間兩方より提灯を出す、重氏これを拂ひ落し。
重氏　ハテ粗相な奴。
　　トこの内一角與次右の金包みを拾ひ上げ、
兩人　お金はこれに。（ト出す。）
重氏　落したものは拾ひ德。
兩人　それ程までに。（ト思入。）
重氏　恩にきずともお出でなされい。
　　ト金を戴く、重氏袴の膝を打つ、これを木の頭。
行きやれ。
　　トきざみ、よろしく、

幕

二幕目　重氏旅館の場

役名　加藤左衛門重氏、監物太郎、黒塚鬼藏人。重氏御臺所牧の方、重氏妾千鳥の前、腰元小柳、桔梗、紅梅、早蕨等。

本舞臺三間の間常足の二重、正面金襖、上の方山の袖にて社の後を見せ、櫻の立木、いつもの所に枝折戸、すべて重氏旅館の體。こゝに前幕の腰元四人水手桶など持つて掃除してゐる、琴唄にて幕あく。

と掃除することよろしくあつて、

桔梗　なんと皆さん、この廣庭へ出臍のやうなあの社は、何といふ神樣でござんすぞいナア。

小柳　あた邪魔らしい掃除が出來ぬわいなあ、箒ついでに掃き出さうぢやあるまいか。

早蕨　これはしたりこの人とした事が、あれはお國から勸請なされた殿樣の氏神樣ぢやわいなう。

紅梅　それイなう、粗末になぞしやつたら、さぞ罰があたらうぞや。

小柳　ムヽ、お國から取り寄せるをば勸請と云ふかや、そんなら今度お國から勸請なされた御臺樣、千鳥樣と殿樣のしつぽりを御覽じたらフンスンでたまるまいと、思うたはあての面、千鳥樣と奧

樣と仲のよいのはどうしたこと、あんまりで拍子がない、次手に悋氣も國許から勸請したらよからうわいなう。

桔梗　それはさうと小面の憎いはいつも來る百物賣りの商人、今日來たら嬲つて遊ばうぢやござんせぬか。

紅梅　ほんにそれがよいわいなう。

小柳　あれ〳〵噂をすれば影とやら、向うへ見えるわいなう　早う呼ばうぢやござんせぬか。

早蕨　それがようござんす。

四人　ヲウイ〳〵〳〵。

トテンツヽになり花道より黑塚鬼藏人淺黃頭巾脚絆のなり、商人のこしらへにて荷箱を背負ひ出て來り。

藏人　これは〳〵お女中樣方、相變らず御用仰せ下さりませ、粉類なら何なりとも蕃椒でも胡椒でも。

小柳　そんなものはいりませぬ、いつものやうに賣り立を。

桔梗　早うこゝで。

皆々　聞かしやいなう。

紅梅　それがいやなら早う。

皆々　歸りや〳〵。

藏人　なんのいやと申しませう、さやうならこの場にて云ひ立てを。

皆々　早う聞かしやいなう。

〽せがみたてられまつかせと、頰杖ついて聲はり上げ、

藏人　のこ〳〵や豆の粉や、まめな手くせに尻こぶたふッつりひり〳〵と山椒の粉、奴さんには蕃椒、坊主の好きな胡椒の粉、若い嫁御の鼻はじく姑御には辛子の粉、おてきに杯さしもぐさ、身柱九十一、すべて心もちや吉野葛、召しませ〳〵。

〽召しませいとぞ賣りにける、腰元どもは目ひき袖ひき、

小柳　マア當分何にもいらぬ、大儀にようしやべりやつたの。

皆々　のこ〳〵早う去にやいなう。

〽一度に奧へはしり入る。（ト腰元皆々奧へはひる。）

藏人　エヽ今日も又とりくさらぬ、テモなめすぎた女郎め。

〽呟き〱荷箱の内より大小取り出し身ごしらへしてのつさ〱、忍び入らんとする所へ。

ト思入あつて、荷の内より大小を出して差し、頭巾をとり身ごしらへして行かうとする、監物太郎出て留める。

藏人　それ。（ト行かうとする。）

監物　曲者待て、心得ぬ商人め、荷箱の内より大小取り出し奥を目がける血相、仔細ぞあらん、眞直ぐに白状せよ。

藏人　曲者とは舌長し、うぬらがうやまひかしづく千鳥の前が兄黒塚鬼藏人、重氏のためには小舅、主同然の某を土足にかける罰あたり。

監物　シテその兄が何故に切り込んで、誰に敵對、目ざす相手の姓名は。

藏人　ヲヽその目あてといふは加藤左衛門重氏が、首討ち取つて知行にするのだ、そこのけ。

監物　さう聞いてはなほのこと、引くゝつて御主人へ。

藏人　何を小癪な。（ト早舞になり、兩人立廻りあつて藏人を蹴倒し、すぐに刀の下緒にてくゝし上げ、）

監物　しばしの間この曲者を。（ト上の社を見て、）幸ひの社の内、獄屋の代りに神は見通し、許させ給

へ。

〽社の内へ無體に押しこめ、蝦錠しつかとおろしおき。

どりや御歸館を相待たうか。

〽さあらぬ體にて入りにけり。（ト奥へはひる。）

〽妹脊の仲に固まりし石童丸の御母君、牧の方とは申せども子持ちと見えぬ御形、花見座敷へ出で給へば、後に續いて千鳥の前大内山の木隠れより、うつし植ゑたる花なれどさすが妾と本妻の、禮儀は戀に品定め。

トこの内奥より重氏御臺牧の方打掛け姿、千鳥の前同じく打掛けなり、後より腰元四人付いて來り、牧の方思入あつて、

牧の　なう千鳥樣、連合ひ左衛門重氏樣、七年餘り禁裏の勤番、首尾よう勤めておしまひなさればこれからお國で御休息、長々の在京に夜の御殿の伽もなくお淋しからんと存ぜしに、自になり代り殿の心を慰むるそもじ樣のあるとの噂、國元で聞くその嬉しさ、とんと心が落ついてゆるゆる上りし今度のお迎ひ、今日は歸國のお願ひに禁裏樣へお上りなれば、お暇が出るやいなこなさんを國へ伴ひ、たんとお禮を申さにやならぬわいなう。

〽おくそこもなき御挨拶。

千鳥　これはマア有難いそのお詞、今更申せば何とやら、云譯がましく思はるれど、數ならぬ身の殿樣に添臥し、御臺樣の御目にかゝらばお叱りもあらんかと思の外のお憐み、さう結構に仰しやつてはお返事もなり難し、千鳥よどうせいからうせいと腰元衆同然に、御意なされて下さりませ。

牧の　ハテわつけもない、大事な殿御を半分づゝいとしほがつて貰ふもの、如在にしてよいものか、その代りこの後外に殿樣の、惡性があるなら二人して云はうぞえ。

千鳥　そりやお氣遣ひ遊ばすな、あなたにお世話はかけませぬ。御名代に二人前私が番を致します。

〽仲よき魚と水いらず。

桔梗　お二方には未だ殿樣御歸館に間もござりませう、それまでのお慰み、お氣欝晴しにこの所にて。

早蕨　双六なりとつひまつでも遊ばして、お歸りをお待ちなされませ。

紅梅　幸ひと私共が持ち運び、奥の亭におきました、双六盤銚子杯、

小柳　イエ〳〵双六より歌加留多より、やつぱりお庭の櫻を見て御酒宴が宜しうござりませう。

牧の　おツつけ殿様お歸りあらん、お目にかけるも二人が御馳走・あの櫻を題にして腰折れなりと一首づゝ、短冊をつけようではないかいの。

千鳥　こりやようお氣がつきました、及ばずながら私も。

牧の　そんなら千鳥殿。

千鳥　御臺樣。

皆々　まづ入らせられませう。

ト唄になり、牧の方、千鳥の前先に、腰元皆々付き添ひ奧へはひる、揚幕にて、

呼ビ　殿の御歸館。

〽程なく左衞門重氏卿、歸館をつげる奧使ひ、靜々と入り給へば監物太郎出迎へ。

トシラベになり重氏烏帽子裝束、後より侍三人付き添ひ出る、奧より監物太郎出て來り。

監物　殿樣には唯今御歸館遊ばされましたか。

重氏　監物太郎出迎ひ大儀。

監物　まづ／＼お入り遊ばされませう。（トやはりシラベにて舞臺へ來りて二重の上へ住ふ。）まづは御機嫌

麗はしく、恐悦至極に存じ奉りまする。

重氏　禁裏表の首尾もよし、喜べ〳〵。

監物　奥庭の櫻御遊覽あつて御酒一獻召し上られ、御休息遊ばされませう。

重氏　いかにも、よきにはからへ。

監物　それ腰元衆、お召しかへ。（ト奥にて）

腰元　かしこまりました。

〽はつと腰元立寄つててんでに召さすお召しかえ、色をゆかりのあや錦見かはすばかりの御出立、げに筑前の御大將。

トこの内奥より腰元四五人出て壺折りに着せかへ、烏帽子裝束を臺に乘せ腰元持つ、重氏壺折に着へ庭下駄をはき、監物太郎腰に付き添ひ行きかゝる、この儘知らせにつき誂への唄にて、この道具を靜かに廻す、やはり皆々歩む。

本舞臺三間の間、眞中二間の亭屋體、簾張りの障子、この内に牧の方千鳥の前双六盤によりかゝり寢て居る體、上の方以前の社、前面の扉に錠をおろし傍に櫻の立木、これにいろ〳〵の短冊を付け、やはり枝折門、よき所に誂への臺をすえ、これに毛氈をかけ右の唄にて幕あく。

ト右の唄にて皆々歩み來る、重氏上の櫻の短冊を見る事あつて右の臺の上へ住ふ、監物太郎思入あつ

て、

監物　これはしたり、殿様の御歸館ありしを奥方には御存知ないか、拙者が參りお目を覺まさせん。

重氏　さなせそ〱、餘念なく寢入りし體、互ひに妬む色もなく睦まじきこそ滿足なり、その儘にさしおけ〱。

監物　成程、御意の如く嫉妬のあるは婦人の道、その氣遣ひなき御二方、かくまで御仲よろしき事、我々まで大慶に存じまする。

重氏　我もこれにて花見の相伴、二人が風情を肴にし花の本にて一獻酌まん、酌致せ。

桔梗　かしこまりました。

ト長柄の銚子杯をもち來り重氏杯をとり上げる、桔梗酌をしようとする、小柳これをとめて、

小柳　マア待たしやんせ、殿様の御酌は私が常からしたうて〱ならぬ所、そのお銚子はマア此方へよこしなさんせ。

桔梗　イヽヱ私がするわいナア。

小柳　イヱ私が。（ト兩人爭ふ。）

監物　これひかへぬか。

重氏　ハテ誰彼と申すに及ばぬ、早う酌致せ。

小柳　かしこまりました。

ト小柳思入あつて酌する、重氏杯をうける。

〽つぎかけたりし不老不死藥の水のしたゝりと、一つ受けさせ給ふ折柄に、雲心なく吹く風の盛りを散らす一嵐、受け持ち給ふ杯へ蕾一房おちにける、重氏つくづくうち眺め。

この內ふすめたる風の音になり、日覆より櫻の花ひら〳〵と散り落ちて、重氏の持ちし杯の中へ落ちるに、思入あつて、

重氏　散ればこそいとゞ櫻は目出たけれと眺めたれども、雨にしぼみ風にもまれ盛りの散るは咎ならず、未だ時にも會はぬこの蕾、杯の中へ散つたること、これこそ人界のはかなき敎へ、老少不定、老いたるが先だち若きが後に殘るとも、定めがたきは人の命、忘るまじきは後生の道。

〽文武にたけき重氏の無常を觀ずる悟道の一言、うちしをれたる御有樣、監物太郞尤もと共に悟りは開けども、わざと詞にはげみをつけ。

監物　コハ云ひ甲斐なき御迷ひ、釋迦といふ賣僧頭樣々の僞りを書きちらし、一文不知の嗚嗚をたら

さんために一切經、たとへて申さば盜賊を捕へ殺生なりとて助け歸さば、國家の憂となる道理、あな忌はしき後生の道、この後ふッつりお止まり下さりませう。

〽佛法そしるも諫めの忠言、心を感じてうちうなづき。

重氏　誠に汝が云ふ如く弓馬の家に生れながら、假りにも無常にひかされては武の道は立ちがたし、この後ふッつと思ふまじ、さりながらよしなき事に心もめいり、何とやら物淋し、次の間にて琴を彈かせよ、御臺千鳥に目を覺まさせん、我はこれにて慰さまん、皆の者は次へ立て〱。

小柳　サア皆さん奧へ行かんせ、私ばかりは後に殘り、日頃の思ひを云はにやならぬわいナ。

トをかしみのこなし。

監物　コリヤ〱控へて居らぬか。

重氏　サア殘らずともに、次へ立て〱。

皆々　かしこまりました。

〽皆々立つて入りにける。（ト監物太郎腰元はひる、又誂への鳴物になり、重氏思入あって、）

重氏　ホヽいつになき我が佛法歸依、武邊にたるみつかんかと案ずるは尤も〱、イデわつさりと酒宴を催し、むすぼれし氣を晴らさん。

ト又眞になり重氏こなし、屋體へ上り、二人の眞中へ來て、二人へしなだれる、唄一杯に切れる。

〽不思議や俄かに物騒がしく、あたりに響き庭の木草もざは〳〵と、風も身にしむばかりなり、二人の黑髮まつさかさまに、蛇の如く鎌首おつ立て食ひ合ふ有樣、さしもの重氏こはげ立ちあきれて詞もなかりしが。

トこの内薄ドロ〳〵になり、牧の方千鳥の前兩人寢てゐる、下げ髮おのれとさかだち蛇のやうになり、鎌首を上げ食ひ合ふ體、重氏ふつと見て、びつくりしてきつとなり、

ハア、恐るべし〳〵、外面如菩薩内心如夜叉と說かれたる佛の戒め目のあたり、顏に白粉丹花の唇、粧ひ飾りて菩薩の如く互ひに妬む顏もせず、打ち見には仲よき體、心の底は邪鬼執念、絕えせぬ證據をおのれとあらはし、かく淺ましき體たらく、忌はしや汚らはしや。

〽汚らはしやと飛び退き給ひ。

妻子は地獄の家土産と說き示されしに疑ひなし、花の莟の散つたるに思ひ比べて觀ずれば、これぞよき菩提の種、國家榮華も望みなし、迷ふが故に三界の火宅に心を苦しむる、悟れば十方空ならずや、今まで心のめいりし上、いや增りたる發起心。

〽指添拔いて髻ふツつと切つたる輪廻の絆。

ト指添にて髮を切り思入。

せめて一筆書き殘さん、さうぢや。

ト琴入り謡への唄になり、上の臺の上へ來て料紙硯を取つて書置くことあつて、烏帽子裝束を一緒におきてこなし、唄一杯に切れる。

薄き契りも過去の因縁、必ず心殘すなよ。

〽細々筆に書きこみし、御髻に烏帽子裝束書置き添へてかしこにおき、裏門よりすご〳〵と立出では出でながら、流石恩愛捨て難く振りかへつて涙にくれ。

ト思入あつて枝折戸の外へ出て、

二人が夢覺め、かくと知らばさぞや歎かん、不便やナア。

〽不便やと見やり給へば蛇形の黑髮、なほもさかんに挑み合ふ執着心に愛想もつき、身震ひたつて足早に行方も知れずなり給ふ。

トこの内愁ひのこなしあつてたち戻る、やはり兩人の髮食ひ合うてゐる、これを見て思入あつて花道へはひる。

〽かくとも知らず監物太郎、何心なく立出でゝ見ればあやしき姿、驚きながら走りより、容赦もなく食ひ合ふ黒髪指添へ抜いて切りはなせば、二人もびつくり起き上り顔見合せて一時に、吐息をほつとつき給ふ、監物太郎四邊を見廻し。

ト奥より監物太郎出て来り。兩人の體を見て刀を抜き切り拂ふ。これにてドロ〳〵打ち上げ。兩人目をさまし、互ひに見てびつくり心付き思入、監物太郎舞臺へ来て右の烏帽子狩衣を見て、

監物　我が君はましまさず、御烏帽子狩衣のぬぎ捨てあるこそ心得ぬ。御髻に一通添へ殘されしは、早御遁世遊ばされしか、ヤ、、、、。ト思入、兩人これを聞き、

千鳥　なに、殿様は御遁世とや。

牧の　何故の御出家ぞいなう。

〽あまりの事に興覺めて泣くも泣かれずうろ〳〵と、ともにうろたへおはします、監物太郎心をしづめ。

監物　ヲ、驚き給ふは理、先程禁裏より御歸館の節いつに勝れし御機嫌、あれなる櫻の木にて御酒宴の折柄、御杯へ花の蕾散つたるとて無常の悟りをひらき給ひ、さも心細く御意なされしを

打消してはおきたれども、御兩人の髪さか立ち蛇の如くになつて食ひ合ひしを、御覽あつての御發心でござりませう。

ヘ歎きに御臺千鳥の前、亂れし髪に心づき互ひの覺り一時に、どうと轉びて泣きしづみ、前後不覺に見えにける。

牧の　恥づかしや人の心、この度都見物がてらお迎ひに上りしが、千鳥と殿様の睦じさを見るよりも妬ましく、胸もかき裂く腹立ちをぢつと堪へて表面には、美しう附き合ふとも寢た間に本心あらはして、淺間しき有様をお目にかけしか悲しやナア、せめては國に殘したる石童丸がおとなしく、生ひ立つまでも思ひとゞまつて給はれかしと、呼びとゞめてはくれぬかいの。

ヘ歎き給へば千鳥も涙。

千鳥　けはひ化粧紅鐵漿より、髪形ぞと艶つけてかた笄よふきあげよと、結ひ揃へしは殿様に見限られまいためばかり、その髪が蛇とならば身體は鬼ともなりかねまい、見捨て給ふも理ぞや、御出家もみな私が業。

牧の　イヤ御遁世をさせませし、科人は自。

千鳥　イヽエ私が。

牧の　イヤわしが。

〽涙みなぎる繰言に、思案なかばの監物も袴の襠に淵をなす、御墓所は涙をおさへ。

監物　イヤ〱泣いて居てはすまぬこと、まだ遠くはござるまい、御後をば追かけて。

〽千鳥もろとも立ち上るをおしとゞめ。

監物　ヤレ待ち給へ、某さやうには存ずれどもいか程おとめ申すとも、最早とゞまり給ふまじ、まづは殘しおかれたる、御書置き御覽あそばされませう。

〽一通をさし出せば是非なく〱も取り上ぐる、涙に聲もふるはれてしどろもどろの讀癖を、千鳥もともにさしのぞけば。

ト この内兩人右の書置を開き讀みかゝる。

牧の　涙ながら書き殘す一通、一つ我弓箭の家に生れなに暗からぬ身なれども、家國を捨て妻子を捨て、世も捨人の沙門となるは前世の佛緣ならん。

千鳥　思ひはからずふつてわいたる遁世を胸狹き女心に、淺間しき姿を見せける故とさぞかし歎きのあまり、倶に姿を變へたく思ふらん。

牧の　さにあらず、妻子珍寶不隨者とあれば、死出の旅路はわかれ〱、伴へる人もなく從ふ者もなく候、とは云ひながらたゞ忘れ難きは石童丸、やう〱二歳の詩國に殘しそれより又七歳あまり、顏も見ず候へばさぞ成人しおとなしくもなりつらんと、思へばいとゞなつかしく忘るゝ事はこれなく候、石童丸をもりたて加藤の跡目をつがせてたべ、父がこの身になり候へばもしや流浪も致さんかと、これのみいかう案じ候、必ず〱歎きにくれ悴が事を忘れぬやう。かへすがへすも賴み入り候。

千鳥　千鳥へも一通も殘さんと思ひしかど、心せかれて候まゝこの文を一緒にながめ、牧の方に力をつけてくれよかし。

牧の　云ひたき事は山々なれども、淚に筆も廻りかね申候、かしこ。

〽讀みも終らず三人は、わつとばかりに泣きしづむ、監物太郎は淚を押へ。

監物　殿樣の事は歎きても詮なき事、一大事はお家の跡目、我が君の御身の上、殊さら隣國には大內之介義弘といふ佞人あれば君御遁世なされし事をおしつゝみ、幸ひ歸國をゆるされし砌りいつもの如く世上へ見せかけ、御臺樣へ我が君の裝束をめさせ、一刻も早く國許へお伴して下るべし、跡目の願ひはお國から、急いで御用意遊ばされませう。

牧の　とかくそなたがよいやうに。

　へ烏帽子狩衣とり上げて、立ち給へば千鳥の前袖をひかへ。

千鳥　私もお國までお供は致す身なれども、お前は石童丸様といふ若君あれば、これに越したる筐はなし、せめて朝夕御身に添ひし、この烏帽子狩衣を、妾に下し給はれかし。

　へとりつくを監物太郎。

監物　御尤には存ずれども、たつた今お聞きの通り、御跡目相續の力を致す烏帽子狩衣、こなた様には進ぜ難し。ハテ何をがな。ヲヽそれ究竟の筐あり。

　へ社の鍵を取り出し。（ト懐中より鍵を出して、

これはあれなる祠の鍵、社の内にはその許の大切になさるゝ筐あり、扉を開いて取り給へ。しかしこゝをよく得心あれ、その筐のなりゆきにて、お國へお供は叶ひませぬぞ。

　へ鍵投げ出し謎をかけ御臺所を伴ひて、奥深くこそ入りにける、千鳥は一句の判じ物。

　ト この内監物太郎鍵を渡し、牧の方に付き添ひ奥へはひる。

千鳥　お筐のなりゆきにてお國へゆく事はならぬとは、どうやら物のある云ひ方、仔細であらん開

いて見ん。
〽社の傍へ立ちよつて錠前あくれば待ちかねしと、飛んで出でたる鬼藏人、やれこはやと逃げ退きしが、顏を眺めて。
トこの內右の鍵にて社の戶をあける、內より以前の藏人出る、千鳥の前びつくり飛び退き、思入あつて。

ヤア、お前は兄さん。
藏人　わりや妹。
千鳥　どういふわけでこの繩目は何の科で。
〽驚きながら親は泣寄り、いましめの繩ほどけば身構へし、物をも云はず駈け出すを。
ト藏人の繩をとく、こなしあつて行きかゝるをとめて、
これ待つた藏人殿、監物太郞が一言に思ひ合はして思案をすれば、どうでも樣子があるわいなう。
藏人　ヲヽ云うて聞かさう、某は大內之介義弘殿に賴まれ、加藤左衛門重氏が首を取り出世の種に

するわ、こゝはなせ。

千鳥　それで何も樣子が知れた、そんならやつぱり縛つておかうもの、云はうやうなき大悪人。

藏人　ヲヽ首尾よう仕おほせなば、一廉の大名になり出世の小口、兄がためになること、サア手引きして討たせてくれ。

千鳥　さう聞いてはなほの事、たとひ兄でも敵の末、いつかなこの場は放しはせぬ。

藏人　そんならわれはこの兄に手向ひする氣か、これ、勘當されても眞實血を分けた兄だぞよ。

千鳥　サア兄樣故にこのやうに手向ひせぬ程に、どうぞとまつて下さりませ。

藏人　イヽヤ、兄が出世の種になる事、但しわれが手引きするか。

千鳥　サアそれは。

藏人　この兄に手向ひする氣か。

千鳥　どうしてマア。

藏人　手引きをするか。

千鳥　サア。

兩人　サア〳〵。

藏人　妹、返事はど、ど、どうだ。（トきつとなる、千鳥の前思入、藏人こなしあつて、）返事のないは不得心、この上は奥へふんごみ。（ト行からとするをとめて、）

千鳥　マア待つて下さんせ、それ程に云はしやんすこと、いかにも手引きして討たせませう。

藏人　そんならしかと得心して、手引きしてくれるか。

千鳥　アイナア。

藏人　出かした妹、それでこそ兄妹のよしみ、得心したらこの刀をわれに預ける、サア案內しろ。

ト刀を渡し奥へ行きかける、千鳥の前思入あつて右の刀にて後より藏人を切る、これより三味線入りの鳴物になり、雨人立廻りいろ〳〵あつて双方手負になり、トド藏人を切り伏せ、のつかゝつて止めをささうとしてその儘苦しみ居ること。

へ難なく押伏せ乘つかゝる、監物太郎走り出で。

監物　ヲ、お出かしなされた千鳥樣、お心の操は晴れたれども、この深手ではお國へは叶ひますまい。

へいたはれば苦しげに起き上り。

千鳥　自とても殿樣のお情うけしものなるに、樣子によつてお國へは叶はぬとありし時、酷い仕方

と恨みしが、このしだらでは疑ひのかゝるは道理、わしが因果とあきらめてゐますれど兄妹の惡心故、おのづと殿樣の御緣が切れる、こればつかりが黃泉の障り。

〽血汐に染みし五體をなげ、泣く聲奥へ聞えてや、一間の襖押し開き御臺は烏帽子狩衣めされ、悠々と立出で給ひ。

ト正面襖より牧の方、重氏の狩衣を引つかけ烏帽子を持ち出て來り。

牧の　我こそ假りの加藤左衞門、千鳥が前の誠を感じ、二世も三世も變らぬ契り。

〽とのたまへば手を合せ。

千鳥　勿體ないそのお詞は、我が君樣のお詞より、忝なさは百倍ぞや、惡心の兄を手にかけ、果てるが身の本望。

牧の　妾はこれより本國へ。

監物　拙者は後にて萬事をしんがり。

千鳥　御臺樣。

牧の　千鳥。

千鳥　おさらば。

皆々　さらば。

藏人　妹、觀念。

ト藏人立上り切つてかゝる、千鳥の前刀を持ちよろぼひながら立廻り、双方さし違へひよろ〳〵となる、この時牧の方は花道の方へ行きかゝる、時の鐘。

〽悟り悟りて出でたる人も、悟ればはかなき花の宴、散りにし妻を殘しおき本國へこそ立歸る。

ト千鳥藏人落ち入る、牧の方監物太郎兩人を見て愁ひの思入、よろしく。

幕

三幕目　大内館の場

役名　大内之介義弘、多々羅新洞左衛門、監物太郎、關口隼人、野口玄蕃。義弘奥方櫻木

新洞左衛門娘夕しで、大名等

本舞臺三間の間正面瓦燈口、高足の二重、左右網代塀、上の方誂への松の立木　正面の欄干に弓矢をかけ、二重眞中に大内之介義弘壺折り衣裝にて、平舞臺の上に關口隼人上下衣裝大小、下の方に野口

玄蕃同じなり、兩人とも銚子大杯を持ち控へ居る、管絃にて幕あく。

〽富んで奢らず貧しうして貪らぬは未可なり、富貴にて禮を知り貧しうして樂しめとは、弟子に示せし孔子の詞、大内之介義弘威勢九州にはびこり、自ら武運を朝日にたくらべ横雲將軍と尊號し、人もゆるさぬ高胡床、浮かめる雲の上見ぬ鷲明日は我が身もしらぬひの、筑紫の御殿と時めきける、伺候の諸武士も自らのし上つたる大名氣質、中にも近習の關口隼人御前に進み。

トこの内始終大内之介義弘杯を取り上げる、兩人酌してゐる。

關口　ハツ、かねて仰せ渡されし通り近國の大名より、家々に傳はりし重寶、今日持參致す筈、すなち寶見分の役は、多々羅新洞左衛門承はる。

野口　それにつき彼が娘、お國に稀なる美人なれども、いかなる事かつひに男の肌觸れず、生れの儘なる生娘と諸家中の風聞故、御手廻りの召遣ひにと存じ上意と申してお次まで、呼び寄せおき候ひしが、御慰みに御覽あそばされませう。

〽何がな御意に入らざる追從、お髭の塵をとりかける、義弘寬々とうちらなづき。

義弘　勅諚と僞り諸國の寶を集むるは、某が謀叛一味のしるし、連判狀も古めかしく氣をかへて人質の代りにする家々の寶、まだ受け取るには時刻も早し、その間にかの娘の面見てくれん。

とこれにて野口玄蕃立つて來り、

野口　お次に控へし、新洞左衞門が娘夕しで殿、急いで御前へ。

〽世にすねて男選みに年長けし、新洞左衞門が娘夕しでは、終ひに殿御の肌知らぬ、おぼこと見えぬしやれ姿、髮の結目に差したるは梅花にあらぬ白羽の鏑矢、笄ならで簪が何の御用でお召しぞと、案じる内も面はゆく御書院近く座しにける、横雲將軍はるかに見やり。

トこの內花道より新洞左衞門娘夕しで振袖衣裳、頭に謎への矢をさし花道へ平伏する。

義弘　夕しでとはおことよな、ハテ見事よい器量、汝が親の新洞左衞門忠と義とに固まりし心より、かたくるしう育てられ麻につるゝ蓬とて、そちまでが身持ちも固く一度も男に肌觸れぬと聞き及ぶ、器量といひ風俗といひあつたら惜しき日蔭の花、殊さら男選みとあれば疑ひもなき手いらずの水上げは、この義弘が今宵から抱いて寢るは。

〽ほやりと笑ふしほの目は仁王の戀する如くなり、はつと思へど夕しではわざ

と額を疊につけ。

夕し　私風情の賤しき女、お寢間のお伽を致せよとは有難い事なれども、御臺樣の思召し一家中へ聞えても女ひでりはあるまいし、家來の娘をわつけもないと、我が君樣も笑はせますもいかが、この儀は御免なされて下さりませ、ほんに誓文殿樣を微塵も嫌ひは致しませぬ、慮外も厭はずつべこべと、お詞背くも君のおため。

〽辭儀する詞の控へ綱、切れもやせんと案じゐる。

義弘　ホヽこの義弘が云ひ出す事、二言も詞を返すもの恐らくは覺えず、女にまれなる大膽者出かした出かした、さりながら一天下の主人となるこの義弘、十二人までは女房持つても苦しからず、否でも應でも妾にするぞ。

〽深く魅入れし鰐の口、遁れるだけはと手をつかへ。

夕し　冥加にあまる御意なれど私はちと譯あつて、一生男に肌觸れて身を汚すことならぬといふ申譯は、頭にさしたる白羽の鏑矢、くはしい樣子は父上に、お尋ねあれば知れまする。

〽云ふにさし出る關口隼人。

關口　これさ夕しで殿、惡い合點、殿樣に惚れられるはこなたのために福德の三年目、忝いとお受

け申すが上分別でござらう。

野口　さやうでござる、親御も浮み上がる事、第一その頭にさしてゐる、白羽の矢が邪魔にならう、どれ、某が抜いて進ぜう。

〽たちよるをむつとせき上げ。（ト野口玄蕃たちかゝるを夕しでつきのけて、）

夕し　コリヤ何となさるゝ、親新洞左衛門が御前に居ぬと高なしの我儘、男を持たぬはどういふ譯か仔細も知らず、親達が浮み上がる、イヤ果報ぢやの福德のと、欲にけがれたその詞、そんな女子ぢやと思うたらゆるさぬぞや。

〽睨みつけられ理窟づめ、云ひこめられて兩人は手持ち無沙汰に尻ごみす。

野口　コレサ／＼夕しで殿、かうでござらう、内證で隱し男をこしらへおきその男への心中立て、外の矢先は通さぬといふ心で、起請代りのこの鏑矢、さしてゐるに違ひあるまい。

義弘　サア不義者の名を云はつしやい。

夕し　サアその儀は。

兩人　サア／＼／＼。

關口　何とでござる夕しで殿。

へせめ問はれても夕しでは、もとより覺えなみだ聲。

ト藏代、兩人左右より立ちかゝる。

夕し　ニハ無體なお尋ね、私も木竹の身ではなし、惚れてくれる殿御があれば欲しうなうてなんとせう、持つに持たれぬ譯あつて脊丈の延びたこの年まで、人の數にも入らぬ身を不便と思うて下さりませ、さら〳〵不義の男はなし、疑ひ晴らして下さりませ。

へ身を悔みたる恨みなき、涙かたてに詫びけれど。

義弘　ヤアまだ男めをかばい居る、よし〳〵云はせやうがある、それ兩人。

關口　サア夕しで殿、不義の相手を白狀めされ。

野口　何とでござる夕しで殿。（ト左右よりきつと云ふ、この時揚幕にて）

新洞　いづれも待つた。

兩人　あの聲は。

新洞　その申譯、それへ參つて致すでござらう。

へやれ待ち給へと聲かけて、立ち出づる新洞左衛門。

ト序の舞になり新洞左衛門白髪鬘立烏帽子に紋素袍にて出て來り直ぐに舞臺へ來て兩人をつきのけ。

關口　貴殿は新洞左衛門殿。

野口　唯今出仕めされたか。

新洞　コリヤ兩人、娘夕しでを何とめさるゝ。

關口　ヲヽ不義の相手を。

兩人　詮議するのだ。

新洞　その不義の相手が聞きたくば某が云つて聞かさう、娘の隱し男といふは忝くも我が朝の神の司、天照皇太神宮。

兩人　ヤア。（トびつくりする。）

新洞　何と肝がつぶれたか、したがかうばかりぢや合點がゆくまい。これ殿も耳の穴をさらへてよう聞かしやれ、この大内の御先祖伊勢兩宮を當國へ勸請なされ、その社より一人づゝ御座子をもうけとり給ふ、印しには家の棟へ不思議に白羽の鏑矢立つ、その役を勤めた我が娘、一旦神に仕へし女、一生男を持たすまいと誓のために神明の鏑矢を頭にさゝせて不淨を拂はす、それを無體に拔きとつて妾にするの足かけのと、罰を受けるが合點か、その上これまで頤のたるい程諫めても聞き入れのねえ謀叛の企、今となつて異見もせぬは所詮毒食はゞ皿と諦めてする

奉公、まだろく／＼望みも達せず、榮耀らしい妄狂ひ、まだ早い、とりおきめされ。

〽病犬の咬みつく如くたゞ一口わんとばかり、膠もしやりもなかりける、
性急なる大内之介怺へかねてすつくと立ち。

義弘　さてはいよ／＼推量の通り、親も倶に呑み込んで、内證に男があるな、我が心に從はぬ腹癒せ、
眞二つに討ち放し、その男めに鼻明かせてくれん、覺悟ひろげ。

〽大太刀すらりとぬき放せば、惡びれもせずおし直り。

夕し　父上まで深きお疑ひ、曇りなき身は天道が正直、お手にかゝるが申譯。

〽合掌したるけなげさを、見やりもせぬ片意地親仁

ト夕しで思入あつて二重の上へ來て合掌する。

サ御前樣、御存分にあそばされませ。

義弘　ヲヽよい覺悟だ、うぬ。

ト刀ぬきはなし目先へつきつけ二三度切りかゝるこなし、新洞左衞門夕しでの方を見向きもせず居る
弘見て思入。

しぶとい女郎、もうこの上は是非に及ばぬ。

〽すでにあやふき太刀の下、大内の御臺走り出で。（ト御臺櫻木走り出て）

櫻木　まづお待ちあそばしませ、重々のお腹立ち御尤もとは云ひながら、戀ばつかりはかた押しに云ふ程埒のあかぬもの、自にお任せあらば何卒すゝめて今日の内、お心に從はせませう。

〽すかしなだめる物腰に貞女のしるしあらはせり、戀は曲者鬼にも涙。

義弘　今討ちはなす奴なれども、その方が詞なれば御身にあづける、返事が遲いと許さぬぞ。

〽詞のたるみに御臺は心得。

櫻木　お氣遣ひあそばすな、たつた今御返事を、夕しで殿用事もあり、そなたはこちへ。

〽夕しでを引立てゝ、尾を踏む心地虎の間へ、伴ひ入らせ給ひけり。

ト御臺櫻木、夕しでの手を引き思入あつて奥へはひる。

〽後には主從物をも云はず、あなたは七面こなたは工面、睨み合うて居る所へ。

ト皆々思入、パタ〳〵になり侍一人出て來り、

侍　ハツ申し上げます、國々の諸侯より寳を持參仕つてござりまする。

ト云ひすてゝはひる、義弘思入あつて二疊臺へ住ふ。

〽僅かに纏ふ大將の衣紋美々しき座をしめて、待つ間程なく入り來る、青貝の
机うや〳〵しく目八分にさし上げて。

ト序の舞になり大名一人銘々獻上の品を三方に乘せ持ち出る、後より上下なりの大勢同じく品を持ち
舞臺へ來り下の方へ並ぶ。

大一　二つ並べし珊瑚の枕、菊地の陶全姜が寢た間もはなさぬ重寶なれども、勅諚とある故持參
仕つてござりまする。

〽廣縁におし直す、次は豐後の友方大學。

大二　水晶のこの簾はその昔、晉の國より渡りし寶、庭に掛くれば風を生じ。

〽自然と雨を降らしつゝ、暑き時分はひいやりと西瓜もどき夕立もどきとさし
上ぐる。

大三　拙者の持參は肥前の國、海月式部が重寶にて白龍石といふ硯、日本一の器物なり。

〽己れと水を涌き出し無精者には第一の寶なりとぞ云ひ上ぐる、その外松浦五
島の一族、筑紫表の國主城主名物寶を臺にすえ、廣縁せばしと並べたり、

ト銘々持參の品々をそこへ直し、

大一　すなはち家に傳はる寶。

皆々　持參仕つてござります。

〽檢分の役人新洞左衞門、腹は立てどもその日の役目、不精無精に見改め。

ト新洞左衞門こなしあつて一々見て。

新洞　いづれも寶に相違ない、誰かあるこの品々、藏の內へ納めさつしやい。

關口野口　ハツ。（ト品々を片づける）

大一　まづは首尾よく獻上の品、御受納下され。

皆々　有難う存じまする。

〽諸國の武士も安堵の胸、皆々旅宿へ立ち歸る。

ト管絃になり、大名皆々下座へはひる。

〽はるかに下つて筑前の城主重氏が執權、物に騷がぬ監物太郞悠々とこそ入り來る。

トこの內序の舞になり、監物太郞上下大小にて出て來り直ぐに舞臺へ來て。

監物　ハツ、筑前の城主加藤左衞門重氏が家來、監物太郞唯今出仕致してござる。

〽義弘つく〴〵うち見やり。

義弘　九州の大名殘らず寶をさし上げしに、加藤の家より何として寶は送らぬぞ、宣旨を背くか、但しは氣儘か。

〽きめつくればちつとも動ぜず。

監物　御尤の御不審、勅諚とある上はいかで違背の候べき、しかし筑前は小國故さし上ぐる寶とては候はず。

義弘　イヽヤさうは云はさぬ、大名の家に寶なくて、家督の繼目は何をもつて規模とする。

監物　イヤ我が國は仁義禮智、五常を寶として國家を治むる、但しこの國には器財をもつて、寶とし、君子の教へを寶とはなされぬか。

〽理窟をつめて云ひこむれば、もとより不才の大内之介返す詞もなかりけり、物に怺へぬ新洞左衛門。

新洞　默れ監物太郎がその一言、知るまいと思ふか、この新洞左衛門ばかりはその手ぢや行かぬ、出直せ〳〵。

監物　イヤ新洞、拙者が申す事に批判があらば承はらう。

新洞　ヲヽ望みなら云つて聞かさう。

監物　承はらう。

新洞　云ふぞよ。

監物　聞くぞよ。

新洞　云つて聞かさう。

〽とすりよつて。

今汝が云ひし仁義禮智信の五常をもつて寶となすとは、唐土臨淄の會に善を以て寶とすると、伍子胥が云ひし古手なひき事、その手ぢやゆかぬ、加藤の家には齊國より渡りし夜明珠といふ名玉今玉女神と神に仰ぎ、尊敬する事まぎれなし、是非玉を渡さずば大軍をもつて押しよせ、家國ともにぶツつぶさうか。

監物　サそれは。

新洞　玉を渡すか。

監物　サアそれは。

兩人　サア〳〵。

新洞　これ、われより年は上だわ、ヱ、へ、、、、。
　へのつぴきさせぬ手詰めの難題、この場を遁れて分別と無事を繕ふ當座のうけ合。

監物　成程玉女神を夜明珠と御存じの上は力なし、いかにも寶珠をお渡し申さん、さりながら年を數へて廿歳と限り、終ひに男の肌觸れず交合の道を知らぬ女があれば、玉を迎へに遣さるべし、もし年に過不足あるか、一度でも男に肌觸れ身の汚れたる女の手にたづさへ持たば、忽ち玉の光を失ひ石瓦も同じ如くとなる、その割符の合ひたる女があらば何時にても玉を渡すに相違はなし、まづ某はお暇仕らん。
　へまづお暇と立上る。（トこの時奥にて）

夕し　待つた、その女これにあり、しばらくお待ち下さりませ。
　へ走り出でたる夕しでが、御前に向ひ頭を下げ。
　ト管絃になり、下座より夕しで出て來り、
不義の男がある故お心に從はぬとの御疑ひ、そのお怒りを晴らすためつひに妹脊の道知らず、身を汚さぬといふ申譯、この使ひ私に仰せつけられ下さりませうならば有難う存じまする。

〽思ひ入つてぞ願ひける、監物太郎もぎよつとせしが、

監物　コリヤ女、身の汚れぬが定ならばいかにも寶は渡さうが、見事寶の檢分するかよ。

〽何がな云うて困らす思案。

新洞　ヲヽ氣遣ひするな、檢分はこの新洞左衞門、娘に連れだち行くからは贋物は食はぬぞよ。

監物　加藤の家の名玉に贋と誠が二つあらうか、ばかな事を。

新洞　見事その詞に相違ないか。

監物　念には及ばぬ。

新洞　御玉の出迎ひ、きつと詞をつがうたぞよ。

監物　席を改め相待ちをるぞ。

〽詞すゞしく云ひはなし、館をさして立歸る。（ト監物太郎思入あつて花道へはひる。）

關口　サアタしで殿。

野口　いそいで御用意。

タし　サア〳〵父さん、早う〳〵。

新洞　コリヤ娘待て、そちには惚れた男がある、此方の身體は清淨でも他から汚れを添ふるといふも

の、それその男が思ひきらぬと云はぬ内は、滅多に行かれまい。
〽戀慕の絆を切らせんため大内が耳に打て響けを、聞き流して不興顔、返答もなき折からに御臺所は立ち出で給ひ。（トこの内櫻木出て義弘の傍へ來り、）

櫻木　モウシ我が君樣、女一人につながれて大切なる夜光の玉、この度受け取り給はずば禁裏表の首尾もいかゞ、夕しでが事さつぱりと、思ひ切つたる證據を見せ、使を仰せつけられませう。

義弘　思ひ切つた。
（ト義弘きつと思案の思入あつて、）

櫻木　エヽ。

義弘　思ひ切つたといふ證據を見せん。
〽後にかけたる弓と矢つがひ。
見よや兩人、命にかへて思ひ込んだる戀なれども、大望成就の妨げなれば、この戀ふッつと思ひ切つた、證據の鏑矢、受けとれよ。
〽切つて放せば松の木に、はッしと立つたる有樣を。（ト矢をつがひ上手の松の木へ射る。）

〽夕しで喜び走りより、矢をぬきとつて押し戴き。

ト夕しで思入あつて松の傍へ来り、矢へ手をかける、抜けぬ故思入あつて、

夕し　コレナウ父上、このお使を爲果せなば枕一つで廿歳まで、ねゝした事を君への云譯、君の心も晴々と曇らぬ女の、ナウ父さん。

新洞　鏡にせよ。

〽帯ひきしめる親子の喜び。

ト又矢を抜かうとする、新洞左衞門夕しでを脇へやり、矢を抜きとつて夕しでにやる。

新洞　出かした娘、これより直ぐに。

夕し　御玉のお迎ひ。

義弘　兩人、はや行け。

トこの内新洞左衞門夕しで思入あつて、花道のよき所まで行きかける。

はや行け。

洞新　ハツ。(トこなし)

夕し　父さん。

新洞　むすめ。（ト顏見合せ新洞左衛門中啓にて膝をたゝく、これを木の頭。）

義弘　行けく。

トきざみよろしく、早舞にて、

ひやうし　幕

四幕目　加藤館宮守酒の場

役名　多々羅新洞左衛門、監物太郎、桑原女之助、石童丸、娘夕しで、監物太郎妻橋立、重氏御臺牧の方、腰元桔梗、紅梅等。

本舞臺三間の間正面金襖、上の方九尺の障子屋體、すべて重氏館の體、こゝに腰元三方に誂への神酒德利備へ物を持ち居る、しらべにて幕あく。

〽三國名譽の夜光の玉、玉女神と勸請し秋の最中の祭り日に、館賑はうばかりなり。

桔梗　コレ紅梅どの、今日はお屋敷は玉女神樣とやらのお祭りぢやとて、このやうに今朝からのお取

りごみ。

紅梅　それは毎年秋の最中は吉例の事なれば、今年は殿様がお出でなされぬ故、いつもと違うて何やら張合ひがないわいなう。

桔梗　それにつけてもこちの殿様は、あのやうな美しい奥様を殘し御出家におなりなさるとは、どうした事であらうぞいの。

紅梅　それも何やら、お好きなされた千鳥様と、御臺様の髪の毛が蛇になつたとやら云ふ事で、それから御出家あそばしたといなう。

〽噂なかばへ監物が、妻の橋立たち出でゝ。

ト襖をあけ橋立打掛け衣裳にて出て、

橋立　これはしたり腰元ども、又してもお上の噂、チトたしなんだがよからうぞや。

〽襖押しあけ御臺所牧の方、石童君を伴ひて書院にたち出で給ふ。

ト奥より牧の方打掛け衣裳、石童丸も壺折り指貫稚兒髷にて出て來り、橋立思入あつて、

橋立　これは御臺樣、今日は玉女神のお祭り、お目出たう存じまする。夫監物太郎も大内義弘の招きによつて參られ、御神事にはづれし段、眞平御免なされませう。

〽斷り申せば御臺所。

牧の　心よからぬ大内の呼びよせ、我が夫の行方も知れず石童は幼少なり、なに云ひ越さんもはかられず、たゞなつかしきは重氏樣。

〽かこち給へば石童君。

石童　母樣お氣遣ひあそばすな、おツつけ父樣のあり所を尋ねて、私が迎ひに參りませう。

〽おとなしやかな諫にも涙もとめる折からに、國一番の濡れ男その名も自然と女之助、兄監物が勘當うけ詫を賴みの廣書院、うぢ〳〵として入り來る、御臺は何のお心なく。

トこの內やはりしらべにて、花道より女之助着流し大小にて出て、直ぐに舞臺へ來り平伏する、牧の方見て、

牧の　珍らしや女之助、この程若も尋ねしが何故登城めされぬぞ。

〽仰せにはつと頭を下げ。

女之　私儀不行跡故兄監物太郎に勘當うけ、それなる橋立殿を賴み樣々詫ぶれど聞きいれなく、是非に及ばず今日は若君樣や御臺所樣の御詞をかる所存、恐れながら然るべう賴み上げ奉りま

する。

〽願ひを聞いて驚きたまひ。

〽尋ね給ふを傍に聞く、橋立は吹き出し。

牧の　テモさても固い、そなたのなに越度、軍法秘密の論議でもしやつた上のいさかひかや。

橋立　御臺様のアノ人を固いとはお目違ひ、そのやはらかさじだらくさ、軍法論議はさておいて女中論議で家中は大もめ、お上にも御存知の前の内儀おらち殿は、夫監物太郎都より貰ひ歸り夫婦に致され、のつぴきならぬ女房を子持ちになると乳臭いとて離別して、お物師のお縫殿とちんちん、それも續かず弓頭の娘おつるを娶り持つと去なしてお腰元のお夏殿、それから仲居お茶の間の白髪交りも色めいて、そこでは悋氣こゝでは喧嘩、何か起れば女之助、私が夫ぢや殿御ぢやと云ひ募つての大騒動、固い夫の面汚しと、勘當せしも無理ならず。

〽語れば御臺も興さめ顔、若君なんの差別なく。

石童　女之助はいかい苦勞、それからその喧嘩の終ひはどうなつた。

〽根問ひにほつと息づまり。

女之　サアその後の儀は、面目もなき仕合せ。

〽あやまり入りし風情なり、御臺もをかしく。

牧の　若氣の至りもあんまり興がる、以後を嗜む心なら倶に詫して得さすべし。幸ひ今日はお寶の祭、玉女神の御前にて。

女之　きつと金打致しませう。

橋立　當座遁れはならぬぞえ。

女之　神に對してなに僞り。

牧の　その詞に相違なくば、サア私と一緒に。

女之 橋立　まづ入らせられませう。（ト思入あつて唄になり、牧の方石童丸の手をひき女之助付いてはひる。）

〽程なく歸る監物太郎、大内が難題胸に釘打つてかはりし思案もなく、廣間へ通れば妻の橋立出で迎ひ。

ト序の舞になり、監物太、思案の思入にて、橋立思入あつて、

橋立　わが夫信俊殿、唯今お歸りなされしか、シテ義弘よりの呼び出しは、いかなる樣子でござりませう。

監物　されば大内義弘は都の勅と僞り、近國他國の寶を集むる、これ正しく謀叛の下ごしらへと見ぬ

きし故、わが國には寶はなし仁義禮智信の五常を以て寶とすと、伍子胥が辯をかつてまんまと云ひふせしに、多々羅新洞左衞門といふ奴夜光の珠の來由を知つて、汝が家に玉女神とあがむるは齊國より渡りし夜明珠、寶なしとは云はせじと明白の一言、爭ふにも爭はれず成程その寶あり、しかし世の常の者たづさはる事叶はず、廿歳と限つて交合せざる女あらば受け取りに越されよ、男女の分ち知つたる者が手に觸るれば、玉の光失ふと言傳へを難題に當惑させんと思ひの外、かの新洞が恰當年廿歳、まだこれまで不犯にてこの役目を乞ひうけ親子連れにて受け取りに來る筈、代々加藤の家の重寶渡さば家滅亡、いやと云はゞ大軍をもつて攻め來らん、さすれば御臺若君のお命も危ふし、とやせんかくやせんと胸はどうづき、女房思案があらば云うてみやれ。

〽語るを聞いて女房は、ほつと溜息つきながら。

橋立　たゞこの上は贋物を、急にこしらへ渡すより、外の事はござりますまい。

〽と云ふをうちけし。

監物　イヤ〳〵その儀は思ひつけども、うつかり受け取る新洞左衞門に非ず、ハテどうがな。

〽ハテどうがなと大ずゐの骨も碎くる一思案、及ばずながらと橋立も智慧の袋

の棚さがし、暗闇搜す如くにてしばし途方にくれけるが。

ト兩人思案の思入橋立こなしあつて。

橋立　イヤ申し、かやうの時には膝とも談合と申します、幸ひ弟御の女之助樣勘當の詫にお出で、機嫌直され共々に、御相談なされませいナア。

〽云ふにしばらく工夫を廻らし。

監物　ム、なに、放埒者の弟が參つて居るとな。コレ。（ト橋立に囁く思入あつて）

橋立　ム、、スリヤ色に事よせ使の女を。

監物　お家のためには人をも身をも。

橋立　恨はうらみ忠義の道。

監物　道は二筋、戀のわな。

橋立　信俊殿。

監物　女房來やれ。

〽女房來やれと立ち上る、心知らねど橋立も夫の詞を力草、伴ひ一間へ入りにける。

ト兩人思入あつて奧へはひる、この時揚幕にて、

ト誂へ三味線入り太鼓謠になり、花道より夕しで振袖打掛け衣裳にて出て、花道へとまり、

呼ビ　お使者のお入り。

夕し　誰ぞお取次頼みまする。（ト奧より女之助上下衣裳に着かへ出て來り。）

女之　これは〳〵御使者には御苦勞千萬、イザまづお通り下さりませう。

ト これにて夕しで女之助に見惚れることよろしくあつて、■物代つて管絃になり、夕しで思入あつて舞臺へ來る。

〽思ひ通はす目遣ひに可愛らしさが身にこたへ、互ひに顏を見かはして上座へこそは通りける、橋立やがて出で迎ひ。（ト奧より橋立出て來り。）

橋立　これは〳〵御女中の御苦勞にようこそおいで、私は監物太郎が女房橋立と申す者、又これなるは主人の弟女之助と申して、武道は勿論歌の道戀の道、ならぶ方なき優男、すなはち今日の御馳走役、御用があればアノ人に、御仰せつけ下さりませ。

〽猫に鰹の引合せいかな釋迦でも精進を、落ちてもみたき心なり、女同志とて此方もにこやか、

夕し　これはいかいお心遣ひ、私は夕しでと申してまだ人数にも入らぬ女、かやうな役に参るはホはなけれど人好みする實物、親新洞左衛門はお次に控へ、マア其方が受取つて來いと、不相應の役目を受け案じながら參りしなり、事ならうお渡し下さりませ。

橋立　何がさてお渡し申さいで何と致しませう、夫も唯今まかり歸りお藏の掃除、しばらくお暇が入りませう、幸ひ今日はお寶の祭神前へ備へし御酒、頂戴あそばし不淨を清め、御受け取りなされませ。それ腰元ども御神酒をこれへ。

腰元　かしこまりました。

ト管絃になり、奥より、腰元二人三方に神酒と土器とを乘せ持ち出て來り、眞中へ置いてはひる。

〽對の德利を三方に腰元たづさへ差し出だす、女之助近く差し寄り。

ト女之助思入あつて

女之　敵を招いて毒酒を盛り約を變ぜし例もあり、毒味致して進ぜう。

〽神酒を兩方つぎ合せ、土器になみ〳〵うけ、ツッとほして夕しでに。

ト德利の神酒を兩方土器へつぎ呑む事あつて、夕しでにさして、

頂戴あれ。

〽頂戴あれとさしければ。

夕し　これは御念の入りし事、縁につながる神の酒、なにお疑ひ申しませう。

〽一つ受けて呑む酒の、忽ち五臓にしみ渡り、亂れかゝりし顔色の行儀もくづれ橋立が。

ト これにて夕しで土器をとり上げる、女之助酌する、夕しで呑むを橋立見て思入。

〽サアしてやつたりと橋立が、わざと話もうちとけて。

橋立　近頃卒爾ながら頭にさゝれし白羽の矢は、いかなる故でござりまする。

夕し　サアこれこそは私が殿御を持たぬ申譯、幼い時この白羽の矢、家の棟へ立ちしより、神のお伽の御座子となりしは幸ひ、よい男好いた殿御のあるまでは人目の關のこの白羽、片時も早う貰ふ氣のお人があらばこの矢をば。

〽亂れかゝりし顔の色行儀もくづれ、女之助が傍近くにじり寄りたる亂れ咲きこゝぞと倶にすりよるを傍に見て居る兄嫁の、手前を恥ぢて薄紅葉、たかをしめたる橋立が、傍からあせつてそれそこをとぢつと引寄せ。

ト この内夕しで酒の廻りし體にて女之助により添ふ、女之助もこなしあつて寄らうとする、橋立を見

て思入いろ〳〵こなしあつて、

橋立　二世の固めがこれまでの不義徒の歸り花、仇花ならば御無用になされませいナア。

〽そやしかくれば夕しでは。

夕し　イヤ申し、戀は親にもお主にも、見かへてするが女の道。

橋立　誠を云はゞアノ一間へ、これ必らず粗相のないやうに。

夕し　あつても大事ござんせぬ。

女之　さやうならば御使者の御女中。

橋立　まづお入りあられませう。（ト唄になり、女之助上の屋體の內へはひる。）

〽これぞ工の臍落と、のちにぞ思ひあたりける。

トこれにて夕しで思入あつて障子の內へはひる、後に橋立殘り思入、屋體の內より女之助出て顏見合せ。

女之　姉者人。

橋立　これ口先ばかりでどうからうは皆浮氣、誠を明かして。

女之　それぢやと云うて、どうやらあじな。

橋立　ハテ遠慮も時によるわいナア。

女之　左様ならば、姉者人。

橋立　必らずともに。

女之　後程お目にかゝりませう。

〽手早く後より押しやつて、一間へこそは入りにける。

ト管絃になり、女之助は上の屋體へ、橋立は奥へはひる。知らせにつき正面の襖殘らず引ぬく。本舞臺襖の向ふ別間にて奥深に二重の間へ橋をかけて行き通ひすること、この左右植込み誂への通り、やはり管絃にて道具納まる。

トずつと奥より橋を渡り橋立出て來り思入あつて、

〽橋立たち出で見廻して。

橋立　女之助の放埒も禍 三年、時の用仕果せたり。

〽仕果せたりと思ふ所へ、多々羅新洞左衛門生れついたる氣短かに、待ち久しくて次の間より歩み出で。

ト序の舞になり、多々羅新洞左衛門立烏帽子素袍にて出て來り花道にとまり。

新洞　これ女中、これさ女中。（トきつと云ふ、橋立びつくりして、）

橋立　ハイ。
新洞　娘は寶珠を受け取つたかまだか、どうぢや聞いておくりやれ。
橋立　これは〳〵御苦勞千萬、まづこれへお入り下されませう。（トやはり鳴物にて舞臺へ來る。）
　　「まづ〳〵これへと招じける。（ト始終奥の方へ思入。）
新洞　シテ娘は、玉を受け取つたか。
橋立　ハイ唯今お渡し申しまする、少しの間お待ち下さりませ、その間定めて御退屈、それ、誰ぞ煙
草盆お茶持てこいよ。（トいろ〳〵こなし。）
新洞　イヤ、生れついて煙草は嫌ひだ。
橋立　さやうならばお茶なりと。
新洞　イヽヤ、茶も飲まぬ。
橋立　そんならお菓子でもとりよせませう。」
新洞　菓子も嫌ひ。（トいろ〳〵思入あつて）
橋立　お茶もお菓子もお嫌ひなら、お床几を差し上げませう。（とあり合ふ床几を出す。）
新洞　床几は役目だ、恩にはきぬ。

〽腰うちかけるその内に、橋立は一間の首尾いかゞと思ひ立ッつ居つ、うろたへまはるを。

橋立 これ御女中。これさ女中、何をきよろ〳〵しめさるのだ、待ちかねて烏帽子首が强ばり申すわ、但し玉を渡さずば、奥へふんごまうか。（ト立ちかゝるをとめて）

新洞 ア丶申し、唯今がお祭の最中でござります。

橋立 なに、祭とは。

新洞 サアその祭とは、ヲ丶それ〳〵、夜光の玉のお祭、まづ最初が鼻高、その鼻の高さが。

〽三間半。

男にしたらば廢り者、次が御輿に提灯で、その提灯が餅搗いて、てうさやよウさ。

ト思はず新洞左衛門の傍へ行く。

新洞 エ丶何を馬鹿な、コレ神事の話聞きには來ぬ、御玉ばかりを受け取るに手間どるは合點がゆかぬ。

〽睨み廻せば。

橋立 ヲ丶けうと、輕はずみに何ぞいなあ、玉と云ふに愚はなく。

〽唐土にては卞和が璧。
我が朝にては龍の玉。
〽伊勢の國にはお杉とお玉。
飛んだは人魂、怖いはあなたの、

新洞　なんと。

橋立　お目の玉。
〽下女の玉でも輕々しう、受けとらるゝものかいナア。
マアあなたはお幾つでござりますえ。

新洞　年は六十になり申すわ。

橋立　さつてもお若い、さうしてお名わえ。

新洞　新洞左衛門といふわ。

橋立　お耳は聞えますかえ。

新洞　隨分聞え申す、蟻のさゝやくも聞える。

橋立　さうしてお目はえ。

新洞　一丁あなたの高札も苦なしに讀める。

橋立　お齒はえ。

新洞　石臼も噛みわる。

橋立　人の養生仙氣が出ようが。

新洞　仙氣の虫はとうに轉宅致したわ。

橋立　デモ折々は出ようがな。

新洞　アヽ出ようとまゝよ。

橋立　イヱ〳〵さう氣をいらつがお毒、それ〳〵頭によつぽど白髮、私が抜いて上げませう。

〽たちよればつき飛ばし。

新洞　ヱヽ七面倒な女め。

〽七面倒なと立ち上り。

ヤア〳〵娘、夜光の玉を受けとつたか、何してをるぞ。

〽呼ばゝる聲の響きてや心靜かに寶塔を、たづさへ出づる夕しでが後に續いて

女之助、出づるやいなや尊敬し。

ト この内づつと奥より夕しで誂への寶塔を持ち目八分に持ち出る、後より女之助出て來り。

女之　忝くも寶塔に籠めたるは御玉にて、暗を照すこと日輪よりも明かなる故夜光の玉とは。

〽名づけたり。

かほど尊き御寶を輕々しく受け取らして、夕しでどのは仕合せ者。

〽挨拶すれば。

夕し　これもみな、あなたのお世話ゆゑ。

〽表向きなる互ひの挨拶、新洞左衞門笑壺に入り。

新洞　出かした娘、玉を異議なく受け取つたは出かした〱。然しそれからの檢分の役はこの新洞、改めて拜禮せん、いづれもともに拜まれよ。

〽詞に從ひ女之助橋立ともに頭を下げて、はつとばかりに敬ひ居る、夕しで心に信をとり。

ト 皆々思入、夕しで眞中へ寶塔を直し、

夕し　どなたも御玉の御感德、拜み給へや。

〽拜み給へと寶塔を開き見すればこはいかに、眞黑々と黑玉の墨をつかねし如

くにて、これはとばかり夕しで親子、女之助も橋立も倶にあきれし顔つきにて、しばし詞もなかりしが新洞左衛門怒つて。

トこの内夕しで寶塔を開く、内に寶珠眞黒の玉にて飾りある、皆々びつくり、新洞左衛門きつとなつて。

新洞　大盗人の監物太郎、あらためずんば贓物を、持たせて歸す企よな、イデ寶藏へふんごんで誠の玉をつかんでくれん。

〽駈け行く向ふをさつとあけ、内より出づる監物太郎。

ト新洞左衛門つか〳〵と奥へ行かうとする、監物太郎出て來り立ちふさがり、

監物　ヤア新洞、先達て云ふ如く不淨の女が受け取らば、玉の光を失ふと云ひしはこゝの事、サアその女に詮議がかゝつた、そこ一寸も動くまいぞ。

〽うつて變りし詮議の裏釘、いがみかゝつて橋立が。

橋立　これ夕しで殿、身に覺えがあるならば有樣に白狀あれ、一間の内で不義がましい淫な事はなかりしか。

〽まざ〳〵しげに問ひかけられ何と言譯夕しでが、すべきやうなく髮にさす白羽の矢をば拔くとはや、矢の根を咽につきたてる、これはと驚く人よりも半

狂亂の新洞左衞門、抱きかゝへて。

ト この內夕しで思入あつて頭の矢をとり喉へつきたてる、皆々びつくり、新洞左衞門驚き介抱して、

新洞　コリヤ娘何故に自害するのだ、言譯なくば無いやうに仕樣もあらうのに、これ情ない、大事の娘を殺すわやい〱。

〽さしもに猛き武士も子故の闇に目も眩み、どうと座して泣きゐたり、今を限りの夕しでが涙かたてに。

夕し　なう恥かしや、自はこのお館へ來るよりもさる人をば思ひそめ、情の道に迷へども大事の役目と心の駒。

〽つなぎとめしも情なや。

御內室のもてなし、あれなる神酒を飲むよりも。

〽不思議や五臟にしみ渡り、大事を忘れなんのその。

まゝよの上にはり持たされ、つひに下紐ときそめて。

〽是非なく身をば汚せしぞや

言譯ならぬ徒を詮議に合うて恥かいて、かくなりゆくは神の罰。

〽神明怒りの鏑矢に射殺さるゝを覺悟して。
死ぬる心の悲しさを。

〽推量してと泣く涙袖にあまれば血にそみて、見る目もいとゞ哀れなり、様子を聞いて新洞左衛門すつくと立つて走りより、娘が云ひし神酒徳利にきつと目をつけ。

ト新洞左衛門思入、ありあふ神酒徳利に目をつけ、

新洞　ヤア心得ぬ、若氣とは云ひながら左程に亂るゝ娘に非ず、仔細はこの内。あらはし見ん。

〽刀の柄にて打ち割り〳〵、うち割る中より宮守のつがひ、あらはれ出づればしつかと捕へ。

ト刀の柄にて徳利を割る、中より宮守出る、兩手にて掴みきつとなつて、

さてこそ〳〵、唐土張華が博物志に交合の宮守を引さき、酒に浸してその氣を飲ませば忽ち女の精根亂すと、書きあらはすその理を知つて娘に飲ませ、性根を亂して徒させ身が汚れた故光失せしと、科を此方へぬりつけて贋物を渡す下ごしらへ、たくんだな、こしらへたな、憎さも憎し不義の相手これへ出せ、ずた〳〵に切りさいなんで腹癒せくれん。

〽三寸俎板見ぬきし兩眼、睨みつけてぞ詰めよする、ちつとも臆せず女之助。

女之　その不義の相手は某、サア御存分になされませ。（トそこへなほる、新洞左衞門きつと見て）

新洞　われか、よい覺悟だ、觀念ひろげ。

〽振り上ぐる刄の下、これなう待つてと夕しでが苦しむ體に氣も弱り、心も折れて詮方もなくより外の事ぞなき、苦しき中にも親の顔ぢろ〳〵と見て。

トこの內新洞左衞門女之助を切らうとする、夕しで袖にとりつき栖になる故切りかねていろ〳〵愁ひの思入、夕しで苦しみながら思入あつて、

夕し　おいとしや父樣、親一人子一人の私に別るゝお前の心が悲しい、お腹も立たうがさりながら。

〽たとひ宮守の業ならずとも、一寸見るから思ひそめ、心が先へ汚れたもの。

帶紐とかずと御寶の光失せいで何とせう。

〽假りの契りも二世の緣、枕交せばわが殿御。

聟は子と云ふ世のならはし、私が死んだ後にても形見と思ひ懇においとしがつて下さりませ、又女之助樣も父上を親と思うて折りふしの、訪ひ音便を賴みます、親に先立つ私の心推量して、可愛と思うてたゞ一言、未來までも夫婦ぞと、云うて聞かして下さりませ。

〽しやくり上げたる哀れさを見るに身にしむ橋立が、せめての事と介抱し萬事を胸で諦めて、詞に出ねど心には、

橋立　さぞや私が憎からう、言譯するにもしられぬ仕儀、これみな前世の約束と思ひ諦め給はれや。

〽歎けばともに女之助。

女之　これまでつくせし惡性のとゞめとなつた今の悲しさ、未來はさておき後々萬劫契り變らじ夫婦ぞや。

〽云ふ聲耳に經陀羅尼物も得云はず嬉しげに、兩手上ぐるが暇乞ひ、あへなく息は絶えにける、わつと泣き出す新洞左衞門地鞴ふんで。

トタしで思入あつて落ちいる、新洞左衞門こなし、

新洞　エヽしなしたり情なや、われ片意地な心より一生男は持たさぬと云うたを誠と思ひつめ、あへねえ最期をしてくれたナ、未來で夫婦と喜べども悲しむ親がこの世から、それが見えるかたはけ者、思ひ出す事ばかり云うて死なずと、便り少ないこの親を、早う迎へてくれいやい。

〽六十越して子にはなれ、何たのしみの娑婆世界。

情なのわが身や、不便の娘が最期やナア。

〽しやくり上げたる一徹涙、堤も切れて大川に泥の淵なす如くなり、ともに哀れと人々の歎きの内に監物太郎、かの寶塔を目通りに女之助を引直し。

ト監物太郎思入あつて女之助を直し、

監物　汝この如く光を失ひし不義の相手、討つて渡すぞ覺悟せよ、サア新洞受けとられよ。

〽云ふ聲に涙拂うてすつくと立ち。

新洞　ヤアその手は食はぬ、切り立てせば助けうと思ふか。いツかなく、眼前敵の敵人手は頼まぬわが手にかけて眞二つ、恨みをはらす、監物そこのけ。

〽とびかゝつて拔き討ちにはつしと切つたは件の名玉、これはとばかり人々はあきれて詞もなかりしが、女之助聲をかけ。（ト新洞左衛門思入あつて、）

女之　手が廻りしか新洞左衛門、せかずとも、サア首を。

〽さしつくれば目にかけず、切り割りし玉ひツ摑み。

ト右の玉を兩手につかみ思入あつて、

新洞　ヤイ玉め、おのれ陰陽和合を嫌ひよう光を失うて娘に自害させたナア、わが子の敵思ひ知つたか、加藤の家の名玉は目利の目からは悉皆藍玉、持つて歸つて主君に見せ恥あらはして腹癒て

くれん、必らず後でその玉は贋物などゝあらそふな、誠の贋があるならば石童や御臺に持たせ
早くこの家を捨てさせよ。
〽云ひ敎へたる詞の裏、表は怒り心にはせめて娘が手向けとも、なれよとかける情をば袖に隱して立ち上る、折よしと御臺若君一間の內より、あらはれ給ひ。
トこの內奥より、石童丸の手を引き牧の方出て來り、
牧の　家のためとは云ひながら科なき者に自害させ、新洞左衞門が歎きも理、哀れを見るも佛の敎、不便の者の有樣ぢやナア。
〽悔み給へば女之助。
女之　御兩所のお身の上も氣遣ひ、幸ひ我が君高野に御座あるとの風聞、それを力にお供せん。
〽いざゝせ給へと勸め立ち、伴ひ出づれば監物太郎。
監物　ヤレ待て弟、汝生れついての好色者、未だお若き御臺所、あづけやる事覺束なし。
女之　げに尤。
〽云ふよりやがて宮守を引裂き、したゝる血潮を腕にぬりつけ。

ト以前の德利より出したる宮守を引さき、腕にすりこみきつとなつて、

女之　これ見給へ兄者人、宮守は不義をすゝむれども、その血潮はかへつて不義をあらはす。
　〽唐土秦の始皇帝、三千人の宮女を愛し不義あらんかと疑ひ深く、
殘らず腕にこれをぬる、不義ある者は忽ちに。
　〽落ちて後なく。
なるためし、さるによつてゐもりといふ字を宮女を守るといふ心で、宮守と書き給ふ。
　〽我が朝にては萬葉集、脫ぐ沓の重なる事のかさならば、宮守のしるしかひや
　なからん。
沓かさなつてさへ印しは落つると讀みし歌。
　〽まして三代相恩の、お主に對して不忠不義、天命いかでと云はせも果てず。

監物　出かした、その事忘るゝな、行け。

女之　ハツ、はやお暇。
　〽はやお暇と勇み立つを。

新洞　出かされた聟殿、ではない赤の他人の女之助。必らずともに娘が事。どうなと勝手にしたがよ

い。

〽いさめかねたるとも涙心はげみの女之助

女之　我が君様の御行方、尋ねもとめてたち歸らん。

監物　後に殘るはこの監物。

〽兄が情のはなむけや、御臺若君たち別れ。

ト監物太郎懷中より袱紗包みの金を投げやる、女之助いたゞいて懷中し。

女之　高野の山の峰にある。

牧の　我が夫もろとも歸りこん。

新洞　それはまつとし。

監物　まつまでは、

橋立　お名殘りをしや。

新洞　いづれもさらば。

〽さらば〳〵の聲を力に忘れ草、伴ひ館を出で給ふ、國に思ひや殘るらん。

トこの内新洞左衛門素袍の袖を入れ愁ひの思入、花道へかゝる、牧の方石童丸に女之助付き添ひ東の

假花道へかゝる、文句一杯に双方舞臺の死骸を見てハアと泣き落す、よろしく段切れにて、

幕の外誂への愁ひ三重、時の太鼓になり、双方とも思入あつて東西へはひる。

幕

五幕目

慈尊院夢の場
玉屋與次住家の場

役名　玉屋與次、桑原女之助、駒形一角春秀、石童丸、大内五郎義貞。庄屋太郎作、御臺牧の方、與次女房おらち、與次娘かどた等

口上觸れすむと知らせにつき大ドロ〳〵になり心といふ字を日覆より引いてとる、木につき幕あく、本舞臺三間の間正面茶壁の暖簾口、常足の二重、上の方障子屋體、眞中に屛風を立て廻し、いつもの所に門口、すべてかむろの宿旅籠屋の模樣、馬士唄にて幕あく。

こゝに亭主呼びたてゝゐる、花道より旅人の仕出し捨ゼリフにて皆々泊る事あつて、殘らず奥へはひる。

〽同じ浮世に人忍ぶ身はならはしか旅の空、筑前の三人を宵よりこゝにかりの

宿、笠も草鞋もとく／＼と寐られぬまゝに御臺所、石童丸の御手をひき障子
開いて立ち出で給へば、女之助は後にひつ添ひあゆみ出で。

トこの内上の屋體より牧の方、石童丸に女之助付き添ひ出て來り、

女之 誠や人の盛衰は定めがたしと申せども重氏公御在國ましませば、錦の褥に御身をそへ透間の風も防がんに、かく淺間しき旅泊の轉寢、御いたはしう存じまする。

へ ともにしほるゝ涙をかくし。

牧の 我々親子が苦勞より若いそなたが心遣ひ、長の旅路を主なればこそ忝いぞや、死んでも忘れはせぬぞや。

へ のたまふ顏のつやゝかさ、旅勞れさへあの御器量、さて美しやと思ふより、
ふつと目につく煩惱心例の持病の好色が、ほにあらはれて。

女之 これはしたり、あらたまつたおつしやりやう、忠義といふはつけたり長々の道中をお前樣の御供して何の苦勞に存じませう、我が君のござると風聞する高野山へはモウ四五里、明日はたしかにお逢ひなさるゝ、さぞ明晩はしつぽりと久々の溜り水、人目堤の切れ口を御用心あそばしませ。

〽しかけて見たる問ひ藥、己が病に配劑の加減は常の如くなり。

牧の　マアあの人のつがもない、たとひ夫に逢うたりとも、御出家の身なれば、その樂しみは切れてある、たゞなげかはしいは國の騷動、大內を滅しこの若を世にたてる相談、一まづ國へ御供して立歸りたい心の願ひ、もしその上の御得心で還俗でもあそばしたら、ハテその時は。

〽とばかりにて袂こぼるゝ露には、いとゞ思ひやまさるらん、なまめく詞をつけこむしれ者、じり〳〵と傍により。

女之　なるほどおつしやればそんなもの、然し一旦浮世をすて御出家なされた御主人、何程おつしやるともよもや御還俗はなさるまい、又殿樣も無分別これ程綺麗な美しい旨い盛りの御臺所、捨ておいて坊主になるとはどうした御思案、第一きつい不心中、この間から道中でつく〴〵と存ずるに、ほんに私がお前のやうな女房持つたなら、拜んでばかり居りまする、何と御相談なされぬか。

〽云ひしなづッと立ち寄つて、後より抱きしめ、なんと〳〵と頰ずりは煤ですることうたてける、御臺はあきれて詞なく、振りはなし飛び退いて、

トこの內女之助牧の方の後より抱きつくをふりきつて、

牧の　コリヤ女之助、そちは氣ばし違うたか、あんまりで物が云はれぬ、石童丸も聞いてゐるぞや、國許を出づる時監物太郎が念に誓ひをたて、宮守の血を腕にまでぬつたぢやないか、まだ廿日にもなるやならず、それ程の大事を忘れ、人でなしの畜生め。

〽やりこめ給へば思案して、こりや色どりではゆくまいと、きつさうかへてげら〳〵笑ひ。

女之　いかにも國を出づる時は、さう思うて出でたれども一月たらず夜も晝も、テモよい器量またあるまいと見る度に思ひの種、まさりこそすれ忘られず、モウ云はうか〳〵とこたへ〳〵て云ひ出す今宵、命がけで惚れた戀、いやとあればお二人を手にかけて拙者も自害、應とあればその通り、サア手短かに御返事を。

〽差添へを拔きはなし大惡無道に一心が、すはりきつたる眼つき天魔の魅入と知られけり、石童丸は稚氣に何の頑是もなみだ聲。

ト女之助刀を拔き放し兩人を押へきつと見得、

石童　死ないで叶はぬ事ならば父樣に廻り合ひその後死なう、それまでは母樣もおはす事、女之助モウ堪忍してたもいなう。

へあどなき詫も武士氣質、御臺は泣くにも泣かれぬ仕儀、燃えたつ胸をおしし
　づめ

牧の　命にかけて自をそれ程までに思ふが誠なら、ともかくもせめて殿樣に廻り合ふまで料簡して
　待つてたもいなう。

女之　イヽヤならぬ、これまで欺すがみなその手、そんな甘茶にやはまられぬ、ハテ厭ならば息子殿
　から先へ殺して。（ト石童丸に刀をさしつける、牧の方とめて）

牧の　アヽこれ、滅多な事をしやんなや。

女之　サア子が可愛くば、夜の更けぬうちいろよい返事。

牧の　サアそれは。

女之　そんならこの子をつき殺さうか。

牧の　サアそれは。

女之　抱かれて寢るか。

牧の　サア。

兩人　サア〱〱。（トつけ廻し裾をとらへて）

女之　返答はどうぢやいなう。

牧の　これさうしやんな、あぶないわいなう〳〵。

〽あなたこなたとつけ廻し御臺は足のふみどもなく、若君抱き一間の内へ駈け入りしが、ごんと一聲鐘の音に、すさまじくも鳴り響く音に驚き見し夢は、覺めてあとなくなりにけり。

ト女之助牧の方石童丸を追ひ廻す。兩人上の障子の内へ逃げ込む、後追ひかけ女之助も續いてはひる、大ドロ〳〵になり、日覆より心といふ字を引いて取る。木につき道具ばら〳〵とかはる。本舞臺正面の襖でんがくにて打ち返し、慈尊院の堂になる、前面の欄干引き上げる、門口を引いて取り蹴込み打ち返す、すべて堂の前側の模様、屏風しかけにて塞錢箱になり、この傍に以前の牧の方、石童丸、女之助旅なりにて笠を持ち轉寢して居る、このまゝ道具納まる。

ト知らせにつきドロ〳〵打ち上げる。

〽旅姿、慈尊院の縁ばなへ主從三人笠かたむけ、前後も知らず臥し給ふ、なほもつゞいて寺々の鐘のなる音に女之助、むつくと起きて月影に四邊見廻し。

ト本釣鐘合方になり、女之助目を覺まし思入あつて、

女之　さては今のは夢であつたか、アヽ有難や嬉しや。我ながらなさけなや、明暮御臺を見る度に惜

しい御妻、お主ならずば口說きおとし我が妻にせんものと思ひたるも日に幾度、我が身でわが身に異見を加へ勿體ない恐ろしいと、又思ひかへて心をあらため忠義を盡すと思へども、生れついての好色、淫犯の病をあらはし夢の內とは云ひながら、主君に對して不義を云ひかけ、あまつさへ討たうとまでしたりしは、よく〳〵武運につきはてしか。

へしばし涙にくれけるが、飛びしさつて頭を下げ。

御臺樣、若君樣、夢の間の不義不屆、眞平御免下さりませ。

へ恐れいつて三拜九拜、親子の人は正體なく寢入りし暇に汗たら〳〵、魘はれ給ふに走りより、もうし〳〵とゆり起せば、二人ながら起き上り顏を眺めて、

ト女之助二人をゆり起し、牧の方心づき女之助の顏を見て、

牧の　ヤア、そなたはまだ寢やらぬかいの。

へ齒の根も合はず面色かはり若君をおし圍ひ、立ち退き給へば南無三寶、夢とはいへど通ぜしかと、胸に盤石おしこむ如くせつなき心を押ししづめ。

女之　お勞れも出でしにや、魘はれ給ふに驚いて、お目を覺まし候ひしか。

へ云ひくろめても氣はすまず、案じ煩ひゐる所へ。（トこの時下手にて大勢の人聲する）

〽群り來たる人音に何事やらんと女之助、眼を配り。
たとひ道行く旅人たりとも見咎められてはお爲惡しゝ、御兩所は笠深く田舍行者の臥したる體、拙者もしばし身を忍ばん。
〽忍びて樣子窺ひゐる。（ト三人とも笠をかたむけ、忍びゐる。）
〽程なく來たる大勢はかむろの宿の百姓ども、中にも庄屋が智慧あり顏。
トこの內靜かなる禪の勤めになり、庄屋太郎作小提灯を下げ先に立ち、百性大勢、ずつと後より玉屋與次一本差し、着流しにて提灯を持ち出て來り。

太郎　コレ皆の衆、この所の殿樣大內之介義弘樣がはる〲の海山を越え、直きに登つて繪圖をみんなに一枚づゝ渡して、この圖に合つた者を縛つて來いとの云付けでござるぞよ、三十ばかりのよい女性と十ばかりの美しいちつぺいと、三十ばかりのよい男と、どうやら人の女房を息子とともに盜んで駈落などゝ見えるぞや。どうでもむづかしい尋ね者見つけたら金になります、共吟味に精出さしやれ、したが縛つても庄屋だけ褒美は俺と半分分け、斷つておきましたぞ。
〽云ふを聞きかねしやばり出る、所でちつと理窟者男をみがく玉屋の與次、朱鞘の大だち落し差したちはだかつて。

與次　コリヤ庄屋殿、拔作でも身内が慾ぢやの、近年は代官によい人がわせた故所も騒がず物しづかでよかつたに、何やら又云ひ出して代官所へ呼びつけ廻り、ちつとばかりの褒美であらうか、澤山さうに三人まで縛つて來いとはうまい殿樣、欺されてこのおぬく殿がくゝつたら褒美をとるハヽヽ、何處へ褒美、わごりよのやうなうまい和郎にくゝられる人間があるものかい、役にたゝぬ口たゝかずと、サア早う行きませう。

太郎　コリヤ待て玉屋、われが今の云分をこの智慧者が勘辨するに、褒美が少なけりや見つけても取り逃がす氣ぢやナア、さつきの云付けを何と聞いたぞ、かばひだてはならぬぞよ、お尋ね者を逃がしたら助けた者の首がコロリ、これも斷つておいたぞよ、サア〳〵いづれも、行きがけに慈尊院の境内を搜して行かうぢやあるまいか、もしもかゞんでをつたらよつぽどの拾ひ物ぢや、サア〳〵ござれ〳〵。

〽大勢引きつれうそ〳〵と、二人の寢姿見付け出し。（ト太郎作先に立ち堂の三人を見て）

ヤア〳〵、皆の衆、待たつしやれ、なにやら笠をかたむけうさんらしい奴がゐますぞ。（ト提灯にてよく〳〵見て）やア、これがお尋ね者に相違ない〳〵。くゝれ〳〵。

ト禪の勤めになり百姓ども女之助にかゝる、左右へ投げのけ牧の方石童丸を圍ひ、

女之　コリヤうぬら盜賊だナ、近よつたら手は見せぬぞ。

太郎　かまふ事はねえ、早く〱かゝれ〱。

ト又禪の勤になり皆々縫ぐるみにて打つてかゝる、女之助刀を拔き切り拂ふ、皆々後の方へ逃げて來て太郎作震へながら、

太郎　コレ、かういふ時は玉屋の與次、早く出てくれ〱。
へ聲かけられて玉屋の與次、つら〱眺めて。

トこれにて與次前へ出て提灯にて女之助を見て、

與次　サテはわいらはお尋ね者、かう大勢がとり卷くからは、所詮遁れぬ程に、早くこの場を逃げるか。イヤ逃げようと思うても、滅多に逃がさぬ。

女之　さてはうぬは盜賊の帳ぼぢやナ、わるく寄つたら撫で斬りだぞ。

與次　何を小癪な。

ト禪の勤めになり與次と女之助立廻り、この内與次の持ちし提灯をうち落す、これよりくらがりの心にて與次思入あつて刀をぬき、切りちらしながら花道へはひる、女之助皆々を切りちらす、皆々逃げて花道へはひる。

女之　かく行先を盗賊に圍まれては叶ひがたし、この間に御供して何處へなりとも立ち忍び夜明けてお山へお供せん、サアござりませ。

ト石童丸を脊負ひ牧の方の手をひき行かうとする、この時以前の百姓一人窺ひよつて、

百姓　うぬ、お尋ね者。トかゝるを見事に切つて捨てる。）

〽後をも見ずして駈り行く。

ト禪の勤めになり三人とも花道へはひる、直ぐにこの道具ぶん廻す。

●本舞臺三間の間平舞臺、正面押入れ納戸口、上の方障子屋體、眞中に据ゑ風呂、いつもの所門口、屏風を立て勝手道具とりちらし、よき所に娘かどた煙草盆にもたれ居睡りしてゐる。この見得在鄕唄にて道具納まる。

〽かむろの宿の玉屋與次、娘かどたは門口をさすと寢てゐる宵惑ひ、おらちは一間たち出でゝ。

ト奥より與次女房おらち、世話女房のこしらへにて出て、かどたを見て、

らち　コレそこなお船頭、モウ船を漕ぎ出すか、ほんにやれたしなみや、つれあひ與次はつひにお代官の顏も見ぬ人、それに今日呼びに來て今に戻られず、おれよりもマアそなたが案じる筈、なぜといや、アノ與次殿とは生さぬ親子、今にも戻られねむたさうた顏見せて心の義理が立つも

のか、寝所でもしいておきや。
〽叱るも親身聞くもおろ〳〵。

かど　母様ゆるして下さりませ、昨夜大師講の持越しでツイとろ〳〵と致しました、寝所でもしいておきませう。

らち　それ〳〵モウ初夜過ぎ、おツつけ戻らつしやるであらう、早う寝所しいておきや、わしが枕は直すぞや。

かど　アイ〳〵。
〽二つ並びを云ひかねて娘頼まぬ心いき、いらぬ遠慮と見えにける。（トこれにてかどた奥へはひる。）
〽この家を力に女之助、御臺若君後ろに圍ひ息をばかりに駈け來り、門の戸忙しく打ち敲き。

トバタ〳〵になり花道より以前の女之助、石童丸を背負ひ牧の方の手を引き走り出て門口へ來たり、

女之　ちと頼みます〳〵。

らち　どなた様でございます。

女之　イヤ我々は旅の者、足弱二人めしつれ盜賊に出會ひ、やう〳〵切りぬけこれまで參りし者、三人の命助けると思しめしおかくまひ下さらば有難う存じまする。

〽餘儀なく云ふにいやとも云はれず。

らち　主人の夫は留守なれどもさほどの御難儀、見捨つるもお笑止、少しの間なりとも此方へおはひりなされませ。

女之　それは千萬忝う存じまする。

〽門口あくれば三人とも命の御恩と追從し、內へはひれば女房が心をつけて表をしめ。

トこれにて皆々內へはひる、おらち茶など出しながら、

らち　マア〳〵こちへおはひりなされませ、定めて御難儀でござりませう。

トこんな事云ひながら牧の方と顏見合せ。

牧の　ヤアそなたはおらちぢやないか。

らち　さうおつしやるは御臺牧の方樣。

女之　ナニ以前の女房とや。

牧の　かはつた所で。

らち　ようマア御出でなされましたナア。（ト合方になり、）何からお話申さうやら、何はさておきこのお姿、何故はる〴〵お越しなされました。

牧の　さればいなう、つれあひ重氏卿御遁世あそばし、國は大内になやまされ命危く逃げのび、我が夫高野にましますと人の噂を力にて、この所まで來ましたわいなう。

らち　それはマアいかい御苦勞あそばしまする、若君樣御成長、何か思へば一昔、變る浮世の有樣でござりまする。

〽憂きを涙に語り合ふ、女之助は四邊を見て。

女之　その方と離別せし折柄、かどたといへる水子を添へしが見事育てあげたるか、無事でをるか、どうぢや。

らち　これ云はぬ昔をお尋ね、誤なき身に暇の狀、是非なく故鄕へ歸り年老つた母樣乳呑子をかゝへ、どうして暮すあてもなく途方に暮れし折柄、この家の主人も以前は武士、尾羽打からした互ひの落目、倶過ぎにするならば母樣ぐるめ養うてやらうとある、二度の夫と思へども親の爲子の爲に、この家へ嫁入つたその年に母樣も見送り、娘も成人したけれど何のお前に逢はさう

ぞ、云ひ出しても下さんすな。
ヘけんと云はれて女之助むつとはすれど宿をかる、無心に詞もなかりけり、若君はおとなしく。

石童　たゞ何事も堪忍して今宵はこゝに泊めてたも。
ヘ涙ぐんだる御仰せ。

らち　こは勿體ないお詞、お泊め申さいで何と致しませう、見苦しけれど一間もあり、マアあれへおいであそばし御休息なされませ。

牧の　そんならおらち、主人が戻り給ふたら、よいやうに賴むぞや。

らち　マアあれへお越しなされませ。
ヘ石童君の御手をとりしほ〳〵立つて入り給ふ、女之助はつきほなく共に奥へと立ち上るを、おらちはやがておしとゞめ

トこの內牧の方石童丸上の屋體へはひる、女之助も行かうとする、おらち屛風にて押閑ひ、

らち　これ待たしやんせ、御子方は御主筋好んでもお宿申すがお前はどうも泊められぬ、何處へなりとも外へおいでなされませ。

〽さしとめられて重なる強腹。

女之　ヤアなめすぎた女め、大切なる二方を預け某何處へ行くべき、お主ばかりの好みを思ひ夫の好みは思はぬか。

らち　サアその好みぢやによつてなほなりませぬ。

女之　そりや又なぜに。

らち　さればいなう、今私には玉屋の與次といふ夫のある身、その留守の間に以前のつれあひ、泊めてくれいとあつた故、泊めましたとはどの口で云はれう、まだお前には昔の道樂直らぬナ、御二方はこのおらちが命にかけて預つた、氣遣ひせずと宿なくば軒の下でも一宿あれ、アタ自墮落な。

〽あたじだらくなと引立つて有無を云はさず門の戸を、あけて表へつき出す。理窟でしめる鍱は押すに押されぬ心の錠、稚なじみの合鍵も工合違うて海老の腰、かゞめながらに軒の下しばしは宿るばかりなり。

トこの内おらち女之助を無理に門口の外へつき出し戸をしめる、女之助こなしあつて柴垣の傍へかゞむ、おらち思入あつて圍爐裏の傍へ來て火を焚いてゐる。

與次　女房ども今歸つた、明けてくれ。

らち　アイ〳〵。（トあける、與次内へはひつて圍爐裏にあたる、）今迄マアどこに何してござんしたぞいナア。

與次　また悋氣か、おいてくれ、今夜はお上の御用で夜が更けたのだわ。サア早く火でも焚きつけろ焚きつけろ。

ト雨人捨ゼリフにて圍爐裏の火をたく、この時外にて、

女之　一端の理にせまり軒に一宿致せども、寒風はげしく身も冷え渡る、御亭主もお歸りと見うけたり、一宿を御無心申したら存じまする。

〽一夜の宿と乞ひにける、與次は聞き耳。

與次　表に何やら人聲がする、アリヤ何ぢや。

らち　イヱありや最前旅人が盜賊に出合ひ難儀すると云うた故、ひくにひかれず足弱二人は泊めたれども、お前が留守故男は遠慮して外に寢さしておいたわいナア。

與次　そんなら何といやる、旅人が三人來て足弱二人は泊めたが、男は亭主の留守で遠慮して泊めぬといふのか、そりや大事ないわ、泊めてやるがいゝ。コレ旅人、遠慮はいらぬ程にマア内へはひ

らつしやれ〱、どうしてこの寒いのに外に寝られるものか、サアこゝへ來さつしやれ〱。

女之　それは千萬忝う存じまする。（ト云ひながら圍爐裏の脇へ來る、おらちこなし。）

與次　サア〱傍へよつて火にあたらつしやりませ。さうしてお前方はどれからどれへござらつしやる。

女之　ハイ、私どもは心願ござりまして、高野山へ參詣致します。

與次　それは御奇特千萬な。（トこんな事云ひながら、火にあたり兩人顏見てびつくり、）ヤアわれは。

女之　そちは。

與次　慈尊院の境内にて。

女之　でつくわしたる盜賊め。（ト切りかゝる。）

與次　何を。

ト誂への合方になり兩人立廻り、おらちこなしあつて有合ふ屛風にて圍爐裏の火をけす、くらがりになり兩人立廻りのうちおらち中へはひり邪魔になる事よろしくあつて、又火燃え上がる、又はげしき立廻り、おらち手早く手桶の水をかけ火消える、トヾ廻りこの時上の障子の內より牧の方行燈を下げ出る、この明りにて又立廻り、おらち詮方なくあり合ふ屛風にて眞中より白刃を押へ三人きつと見得。

らち　マア〱待つて下さりませ。

與次　邪魔だてひろぐな。

女之　のいた〳〵。

らち　イヽヤ退かれぬお二人さん、殊に我が夫與次殿はこなたの事は所でも、人も恐るゝ男一匹、盗賊よ追剝よと名をたてられて切先勝負、もしもの事があつた時妻子までの顏よごし、何故さもしい名はとらしやんした、サ樣子聞かぬその先は、滅多にこゝは放さぬわいなあ。

與次　尤ぢや、全く盗みはせぬ、その侍が同道の足弱と云ふはお尋ねの者、卽ちこの國の領主大内義弘殿到着あつてこの繪圖と合し、搦め取つて渡せとの云付け、證據はこゝに。

（へ出して見せたは紛ひもなき御臺所と若君の、お姿書きしうつし繪に、人々はつと胸つかへ肝を冷やすばかりなり、おらちは常から夫の心轉もしき氣をよく見拔き。（トおらち心遣ひの思入あつて）

らち　その繪のお二人を何處いかなる御方と、知つてこなたは捕へさんしたえ。

與次　イヽヤ知らぬ、人違ひでも大事ない捕へて出せとの云付け、身にかゝらねば念おして問ふ間もなく歸りがけ、慈尊院の境内で見遁しおいたに恩を仇なる犬侍、そこのけ女房。

トヽ又切りかゝるをおらち後ろより抱きとめ、

らち　イヽヤのかれぬ、からなつたら何を隱さう、これなる侍は私が以前のつれあひ、御供しられた御二方はその繪に違はず筑紫の大名、加藤左衛門重氏樣の御臺若君樣ぢやわいナ。

與次　ヤヽ何と。（ト思入。）

らち　私が以前のお主ぢやわいの。

與次　何と云ふ、すりや奥にござる御二人は重氏公の御臺若君と申すか。

らち　アイナア。

與次　さやうとは存ぜず、最前より無禮の段は眞平御免。

〽眞平御免ときをりの平伏、あやまり入つてぞ見えにける、心ゆるさぬ女之助。

ト與次刀を投げ出し下手へ來り平伏する。

女之　ヤア俄かの三拜食はぬ〳〵、我も昔は家來筋と古手をもつて油斷させ、大內方へ內通する下心、卑怯な奴、サア立ち上つて勝負せよ。

與次　ヤレ、はやまり給ふな、その云譯見する品あり、しばらく御待ち下さりませう。

〽まづしばらくと押しなだめ、簞笥の內より刀一腰とり出だし、目通りにすへどつかと座し。

ト思入あつて押入れより狐川の刀を出し來り前へおき、

女之　いづれも御見知りのある刀、立ち寄つて御覽下され。

　目貫は金の菊ながし。

牧の　牡丹に獅子の高彫り鍔、紛ひもなき夫の差料。

女之　これを所持なすその仔細は。

與次　ハヽハツ。（ト平伏する、謠への合方になり、）御不審は御尤、もと某は播州の浪人尾羽打枯し都方へ奉公稼ぎに上りし折柄、八幡山崎の間狐川の渡しにてさる浪人と口論しいだし、さし違へんと致せし所その場へ重氏公通りあはされ、その方の一分立てよと御差替へ一腰づゝ下しおかれ、命助かるのみならず外聞の腰をふさぎ、それより武士奉公のありつきなくこの國の土民となつては候へども、御恩は忘れぬ昔氣質、命の親の重氏公、その御臺若君と聞き何と手向ひ申すべき、御疑ひをはらされ御譜代同然に思しめし下さるべし。

牧の　げにその事はお物語ありし事、さてはその時刀を貰うたはそなたよの、やつたる人は御遁世、御後慕ふ我々が力となつて今一度、重氏公に逢はせてたも、頼み少ない世の中ぢやわいの。

　ト　かこち給へば。

與次　お氣遣ひなされまするな、天地の間に御座あるなら尋ね逢はせ參らせませう。

〽奥そこもなき心底に、見込んでなほも女之助。

女之　ホヽウ頼もしき御一言、とても事に御誓言が承りたい。（ト刀を拔いて金打する、女之助見て。）

與次　諸天善神はおろか、佛意にかけて二言はござらぬ。

〽聞いて安堵の胸をすへ、何思ひけんどつかと座し指添へぬいて我とわが、腹にぐつとつきたつる、人々これは狂氣かと驚き騷げば。

ト思入あつて刀をぬき腹へつきたてる、皆々びつくり介抱して、

牧の　コリヤ氣ばし違うたか女之助。

與次　何故切腹なされしぞ。

女之　騷ぎ給ふな方々、思ひがけなき最期故御驚きは御尤、一通りお聞き下されませう。（ト竹笛入りの合方になり、）何を隱さん某は生れついての好色ふかく、兄監物太郎の疑ひを晴らさんため宮守の血を贖にぬり、誓ひを立てゝ國を出で心を心でたしなめども情なや、宵の夢わりなくも御臺へ戀慕きゝ入れなきを手にかけて、殺さうとまでしたりしが慈尊院の時知らす鐘の響に夢覺めて、いつにない御臺にはわが姿を見て恐れ給ふ、南無三寶、夢の内とは云ひながら。

ヘ通ぜしか、はや切腹と思へども、我なくなりては御兩所を、守り奉る人なしと。

さあらぬ體にてこれまで來たり今與次殿の心底見こみ、頼みおきて相果てる、申し若君樣、これなる與次殿を力となされ父樣の御行衞尋ね、めでたく御對面あそばせや。

ヘ何の因果でこのやうな不所存者には生れしぞ、我とわが身を悔み泣見る目もともに哀れなり、與次はわざと涙をかくし。

與次　夢は五臟の煩ひ、なぜ本心をあらため御先途を見屆けぬ、切腹とは腑甲斐なし。

女之　イヤ本心を改めても夢となぐるになぐられぬ仔細は、腕にぬつたる印しの血、心の迷ひで宮守の血潮がこれこの如く消えたるは。

ヘ罰か報いか天命か、兄監物へ云譯の種を失ひ是非もなく、かくはからひ申せしぞや。

よし印しが落ちぬとて最早御臺の思しめし、片時も心安かるまじ、せめての冥加に御主人の御心休めにする切腹、これまでつくせし忠節を無にして死ぬる拙者が心底、御推量なされて下さ

りませ。

〽云ふ聲も弱りはてたる息遣ひ、與次は哀れの袂を絞り。

與次　せめて最後の思出に娘かどたにたゞ一目、これかどたよ〳〵。

〽立つを引きとめ女房が涙ながらに。

らち　申し、定めて樣子を聞いてもゐませう、駈け出るはづを駈け出さぬは前の親を慕ふかと、思はれまいと思ふからその氣な娘を呼び出して、泣くも泣かれぬ苦しみをさゝうより、やつぱり小陰で存分に泣かしてやつて下さんせ。

〽子によそへたるわが涙、たもちかねて思はずもわつとばかりに泣きさけぶ、御臺も共に御涙。

牧の　惚れる身よりも惚れられる、この身の辛させつなさを推量してたもいの。

〽しやくり歎かせ給ふにぞ。

女之　そのお詞が冥土のかたみ、南無阿彌陀佛。

〽差添をぬくがこの世の暇乞消えてはかなくなりにける、はつとばかりに人々

のすがり泣き入る折こそあれ、はるかに聞ゆる人馬の聲、すわ事こそと與次はつッ立ち。

ト女之助落入る、皆々思入、この時チャン／＼と音する、與次びつくりこなしあつて門口へ出てきつと向ふを見て、

與次　コリヤ／＼女房、泣いてゐる所でない、察する所討手のやからと覺えたり、思ふ存分働いてすき間を見てお供せん、御臺若君を早く／＼。

トこれにて牧の方若君を介抱しておらちかどた奥へはひる、與次きつと思入あつて身ごしらへする。

〽尻七の圖までひつからげ身ごしらへして待つ所へ、大内五郎義貞手の者引具し駈來たり。

トチャン／＼になり大内五郎義貞四天丸ぐけりゝしきなりにて、捕手四人十手を持ち軍兵大勢高張り提灯にて出て來り門口の外にて、

大内　ヤア／＼者ども承はれ、加藤重氏が御臺石童この家の内にかくまひある事、注進あつてたしかに聞く急ぎふんごみ搦めとれ、必らずぬかるな。

四人　心得ました。

大内　それ、ふんごめ。

ト四人門口をあけてはひる、與次これを相手に立廻りドン〳〵三味線入りの鳴物にて花々しくよろしく立廻りあつて四人逃げてはひる、門口の外にて大内五郎こなしあつて、

ヤア〳〵所の代官駒形一角、あれめし取つて手柄にせよ。（トこの時揚幕にて）

一角　ハヽア。

〽駈け來る侍早繩たぐつて大聲あげ。

トバタ〳〵にて駒形一角野袴ぶつさきのなりにて、種ケ島の鐵砲を持ち出て來り、

一角　ヤア〳〵與次、汝いか程働くともかく十重廿重に取り卷く上は最早叶はぬ、異議に及ぶと飛道具、いかに〳〵。

〽いかに〳〵とのゝしつたり、流石の與次も飛道具に心おくれし折柄に、一間の內より。

と與次當惑の思入、この時障子の內より、

らち　コレなう御亭主、とても遁れぬ我々親子、急ぎ繩かけ渡されよ。

〽出づるを見れば妻のおらち、娘かどたを石童にしたてゝ出づる主思ひ、それ

と悟れど恩愛に心おくれて手をつかへ。

トこれにて障子の内よりおらちおどた、御臺石童のなりになり立ち出る、與次思入。

與次　その御覺悟はさる事ながら一端かくまひし某が、むざ〳〵渡す無念さを御推量下さりませ。

〽夫婦別れの涙をば、目に浮かむればおらちもしほれ。

らち　自は覺悟の前、たゞいとしいはこの石童、不便にござるわいの。

〽不便にござると、とも泣きにしほれしが與次はつッ立ち。

與次　サアお役人、お尋ね者の兩人、繩かけて受けとりなされませ。

〽云ふ聲に駒形一角、内にはひりすき間あらせず氣配り目配り、是非なく繩をかけにける、表に控へし大内が大聲。

トこの内一角内へはひる、腰よりとり繩出してなげてやる、與次とつて兩人に繩かける、この時門口へ外より大内五郎こなしあつて、

大内　ヤア〳〵一角、かねて渡し置いたる繪姿あるべし、よくひき合はせて受けとれよ。

〽遁れがたなき鶴の一聲、鷺を烏と爭うても爭ひにくき繪姿を、明りへ出してひきひろげ見るも一生懸命、遁れぬ所と與次は身がまへ。

一角　それ提灯。（ト軍兵左右より提灯を出す、與次はつと思入あつて刀へ手をかけこなし、一角も思入。）

面をあげい。（トおらち思入あつて額を上げる。）

〽つく〲眺めて駒形一角。（ト見る事あつて思入。）

重氏が御臺桙、繪圖の通りに相違ない。相違ござらぬ。

〽表へ答へるたしかの訴へ、與次は夢かと念に念。

與次　その詞に相違ないか、後で違變めさるゝな。

一角　ヤアいらざる馬鹿念、駒形一角春秀が受け取つたに相違があらうか、よく繩かけて渡した、出かした〲。町人には珍らしきその方、當座の褒美に一腰くれう。

〽差添ぬいて提灯の、明りへ出したは重氏の狐川にて情の一腰。

ト一角思入、差添をぬいて出す、與次取つて來る、この時上の障子の内より、牧の方出てこの刀を見て、

牧の　ヤ、コリヤ我が夫の御差かへ。

與次　拙者が刀と。（ト比べて見て思入、一角思入あつて）

一角　すりやいつぞや狐川にて。

與次　御恩を受けしその時の。

一角　そんならその時、アノ出合ひし。

與次　ヲ、侍か。

一角　コリヤ。（ト押へる、與次こなし。）それ繩つきを。（トおらちを引廻して下へおく、木の頭。）引つたてい。

ト双方ともこなし、よろしく、

ひやうし幕

大詰　高野山の場

役名　苅萱道心實ハ加藤左衛門重氏、同宿安心坊、喜悦坊、祟悦坊、義緣坊、玉屋與次、石童丸、獅々戸郷助、阿闍梨。牧の方、與次女房おらち、娘かどた等。

本舞臺一面の山幕、よき所に榜示杭、幕の内より高野參りの仕出し大勢立ちかゝり居る、静かなる鐘の勸めにて幕あく。

□　これはいわ組の御先達、御登山なされましたか。

先達　シンキ役の衆が三四人、高野山へ參りたいとある故、御案内申しました。
○　それはお奇特千萬、然しお山もこの節は、田舍の參りで賑やかでござる。
先達　さいなう、こなた樣も御參詣か。
○　イヤわしは、一寸御坊達に用事があつて來ました。
先達　ハヽア、れこの口でお上りか。（ト握り拳を出してみせる。）
□　マア〳〵その口もあり、又吉野邊までかけ合があつた。
先達　大阪で儲けたらいで、吉野から高野とは、しりしまいのよい人ぢや。
○　また先達の惡口か。
先達　とんとこなさんは、江戸ツ子つぶぢや。
三人　ハヽヽヽ。
四人　とんとお別れ申しませう。
□　先達、お家へ用事があらば、お言傳て申しませうかえ。
先達　イヤ、私もこの山から直ぐに歸ります。
兩人　左樣なら御機嫌よう。

三人　どりや參りませう。

トやはり右の鳴物にて皆々下手へはひる、山幕切つて落す。

本舞臺正面に岩組、上の方眞中まで岩組、段々にこしらへ絶頂に折れるしかけの松の立木、よき所に蛇柳、眞中にこしらへの女人堂、左右峙山の體、上の方の道具峙山にて、半分見せてある體よろしく、山オロシにて道具納まる。

〽陰德あれば陽報あり賢き敎へまのあたり、御臺所石童丸玉屋の與次が介抱にて、重氏卿の御存所尋ね求むる高野山、小石まじりの細道をつまづき〳〵たど〳〵と、たどり給ふぞいたはしや。

トこの內かすめたる山オロシになり、花道より牧の方笠と杖とを持ち、後より玉屋の與次一本差し、旅なり、石童丸を背負ひ出て來り、花道にて、

牧の　イヤナウ與次、誠や人の習ひにて榮え衰へ浮沈ありとはかねて知りながら、よその事よと思ひしが今身の上に思ひ知る、これにつけてもいとしいは內室のおらち殿娘のかどた、我々が身に替り敵の中に憂き苦勞、さだめて憂目に合ふやらん。

〽案じすごしの御淚、倶にしをるゝ詞をおさへ

與次　ハテわつけもない御歎き、彼等が御身に替りしはお主大事と一途の忠義、さりながら駒形一角は情を知つたる侍、命には氣遣ひなし、かやうな小事に御心をいため給ふは御病氣の御障り、必らず御案じなされまするな。あれ〳〵向うが女人堂、そろ〳〵と御歩行なされませ。

〽與次が介抱牧の方、爪先上りつく杖も重い主人を輕々と、背に背負うて女人堂やう〳〵とこそつきにけり。

トこれにて皆々本舞臺へ來り與次、石童丸を下ろし思入あつて、

與次　定めし石だかな道故、おみ足がいたしましたでござりませう。

牧の　ツイに習はぬ山道、殊に長の旅勞れ。石童丸さぞわがみもつかれたであらうの。

石童　イヱ〳〵何ぼう勞れても、今日は父上に廻り合ふ日ぢやと思へば、さしてせつなうもござりませぬ。

牧の　親なればこそ子なればこそ、それほどまでに父御を慕ふ志、大師樣が不便に思しめし廻り逢はぬといふ事はあるまいわいなう。

與次　かやうにお二人のお供は致したれども、御臺樣はこの女人堂より先へは叶はぬ、私はいつぞや狐川にて御恩をうけました砌り、お目にかゝつた故ほのかに御見知り申してをりまする、石童

様には父御のお顔、定めし御存じでござりませう。

石童　イヤ父上の御顔は、知らぬわいなう。

牧の　そりやそのはずの事、この子が二つの年より父御は都在番、丸九年經てど御歸國なく、自らは都までお迎へに參りしが、御出家の御望みある故その場より御出國、御國へとてはお歸りなされず、それ故石童には御對面なされず、お顔は見知らぬわいなう。

與次　コリヤ父御のお顔は御存じござりませぬか、ハテそれは當惑、ツイ高野とは申せども大分の御出家、私一人が見知つたと申して、なか／＼ツイ廻り逢ひにくい、ちつとも早くお山へ參り、かたはしから尋ねませう。

牧の　そんなら石童もろともちつとも早う。

〽與次が詞を力草、夫を慕ふ山水の流れは同じ女房おらち、娘のかどたもろともに息を限りに驅け來り。（ト山オロシになりおらち、かどた以前のなりにて走り出て與次を見て、）

らち　ヤ、お前はこちの人、御臺様か。

與次　そちや女房おらちか。

かど　とゝ様か。
牧の　ヲヽかどたか。
〽御臺も倶に御驚き、浮木の龜の對面と、喜び思ふぞ道理なり。
與次　コリヤ女房、どうして此處へ參りしぞ、樣子はどうぢや。
らち　不思議に命助かりしが御運の末、折角親子が心を推せし御身替りも贋物と新洞左衛門に云ひさかれ、いとしや駒形一角殿は直ぐにその場で御切腹、我々も危き所をやう／＼切りぬけ逃げたれども、追手の來るは知れたこと、少しも早くこの所を。
〽云ふに驚く與次が顔色。
與次　でかす／＼、然しこの如く御大病なればたやすくは逃げがたし、その方は御臺樣を伴ひ娘もろとも、アノ女人堂へ身を忍ばせ我はこれにて討手を引きうけ切りちらさん、ちつとも氣遣ひなされまするな。
〽制する詞に御臺は嬉しく。
牧の　これ石童、與次がこゝに居やれば心置きなう、一時も早う父御をたづねお供しや、殿樣のお顔を見るならば、耆婆扁鵲が藥より百倍ましたる藥となり本復するに疑ひなし、お顔は知らずと

も御名を名乘り、加藤左衞門重氏の今道心はいづくにおはすと尋ねて見や。

〽湯水を取つての介抱よりこれにましたる孝行なしと、息もたよわき御仰せ幼心に聞き分けて。

石童　父上のお顏を見て御本復さへある事なら、なる程私は先へ參りませう。與次よ後から來てくれよ。

〽しほ〳〵濡るゝ笠と杖、とり上げて立ち給ふ。

牧の　そんならもう行きやるか、西も東も知らぬ身を手放してやる氣遣ひさ、後の難儀はいかならん。

〽またさめ〴〵と泣き給ふ。

與次　ハテやくたいもなき御歎き、おッつけ親子御三人目出たう御對面。

らち　その時こそは私ら親子も倶に喜び。

石童　そんなら母樣、後ほどお目にかゝりませう。

〽立ち給ふ。（ト石童丸行きにかゝる。）

牧の　これ石童、山道をよそ見して、怪我ばしゝてたもんなや。

〽と氣をつけて見かはし〳〵別れたる、これがこの世の名殘りとは後にぞ思ひ知られたり。

トこの内石童丸は花道へはひる、牧の方思入。

〽かゝる所へ麓より大勢の足音、與次はそれと心付き。

トこの時チャン〳〵になり、與次きつとこなし、

與次　アノ物音はたしかに討手の奴ばら、見つけられては一大事、コリヤ〳〵女房、御臺をしばらく女人堂へ、はやく〳〵。

〽早う〳〵におらちは心得、御臺と我が子を伴なうて女人堂へと忍びけり。

トおらち、かどた牧の方を介抱して女人堂へはひる、

〽程もあらせず大内の郎黨、獅々戸郷助大勢引き連れ驅け來たり。

トチャン〳〵になり、獅々戸郷助四天りゝしきなりにて、捕手大勢つき添ひ出て來り。

獅々　ヤア見付けた〳〵、汝逃ぐるとて逃がさうか、誠の御臺石童丸は何處へやつた。ありやうに白狀せよ、異議に及ばゞ汝ぐるめに繩かけうか、サア返答はなんと〳〵。

ヘなんと〳〵と呼ばゝつたり。

與次　ヤア猪口才なるうぢ虫めら、ならば手柄に搦めて見よ。

獅々　面倒な。者ども、ソレ。

トドン〳〵になり、捕手大勢與次に打つてかゝる、立廻り、後より獅々戸郷助切つてかゝる、與次拔き討ちに切りつける、大ドロ〳〵雷の音になり、捕手大勢下手へ逃げてはひる、與次追駈けてはひる、これにてこの道具ぶん廻す。

本舞臺正面女人堂仕掛けにて岩組になり、下の方へ引いて取る。後丸木橋、上の方に岩を押し出す、この上に三世佛の供養塔を出し、花道眞中不動坂、すべて高野山の體。所々に蔦かづら、松の大樹、ずつと上の方へ竹本連中の出語り臺を押し出し、この道具納まる。

ト知らせにつき淨瑠璃。

ヘ行く空の、雲間に近き八葉の峯に紫雲のたなびきし、高野山と聞えしは三面に山連なり、源一水にして萬水東に流れ、大師二犬に道を習ひ開き始めし靈地とかや、麓につらなる寺々の同宿どもはそれ〳〵に、寺々の使番頭の丸い奇特には、あぶらけのない付き合はさつぱりとして殊勝なり。

トこの内しづかなる禪の勸めになり安心坊、喜悅坊腰衣同宿のなり、苞の自然薯、豆腐箱を持ち山の

上より出て來り橋を渡り本舞臺へ來る。

安心　なんと喜悦坊、今のぐわら／＼はなんであらうぞ。

喜悦　さればいなう、強いお山の荒れやうであつたが、心の不淨の者が登山したと云ふやうな事かいの。

安心　この高野も結構な所ぢやが、おり／＼のぐわら／＼には困りはてるてや。

喜悦　かうちよこ／＼ぐわらつくと、臍のかけがえでもこしらへておかにやならぬ。

安心　何を云はれるやら、臍のかけがえがどこの國にあるものか。

喜悦　あるぞや。

安心　そりやどこに。

喜悦　麓のあら物屋に。

安心　何の阿呆らしい、そりやへそがはらけぢや。

兩人　ヘヽヽヽ。

〽互に笑ひの折柄に慈尊院の同宿ども、生れし頭へ返り咲きに二人は山をこし衣、歩み覺えし山道を苦のないくらし輕々と、きかゝる宗悦義緣坊それと見

るより。

トこの内しづかなる禪の勤めになり、花道より宗悦坊、義緣坊兩人やはり同宿のなりにて出て來り、花道中程坂の切り穴へ下り、舞臺下の方へ出て來り。

宗悦　そこにゐるは安心坊。

義緣　喜悦坊ではないか。

安心　義緣坊か。

喜悦　宗悦坊、この兩三日は御意得ぬナ。

宗悦　お互ひに變る事もなうて。

四人　重疊々々。

安心　時に先程は、けしからぬ荒れでござつたなう。

喜悦　されぱいなう、今の今とてその噂。

義緣　なんとまあ、ぴか／＼ぐわら／＼には、困るではござらぬか。

宗悦　何を云はるゝやら、心の惡い者が山へ登るとあのやうにお山が荒れる、爭はれぬものぢや。

義緣　その話で思ひ出した、もしや貴僧達下山の砌りに隱し妻などいふやうな者をひき上げはせぬ

か。

安心　これはけうがる事を申すお僧ではあるぞ、當山開かせ給うてより、女人結界は云はずとも知れし事、なうお僧達。

喜悅　ヲ、それ〳〵、女人は云ふに及ばず、不淨なる者も登山ならぬこの山。

義緣　ぜんたいそのお山が迷の種。

宗悅　それ、さういふ心故お經一つよう覺えぬ、いつまでも味噌すり坊主ぢや。

義緣　サアその、れん木がちよこ〳〵すりたがる。

安心　またてんがう口。

喜悅　御出家仲間のすたり者め。

宗悅　こんな坊主は下山さしてしまふがよい。

義緣　そりやありがた、下山して鰹玉子のあばれ食ひ、びんつけなしの二つをり。

ト立かゝる皆々留めて。

喜悅　その頰げたを。

安心　ハテモたうござる、氣輕な義緣坊、心に思はぬ仇口をたしなむがようござる。

義緣　ハイ〳〵、きつとたしなみまする。

喜悅　時にいづれも、こゝで休息してから行きませう。

安心　それがようござらう。

皆々　左樣致さう。（ト皆々控へる。）

謠〽百年の榮燿も風の前の燈火、悟れば我も佛なり。

〽加藤左衞門重氏入道、苅萱道心と名を改め、佛法修業の山坂を、たどるも後世のたよりなり。

トこの內音樂になり花道より、苅萱道心黑衣、謠への頭巾袈裟をかけ、花手桶をさげ珠數をつまぐり出て來る。

皆々　ヲヽ、そこへござるは苅萱御坊ではござらぬか。

苅萱　これは〳〵お僧達、一兩日はものどほにござるの。

皆々　マア〳〵これへ。

苅萱　然らば御免。

〽まづこなたへと招じける。（トこの內花道の坂へ下り本舞臺へ來り、）

宗悦　苅萱御坊には、見れば經木と花桶を持ち、どこへ行かつしやりますな。

苅萱　イヽヤ、これは百日が間書寫なす所の經木、又この花は所々の堂へ捧げる花でござる。

喜悦　ハテ殊勝な。

義縁　アヽ俺は一日に一遍のお勤めさへ砂かむやうに思ふのに、ようそのやうに御坊には精を出さる事ぢやなう。

苅萱　いつでもをかしい御坊ではある、さうしていづれもは、どちらへお越しなさるゝぞ。

喜悦　愚僧どもは師の御坊の云ひ付けで、奥の院まで參りまする。

宗悦　今の風雨で、しばらく休らうて居りました。

安心　何さま、凄まじい震動であつた、何事であつたぞいなう。

宗悦　今も今とてその噂、もしや道心の内の妻子などが、後を慕うて登つたといふやうな事ではないか。

苅萱　わつけもない、何程夫を慕ふ女ぢやとて、なんのこのお山へ登りませうぞ。

皆々　いかさま、さうでもあらうかいなう。

義縁　ほんにこの大師樣もきつい女嫌ひだ、あんまり惡うないものぢや、したが何ぼう山が荒れても

國元から女房や子が、逢ひに來たら逢ひたうなりさうなものぢや。

苅萱　これ〳〵御坊、かりにもそのやうな事云はぬものぢや、いづれの道心にもせよ國元を出づる時、妻子の顔は今生で見まいと棄恩入無爲の誓をたて、佛に約したる事變ぜられうか、この身ははや娑婆を離れたと覺悟せねば、この山へは登山はならぬわいなう。

〽立派に云へど恩愛の、目にもつ涙おしかくし。

ト愁ひの思入にて山の上へ上り、三世佛へ花を供へ拜み、皆々も思入あつて禮拜してゐる。

〽いたはしや石童丸はかゝる難所をたど〳〵と、心も空に浮草の根ざしの父の顔しらず、名のみしるべにたどり行く袖の涙ぞ哀れなり、思ひ高野の谷川や見上げて通る不動坂、踏みも通はぬ丸木橋名殘りなさけも横しぶき、嵐に木の葉散りはてゝ心細道つく杖の、下りつ上りつ行先を問へど岩根の松の蔭、石童親子の機縁にや、思はず傍にたち寄つて。

トこの淨瑠璃の內花道より、石童丸以前のなり、笠と杖とを持ち出て花道にていろ〳〵こなしあつて坂へ下り本舞臺へ出て皆々の居る眞中へ來て、

石童　モウシ〳〵御出家樣、チト物が尋ねたうござります。(トこれにて皆々正面を向き石童丸を見て)

喜悅　ヲ、見ればしほらしい物腰かつかう、よしありげな人の子と見えるわいなう。
安心　そして尋ねたいといふは、何の用で、
皆々　ござるぞいなう。
石童　このお山に、今道心のましまさば、敎へてたべ。
〽敎へてたべとありければ。
喜悅　これはけうがるお尋ね事、見れば年端もゆかず、今道心では解りにくい、お前一人ではあるまい、連れは親御か兄弟衆か。
石童　イヱ〳〵連れはござりませぬ、どうぞ今道心の御出家に、お逢はせなされて下さりませ。
トこの內苅萱も平舞臺へ下りて、
苅萱　いかに年少なればとて頑是のない、九百九十の寺々に每日入り來る初發心、昨日剃つたも今道心。
〽一昨日剃つたも今道心、さやうに尋ね給ひては知れがたし。
その道心のお顏でも。
石童　さればとよ、尋ぬるは我が父上、二つの年に別れし故お顏も見知らず。

喜悅　アノ顔も見知らず。
宗悅　さうして國所は。
石童　アイ、國は九州筑紫の松浦。
安心　アノ、こなたの國は筑紫の松浦か。
石童　アイ。
喜悅　マアお聞きなされ苅萱御坊、九州の端からはる〲の所を、
義絲　父を尋ねて高野へ登る、ヤアトコセイ、よい子ぢやの。（ト唄のやうに云ふ。）
苅萱　ハテわつけもない、住めば都のたとへの通り生れ故鄉がなうて何とせう、コレそなお子、連れはないとの事、連れの衆か母御にでもはぐれたといふやうな事か。
石童　アイ母樣も父上の御後慕ひ、後の宿までお越しなされど、持病の癪にて步みもならず。
安心　それ故一人か。
石童　父上を尋ねに上りました。
　へ聞いてどうやら氣にかゝる、苅萱心とり直し。
苅萱　その父御に逢ひたさに、この高野へはる〲と登山せられしはどういふ譯ぢや、それを語られ

よ。

ヘ語り給へとありければ。

石童　アイ、二つの年より御國にとては御出でなされず、母樣の御手にて人となり。

喜悅　なんぢや、こなさんを二つの時に、父御がお前を捨てゝ。

石童　どつちへやら御出でなされたわいなう。

義緣　可愛さうに、愛らしい子を捨てゝ出て行くとは、むごい親ぢやなあ。

宗悅　二つの年から今迄手鹽にかけた母御は、いかい世話であらう。

石童　それ故父上に逢ひたさ故、お山へ登りましてござります。

喜悅　二つの年に別れた父御なら、顏見覺えもせまい、ほんに雲つかむやうな尋ね物。

安心　一體マア、お前の親達の名は何と云ふぞ。

苅萱　今道心では知れがたし、俗の時の名を云うて。

ヘ尋ねられよと身の上の、事とも知らず仰せける。

石童　さればとよ、尋ぬる我が父上には二つの年別れし故お顏も知らず、元は筑紫の松浦、加藤左衞門重氏樣。

〽云ふよりさては我が子かと、見れば見る程稚顔疑ひもなきわが子ぞと、云はんとせしがまてしばし、佛前にて誓をたてたる恩愛妹脊、こゝぞと思ひよそ〳〵しく。

苅萱　ム、年端もゆかぬにはる〴〵と慕ひ來たる志、誠の父が聞かれなばさぞ嬉しくもなつかしく、飛びつく程に思はれん、さりながらこの山の掟にて、たとひ廻り逢うたりとも、名乘り合ふ事叶はず、早く國へ歸られよ。

〽云へどせきくる胸の内、目に持つ涙たもちかね、墨の袂をしぼらるゝ。

喜悅　時に御坊達、この子にかゝつて餘程の暇とつた、なんとそろ〳〵行かうではござらぬか。

安心　しかしこの子も尋ぬるお人に逢はひで氣の毒、暮れぬうちに下山めされや。

宗悅　苅萱御坊も御同伴。

苅萱　イヤ、拙僧は後より參上仕らん。

喜悅　左樣なら、愚僧どもはお先へ。

義縁　そなお子、緣あらば又逢ひませう。

皆々　そんなら苅萱御坊。

苅萱　また明日逢ひませう。

〽挨拶互ひにそれ〲に、宿坊々々へ立ちかへる、苅萱後を見送つて。

トこの内かすめたる山オロシになり同宿四人思入あつて下手へはひる、直ぐに誂への地藏經になり苅萱思入あつてあたりを見廻し、

苅萱　これ〱そな御子、これへ〱。

石童　アイ〱。

苅萱　最前からの樣子を聞いて倶に涙をふくみました、その親のサア儘ならぬ世のうきふし、コレよう聞かしやれや、身にも命にもかへぬ大事の子を、ふり捨てゝ國を出る親の氣は、よく〱であらうと思うて、必ず〱恨まぬがよいぞや。

石童　イヱ〱勿體ない、何の恨みに思ひませう、大事の父上けがにも恨む氣はござりませぬか、ひよつと父上に逢はれぬ時は、母上には焦れ死になされうと思へば、わしやそれが悲しい、悲しうござります。

〽ないじやくりするいぢらしさ。

苅萱　ヲヽ道理ぢや尤ぢや、親となり子と生るゝ程深い緣があらうか、顏も所も知れぬに尋ぬるは

詮ない事、尋ねずとも母御もろとも、早く國へ歸らるゝがよいぞや。

〽云ひ敎ゆれば泣く目を拂ひ。

石童　イヤナウ、わが國は大内といふ者攻めなやまし。

〽母様もろともこの山の麓まで參りしが、悲しき事は母様が道の勞れに煩うて命の内に唯一目。

父上に逢はせてくれよとのお歎き、情と思うて御出家様。

〽御存じならば敎へてと、目にもつ涙はら〱〱、おさへかねたる有様に、我こそと名乘つて聞かさうか、イヤ勿體ない大師の御坊の戒めと、いうてはる〲來た者を知らず顔見ぬ顔が、どうなるものぞ不便やと、百千萬の憂き涙、二つの目にはたもちかね前後正體泣き居たる、石童丸は目かしこく。

左程に歎き給ふのは、もしや父上ではあらざるか、早く名乘つて下さりませ。

〽すがり歎かせ給ふにぞ、亂れ心の折りふしに、後の方の岩かげより師の阿闍梨の聲として。

ト山ヲロシ　なり山の頂上より阿闍梨、緋の衣頭巾にて出てきつと下を見下し、

阿闍　ヤア〳〵刈萱、棄恩入無爲の誓ひを忘れ給ふな。

〽制せられて苅萱は、起き上つて振りかへり。

トこの內阿闍梨はひる、苅萱はつと心づき、

刈萱　ハヽアさうぢや、迷うたり誤つたり、いまこの三界皆これ我が子、いづれを我が子と思ふべき、師の手前面目なし。こゝはなされよ。

〽こゝ放されよとありければ、石童丸はすがりより。

石童　もうし御出家樣、どうぞお傍において下さりませ。

〽拜みまするととりつけば。

刈萱　今おことが尋ぬる重氏入道、この山におはせしかど諸國修行に出で給ひ、今は行方も知れがたし、急ぎ下山し母御の病氣の介抱めされ。

石童　なに父上は行方も知れず、この山にもおはさぬとや。

〽なう情なや淺間しや、我はともあれ母樣が焦れ死をなされうかと、そればつかりが悲しうて後へ戻るも戻られず、似た人にてもあるならば逢はせてたべ

とかくくどく、心ぞ思ひやられたり、見るに不便と苅萱はいつそ名乘つて聞かさうかと、行きつ戻りつとつおいつ、弱る心をとり直し。

刈萱　ヲヽ尤ぢや道理ぢやが、母御の病氣とあるからは一時も早く下山めされ。又これは師の御坊一萬歳の護摩を焚き調合ありし妙藥、急ぎ下山し母御の病氣の介抱めされ。

ト懐中より藥の包みを取り出しそこへおき、

〽さし出せばつきかへし。

石童　イヱ〳〵御出家樣の手より物を貰ふと五百生まで手のない者に生るゝとの事、そのやうに御親切に云うて下さりまする程、こゝがどうも去にともない。モウシ御出家樣、いつまでも御傍においで下さりませ。拜みます〳〵。

〽手を合はしてはすがりより、衣の袖にとりついて、歎き悲しむ有樣は賽の河原もかくやらん、かくてははてじと苅萱は。

刈萱　サヽ早う行きや、左へ行けばはな坂とて平地も同然、日の暮れぬうち早う行きや。

石童　アイ。

苅萱　早う行かぬか。

石童　アイ。（ト苅萱わざと手あらく突きとばし。）

苅萱　行けといふに。（ト愁ひの思入。）

石童　アヽイ。

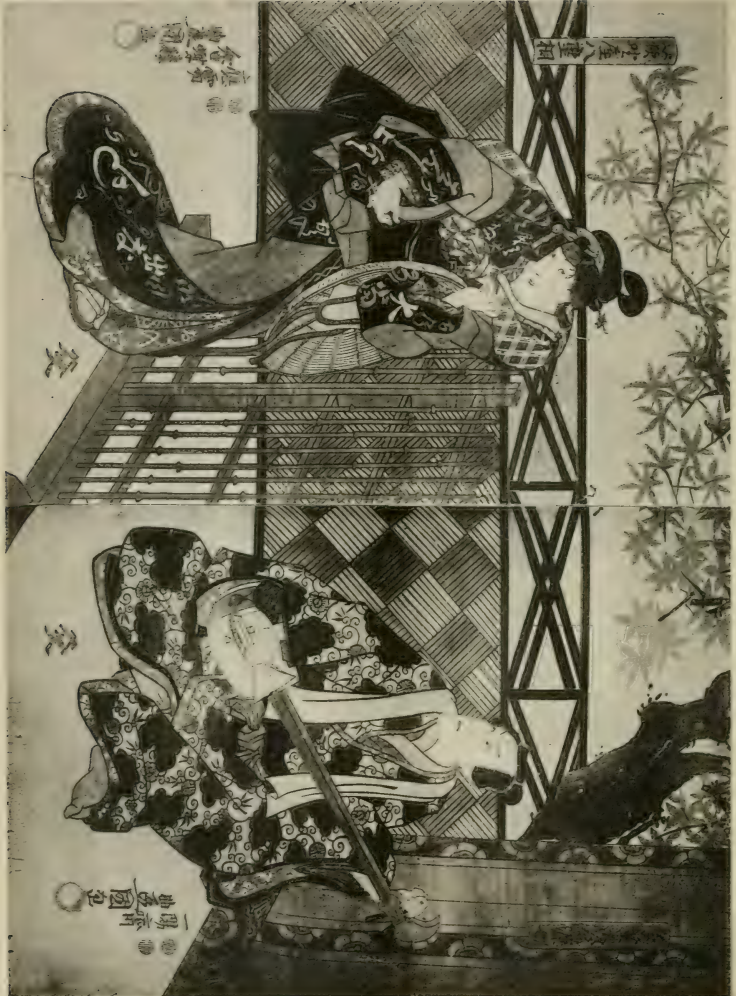
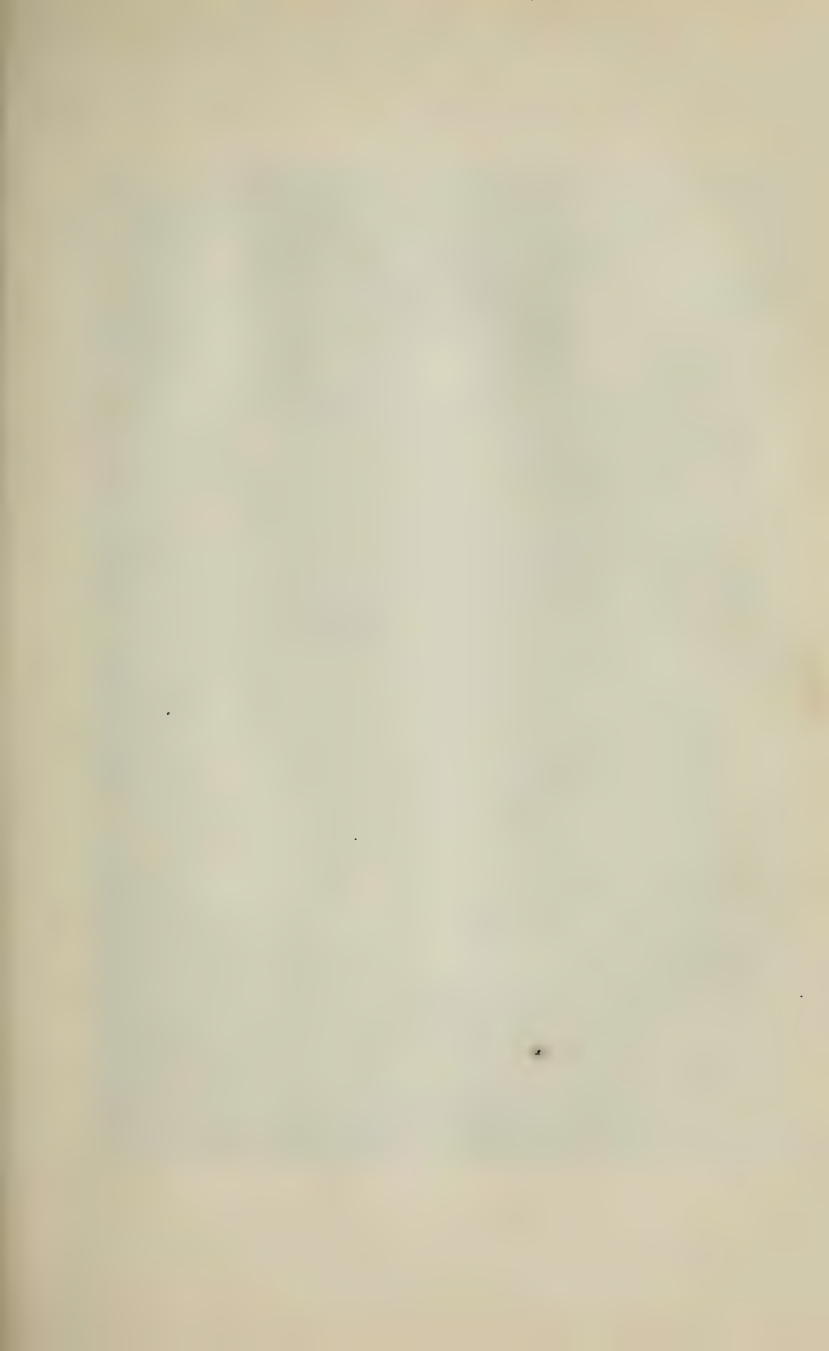
〽あいとばかりに若君は薬とあるを力にて、押しいたゞき懐中へ是非もなみだの憂き別れ、迷ひの道をばそこゝと教へながらも苅萱は、心もとなさ思はずも引かるゝ縁の友綱や、見えつ隠れつ。

トこの内苅萱介抱して杖と笠とを持たせ石童丸泣く〳〵花道へかゝる、正面の道具段々と下手へ引く苅萱よろ〳〵として岩根へより正面の山幕切つて落す、一面の大師堂になる、この内苅萱向うを見送り〳〵山の上へ登り、松へ手をかける。これにて堂の扉開く、一面の萬塔になり苅萱松の枝ほつきと折れてどうと落ちる、正面の萬塔左右へ開き弘法大師の像を押し出す、苅萱是にて大師を拜む。床の三重にてひつぱりよろしく。頭取出て。

頭取　まづ今日はこれぎり

ト目出たく打出し

高野山（終り）

八重桐廓噺

八重桐廓噺（嫗山姥──一幕）

兼冬館の場

役名　煙草屋源七實は坂田藏人時行、太田十郎、荻野屋八重桐、兼冬娘、澤瀉姫、局野分、腰元お歌、同桔梗、同楓、同尾花、藏人妹白菊、其他。

本舞臺、一面の御簾、本緣附きの高二重、向う金襖、瓦燈口。上手、石の手水鉢、松の臺みき、下手、櫻の立木。同じく釣枝、いつもの所桟折門、柴垣、尤も御簾一面おろしある。管絃にて幕あく。

〽松浦潟ひれふる山の石よりも、積る思ひは猶高き岩倉大納言兼冬公の御娘、澤瀉姫と申せしは、源の賴光と御緣邊の契約も、互ひに待てば久方の、月日重なり年を經ち情盛りも徒に、右大將高藤が讒言故、賴光の行方なく、枯野に弱る秋の蟲、世に便りなき憂きふしに、若し御短慮の事もやと、お寢間の奉行寢ずの番、女中の外には男まぜずの大役は、女護の嶋に異ならず。

ト御簾の内にて、

姫　君がため、惜しからざりし命さへ。

腰元 皆々　こゝにあつたわいなア。

ト琴唄になり、御簾を巻上げる。内に廣振袖の澤潟姫、褥の上に脇息にもたれゐる。局。野分ふけたるこしらへにて傍に控へ、藏人妹白菊、腰元にて附添ひ、この傍に腰元六人、歌がるたをまきちらし、これを取つてゐる仕組、あと右の合方。

白菊　忍ぶれど、色に出にけり我戀は。

桔梗　物や思ふと、人の問ふまで。たしか、そこらに。

尾花　物や思ふとは、そりや、こちのお姫樣の辻占。

朝顔　難波がた、短き葦の節の間も。

女郎花　逢はで、この世をすぐしてよとや。

野分　コレ腰元衆、お姫樣をさしおいて自身の遊び、殊に又、お氣にかゝる辻占の歌合せ。チト嗜んだがよいわいなア。

白菊　イヤモシ、お姫樣、あなたはなぜに、浮き〳〵はなされませぬ。これ程大勢集まつて、浮世噺

の高笑ひも皆あなたを勇めのため。

楓　もしお煩ひでも出た時は、親御さまへの御不孝。日頃のお氣には似合はぬこと、お嗜み遊ばされませう。

〽勇められても勇まぬ顔、

姫　ア、またそちたちの氣詰りは、聞きたうない。日本國の花紅葉を今この庭へ移しても、なんの心が勇まうぞ。吉日極り、賴光樣へ嫁入りして、今頃は、お腹に帶をも結ぶ筈を、アノ、

〽右大將づらめに妨げられ、剩へお行方知れず、何處を當途に一筆の。

問はせの文さへ、長枕。

〽この長き夜を誰と寢ん。

わしや、泣くまいとは思へども、淚がどうも堪忍せぬ。こらへていなう。

〽こらへてたもとはらはらと、玉を貫く御目許。腰元茶の間仲居まで御道理樣やと諸共に、貰ひ淚にくれければ、お局は氣の毒がり、

野分　コレ、なんぞいなう皆の衆、お力はつけもせず、そなた衆まで同じやうに、嗜んだが、よいわいなア。

桔梗　それ〳〵、今に、頼光さまのお行方知れたその時は、お目出たい御祝言。

楓　ほんに、この樣な時には、アノ、日頃からお氣に入りのお歌どの、何處へ行かれたことぢややら、折の悪いことではある。（ト向うへこなしあつて）アレ〳〵、あそこへ見えるは、確にお歌どの。お姫さまがお待兼ね、早う〳〵。

へ早う〳〵の聲につれ、裝に似合はぬ振袖の、ぴらしやらとして立歸る。

ト稽古唄になり、花道よりお歌、振袖の腰元にて傘をさし、風呂敷包みを提げ出て、直に舞臺へ来る

お歌どの、何をしてゐなさんしたぞいなう。

お歌　ア、コレ、忙しない。皆さん、わたしや願ひ事がある故、長谷のお寺へ願を籠めて、お百度上げに、行たのぢやわいなう。

白菊　そこどころぢやござんせぬ、又お姫様が何やら思ひ出し遊ばして、おふさぎ遊ばしてぢや程にいつものやうに、御機嫌直して下さんせ。

お歌　コレ皆さん、聞きなさんせ。觀音樣の御神前に、何ぢややら、すさまじい人立ち、覗いたりや、鬮を買うてゐる故、妾が買つたりや當つてな、コレ、この樣な羊羹と、役者の繪を取つたわいなア。

ト羊羹と錦繪を出す。皆々開き直つて、

皆々　そりやマア、誰の似顏でござんすぞえ。

お歌　これは、わたしの贔屓の團十郎。又これは、いつち贔屓な菊之丞でござんす。今度の宿下りには、十日も二十日も、芝居をたんのうする迄見にやならぬわいなア。

皆々　そんならお前も、濱村屋が贔屓かえ。

お歌　濱なら、一二度の飯を、十度喰うても、見たいわいなア。

皆々　そりや何故でござんすえ。

お歌　ハテ、濱ならたべよと、人毎に言ふでは、ござんせぬかいなア。

皆々　お歌どのゝ、何を言はしやんすぞいなア、ハヽヽヽ。

〽笑ひ催すその折から、案內もなくてのッさのさ、右大將高藤の家來太田の十郎、主の權威の張目高、枝折の外より大音にて。

トこの文句の內序の舞になり、花道より太田の十郎、大小、上下、衣裳、くり下げにて出て來り、本舞臺へ來り、

十郎　兼冬公はおはするか、右大將高藤より俄の上使。

お歌　テモ、折の悪い太田づら、人の邪魔する上使、棕櫚箒など立つて、去なしてくれう。ア、、腹が立つ。

ト棕櫚箒を立てかける、楓、野分、留めて、

野分　これ、わッけもない、假染ならぬ御大身よりの上使、必らず粗相致すまいぞ。

ト楓は枝折へ出迎へて、

楓　これは〳〵、太田さま、お役目御苦勞千萬、まづ〳〵これへ。

十郎　千里萬里も主命なれば、さのみ苦勞とも存ぜぬ。それを察して格段の挨拶、マ、過分々々。上使の儀なれば罷り通る。許しやれ。

〽遠慮會釋も正座に通り。（ト上手へ通り）

シテ兼冬公には、如何致された。

白菊　兼冬ことは心願あつて、長谷の觀音へ參詣、館には姫君ばかりのかしづき、即ち女房ばかり。假令御上使の趣傳へたとて、詮なきこと。まづ今日は。

腰元皆々　お歸りなされませいなア。

十郎　イヤ〳〵こいつらが默りをらう。スリヤ、兼冬には他行とな、よしや他行にもせよ、男た

る者一人もなきこの舘、油斷大敵、不意に浪藉込み入り、舘をも切取られなば、後での吠面。これも入らざる身共が采配。先づ、何はしかれ今日の上使、主人高藤より、澤潟姫へ上使。

白菊　なに、姫君への御上使とは。（ト管絃になる。）

十郎　先達より度々、右大將高藤公、澤潟姫へ心をかけられ、媒を以て婚姻の儀申し入るれど、今に於てその沙汰なく、その返事受取り立歸れと、主人よりの言ひ付け。サアヽ姫君、色よいお返事が聞きたうござる。

白菊　イヤモシ、憚りながら私が、差出ますやうなれども、貞女兩夫に見えずと、姫君には勅勘ありし賴光さまへ、二世の契約遊ばしたれば、なんぼお行方知れねばとて、高藤さまへ從うては、小夜衣を重ぬる不義。

十郎　イヤ、賴光は一生埋れ木、勅勘の身にて緣を組まば、後でこの家の兼冬に、難儀のかゝるまいものでもない。

姫　いやとよ、妾も一旦賴光さまと、緣を組みたる上からは、たとひこの身はどうならうとも、今の思ひに增しはせじ。穢らはしい、去んでこの通り高藤どのへ、言やいなう。

〽思ひ詰めたる一筋に、身をも惜しまぬ貞心貞女、流石の太田も口あんぐり、

傍からお歌がしやしやり出で、

お歌　何ときついもの、雀の千聲鶴の一聲、お姫さまの御一言で、だんまりおしの劒刃を二腰さした太田さま、チツト鼻毛が五十町、一里延び過ぎて見えるぞえ。そしてマア、アノきつい顔わいなア。そんなきつい顔してゐると、女が惚れぬぞえ。

腰元皆々　ちつと笑うて、御らうじませ。

十郎　エヽ、いま〱しい女ども、身共を馬鹿に致すか。

白菊　これはいかな、女儀を捕へて大人げない。

十郎　それぢやと申して。

白菊　ハテ、あなたも聞譯のない、無粋なお方。

十郎　いかさま、小事に拘らぬ、大事の役目。このまゝ、一間で休息せん。女ども、案内致せ。

お歌　エヽ、案内が入るものか。勝手次第に、一人で行たが、よいわいなア。

十郎　うぬ、その口を。（トきつと立掛る。）

お歌　イヤ、私が御案内致しませう。

十郎　然らば、手前が。

お歌　あかんべえ。（ト下手へ逃げる。）

十郎　うぬ、どうしてくれう。

トうろたへて、刀をさかさまに差す。

桔梗
尾花　モウシ、お刀が、逆樣で、ござりまする。

十郎　ヱ、、存じてをるわえ。

白菊　イザ、私が、御案内致しませう。

十郎　然らば、女中。

白菊　御上使さま、イザ、御案内致しませう。

〽なぶり散され、太田の十郎赤面してぞ奥に入る。

ト三味線入り管絃にて、白菊先に、太田十郎、奥へはひる、後しらべ、

お歌　まづ、邪魔を拂うたぞや。それはさうと、アノ煙草屋は、まだおぢやらぬかいなう。

腰元
皆々　ほんに煙草屋は、まだ見えぬわいなう。

お歌　早う煙草屋が、來ればよいが、ア、、しんき。

腰元
皆々　そんなら、お歌どのは、煙草屋に。

お歌　ヲヽ、恥かし。

腰元皆々　ホヽヽヽ。

お歌　アヽコレ皆さん、そんなになぶつて下さんすな。ほんにこの煙草屋は何故遅いことぢやゝら、アヽ待たるゝ身より、待つ身になるなとは、よう言うたものぢやなア。

〽煙草煙草と待つ宵の、松葉たばこの柔こき、女中仲間ぞ賑はしき、

〽昔は色に上り詰め、今は浮世に下り坂田の時行と、埋れし名も父の仇晴らさんと思ふ志、あかぬ女夫の中をさへ、三行半の生別れ、袖に涙の革行李を今は身過と引擔げ、刻み煙草、油引かずと賣り歩く。

トテンツヽになり、花道より源七、やつしなり、三尺帯、煙草賣りのこしらへにて、風呂敷に荷箱を背負ひ出て來り、

源七　刻煙草、油引かず、煙草の御用はござりませぬか。

〽と賣り歩く。

ト宜しく本舞臺へ來り、枝折戸の外にてこなしあつて、

ヘイ、いつもの煙草屋でございます。御用はござりませぬか。

お歌　そりやこそ煙草屋が來たわいの。サア／＼、こちらへはひりや、はひりや。

ト源七の手を取りて内へ入れ、荷をおろし宜しくあつて、

腰元皆々　源七か、待つてゐたわいなう。

お歌　お姫さまもお待ち兼ね、又そなたには、いつぞは聞かうと思うた、煙草の講釋謂れを、ちやつと聞かしやいなう。

源七　これは／＼、毎日々々商ひに上ります、得意旦那のあなた方のこと、煙草の因緣、さらばお話し申しませうか。

〽しかつめらしく座に直り、

お歌　ドレ、承はりませうか。

源七　まづ、妾が煙草の始まりは、昔唐土玄宗皇帝、かの揚貴姫との痴話事に、比翼連理の語らひとて、

〽吸付煙草なされけり。

さて、我朝にて始まりしは、往古、江口神崎なんどゝいふ、名高き廓の遊君が、客を待つ間の煙草盆、

〽煙りくらべん淺間山。そらさぬ顏でゐたりける。

さてこそこれを、お山煙草と名付けたり。

〽廓の諸分を國府にわけて。

〽君を思へば仙臺煙草、我等が煙草は仙人の、通を失ふ色どり手どり。

吉野煙草の、花よりも、

〽と語りける。

煙草の因縁、あらかじめ、この通り。

お歌　こつても聞きごと、煙草の因縁。辯舌といひ器量といひ、何處に一つ言分の無い、元服した太平さん。君と我とは有馬の煙草、私が心を刻み煙草、どうぞ返事を松葉煙草、人は目許で、コレ申し。

〽これ程迄に戀ひ慕ふ私が心、思ひやつてくれもせで、心強やと煙草屋の、膝に打伏しゐたりける。

トこの内お歌、サワリ模様宜しくある。姫は笑ふ、腰元見やつて、

源七　そりや、御機嫌が直りました。

お歌　ヨウ〳〵、こちの色男、さま〳〵。
源七　なに、私がお前の目から、色男と見えますか。
お歌　ヲヽ色男とも色男とも、業平ぢやわいなう。
源七　それは有難うございます。又私の目から、アノお前様は、小野の小町か楊貴妃か、美人と見えます。
お歌　ヤア、何と言ふ。そりや、汝身が目からは、私は美人と見えるかや。
源七　ヲヽ、美人とも美人とも日本一の美人と見えます。
お歌　そりやマア、煙草屋、ほんまなことかや。
源七　何の、僞りを申しませう。美人どころか、鬼人と見えまする。
お歌　ヤア〳〵、鬼神ぢや。モウ料簡が。
ときつとなつて立掛る。腰元皆々、源七を隔て、お歌を留める。
〽騒ぎさゞめく折からに、奥より出づる以前の使者。
ト始終しらべにて、この内奥より太田十郎、出て來り。
十郎　ヤア、べん〳〵と待てど暮らせど、兼冬も歸らねば使者へ對して無禮であらう。この上は是非

に及ばぬ、姫を引立て連歸る。サア姫君、身と一緒に。

ト姫の手を取り、立掛る。腰元支へて、

楓　こりや理不盡な、何となされまする。

十郎　主人へ言譯、姫を連れ歸る。

お歌　イヤア、主人お歸りのそれ迄は、いつかな姫は。

皆々　渡されませぬ。

十郎　ヤア、何時歸るか知れぬ兼冬、べん〳〵だらりと待たるゝものか。サア、きり〳〵と澤瀉姫を、渡しめされ。

ト姫の手を取り立ち掛る。皆々捨ゼリフにて太田を宥める。この以前よりお歌源七、色々囁き、囁き返しをりて、この時源七こなしあつて、前へ出て、

源七　モウシ〳〵お侍樣、今暫くお待ちなされませ。

十郎　ヤイ〳〵〳〵、うぬ素町人め、うぬらが存じた事ではない。何處ぞそこらに、すつこんでをらう。

源七　ハイ〳〵、成程私は、素町人でござりますが、さりながら、木折りで行かぬは戀の道、どうや

らこのお取持は、この町人にお任せなされて下さりませ。

十郎　成程、そちが申す通り、木折りで行かぬは戀の道。シテ、その方は何者だ。

源七　ハイ、私はお館へ商ひに上ります、煙草屋でござります。どうぞ煙草を、お求めなされて下さりませ。

十郎　たはけ者めが、煙草が姫の代りになるものか。

源七　イヤ、ずんどなります。

十郎　何と。

源七　サア、私の煙草は、お取持になります。どうぞ、お買ひなされませ。

十郎　ヱヽ、うるさい奴だ。身共は煙草は嫌ひだわ。

源七　ナニ、お嫌ひとあれば是非もない。しかし私の煙草は唐土の美人草を製しまして刻みました故、この煙草をちよつと吸ふと、どんな戀でも女子の方から、ずる〱べつたり吸込み煙草、あなたもこの煙草、一服お上りなされたら、ひよつとお姫樣がずる〱と、お出でなされる思召しに、なるまいものでもござりませぬて、ナア申し。

十郎　成程、コリヤ尤もぢやが、身共煙草は嫌ひ。然し、その價は、定めて高直であらうな。

源七　イエ〳〵、始めてのお方には試みのため、たゞ振舞ひ申します。

十郎　ヤア〳〵〳〵、何と申す。そんならたゞ呑ませるか。然らば拙者、元來煙草は大好物ぢやて。

源七　ナニ、煙草はお好みだ。左樣なら何服でも、お上りなされませ。

十郎　コリヤ、錢は、出さぬぞ。

源七　サア〳〵、御遠慮なう、何服なと上れ〳〵。

十郎　かういふ事なら。

ト錣の合方になり、源七煙草の荷箱をよき所へ出す。腰元めい〳〵に煙草盆や煙管を出す。源七煙草をついて煙管を差出す。太田の十郎はこれを取つて吸ふ。

源七　まづ、この煙草を呑めば、色白で意氣で、いつでも女が惚れる。

十郎　ヲヽ、面白い〳〵。

源七　さて二服めには、悋氣なくにつこり笑うて、諸人愛嬌が出來るなり。

十郎　何だ、愛嬌が出來るか、もつとつけ〳〵。

源七　三服めには、三方四方よりさツ〳〵と、女の方から持ちかけて參るなり。

十郎　これはたまらぬ、奇妙々々。

源七　さて四服めには、しつこく始終あなたに、抱付いたりひつ付いたり。
十郎　これはどうもたまらぬ。ちつと、静かにやつてくれ。
源七　サア、所で五服めには、呉服を積み後生大事に、あなた一人を守ります。
十郎　ヲ、嬉しい、嬉しい。コレ〳〵静かに〳〵。
源七　六服目には、六親眷屬和合して、ろく〳〵に見知らぬ女子が靡くなり。所で七服めには、七福神七福則滅。
十郎　ヱヘン〳〵〳〵、どうも眩暈が來て、目がまふやうだ。許せ〳〵。
源七　八服めには、八方八所へ女にはられ、九服目には藏を建て、十でとつくり納まつた。目出度いな大黑。ソレあそこへ、女が參りました〳〵。
お歌　それ〳〵こちらへも、大勢女が參りました。
〽腰元共に突放され。
ト腰元皆々寄つて、太田十郎をあつちこつち引廻し、トヾ枝折門の外へはふり出す。
十郎　ヤイ煙草屋、ひどいめに遭はせたな。こりやモウこたへられぬ、出直して參らう。これ〳〵、思へ人が三つに見えるわ〳〵。こりや たまらぬ。屋敷へ歸り味噌汁で、行水せねばならぬ。

ばく、憎いやつの。

源七　モウシく、モウ一服、差上げませうか。

十郎　それには及ばぬ、煙草屋、覺えてうせう。
「言へども足は地に付かず。ふなくしてぞ立歸る。
ト太田十郎、煙草に醉ひしこなし。甚句唄にて、宜しく花道へはひる。後皆々こなし。

腰元皆々　イヨ煙草屋、きつい者であつたなア。

源七　どんなものでござります。ハヽヽヽ。

姫　ハテ、昔床しさうな商人、常々腰元共の話を聞けば、廓とやら傾城とやら、大内には珍らしい、戯れの物語り。なう、皆のもの。

楓　左樣でござります。定めし絲竹の嗜は、あるであらう。

朝顏　苦しからずば、そのお姫樣のお望みを、サアく煙草屋。

腰元皆々　所望ぢや、所望ぢや。

源七　これは又、わツけもない。尤も以前は、傾城の一ツ買も仕り、三味線鼓弓淨瑠璃文作、野郎一卷の諸藝なら、

〽こつちへ任しておく座敷、吉野の山の連彈も。
昨日の昔、今日は又。
〽吉野煙草の刻賣。
股引掛の三味線とは。
〽茶漬に鯷の御望み。
ひらさら御免なされませ。
〽と逃出す。

トこなしあつて逃げんとする、お歌留めて、

お歌　どツこい〳〵、コリヤ〳〵煙草屋、早う彈いて、聞かしやいなう。

源七　それぢやと申して。

お歌　わが身、お姫様のお詞を背きやるか。

源七　どう致しまして。

お歌　そんなら、彈きやるか。

源七　サア。

お歌　サア。

源七　サア〱。

お歌
腰元　どうぢやぞいなう。
皆々

源七　エヽ、そのやうにおつしやる事。宜しうござります。てんぽの皮と、やつてのけませう。

〽是非なく出す三味線の。

ト皆々取巻きこなし。是非なく、源七箱の中より三味線を出し、これを持ち衝立のかげへはひる。皆々こなし。下座の獨吟にかゝる

お歌　ヨウ〱、三筋の彈きあんばい、男振りといひヨウ〱、旨い〱。

獨吟〽絃は昔にかはらねど、彈くその主の成れの果、今は秋田の落し水。

ト宜しく獨吟ある。

竹本〽紙衣の袖に置く露と、共に離れし妹背の中、あはれ昔は全盛の、松の位も冬枯れし、風呂敷包み行く先きは、知らぬ旅路にとぼ〱と、築地の蔭にやすらへば。

とこの内花道より、荻野屋八重桐、紙衣の着付け、甲斐絹の小風呂敷をはすに背負ひ、菅笠杖を持ち

出て、花道にて、櫻の落花するを見て、こなし。

八重　誰が住居かは知らねども、しやれた浮世の一節は、我身も共に櫻花、仇に散り行く眺めぢやなア。（トこれにて舞臺へ來る。）

〽車寄より立ち聞けば。

ハテ、珍らしいことではある。

[illegible]〽親の撥駒紙駒の、三筋世過ぎに通ひ廓の賑はしき。

不思議や、あの小唄は、我が身廓にありし時、坂田藏人時行どのに馴初めて、作り出せし替唱歌、彼の人ならで誰が傳へたか、懷しや。どうぞ入り込み、

〽見たいものぢやと言ひしほの、出放題に聲張上げ。

サア〳〵、これは難波の遊女町に、誰知らぬ者もない傾城の祐筆、濡一通の狀文なら、恐らく私が一筆で、叶はぬ戀も假名書き筆、びらりしやらりとかすり墨、生娘遊女妾者、後家、尼、人の女房まで、段々の書分けは、私が家の傳授もの。モシ、そんな御用なら。

〽お賴みあれとぞ言ひ入れたる。

〽奧には女中が、耳そばだて、

ト外にて八重桐宜しくこなし。この時腰元これを聞き、思入あつて、

野分　さつても珍しい賣物、呼入れて痴話文書かせ、お姫さまのお慰み。それお歌、こちらへ呼入れや。

お歌　ハイ〳〵畏まりました、(ト枝折門の外へ出て、)コレ〳〵、傾城の文書どの、こゝのお姫さまが、何やらそもじに、御用があるとおつしやる。サア〳〵こつちへはひりや、はひりや。

八重　モ御用とは、ヲヽ嬉しい。左樣なら、御免なされませ。

〽お目もじさまにと夕顔の、庭の飛石すな〳〵〳〵。ちよこ〳〵〳〵と奥座敷へ、何の遠慮も並み居たる、内裏上﨟に場うてせぬ、いづれそれしやと見えにけり。

トこのお歌案内して、八重桐内へはひる。皆々に會釋してよき所へ住ふ。腰元皆々、こなしあつて、

桔梗　ヲヽ、傾城の右筆どの、ようこそ〳〵。ほんに、何を認めさせうやら。

トこの時衝立の蔭より、源七出て、

源七　その文句は私が、望みませう。

〽煙草賣りの源七も、何心なく顏と顏。

そちは。

八重　お前は。

ト互ひに顔を見合せ、びつくりこなし。

ヘ女はそれと水臭き、男畜生人でなし。赤恥かゝせて退けうかと飛立つ胸も人目の關、押鎮め押鎮め、心を碎き折々に、後目に睨むも戀なれや、姫君何の氣もつかず。

トこれにて源七は上手へ逃げて、しよげたる思入、八重桐は下手にて、ぢつとこなし。姫始め皆々不思議の思入にて、

姫　これなう紙衣、そなたの物ごしつま外れ、如何さま常の女子でなし。さうした姿になりやつたは、定めし深い譯あらん。

朝顔　一河の流れも他生の緣とやら。

女郎花　コレ〳〵、文書どの、お姫樣のお望みぢや程に、そなたの成行き、包まず語つて、

お歌　どうぞ話して、聞かしやいなう。

ト腰元皆々、傍へよりこなし

八重　ハイ〳〵、どなたかは存じませぬが、お優しいそのお詞お尋ねなうとも最前から、言ひたうて

言ひたうて、胸の燃ゆる思ひも、サ、さらば、お話し申しませう。

〽襟かき合せ八重桐は、女中の中に押直り。

ト八重桐前へ進み出で、宜しくこなしあつて、

恥しながら私が昔は、うき川竹の傾城、荻野屋の八重桐として、太夫仲間の立者と、言はれし程の全盛が、末も遂げぬ仇戀に、登り詰めてこの通り。夜な〳〵變る大盡の、中にも坂田の某とて、水揚の初日より、ふと逢ひ初めてまる三年、何が互ひの浮氣盛り、登る程に登る程に、切利天の中二階、夜晝なしの床入に、掛繩樣と異名を受け、水も漏らさぬ仲なりしに、又同じ廓に小田卷といふ太夫、彼の男に行きつきて、毎日百通二百通、書きも書いたり痴話文は、大方馬に七駄半、船に積んだら千石船、車に載せたら、

〽えいやらさ、木遣でも音頭でも、祈つてもまじなうても、微塵けもない二人が仲、いよ〳〵慕うて逢ふ程に。

かの小田卷、大きに腹を立て、ア、忘れもせぬ八月の、

〽十八日の雨上り、月は山より朧染の、裲襠ひらりと取つて捨て、白無垢一つに引拔き脛もあらはに駈け來り、私が膝にふんわりとんと居懸つて。

これ八重桐。あんまり見られぬ、厭ぢやぞや、サア、男をたもるかたもらぬか。厭か應か、應か厭か。二つに一つの返答が、聞きたいと。

へ胸づくしを引摑む、こつちも一期の大事ぞと、弱身を見せず。

コレ小田巻とやら管巻とやら、ひかりは喰はぬ出直しや。この廣い日本に、アノ人ならでは、男はないか。よし、

へないにせよあるにせよ、それ程ゆかしい男なら、何故に先に惚れなんだ、男盜人いき傾城と、言ひ樣取つて投げ付くれば明障子を打破り、續三味線を踏碎き、縁より下へころ〱〱〱と、這柏槇までこけかゝり、木斛南天めつきり〱、切石の上に眞俯向、鼬は一石六斗三升五合五勺、そりやこそ喧嘩が始まつた大事のこつちの太夫樣に、引をつけては叶ふまい、加勢をやれと言うた程に、遣手引舟仲居飯炊や出入りの座頭按摩取、巫子山伏に占屋さん雪駄片足に下駄片足、草鞋掛で來るもあり、臺所から座敷迄太夫樣の仕返しと、彼處では叩合ひ、此處では撲合ひ踊り合ひ、茶棚竈煙草盆、あたる物

を幸ひに、打めく打破る踏碎く、めり〳〵ぴッーと鳴る音に、そりや地震よ雷よ、世直し桑原々々〳〵と、我先きにと逃げさまに水擔桶盥にこけかゝり、座敷も庭も水だらけになる程に、南無三海嘯が打つて來るわ、なう悲しやと喚くやら、秘藏の仔猫を馬程な鼠が啣へて駈出すやら、屋根では鼬が踊るやら、神武以來の悋氣爭ひ、このこと世上に隱れなく。

トこの内八重桐、しやべりの振り宜しくあつて、

サ、彼の男はその場より、親御さまの勘當受け、我が身も廓を夜脱して、根本戀路の浮名とる、鍋の蓋取る杓子取る、馴れぬ世帶のその日過ぎ、男め故でござりまする。アヽあんまりしやべつて、息が切れた。憚りながらお茶一つ。

〽下さんせとぞ語りける。

トお歌、湯呑みを持ち出る、八重桐これを呑む。

姫　さても〳〵心中者、假令いかなる身になつても、思ふ男と添ふからは、定めし面白いことであらうの。

八重　さればでござりまする。その後を聞かしやんせ。その男の父親が、闇討ちに討たれ、敵討たね

ばならぬと、私とは緣切つて、行方もなう別れ、親の敵を狙ふとは。
〽跡方もない赤僞り、我が身に秋風立ちけれど、何を機に退かれもせず。
親御さまの死なんしたを、畢竟一の托附に、敵討との口上は、
〽釋迦でも一ぱい參ること。
まんまと私をたばかり、女房には紙衣を着せ、
〽その身はちやんと榮耀らしい、若い女中に立交り、
三味線彈いて居けつかり。
〽くさりさるを見る樣な、日本國の姫御前の因果を一つに固めても、我身には
及ぶまい。
初對面の皆さまへ、ありし昔の懺悔話し。お恥かしう存じまする。
〽お恥しやとばかりにて、おろ〳〵涙にくれにけり。

お歌　ヲヽ、尤もぢや、尤もぢや。道理ぢやいなう。我身にかゝはらぬこちと迄、そんなつれない男の話を聞くと、腹が立つて腹が立つて、目が煙たうてこたへられたものぢやない。尤もぢや。

コレ〳〵女中、尤もながら、短氣な心を持ちやんなや。

八重　ハイ〳〵、有難うございまする。

姫　コレ、そなもの、まだ自が聞きたいことがあれば、自と一緒に、腰元共、皆奥へ。

腰元皆々　まづ、入らせられませう。

ト唄になり、一面に御簾下りる。

お歌　コレ、腰元共に煙草屋、おじや〳〵。紙衣もおじや、煙草屋もおじや、紙衣もおじや、

トこなしあつて、お歌、上手へはひる　後に源七八重桐殘る。

八重　さらば私も、奥へ參りませう。

へ立たんとすれば、

源七　コリヤ待て、女房。

八重　去られた夫に、詞は交さぬ。

源七　去られた夫に詞交さぬとは。まゝ、下にゐや。流石は流れの女ぢやなア。

ト八重桐を引据え、こなし。合方になる。

親の敵を討つ迄は、相對づくの離別ではないか。それに今の當て事は、誰に言ふ當て事。未だ親の敵も知れず、心を碎く夫の體、哀れとも思はず、おのれが榮耀に引當てゝ、面白さうな今

の仇口、ヱ、、おのれはなア。

ヘ無念涙にくれければ、

八重　アノ、まが〳〵しい顔わいの。親の敵は幾人あるぞえ。この程こなたの妹、白菊どのとやらが、先月二十三日佐夜の中山で、討ちし小部の平太は、敵ではないかいの。

ヘ時行はツと驚き。

源七　ナニ、妹白菊が、敵平太を討つたるとは、必定誠の事なるか。それと確かな事ばしあつてか、サ、、何と。（トきつとこなし。）

ヘせき立つ折から白菊奥より走り出で、（トこの時白菊、つか〳〵前へ出て、）

白菊　ヤ、お前は兄上時行さま、お懐しうござりまする。

源七　ヤ、そちや妹白菊、どういふ譯でこの館へ。シテ、敵平太を討つたるとは、誠の事か。

白菊　サア、その譯と言ふは、何卒父さんの敵を討たんと、碓氷の荒藤太さまを語らひ、先月二十三日小夜の中山にて、敵平太を、安々と討取りしが、どうぞこのこと、お知らせ申さうと、思へども知れぬお前のお行方。

源七　ヤ、スリヤ、そちが、敵平太を討つたるか。

白菊　アイなア。

源七　ホヽホイ。

〽はツばかりに詞なく、女房すりより。

八重　コレ時行どの、科もない頼光さま、妹御を匿ひし遺恨により、右衛門督平正盛、清原の右大將と心を合せ、頼光さまを讒言して、今勅勘の身となり給ふこと、日本國に隱れのない、これ程大きな騒動を、今迄知らぬとは、狼狽者臆病者の浮名をば、世間へ觸れうと言ふことか、腑甲斐ない氣にならしやつたなア。

〽おとましやと恨み泣き。

白菊　それ故私は人知れず、頼光さまの許嫁、澤瀉姫にかしづかんと、この館へ腰元奉公、最前奥にてお前のこと、ちよつと聞きしがモシひよつと、御身のために惡しからんと、今迄こゝへ出なんだが、聞けば聞く程おとましい、正しい武士でありながら、かゝる騒動も知らぬといひ、親の敵もえゝ打たず、何處にさまよひゐたまひしぞ。お心迄がその樣に、何故さもしくならしやんしたぞいなア、お前はなア。

〽取付きすがれば、時行いらだち、

源七　さては敵故、頼光の御難儀となつたるかや。妹に先こされ、親の敵は討たずとも、正盛右大將は敵の敵なり。イデ兩人が首取つて、頼光の御恩報じ、女房そこのけ。

　　ヘ踊り出づるを引留め、

八重　それ〳〵、それはしつかい狂氣の沙汰、討つに討たれぬ仔細のあればこそ、日蔭の御身となり給ふ。こなたが今駈出して、心易く首取らうとは、重ねて恥をかきたいか、こなたが今迄徒らで、娘を口説おとすのと、首をころりと落すとは。

　ヘ雲泥萬里と恥しむる。時行道理に責められて行きつ戻りつ齒がみをなし、拳を握り立つたりしが、モウこの上は分別なしと鎧通しをおつ取つて、腹にぐつと突立つれば、女房これは狂氣かと、白菊諸共取りすがり。

コレこちの人、狂氣ばしなさんしたかいなア。

白菊　モシ兄上さま、こりや何故の。

兩人　御生涯で、ござりますぞいなア。

　　ト兩人取りすがり介抱する。源七きつと苦痛のこなしあつて、

源七　ヤレ音高し〳〵。おことが今の惡言は、伍子胥が呉王を諫めたる金言よりも猶重し、恐らくは

この一念項羽紀信が、勇氣にも劣るまじと思へども、時來らねば力なし。それ迄存へ臆病者腰拔と、指さゝれんは、無念の上の無念なり、我死して三日の內、御身が胎內に苦しみあらば、我魂宿りしと心得、十月を待つて誕生せよ。

〽神變稀代の勇力の、男子となつて今一度、人界に生れ出で。

正盛右大將を滅さん。御事が身も、今日より常の女と事かはり、飛行通力あるべきぞや。深山幽谷を住家とし、生るゝ子を養育せよ。汝が五臟に早納めよ。

〽臟腑をつかんで紅の血は夕立と爭ひし、最期の念ぞ凄じき。

ト時行、臟腑を掴んで、八重桐を引付け、口へ押入れる。薄ドロ〳〵。燒酎火燃ゆる。これにて兩人悶絕する。

〽あら不思議や切口より焰の塊、女房が口に入ればうんとばかり、その儘息は絕えてけり。

トこの時花道の揚幕にて、

十郎　ヤレ、來いやい。

〽かゝる處へ太田の十郎、組子引連れ追つ取り卷き。

ト鳴物ドン〳〵になり、花道より以前の太田十郎、襷鉢巻にて先に立ち、花四天の捕手大勢、十手を持ち出て來り。

ヤア〳〵兼冬、右大將高藤公より、汝が姫を召さるれども、賴光と緣組とて、承引なき故、踏込んで、からめ捕つて歸れとある。サア、速やかに渡せばよし、渡さぬにおいては踏込んで、からめ捕らうや。返答は、何と〳〵。

〽何と〳〵と呼ばゝつたり。聞くより白菊立上り、

白菊　ヤ、女ばかりと侮つて、慮外しやると許さぬぞ。

〽用意の懷劍たばさんで、寄らば切らんと身構へたり。

ト白菊刀へ手をかけ、きつとこなし。

十郎　ヤア、物な言はせず、討つて取れ。

トドン〳〵になり、太田十郎奥へ走りはひる。捕手は白菊にかゝりちよつと立廻り。この内奥より太田十郎、姫を引立て出て來る。

〽伏したる女むつくと起き、姫を圍うて立つたるは、さながら鬼女の如くなり。

トこの内八重桐心付き、太田十郎を突廻し姫を圍ひ、白菊にこなし。

八重　サア、白菊どの、この暇に姫君さまを守護なして、この場をお立ち、お立ち。

白菊　ぢやと言うて、この場を見捨てゝ。
八重　ハテ、未練なことを。ござれといふに、サア〱早う。
白菊　そんなら、このまゝ。
八重　ちつとも早う。
白菊　おさらば。
〽姫を誘ひ白菊は、虎口をのがれて落ちて行く。
ト捕手かゝるをちよつと立廻り、投退け、白菊は姫を引連れ、花道へはひる。太田十郎は八重桐をきつと見て、
十郎　ヤア、怪しい女め。
捕人　すさり居らう。
八重　なに、某を女とや。體は流れの太夫の身、一念は坂田の藏人時行なるわ。
トこの時薄ドロ〱にて、源七苦痛の體にて、
源七　さては、魂宿りしか。
〽ヲヽさもさうずさもあらん。我が魂は玉の緒の、お命恙なく行末待たせま

しませと、姫君に一禮し、怒れる眼物すごく、島田解けて逆に、忽ち夜叉の鬼瓦。

とこの間誂へ鳴物にて、花四天打つてかゝり、めい〳〵好みの立廻り宜しくあつて、トゞ皆々花道へ逃げてはひる。

八重　これより我は伊豆の國、足柄山に分け入つて、山より山に住ひせば、山姥とも言へ、そぢやないか。

源七　ムウ。

八重　さうぢや〳〵、腹な子に、手習學問學ばして、いかにも無骨に育て上げ。

〽千人にも萬人にも力すぐれし者ならば。

わが夫の名を雪がんこと、疑ひなし。

〽胸は張弓强弓の雲井に分けて行末は。

ト八重桐こなしあつて行くを、捕手兩人つか〳〵と出て、やらぬとかゝるを押へ、

八重　ア、モシ。

源七　行け。

八重　おさらば。

トこれにて兩人の捕手振り拂ひ、八重桐に組付くを引付け、首筋を掴むと、くはへ目飛び出る。

ヘ怪（あや）し恐（おそ）ろし。

ト三重送り、大ドロ〱にて、よろしく、

幕

嫗山姥（終り）

玉藻前曦袂
たまものまへあさひのたもと

玉藻前曦袂（玉藻前三段目道春館――一幕）

道春館の場

役名　鷲塚金藤次秀國、安倍采女之助安清。道春後室萩の方、姉娘桂姫、妹姫初花姫、腰元其他。

本舞臺四間、黒框の上段、正面金襖、上下一面塗骨の障子屋體、續いて上下襖の出はひり、揚幕の所杉戸の出入り、舞臺花道とも高麗べりの薄べりを敷き詰め、諸所へ菊燈臺を照し、總て道春館の體、茲に腰元四人居並び、琴唄にて幕あく。

腰一　モウシもみぢ殿、いつぞやより薄雲の君樣の仰せとて、桂姫樣を入内させよとの度々の御諚。

腰二　心よからぬ薄雲樣故、女ながらも道春樣の後室とて、直なる道の御氣質から。

腰三　もしも姫樣と采女樣の其仲を、御存じあつての事ではあるまいか。

腰四　昨日清水へ御參詣の折、犬淵どのが姫樣を、無理無體に連れ行かんとせし處に、

腰一　折よくも采女樣がお出であつて、其の場は事なく戻りしが、

腰二　又も入内の御沙汰があらうかと、案じわづらふ姫君樣。
腰三　思ふお方のあたりはつらく、
腰四　ホンニ女子といふものは、
腰一　あぢきない、
皆々　ものぢやなア。

〽仇口々の腰元共、折から入り來る安倍の安靑、几帳のこなたに佇みて、

ト下手より釆女之助、上下衣裳大小にて出て、

釆女　後室樣のお召しによつて、釆女之助只今參上、誰ぞお取次お頼み申す。

〽と云ひ入るれば、腰元どもは立騷ぎ、

腰一　ホンニまア、噂をすれば影とやら、
腰二　釆女樣にはようこそお入り、
腰三　私共が此由を、御後室樣に、
四人　お取次ぎいたしませう。（ト皆々奥へはひる。）

〽打連れ一間へ入りにける、斯くと白齒の桂姫、一ト間をそつとさし足に、逢

ひたかつたと走り寄り、縋り給へば振り放し、（ト上手より桂姫、振袖なりにて出て取縋るを、采女こなしあつて、）

采女　コハ興がりな姫君、委細は御存じある通り、上より毎日の催促は入内あらば双方とも無事に納まる浪風、もし御得心無き時は、後室樣の御身の上、爰はよう辨へて、拙者が事は思ひあきらめ下されよ。

〽云ふ顏つれ〴〵打ちまもり、

桂姫　ソリヤお胴慾な采女樣、今更言ふも愚痴ながら、

〽北野詣での折柄に思ひ染めたる身の因果、ほんに寢た間も夢にさへ、こがれ焦るゝ戀しさの、それに引替へ胴慾な、むごいわいのと一ト筋に、思ひ詰めたる娘氣の、袂なまめく怨み泣き、折節次ぎの一間にて、（ト桂姫よろしくある、この止り、正面にて萩の方、）

萩　花も憂し、嵐もつらし諸共に、散らば誘ふ誘へばこそ散る。

〽歌を吟ずる母の聲、はツと思ひし姫よりも、采女之助は氣を焦り、

采女　さては樣子を御存じか、見附けられては互ひの難儀。

〽まづ〳〵奥へと押しやられ、是非なく〳〵も入り給ふ。（ト采女之助奥へ思入、藻君は奥へはひる。）

〽時しも襖押し明けて、館の後室萩の方、しとやかに座し給へば、

ト奥より萩の方、被布着流しにて出て、二重へ住ふ。

〽采女之助両手をつき、

憚り乍ら御前様、御安泰の體を拜し、恐悦至極に存じまする。

〽と伺へば、奥口見廻し、萩の方小聲になり、

萩　近う〳〵。其方もかねて知る通り、先祖より傳はりし獅子王の御劍、何者の仕業にや盗み取つて行方知れず、此事禁廷へ聞えなば、藤原の家は沒收、もしもの事があつたなら、草葉の蔭の夫まで言譯なく、兎や斯くせんと自が身につゞまりし今の難儀、便りに思ふはそなた兄弟、力になつてよきやうに、思案を頼む、コレ安清。

〽世にしみ〴〵と聞ゆれば、采女之助は頭を下げ、

采女　委細承知仕る、我々が爲めには御主人同然の道春公、いかで疎略に存ずべき、天をかけり地を潜りて隠るゝとも、草を分つて尋ね出し、お手に入れんは案の定、お氣遣ひ遊ばすな。

〽力を附くる折こそあれ、（ト花道の揚幕にて、）

呼び　御上使。

采女　ナニ、御上使のお入りとな。

萩　姫を入内の催促ならん、自がよきに計らはん。まだ其方に話しもあれば、采女は奥へ。

〽仰せに否む色もなく、然らば後刻と夕間暮、禮儀は厚き式臺に心を奥と次ぎの間へ、立別れてぞ、

ト采女之助は下手、萩の方は奥へはひる。

〽入相時、早や夕陽も傾きて、無常を告ぐる鐘の音も、いとゞ淋しき黄昏や、間毎を照す銀燭の光りまばゆき白書院、程もあらせず入り來る鷲塚金藤次秀國。

ト三味線入り序の舞になり、花道より金藤次、大紋着附烏帽子にて出て來り、奥より萩の方は裲に着替へ出て、平舞臺に、出迎へる、金藤次は花道へ止る。

これは／＼、御上使様には御苦勞千萬、私事は館の後室、是れまで出迎ひいたしまする。

金藤　後室には、出迎へ大儀。

萩　御上使樣にはまづ〳〵是へ。

金藤　役目なれば罷り通る、許しめされ。

〽素袍の肩肱いかつげに、上座へこそは押し直る。

ト舞臺へ來て、上段に直る。萩の方は平舞臺下手に住ふ。

萩　シテ、王子樣より御諚の趣き、仰せ聞けられ下さりませう。

金藤　上意の趣き餘の儀にあらず、王子かねぐ\御懇望ありし、獅子王の劍、今日中にさし上ぐるか、さもなくば娘桂姫が首討つて渡さるゝか、二ツに一ツの御返答、サ、たつた今承らう。

〽とありければ、

萩　コハ存じよらざる御題題、其劍は紛失いたし、所々方々と尋ぬれども、今に於て行方知れず、今暫らくの御容赦を。

金藤　アイヤ、そりやならぬ、王子が御心掛けられし桂姫、度々催促あるといへども、兎やかくと云ひ延ばし打捨ておかるゝ事、貴族の威勢にぶきに似たりと、以ての外の御憤り、劍がなくば桂姫首にしてお渡しなされ。

〽退引させぬ釘鎹、胸にひッしと萩の方、途方涙にくれ居たる、後に立聞く

桂姫こなたの間には初花が、忍んで様子立聞くとも、知らず御臺は涙を拂ひ、

ト萩の方ぢつとこなし。此時上の方の障子を明け、桂姫よろしく思入、下手の障子を明け、初花姫同じこしらへにて伺ひ居て、よき程に双方障子を建て切る、萩の方思入あつて、

萩　とても手詰になる上は、とても遁れぬ娘が命、未練なる申し條ながら。

〽一ト通り聞いてたべ。

過ぎ去り給ふ夫道春、二人の中に子なきを愁ひ、清水の邊なる三神の社へ立願籠め、三七日の參籠、その歸るさに水子の泣聲、肌に添へしは女龍の鱗形、由ある人の胤ならんと神の御告げと連れ歸り、育て上げしは桂姫、間もなく儲けしアノ初花、右と左に月花と詠め暮せし姉妹を、是非に一人はない命、殺さにやならぬ仕儀となり。

〽せめて夫がましまさば、問ひ談合もあらうもの、何をいうても身一ツに、かゝる憂き目も前生の、報いか罪か、悲しやなア。

〽身をくやみたる御涙、止め兼ねてぞ見えにける、思案極めて顏を上げ、

杖柱とも思ふ姉妹、勝り劣りは無けれども、劍で殺さば三神への恐れと云ひ、殊には義理ある姉娘、こゝの道理を聞分けて、妹の初花を代りに立つて給はらば、此上もなき御情。

〽云はせも果てず、聲あらゝげ、

金藤　ム、、そりや三神への咎めを恐れ、神の御末の王子の仰せ、お用ひなされぬか。それは面もあれ、上意を受けし某へ身代りなどゝは思ひもよらず、無益の問答聞く耳持たぬ。サア、たつた今受取らう。

〽と詰寄つて、いツかなひるまぬ其の顔色、叶はぬ所と胸を据へ、

萩　イヤナウ御上使、武士は物の哀れを知るものといふ、自が一つの願ひは、コレ、此の双六盤、二人の命を天道の指圖に任せ、負けたる方の首を討たば、せめてはそれを定業とあきらめらるゝ事もあり、どうぞ此の儀を御料簡、慈悲ぢや、情ぢや、聞分けて。

〽義理と恩愛二筋に、傳ふ涙は雨やさめ、身にふりかゝる桂姫、母の情の有難く、御慈悲といふも口籠り、振の袂に白雨の晴間は實に見えざりき、

トよろしく、萩の方上手の障子の内の桂姫よろしく、金藤次思入あつて、

金藤　エ、、さま〴〵のよまひ事、見物するもまどろしけれど、ハテ何とせう是非がない。サア、きり〳〵とお初めなされ、が、勝負のつくが、直に寂滅。

萩　なるほど〳〵それと明かさば女氣の歎きに心かき曇り、取亂しては詮もなし、たゞ餘所乍ら暇

乞ひ。

〽後言ひさして母親は、詞なく〳〵取出す、用意の褥四方には、立つる樒の一ト本も、露を待つ間やかげろふの、あはれ果敢なき有様を、几帳のかげに采女之助、かゝる難儀も我故と思へど出るに出られぬ仕宜、千々に心を苦しむる、思ひは同じ母親が、是が冥土の使ひかと、思へばいとゞせきのぼす胸は子故の五月闇、あやめも分かぬくもり聲。

ト此文句の内腰元、白布、褥、双六盤を持ち出してよろしく並べる。下の襖の内に、采女之助窺ひ居て、よき頃に襖をしめる。腰元は下手へはひる。

娘、娘。

〽と呼び出す。

あい〳〵。

〽あいと返事も一様に、斯くとは誰も白小袖死出の晴着を姉妹が、姿も對の雪柳、しをれ出でたる居所の道、羊の歩みたど〳〵と、最期の座にぞ押し直る。

ト上下の屋臺より、桂姫、初花姫、白の小袖にて出て、白布の上へ住ふ。

〽一ト目見るより萩の方、さては樣子を聞きしかと、先を取られて今更に、とかういらへも淚なる、母の嘆きにかき曇る、心は月の桂姫、やう〳〵と顏を上げ。

桂姫　委細の樣子はさつきにから、殘らず聞いて居りました。

〽塒放れし時鳥、子で子にあらぬ自を、此の年月の御養育。まだ其の上に自を助けんと、さま〴〵の心遣ひ、思ひ廻せば廻す程、そら恐ろしい身の冥加。

〽胸に迫りて一言も、お禮は口へは出ぬわいなア、こんな憂目を見せますも、自らが、たゞらから、とても叶はぬ戀故に、

〽露ちり御恩を送りもせず、覺悟は極めて居りました。

〽お許しなされて下さりませ、又二つには產みの父上母樣は、何處にどうして

先立ちまする不孝の罪。

ござるやら、命の際にたゞ一ト目、逢うて死に度い顔見度い、是ばッかりがと云ひさして、聲くもらせば初花姫、

初花　ナウ曲もない其のお詞、たとひ何れの胤なりとも、妾の爲めには大事の姉樣、お前は殺さぬ自を。

桂姫　イヤナウ、そもじは存へて、便り少ない母上に、お宮仕へを賴むのぢや。

初花　イヤ自を。

桂姫　イヤ、妾を。

初花　お殺しなされて、

兩人　下さりませ。

〽死を爭ひし姉妹の、心根不便と母親は、何れをそれと分け兼ねる、胸は淚の三ツ瀨川、身も浮くばかり嘆きしが、さあらぬ體に、

萩　ナウ娘、御上使樣へ御馳走に、日頃手練の双六を、お目に掛きや、一世一度の曠業なれば、二人共に大事にかけ、どちらも負けてたもんなや。

〽割つては言はぬ親心、かたへの盤を引寄せて、是が此の世の別れかと思へば

直す手もたゆく、斯るためしも綾錦、袞の紐をとく／＼と、賽の川原の此世から、積む石數も姉妹が、年に似合はず目に持つ淚、互ひに筒を取交し、指す手引く手も派手ならず、切つ切られつ修羅道の、苦しみ受けん悲しやと、思へば筒も手もふるひ、しどろもどろの石遣ひ、姉を庇へば妹を助けんものと双方が、出一一六五二四三、果し爲ければ氣を焦ち、

ト此文句の内双六をすることあつて、金藤次せき込んで、

金藤　ぐづ／＼と埒の明かぬ長詮議、早く勝負を附け召され。

〽早く／＼と鷲塚が、せがみ立つれば姉妹も、爰ぞ一生懸命と、心盡しの盤の面、母は胸まで突掛くる淚飲み込み／＼て、背ける顏に露時雨、乞ひ目を振りし姉よりも、妹が心の嬉しさ苦しさ、

ト萩の方は眞中に、いろ／＼思入、とゞ初花負ける。

初花　サア／＼、姉樣がお勝ちなされた、妾を討つて下さりませ。

〽首さし延べて覺悟の體、見る母親は保ち兼ね、わつとばかりに伏沈む、刀すらりと金藤次、

金藤　勝負は見えた、觀念なせ。

〽ひらめく稻妻姉姬の首は前にぞ落ちにけり、ナウ悲しやと初花姬、敢なさか、らに取付いて、悲嘆の涙果しなき、泣く目を拂ひ萩の方、上使の傍に詰め寄つて、

ト文句の通り桂姬の首を討つ初花驚いて死骸に取付いて泣き伏す、萩の方きつとなつて、

萩　ヤア、うろたへたか金藤次、勝負に勝つた姉姬をなぜ討つた、なぜ殺した、それと悟つて初花が、身代りの志し水の泡となつたのも、皆其の方が無得心、たばかられたか、口惜しい。

〽身を振はして腹立ち涙、上見ぬ鷲塚せゝら笑ひ、

金藤　ハヽヽヽヽ、洒落臭い咎め立て、勝負に勝たうが勝まいが、仰せを受けた桂姬、討取つたがナニ誤り、惡く身動き致しなば、どいつこいつの容赦はない、すツ込んでゐやれ。

〽權威を嵩に傍若無人、振袖引き裂き首押し包み、にらみ散して立出づる、御臺はくわッとせき上げ給ひ、

萩　ヤア、過言なり金藤次、女と思ひ侮つて雜言無禮、右大臣道春が妻、そこ、一寸も動くまいぞ。

〽ト裾引上げ、長押の薙刀押取つて、石突てうと庭の表、八双三段水車、母樣

是れは何事と、止め隔つる初花姫、邪魔しやんなと突退け刎ね退け、すくふ長刀ひらりと交し、やア猪口才な腕立てと、首をかたへに金藤次、秘術を盡す上段下段、

ト萩の方長刀にて打つてかゝるを、金藤次よろしくあしらふ立廻り。

へ運の極みか金藤次、肩先四五寸斬り下げられ、思はずたぢ〳〵、付け入る刃むね蹴落され、是れはと駈け寄る弱腰を、どうと打付け動かせず、采女是にと飛んで出で、拔く手も見せず、鷲塚が脇腹グッと突込む白刃、急所の深手にどうと座す、起しも立てず聲荒らげ、

ト萩の方は金藤次の肩口を切り、長刀を打落され、引据へられる。下手より采女之助出て、金藤次の脇腹へ突込む。

采女　王子に諂ひ惡事を勸め、人を損ふ獄卒め、思ひ知つたか。

へ思ひ知れやと刀の柄、ゑぐる腕首しつかと押へ、

金藤　ヤレ待て采女、逸まるな、云ひ殘す仔細ぞあり。

采女　ヤア、此期に及んで何云譯、血迷うたか金藤次。

金藤　血迷ひもせぬ後れもせぬ、まづ暫く。

へまづ暫くと押し止め、苦しき息をホッとつき、（ト床の合方になり）

元某は東國武士、下野國那須の某、故あつて所領に放れ當地へ來りさまよふ内、女房が初産、産み落したは女の子、浪々の身の悲しさ、女龍の鍬形相添へて、五條坂のほとりに捨て置きしが、程なく妻も世を去つて、憂き年月を送りしが、思はず王子の見出しにあづかり、當家に傳はる獅子王の劍、盜み取つて得させなば、一廉の侍に取立んとの頼み、ハヽア畏まつたと忍び入り、奪ひ取つたは此の鷲塚、慾に目がくれ惡人の、王子に隨ひ積惡無道、か程邪險な心にも。

へ忘れ難きは恩愛の、捨てし娘はいかゞぞと、

案じ煩ふ折も折、最前御臺の御物語り、聞く時の其の嬉しさ、肉身のお子に代へ庇ひ給はるお慈悲の心、有難しとも嬉しとも、何と詞があるべきぞ。

へ須彌より高き御高恩、萬が一ツも報ぜずして、知らぬ事とは云ひながら、御家に仇する人でなし、

假令鬼畜の身にもせよ、初花姫の御首に、なんと刄が當てられう。お手に掛つて相果てなば、

せめて心の云譯ぞや。

〽先非を悔む斗のさんげ、扨はと計り母娘、采女之助も立寄つて、

采女　シテ其の劍は、御邊が所持してをらるゝか。

金藤　獅子王の劍は內侍所と諸共に、王子の館に隱しあれば手段を以て取返されよ、斯く物語れば劍の盜賊、イデ立寄つて御成敗。

〽よろぼひ〳〵首取上げ、

コリヤ娘、父ぢやわい〳〵、なぜ物言うてはくれぬぞやい。

〽眠れる如き死顏を、打まもり〳〵、

今際になつて二タ親を、こがれ慕うた心根が、いぢらしいやらふびんなやら、

〽其の時名乘るは易けれど、恩義の二字にからまれて、ぢつと怺ゆる辛抱は、熱鐵を吞む心地ぞや。

〽燒野の雉子夜の鶴、子をあはれまぬは無しと聞く、あたら寄を胴慾な、首打ち落し手柄顏、

むごい親ぢやと冥土から、怨んで居よう、可哀やなア。
〽我を忘れし男泣き、心を察し萩の方、あやめも涙に正體なく、

萩　一樹の蔭の雨宿り、一河の流れを汲む人も、深い縁と聞く物を、藻の上から育て上げ、手鹽にかけた親ぢやもの、可愛うなうて何とせう、十七年の春秋が、一期の夢となつたるか。
〽返らぬ事をくどき立て、かこち給へば初花も、共に涙にむせ返り、

初花　ホンに昨夜も今朝までも、斯うした事があらうとは、
〽神ならぬ身の情ない、
ナンボ捨てても子ぢやないか、なぜ自を斬らなんだ、今から誰と續松や琴の浚ひや十種香も、手向けの種となつたるか。
〽聲も惜しまず叫び泣き、采女もさすが愛着の、義理の柵恩愛の、血筋の別れ鷲塚が鬼を欺く兩眼に、たばしる涙はら〳〵。四人が涙一時に落ちて流る丶袖の海、膝に淵なす如くなり、采女之助はツと立上り、

采女　我は是れより姫が首、王子の館へ持參して、虚實を以て御劍を奪ひ返し奉らん、早おさらば。

〽と立出づる、コレナウ暫しと母親が、首に名殘りの唱名は、直ぐに黄泉へ道しるべ、道の案内と鷲塚が刀を拔けばがつくりと、もろくも枯るゝ芭蕉葉の露の玉藻もうるほふ袖、絞り兼ねたる曦の袂、

初花　無常の風に吹き散りて、

萩　露と消え行く。

三人　死出の山。

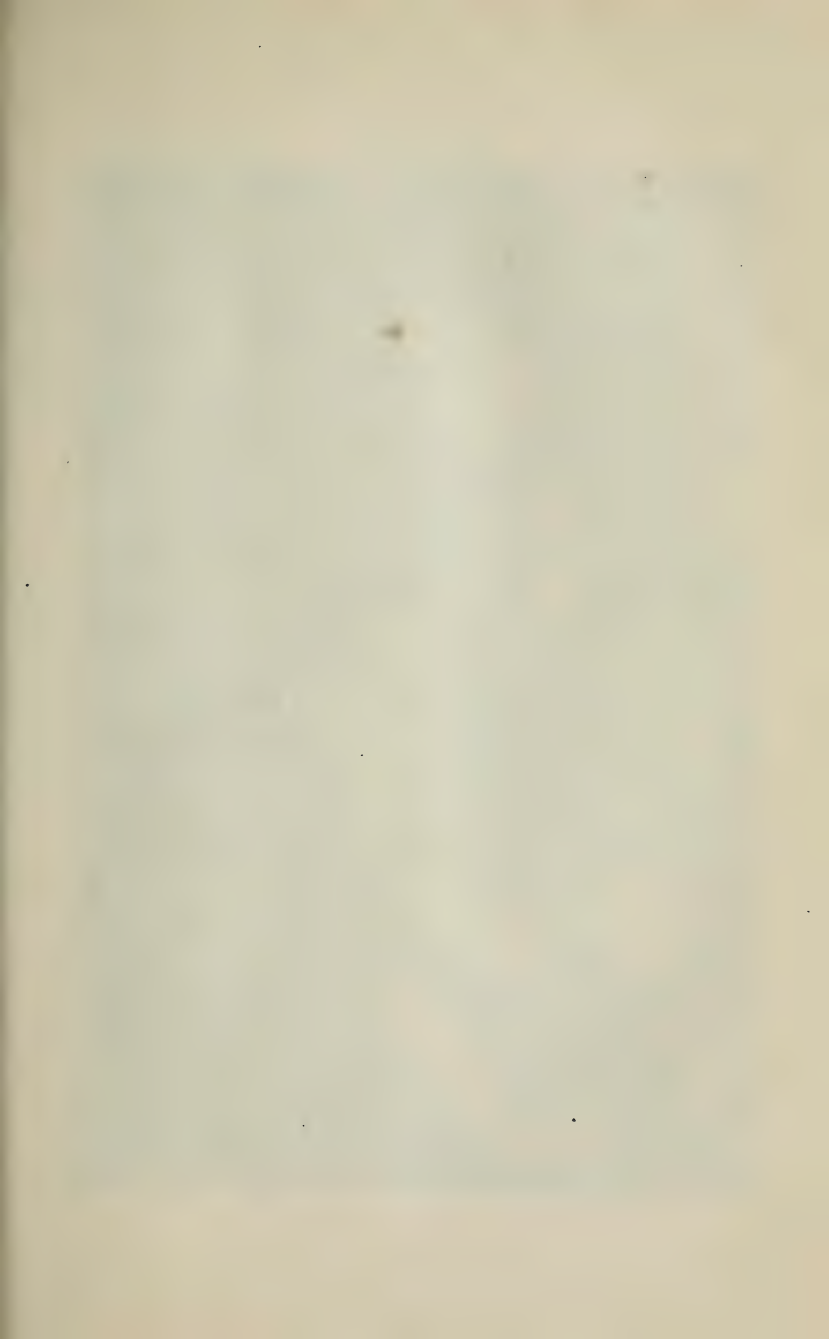
〽雲井の御所や九重の大内山へと、

ト采女之助首を持つて下手へ、萩の方姫は愁ひのこなし、金藤次落入る、此もやう段切にて、

幕

玉藻前（終り）

義經腰越状

一勇斎國芳画

義經腰越狀（五斗兵衞——二幕）

序幕　義經館の段

役名　目貫師五斗兵衞、和泉三郎忠衡、九郎判官義經、龜井の六郎、錦戸太郎、伊達次郎
竹田奴、雀踊りの人數、其他。

本舞臺一面の高二重、黒塗りの襷欄間、同じく擬寶珠附きの高欄、見附瓦燈口、金張附、尤も一面に御簾おろしてある。爰に龜井六郎、着流し、大小、紫の手拭にて頬冠り、これを雀踊りの奴六人きつと取巻き居る、知らせに付き、

唄へ　やアら、雀踊りが所望ぢやが、合點か。

ト渡り拍子になり、皆々取巻く見得にて幕あく。これより龜井に雀踊りの奴銘々立廻り、アリヤセの掛聲にて、雀踊り存分あつて、とゞ渡り拍子にて、龜井奴六人を花道へ追ひ込み、きつと見得。

六人　おゝ、さて合點だ。

床へ　踊りは散つて散亂せり。

ト此の時正面の御簾を卷き上げる、眞中二疊臺の上に褥を敷き、壺折にて義經脇息を置き居る。後に小姓刀を持ち、平伏して居る。此の上手に錦戸、衣裳上下にて、下手に伊達次郎同じく衣裳、上下大小にて控へ居て、此の時二重より下り立ちかゝりゐる龜井に目を付け、きつとなつて、

錦戸　やあ、何奴なれば我君の御前をも憚からず、ほたえ過ぎたる狼藉者。

伊達　面を隱すは慮外者。(ト頬冠りを取つて見て)やあ、わりや龜井の六郎。

兩人　ヤア、思ひも寄らぬ、こりやどうぢや。

義經　ハテ心得ぬ六郎が振舞、召し寄せもせぬに、風流なる踊りの いでたち、某が遊興を妨げるは、所存ばしあつての事か、サア言へ、聞かう。

〽小氣味惡さに、尻込みすれば御大將、(ト管絃になる。)

龜井　すりや、御酒興の妨げとなりし故、お咎めとな。

義經　常々の諫言立て、若輩者の分として不屆きなりとは思へども、數代忠勤の家筋に免じ、宥免致しさし置けば、身が目通りをも恐れぬ法外、遊興の妨げ、憎きやつ。

龜井　扨は、御遊興の妨げせしは、御心に障れども、今一天下、國家の大事に御心は付きませぬか。

義經　何がなんと。

龜井　我君、あなた樣はナア、近頃鎌倉より仰せ越されし人質、靜御前をお渡しなき故、鎌倉殿の御怒り烈しく、近く大軍を以て攻め來るとの風聞、萬民心安からざる時節、晝夜を分たぬ御酒宴、遊興に正氣を奪はれ給ふ故、御家累代の武士を始め、十一人の御近習、立替り入替りお諫め申せども、御側に仕へる佞人ばらの。

トあたりへこなし、錦戸伊達の兩人ぎつくりこなし、

甘き詞に惑はされ、お聞き入れなきのみならず、却つて御不興を蒙り、皆々國に引き籠る、今にも御大事といふ時は、君の御爲に一命を露いさゝかも厭はぬ忠臣は遠ざけ、良藥口に苦しといふ俗説にお心付かぬは天魔の魅入りし故なるか。えゝ、淺間しい御所存でござります。

義經　ヤア、小賢しき一言、燕雀の身として大鵬の心、中々及ばぬ所一旦和睦なし心解け合ひし兄賴朝、何しに約を變じ一戰に及ばんや。ハテ小癪なやつの。

錦戸　善惡ともに主命に從ふは臣家の常、入らざる事にいきせい揉まずと、心を改めお詫さつしやれ。御前體は某よきに執りなしせん。サア、早くお詫〳〵。

龜井　ヤア、過言なり錦戸太郎、梶原が讒言に腰押しする佞人共、兼房が請け合ひし人質を鎌倉へさへお渡しあらば、天下は自然に治まる道理、萬民の爲天下の爲と思しめし、お聞き入れ下されれ

い、我君樣コレ申し。

〽忠義に凝つたる龜井が諫言、十八歳にて討死せし、義經公の身内にて、四天王の名を得たる其の一人の勇士なり、氣早やの大將御氣色變り、

義經　ヤア、諫言を入れるは臣下の役と宥免すれば附け上り、佞人の詞に惑ふとは慮外の一言、必定錦戸兄弟が威勢を嫉む讒言か、佞人とはおのれが事、重ねて我が目通りは叶はぬぞ。そこ、立ちをらう。

〽御座を荒らげ立ち給ふ、御裾に縋り付き、

ト義經きつとなりて、立ちかゝるを、龜井ちよつと押へて、

龜井　こは情けなき御諚、御目通り叶はねば、切腹仕るより外はなし、假令御手討になるとても、申しかけたる御諫言、露ばかりなりとお聞き入れあらば、命は更に惜しまぬ六郎。モウシ我君樣。

〽押して諫める忠義の一途、耳に逆らふ御大將、立ち蹴に蹴やり、

義經　ヤア面倒な、錦戸兄弟、奥にて酒宴を催さん、皆來れ。

「〽かた〳〵來れと言ひ捨てゝ、一間の内へ入り給ふ。龜井は餘りに興醒めて、
さしうつむけば、錦戸兄弟嘲笑ひ、

錦戸 はゝゝ、よいざま〳〵。後先きの見分けもなく、若輩者の分として、佞人の讒言のと我々兄弟を嫉むその報いが來て、君の御不興を蒙り、おめ〳〵と生き長らへては居られまい。こりや恥を知れ、恥といふ事知つたら、今爰で腹を切れ、これ迄の誼で、介錯は致してくれうわ。

伊達 何として〳〵、腹は、えゝ切るまい。腹の切り樣を知らずば、教へてやらうか。

龜井 やあ、聞き憎い雜言、おのが性根に引き較べ、威勢を嫉む讒言とは、奇怪なるあだて。一言と申さば切り下げくれるぞ。

伊達 アノ、われがかや。

龜井 おんでもない事。

錦戸 伊達 さあ、

龜井 さあ、

三人 さあ〳〵〳〵、何を小積な。（ト三人ともきつと詰めかける。）
〽既にかうよと見えける所へ。

泉　待つた御兩所、暫らく〳〵、
　　ヘ聲をかけて御次より、立ち出る泉の三郎、血氣の六郎大老の詞に免じ猶豫の體、
　　ト奥より泉三郎長裃大小にて出て、二重よき所へ住ひ、
錦戸 伊達　三郎殿には、只今出仕召されたか。
泉　やうやく只今出仕致せし處、思ひ寄らぬ君の御不興、御兄弟の爭ひ、六郎殿の御短慮、暫らくとお留め申したは、双方のお怒りを宥めん爲、ハレ、お年に似合はぬ性急な太郎殿、次郎殿にも暫らくお扣へなされい。
錦戸　イヤサ、左樣ではござらぬ。若輩者の分として我々兄弟に向つて、慮外の一言、料簡がなりませぬ。
泉　御尤もには候が、然し申さば若輩者の儀、無骨の非儀は拙者がお詫び、何事もこの三郎に御免じ下され、先づ〳〵お下にござれサ。
伊達　エヽコレ、憎い奴なれど。えゝ、貴殿のお詫び、命冥加な素丁稚め。
龜井　何を、こやつが。（トきつと立ちかゝる。泉三郎目くばせして）

泉　ハテ性急な、主人への諫言は臣下の役とは言ひながら、御意見が一途な故却つて御前のお怒り、我君踊りをお好みなさる故、錦戸伊達の御兄弟迄、若侍同然に、アレ〳〵あの如き雀踊り、これも主命なれば、いづれも御苦勞〳〵。サア、君の御機嫌直し、踊りが肝要々々。

龜井　ヤア、馬鹿々々しい。貴殿迄が踊りとは、踊りが天下のお爲になりますか。

泉　ホウ、なるとも〳〵。イヤモウ、ずんとお爲になり申す。

龜井　や、何んと。

泉　サレバ、盛んなる火を消さんとて、水をかければ猶逆立つ道理、その火を納めるには又火を以つて消す理、ナ、爰をよく得心めされ。そこを存じて某も、御前を計つて一と踊り、仕らんとは存ずれども、何を以ても君の音頭は古風な故、夫の道念節の變盡しがよからうと思ひ付き、日本一の音頭取り、五斗兵衛を同道致した。此の音頭にて踊る時は、如何程大敵の踊りなりとも、態度を亂さず一致して、進退駈引心の儘、追付け、彼れ五斗兵衛も御目見得致させん。某は此の旨君へ言上せん、囃子方の手配りも致すでござらう。先づそこ許は御歸宅あつて、踊りの御用意なされい。ハテ御前は某に任せて、まづ〳〵早く〳〵。

〽智勇を兼ねし三郎が、教へに龜井も聊落着き、

龜井　ハテ驚き入りたる踊りの指圖、音頭取りのお物好みまで承つて先づは安堵、然らば萬事は其許へ、お任せ申すでござらう。

泉　好何にも、御前の踊りは某が、

龜井　音頭の駈引き、

泉　一手になつて、

龜井　進むも、

泉　退くも、

龜井　その場の駈引き、

泉　萬事は再會。

龜井　おさらば、

泉　さらば。

〽泉は一と間へ六郎は、心を殘して立歸る。（ト龜井は花道へはひる。）

〽後に兄弟口あんぐり、踊り半へ日の出た心地、

伊達　イヤナニ、兄者人、兼ねて計略の通り、先づ六郎めは大片附き、まつた老耄れの權之頭めはく

たばつてしまひ、武藏坊は奥州へ使とて、物事に泉の三郎めも、押込める思案肝要。

錦戸　ひそかに〳〵。

トあたりへこなし。調べになる。

あるとも〳〵。三郎めが今ぬかした五斗兵衛といふ奴は、目貫きの細工人、根が卑しい素町人といひ、大酒をすれば性根を亂し前後を辨へぬうつけ者、二斗三斗の限りもなき喰ひどれ故、誰言ふとなく五斗兵衛と名附けし、何の役にも立たぬ奴、そこを見込んで一つ手段を以て、彼れ五斗兵衛が目見得せぬ內酒を喰はせ、馬鹿を盡すを越度にして、五斗めは元より三郎めも惡しざまに言上し、追ひまくつてしまへば、うつそりの大將は立てうと伏さうと身共次第、必ずぬかるな合點か。

伊達　出來た〳〵。はて智慧もあればあるもの、五斗めに酒くらはせてしくじらすとは、極上々の御分別。

錦戸　もし仕損ぜば、こりや。（ト囁くを呑み込んで）

伊達　心得ました、兄者人、

錦戸　弟、來れ。（ト錦戸伊達奥へはひる。）

へ打ち連れ奥へ入りにける。暫くあつて五斗兵衛は、再び花咲く會稽の、錦にあらぬいでたち[illegible]へ、流石名高き軍師とは、聞きしにも似ぬ衣紋附き、細蓮を顧みぬ大丈夫、笑ひ譏りもなんともなく、御座の間近く入り來る、伊達の次郎出迎へ、

と調べにて花道より五斗兵衛、麻裃衣裳大小にて出て來る。奥より伊達の次郎出て、こなしあつて、

伊達　ナニ、其許が聞き及ぶかの五斗兵衛殿よな。先達つて承れば、お名は改め聞くに及ばぬ、手前儀は錦戸太郎が弟伊達の次郎と申す者、朋輩と相成れば、貴殿の引廻しを賴み存ずる。

五斗　これは〳〵御挨拶、諸事萬事お賴み申さでは叶ひませぬ。さゝ、御手を上げられい〳〵。

伊達　イヤ〳〵、先づ〳〵貴殿から、

五斗　ハテ、先づお先きへ、其許から、

伊達　イヤ〳〵、

五斗　イヤ〳〵、然らば御一緒に。

兩人　一イ二ウ三イ。

と兩人辭儀をし合ひ一時に手を上げ、

伊達　はゝゝゝゝ。（ト双方笑ふこなし。）

伊達　以後は別懇に、

兩人　申し談ずるでござらう。

〽禮儀半ばへ腰元が、銚子杯持ち出て、

ト腰元兩人長柄の銚子、大杯を三方へ載せ持ち出て、

腰元　これは御前の御杯、御頂戴あられよとの仰せにござりまする。

伊達　フム、御前のお流れとな。よし〳〵、これへさし置き奥へござれ〳〵。

腰元兩人　かしこまりました。ト伊達腰元に囁き、呑み込ませて受取る。

〽御次ぎへこそは入りにける。（ト腰元兩人上手へはひる。）

伊達　サテ〳〵貴殿は仕合せ者、平生酒を好まるゝとの風聞、かねて上聞に達せし故か、君より下し置かれたる御杯、一獻御過しあつて鬱氣をお晴らしあらば、我君にも嘸御滿足、さあ頂戴めされてよからう。

〽さし附くれば燒石の、飛び立つ如く思ひしが、ちやッと思案し、

五斗　イヤ〳〵、イヤ〳〵、イヤ〳〵、イヤで候、懲りて候。

伊達　ナニ、いやで候。はゝゝゝ、折角我君のお志し、無下になさるは第一無禮と申すもの。

五斗　いかさま頂戴致さいでは。（ト又思案し、）イヤ〳〵、イヤ〳〵、まだ御目見得も濟まぬうち、イヤ〳〵よしに致さう。

伊達　コレサ、貴殿にもない斟酌、左樣でござらば一獻、深うは強ひませぬ。一つ位は大事はござりますまい。

五斗　いかさま一つやなぞは。

伊達　さうとも〳〵、さあ一獻。

ト大杯をさし附ける。五斗兵衛ちよつと氣を替へ、

五斗　イヤ〳〵、やめに仕らう。

伊達　ハテ氣の惡い、どうしたものでござる。これ、しかも此の酒は御前の名酒で、輕くもなし重くもなし、イヤハヤ、言ふに言はれぬ呑み口、まア只一ト口なら苦しうもござるまい。が厭とあるを強ひてお勸めも申さぬが、どうでも貴殿上らぬか。

五斗　イヤモウ、一獻もたべたい事はござらぬテヤ。（ト呑みたさうに、口なめづりしてこなし。）

伊達　ハテ〳〵、殘念に存ずる。

〽様子窺ふ錦戸太郎、廊下口よりのさばり出で、

ト此の文句の内、奥より錦戸太郎出て、二重よりおりこなし、

錦戸　扨は其許が御目見得の、五斗殿でござるかな。

五斗　其許樣は。

伊達　いや、拙者は同名太郎でござる。

五斗　これは又御叮嚀な。

錦戸　いや、身共これへ參つたは、義經公の御内意、先刻下し置かれし御杯、身共參り自他共に勸めよとの仰せなりや、少々は醉つても却つて君の一興とも相成り、弟が無骨ならば拙者が替つて、お勸め申す、辭退あらず受けられてよからう。

五斗　コレハハヤ、有難い御上意、左程に厚い思し召しのお杯、戴きませぬは無禮の至り。

兩人　左樣々々。

五斗　何は格別、先づ取り上げまして。（ト杯を取らうとしてちよつとこなし。）イヤ〳〵、どうでもよしに仕らう。

兩人　そりや何故々々。

五斗　爰が夫の、心の駒に手綱ゆるすな。大事の御目見得濟まぬ内は、めつたにたべませぬ。
錦戸　これは又其許にも似合はぬ愚痴の至り、然し大事と思しめすも無理ならねば、そこを達つて勸めも致さぬ。折角下し置かれたる御酒を捨てゝもおかれぬ。何んと弟、その方呑んで一つさしやれ、身共が一緒にお流れを頂戴せうか。
伊達　成程、これは兄者人の上分別、然らばそれがしたべませうか。
錦戸　それがよい〳〵、お勸め申せど五斗殿がまゐられぬ、粗末にもなるまい。ドレ〳〵身共が酌をしてやらう。
伊達　それはハヤ御苦勞千萬、然らば毒味仕りませう。
　　と大杯にて引き受ける、兩人呑む事、五斗はもぢ〳〵いろ〳〵こなし。
　　やも、かう引受けたところは、どうも言へませぬ。
錦戸　さうあらう〳〵。
伊達　此の又酒の色合ひといひ、こりやこれ御前の別造りでござれば、香りと申し何から何まで申さう樣もない。ちつとかざを嗅いで見やれ。どうもかうも言へぬ鹽梅。さらば拙者が。
　　ト呑み乾す。五斗呑みたさうに、もぢ〳〵こらへ兼ねるこなし。

錦戸　どうぢや〳〵、心持は。

伊達　イヤモウどうと申して此の口當り、胸の涼しさ、氣がはつきりとなり、あなた一つお上りなされては。

錦戸　おゝ呑まうとも〳〵、さゝ注ぎやれ〳〵。（ト錦戸受けて、）えゝこれ、五斗殿がまゐればよけれど、お用ひなければ是非がない。然しこれ、うらやましうはござらぬか、澄み切つてござるぞや、此の又香りと言ふものは。

〽ぐつと呑めば咽喉ぎつちり、穴へ釣り込む惜しみ呑み、傍に五斗は咽喉ぐびぐび、唾を呑み込みたる心根は、日でり續きに百姓の、雨乞ひするもかくやらん。

ト此の内上手より小姓一人、大きなる銚子を持ち出て、おいてはひる。

錦戸　弟もう一つ。おツとあるぞ〳〵。（トぐつと呑んで、）サ、さし申さう。

伊達　はツ、戴きませう。これが呑まいでなりませうか。（ト伊達大杯を引き受け、呑む事。）

〽堪へ兼て杯おつとり、

ト五斗いろ〳〵こなしあつて、此の時伊達の杯を持ちそへ、

五斗　此の酒、助けませう。
兩人　ヤア。
五斗　一つやなぞは、苦しうもござるまいかい。
伊達　ソレ〳〵、助けるとあれば。
錦戸　いか樣とも〳〵。（ト五斗口をつける。）
伊達　何んと、どうぢやな〳〵。
五斗　あゝゝゝ、此の口當りのよさ。（トぐつと乾す、錦戸思入。）
錦戸　然らば、モ一つ。
五斗　イヤも一つはおろか。イヤ〳〵〳〵、爰ぢや〳〵、まあこれは貴殿へ御返杯。
伊達　ところを拙者押へませう。
五斗　これは又迷惑な。
錦戸　誰か、銚子持て。
　　ト手を拍つ、上手より又小娃大銚子を持ち出て、おいてはひる。
五斗　いや〳〵、ちよと眞似ばかりでござるぞや。

伊達　きこんになされい〳〵。（ト言ひながら五斗の持つ杯へ注ぐ。）

五斗　おツとゝゝゝハアーーアーー。此の口當りといふものは。サア申し、さしませう。

ト錦戸へさゝうとして見ると、錦戸わきを向いてゐる。五斗伊達に向ひこなし、

錦戸　おゝ、押へよう〳〵。

モウシ〳〵兄御樣は、押へようといふお顏付きぢや。

五斗　ナニ、押へ、押へツとあらば、マア一つ呑まずばなるまい。

伊達　さあ〳〵、呑まつしやれ〳〵。

ト兄弟思入、五斗に酒をつぐ。五斗呑んで、

五斗　おゝえらい〳〵、やう〳〵味が知れた。扨よい御酒の、へヽ、今日でなくばなあ。サア〳〵お取りなされい、あまりあこぎ〳〵。

伊達　ぢやと言うて、まあ一獻はどうであらう。

錦戸　祝うて三獻、お手際が見事々々。

五斗　御酒がよければ呑みもせう。ぢやが、もうこれで、取ります〳〵。

ト兩人思入、無理に注ぐ、五斗呑む事。

伊達　銚子持て、銚子持て。

ト又小姓銚子を持ち出て、おいてはひる。

五斗　イヤ、もうこれで、

錦戸　あゝいや、餘程なる口ぢや。さ、さ、ま一つ〳〵。

五斗　ハテ、それでは四獻になりますがや。

伊達　ハテ、四獻や五獻は目の下を、くゞると言へば。

五斗　イヤ、もうこれは御免下されい。

錦戸　然らば菓子、お肴致さう。

五斗　お肴とあれば、無下にもなるまい。（ト又杯を取り上げる。）もう〳〵これで、必ず取つてござるぞや。

伊達　ハテ、そりや貴殿の心任せ。（ト又つぐ、五斗受ける。）

錦戸　それ、お肴〳〵。（ト後へこなし、奥にて謠になる。）

〽兵の交り、頼みある中の酒宴かな。

トよろしく納まる。

五斗　こりや有難いわ、やい〳〵、さ、お約束ぢや、お取りなされい。

錦戸　あゝこりや〳〵、四献では數が悪い。何んで此の杯が取られう。それ、注ぎめぢや、銚子々々。

ト小姓銚子を持ち出て來る。

五斗　ハテサテ、無理もよい加減に。

伊達　でも、それ程呑む口を持ちながら。

五斗　ナニ、格別に此のくらゐで。

錦戸　ぢやによつて、勸めるわさ。

五斗　さ、五献でも七献でも、

兩人　おゝさへお酌仕らう。

〽してやつたりと、長柄を直ぐに瀧の酒、絶えずとう〳〵盛りつぶす。

五斗　こりや、瀧呑みぢや〳〵。

兩人　ハテサ、よいてや。

ト錦戸伊達、五斗の受けし杯を手にて押へ、無理に銚子を引き替へ引き替へ、したゝか呑ませる。五

斗醉ひしこなし。

五斗　イヤ〳〵、モウ〳〵、どうもたまらぬ。

兩人　これさ〳〵、五斗殿々々。（ト兩人五斗の盞をつゝき廻し）これさ〳〵、もつと參らぬか、獻が惡いが、どうぢや〳〵。

五斗　もう〳〵十分。御免々々。

錦戸　イヤナニ五斗殿、最早十分とあらば兎も角も、醉醒しにちよつと御座敷拜見なされては、如何でござらう。

五斗　ムウ、お座敷拜見結構でござる。

伊達　然らば手前が案内仕らう。

錦戸　イヤ五斗殿、手前がお手を取りませう。

五斗　これは御慮外、五斗ほどの者が、このくらゐの御酒で手を引かれたと言はれては、相濟まぬ。

兩人　然らば、かう御越しなされい。

ト兩人二重へ上る、五斗は醉ひたるこなしにて、

五斗　左樣ござらば、お座敷拜見仕る。（ト二重へ上る、兩人手を取つて）

錦戸　これが卽ち、雁の間でござる。
五斗　がんの間、承知。
兩人　所を、から廻つて。（ト正面を向かせて）
伊達　是れが卽ち、お物見でござる。
五斗　お物見面白い。
錦戸　所を、から廻つて。（ト上手へ連れて行つて）爰が卽ち、松の間でござる。
五斗　松の間、よし〳〵。
伊達　所を、から廻つて。（ト下手へ連れて行つて）これが卽ち鶴の間でござる。
五斗　おゝ、鶴、鶴。
兩人　所を、こちらへ廻つて。（ト又正面を向かせ、）これが卽ち白書院でござる。
五斗　見事。（トよく〳〵見て、）おんなじやうな所ぢやな。
兩人　所を、からして下へおりて。

ト言ひながら二重よりおりて、上下へ引張り、からだをゆさぶる。五斗酒の廻りたるこなしにて倒れる。

これより、長廊下へまゐらう。

五斗　モウ〳〵、何事も御免下され〳〵。

ト五斗倒れて寝入るこなし、兄弟兩人思入あつて、

伊達　兄者人、まんまと首尾よう。

錦戸　コリヤ。

ト五斗の伏したるを見てこなしあつて、

兩人　はゝゝゝ。

へ手段にのせて兄弟が、悦び勇む折からに、

呼ビ　御成り、

ト兩人これを聞き、こなしあつて奥へはひる。

へ大將九郎義經公、五斗兵衛に對面せんと、直垂折烏帽子泉の三郎先に立ち、御廣書院に出給へば、後に續いて錦戸兄弟、威儀を繕ひ座に直る。五斗兵衛はぢろりと見て、廻り過ぎたる舌按配、

ト此の文句の内、義經に小姓附添ひ、正面に住ふ。三郎は二重下に住ふ。錦戸兄弟上手より出て平伏して、五斗の傍へさし寄つてこなし、

伊達　コレサ〱、五斗殿、我君の御入りなるぞ。

錦戸　コレサ、起きさつしやれ〱。

ト五斗目をさまし、寢腹這ひにて醉ひしこなし、あたりを見て、

五斗　ヨウ〱、これは〱皆樣、ようこそお出で、こりや〱嚊よ娘よ、お客樣がお出でぢや。お煙草盆出せいやい、お茶持てうせい。

〽我家と心得馳走振り、泉はハッと仰天し、扨は錦戸兄弟が、酒を盛りしに極まつたり、と悟りながらも此の場の難儀、目顏で知らせきよろりくわん、義經遙に見下し給ひ、

ト五斗醉ひしこなし、義經思入あつて、

義經　ム、三郎が勸めし軍師五斗とは、彼れが事よなあ。

泉　御意の通り一陽來復の時を待つ、武家の高名を埋む五斗兵衞と申す者、御對顏の上お詞下しおかれませうなら、お取次ぎ仕りし某まで、大慶至極に存じ奉りまする。

義經　傳へ聞く漢の世に、高祖始めて韓信を見し時、得たる業を尋ねしためし、吉例もあれば尋ねて見ん。錦戸兄弟、何にても尋ねて見よ。

兩人　畏つてござります。
　〽仰せに出しやばる錦戸太郎、（ト兩人五斗の傍へ行き。）
錦戸　コレ〳〵五斗殿、三軍を司る軍師となるとあつて取次ぎせられし其許、定めて六韜三略は存じをらるゝであらうな。さあ、明白に言上めされ。
伊達　イヤサ、六韜三略はそらんじてござるか。（ト兩人きつと云ふ。）
五斗　何ぢや、陸で行くと三百ぢや。そりや高い、人を駕籠舁きか何んぞのやうに、それがしそんな事はずんど存ぜぬ〳〵。
錦戸　何ぢや、知らぬ、ハテ見事な軍師ぢやな。然らば武藝は。
五斗　ムヽ、武藝か。
伊達　いかにも。
五斗　そりや武士の表道具、知らいで濟まうか。
兩人　サア武藝はどうぢや。
五斗　先づ、弓槍鐵砲、馬に乘る事、劍術體術何でもかでも引きくるめて、
兩人　存じてござるか。

五斗　存ぜぬで罷りあつた。

兩人　ヤア。

五斗　何んとけうといか、先づいつたい、われら根が嫌ひぢやて、何をさせても埒明かぬ道理よ、職人の子ぢや者。兎角好きなはこれ〳〵、さらば一つ下されうか。

又引き受けて呑む酒を、手に汗握る泉の三郎、胸を痛めるばかりなり。大將甚だ立腹まし〳〵、

義經　ヤア、かゝる浮世のすたれ者、軍師なりとて勸めしは、所存ばしあつてか、泉が心底何と。

泉　はツ、御尤もの御不審、昔より傳へ聞く智者の一失とは此の儀、大酒をすれば前後を忘れる持病の疵、暫く御休息あつて彼が醉醒めての後、軍術の奥儀お尋ねあつて然るべく存じまする。

義經　默れ三郎、一大事の場所に及び、五斗が酒に亂れしとて、正氣になるまで討つを延ばさんや、イヤサ、敵が猶豫し合戰を暫く待たうと思ふか、心得ぬ一言の返答せよ。但し此の義經を馬鹿者と思ひ嘲けるのか、軍師なぞとは思ひもよらぬ事、見るもなか〳〵けがらはしい。ヤア〳〵誰か五斗めを引立てい。（ト後にて）

皆々　ハア――、

〽やれ引立たせと怒りの面色、重ねて何んの御諚もなく、座を立ち奥へ入り給ふ、荒々しくぞ見え給ふ、錦戸兄弟笑壺に入り、

錦戸　コリヤ、我君の御立腹が御尤も、此の樣な喰ひどれの極道を、軍師などゝお目利は、あつぱれあつぱれ。

伊達　イヤ、見事ぢや。イヤなかく〳〵お手柄、でかしましたく〳〵。重ねて何んの事にも差出ぬやう、見せしめのためぢや。あの醉どれめを引きずり出せ。

皆々　アハ――、（ト後にて聲する。）

錦戸
伊達　ハテ、あつぱれのお目利でござるなう。

〽言ひ捨て一間へ入りければ、後に泉の三郎は、五斗が亂れし體を見て、

ト錦戸兄弟せゝら笑ひ上手へはひる。三郎無念のこなしあつて、二重よりおり、

泉　ハテ殘念な。なかく〳〵彼等が手に合ふ五斗にあらねど、と言うて此のまゝ歸るもいかゞ、ハテ、ム、ヽ、兎や角言ふ內醉も醒めなば、おのづから正氣も付かん、此の上は佞人の兄弟を退けるが肝要、立ち歸つて又工夫せん。ハテ是非に及ばぬ。

〽無益の論と誤りを、身に引受けて立歸る。（ト花道へはひる。）

へ下知を受けたる下郎ども、てん手に割竹持つて出で、

ト床の合方にて、竹田奴六人、割竹を持ち出て、花道にて、

奴一　サテ、厚かましい太郎四郎もあるものぢやなあ。

二　何にも知らず軍師ぢやの、ぐんにやりぢやのと、のぶといやつぢや。

三　いつたい、又おらが仲間の内にも、相應な軍師があるもの、職人風情がいけるものか。

四　これからそいつを引きずり出して、何んぞ買はして酒にせうかい。

五　イヤ、それよりも、いつそからだ中灸をすえて、叩き出さうかい。

六　おゝ〳〵、それがよい〳〵、サア〳〵ごんせ〳〵。

ト皆々舞臺へ來り、五斗の上下へ立並んで、

それもよからう、此の通り評定の熟した上は、あの熟柿臭い醉どれめ、拍子を揃へてやりかけう。

ト よろしく取り卷きて、

一　何でも音頭がキツカケぢや。

六人　天の七夕おいとしござる。シュツ〳〵〳〵、シュツ〳〵〳〵。

トよろしく五斗の廻りを割竹にて叩き立てる。五斗やうやく起上り、醉ひしこなし、

五斗　エヽ、こりや、待つてくれ〳〵。えゝいこれ〳〵。われはいつたい何ぢやい。

六人　さういふわれは、何ぢやい。

五斗　おゝ、おりや五斗といふ軍師ぢやわい。（ト息を吹きかける。）

六人　えゝ、臭いわ〳〵、何言ふぞい。

五斗　何を言ふとは、緩怠千萬。

一　くわんたいとは、おのれの事ぢやわい。

二　喰ひ抜けの分として、軍師とは何の軍師ぢや。

三　おゝ、大方おかわのうんしであらう。

六人　さ、きり〳〵出てうせい。

五斗　おゝ、尤もぢやが、もうこれから、軍師の生業は止めぢや。

六人　おゝ、それがよい〳〵。

五斗　はゝゝゝ、先づは客方の御意に叶ひ、執着至極におはしますぞや。

六人　何、おはしますとは、

五斗　大方それでその割竹も、取置きであらうな。
六人　ならぬ〳〵。
五斗　ナニ、ならぬ。軍師の生業休みにしても、
六人　追ひ捲くるのが、殿樣の御意ぢや。
五斗　ホイ、それでは返す詞もない。おれが渡世は、目貫の職人。
六人　おゝ、その目貫知つてゐるか。
五斗　それぢやによつて。
六人　目を拔かうとしたのぢやな。
五斗　おゝ面白い、目貫の秀句、えらいもんじや〳〵。おれが目貫の値段知つてゐるか。
六人　知らぬ〳〵、どうぞ聞きたいなあ。
五斗　聞きたいとは、入用かな。
六人　おゝ、欲しい〳〵。
五斗　おゝよい、爰に少々持ち合したのがある、手彫りの目貫が入用なら、値段附きで聞かさう聞かさう。

六人　さらば聴聞致さうか。

五斗　おゝ、。

〽扇ひらいて聲作り、

さらば某もと、ヱヘ、、改まつてけつかる。先づおらが家の目貫といへば。

〽牡丹に遊ぶ戰は、大方四々の十六貫、月に兎は子持ちの證據、三五をかけて十五貫、猫は二四が八百目、狸は金で百疋なり、つなぎ馬は相場もなく、滅多無性にたいこ持ち、猿は三十三貫三百三十文也、紋盡しなら桐のとふ五七兩から五三兩。

毛彫りはかゝが重寶で、

〽御望みならば、

六人　何んぼぢやえ。

〽三百目、

六人　ヤレコラ、大事に、だまされなア。

〽その外家の三番叟、御望み次第好次第、打たるゝ替りに進上と、口に任せて言ひ述ぶる。慾にふけたるども下部、

トこれより床に六人奴のりて、

モウシ〳〵五斗殿、それは近頃忝い。とてもの事に値の高い三番叟、えい〳〵、そこに持つてござるなら、お見せなされて下さりませ。

トよろしく床にのつて、五斗こなし、

五斗　ナニ、三番叟が欲しいか、それは何より得て安いこと。さらば目貫をまゐらさう。

〽持ち合せたる伊勢紙の、丼どつと打明くれば、ばら〳〵と寄りたかり、

ト懐中より壺屋の煙草入を出し打ちあける。中より目貫ぶちまける。

三人　イヤア、おれぢや〳〵。

三人　イヤ、おれぢや〳〵。

ト皆々これを奪ひ合ひ、竹田奴五斗のこしらへできる間、捨ゼリフしばしあつて延ばし、よき時分煙草入を烏帽子にして、裃の肩衣を打ちかけ、

五斗　竹田近江が、細工の仕立は此の通り。

〽引きかついだる合羽の烏帽子、しかつめらしく聲張り上げ、

ト鳴物になり、

おゝさへ〳〵、悦びありや〳〵、我此の所より外へはやらじと思ふ。

ト三番叟の合方になり、醉つたるこなし、ひよろ〳〵として、これより大小三味線入りの鳴物になりをかしみの立廻り一人づゝあつて、五斗懐より目貫を出して一人宛招き出す。それを貰はうとしてをかしみの立廻りいろ〳〵あつて、トゞ見事に投げ、よろしくとまる。

〽ゑい〳〵醉ひに醉はされて、似せる家來が鵜の眞似や、からす飛びして、

六人　かア〳〵、

ト烏の飛ぶふりあつて、三重になり。舂中へ五斗上ると、向つて一人馬になり、先に二人割竹を槍の心にて持ち、後へ供廻りの體にて、行列模樣よろしく。此の人數に浮かれて舞臺を廻り、行列三重にて花道へはひる。

幕

二幕目　泉の三郎館の場

役名　目貫師五斗兵衛後に後藤兵衛盛次、和泉三郎忠衡。三郎妻高ノ谷。五斗女房關女、同娘德女、腰元三人。

本舞舞三間の間中足、本緣附きの二重、上下共障子屋體、正面金襖、何時もの所簀戶、下手に柴垣幕の內より腰元三人早枝、立田、梅の戶、居並び、琴唄にて幕あく。

早枝　なんとマア皆さん、此の頃からこちのお邸へ、いづれの御浪人かは知らねども、御夫婦に娘御連れてのお客あしらひ、大事にかけなさるは、何ぞ譯のある事さうな、そなた衆は樣子知らずかいの。

立田　サイナア、あの御浪人は元が目貫の彫物師、兵法や軍法が上手なため、然も今日お目見得とて、旦那樣が御同道なされた。それ程戰が巧者なら、人の見ぬ間の夜戰も、大抵のことではあるまいの。

梅の　イヤ〳〵、目貫師なら、たかの知れた腕前であらうが、然し馬にのるは上手であらうわいの。

早枝　ヲヽ、ソレ〳〵、したが、ほんまの馬に打ち乘つて、戰の掛引は覺束ないわいなう。

兩人　ホンにさうでござんす。

三人　オホヽヽヽ。

〽遠慮會釋も蔭言の、仇口々ぞかしましき、折柄奥より和泉が妻、高の谷は歩み出で、

ト調べをなせ、奥より高の谷、褊襠なりにて出て來り、

高の　かしましい腰元ども、わざくれ事はたしなみませうぞ。尤もこれ迄職人にて伏見の里にお住ひなされど、根が木曾殿の御浪人、氏といひ武藝といひあつぱれ武士と連合ひのお悦び、樣子も知らず見苦しい、おかもぢや娘御の、お耳へ入らば自迄、ともぐ\に誹ると、さげすまるが恥かしい。重ねてきつと、粗相を致さば許しませぬぞ。

三人　はアい。

〽叱りつけられ尻込みし、あやまり入つてぞ見えにける、關女娘を伴ひ出で、氣の毒顏に、

ト皆々思入、奥より關女德女を連れ、下手より出來り、

關女　これはしたり、どういふ事で奥樣の、御機嫌を損ねたのでござりまする。少々の粗相ならどう

か　私にお免じなされて、御料簡遊ばして下さりませ。
へ我身の上の噂とは、知らで取成し追從まじり、傍で聞くさへ笑止なり、高の谷は打笑みて、

高の　コリヤ〳〵三人の者、今日はあなたの御挨拶で料簡する、早う勝手へ、立つて行きや〳〵。
へ皆打連れて走り行く、娘は母の袖を引き、

ト腰元三人奥へはひる。德女こなしあつて、

德女　モウシかゝ樣、とゝ樣は御前へお出で、まだお歸りはなされませぬかえ。

關女　おゝ、待ち兼ねるは尤も。〳〵イヤ申し奥樣、斯樣に申せば夫の事を申す樣で惡けれど、七八年も連添うて萬事に心を附けますれど、大酒呑んではたわいのなさ、目貫を上手に彫りますより、外に藝は何もない人、軍師とやらになるとて、三郎樣がいかいお世話、しつけぬ事を致されたら明けても暮れても仕損ひ、遂には愛想が盡きようかと私が案じ過し、御推量なされて下さりませ。殊に今日はお目見得に、早くより御同道、きつうお暇が入りまするも。

高の　これはまあ〳〵、あなたとしたことが、卑下なさつての御挨拶、お氣遣ひ遊ばしまするな。夫和泉の三郎も堀川のお屋形では隱れもない武士、ついにこれ迄粗相は致さず、締めくゝりがよ

い爲めありや擬ひのない平打紐、あの人の言ふ事なりや、惰なと人の噂さにかゝる程な侍、見込みがなうて世話燒くものか、首尾よう追附けお歸りでござりませうわいな。これ腰元共、申しつけた品これへ。

腰元　かしこまりました。（ト廣蓋に裲襠を載せ持ち出る。）

高の　これは私が着古しなれど、今日からあなたも武士の奥方、それではあまりに輕々しい、それを召しておいで遊ばせ。

へトさし出せば、見てびつくり、

闘女　これはまあ〳〵有難う存じまする。そんならこれを頂戴致しても、大事ござりませぬか。

高の　さあ〳〵それを召してお出でなされませ。それ腰元共、召させ申しや。

腰元　かしこまりました。（ト裲襠を闘女と德女とに着せる。兩人いろ〳〵こなし。）

闘女　これはまあ、めつさうに長い、さうしてまあ、どう致しますのでござりまするえ。

早枝　サア、かう遊ばしませ、此の褄をかうおとり遊ばして、左のおみあしから、するり〳〵と、かう遊ばしませ。

闘女　ホンにあなたはお上手ぢやなあ。

徳女　モウシ母様、わたくしが致して見ませうわいな。

立田　サア、あなた、して御覧じませ。

徳女　左様なら、かう致すのでござりまするか、かう、左のおみあしから、するり〳〵、と、かうでござりまするか。

腰元兩人　ホンニあなたは、御器用なお子でござりまするな。

闘女　ドレ私も致して見ませう。えゝ、かう致して左の方から、するり〳〵。

ト立つて我足に裾を踏み、べつたり座りこなしあつて、

テモ不器用な子ではあるわいな、おほゝゝゝ。（トこなし。）

〽といふ間程なく表の方、（ト花道の揚幕にて）

呼ビ　殿様のお歸り。

〽下部が呼ばゝる聲につれ、いつに變つて和泉の三郎、疊ざはりもあらけなく不興顔にて立ち歸れば、たゞならぬ體氣遣ひさに、

ト右の文句に序の舞をかぶせ、和泉の三郎、上下大小にて、物思ひのこなしにて出て來り、直に舞臺へ來る。高の谷思入あつて、

高の　只今おさがり遊ばしましたか。

關女　今日は、いかい御苦勞樣でござりまする。

高の　シテ、御前の首尾は、如何でござりまするな。

〽尋ねに和泉は溜息つき、

和泉　ハテ誠や智者の一失とて、古語に違はぬ一つの疵、古今無双の侍なれど、酒と大病には耆婆扁鵲が藥も及ばず、なさけなや五斗殿、錦戸伊達が計略に乘せられ、いつの間に呑まれしか又例の大酒、前後不覺のお目見得、何をお尋ねあつても存ぜぬと取り合はねば、御前の首尾は散散、雜人輩に叩き出され、見苦しき振舞、えゝ今日迄人に笑はれぬそれがし迄が、面目を失ひしぞ。

〽と語れば高の谷輿さまし、五斗が妻もあきるゝばかり、

關女　スリヤ又、御酒をたべましたか。さうしてまあ夫は、何方へ參られましてござりまする。

〽おろ〳〵涙に和泉の三郎、

和泉　イヤ〳〵外へは參られまい。おツつけこれへ歸られよう。えゝ、殘念千萬な。

高の　よくない人の取次ぎ遊ばしてあなた迄の御恥辱、お氣の毒の痛みにおかまひ御無用、ちとお休

み遊ばしませ。

和泉　如何にも、暫時休息致さう。イヤナニ、關女、娘御とも次の間へ。

關女　有難うござりまする。ホンニ夫の持病の大酒、御笑止にござりまする。

高の　サア先づ奥へ。

和泉　奥も來やれ。

〽伴うて一と間の内へ。

ト三重になり、皆々奥へはひる。これより出語りになる。

〽酒といふ世の曲者に浮かされて、軍師も今は塵埃、箒の先へ二升樽くゝり付け、えい〳〵目貫師かな、何でもせい。

ト五斗箒の先へ二升樽を付け、醉ひたるこなしにて出て來り、花道にて、

〽箒々と賣りたる親父、店の端にも暫しは休む、土の人形やさかなをよせて、二つ三つ四つ五つ六つも、たべつ押へつ、相しよとおしやる、脇より人の見るならば、かろ又〳〵かろ又、をかしかろ、またけなりかろ。（トよろしくあつて、）

五斗　ハヽヽヽ。ムヽヽヽヽ。ハヽヽヽハヽヽヽ、コリや待つてくれ〳〵、頭がはづれるわ

「い、待つてくれ〳〵ハヽヽヽ。

トおとがひを押へ無性に笑ひ、花道よき所へすわり、笑ひながら橋を見て、

おれが生きて居るのも、おまへの蔭ぢや。有難い〳〵。やゝ誠に面白い〳〵、扨御前で下されて、それから長者町の池が手造りを天王寺が所でたべたぢや。これは事ぢやと言うたら、平又五が、材木程な牛蒡をはさんだ、おッとこりやどうぢやと言うたら、辰巳隅のかねものが隅濟みにせいと言ひをる。許せと言うたらば、アイヤならぬと言うた。

ト此のせりふをきつと言ふ。

又いづや山三ぶが赤銅のつるかけを出した所を、小氣味よう聞しめされたぢや。マア何と無理か、無理ぢやあるまいがな。無理ぢやと言うて見い。

トひよろ〳〵として、往來の人に言ふ心にて、閙耳して、

ム、無理ぢやないか、よし〳〵もうよい、無理ぢやないか、よいわ〳〵、ひつこう言ふな〳〵扨。（ト舞臺を見て、）おゝ、向うが即ちわれ等が家ぢや。いや、おれが内ぢやないわい、内ぢやなけれど向うへ行かにや、いねる内がないによつて、まあ内も同然ぢや。えゝか、さらば座敷へ参らうか。

〽さらば座敷へ參らうと、樽ふりかたげ千鳥足、しどろもどろの口の內、よろめきながら聲づくり、

トよろしく枝折戸の傍へ來り、

扨、旦那お歸りぢやと言へば、しかつめらしいが、假名で言や居候お歸りぢや、居候がお歸りなされたぞよ。（ト內へはひらうとして樽を見て、）御免なされませ、お先きへはひりまする。

〽トよろめきながら、（ト內へはひる。）

戻つたぞよ〳〵。誰も居ぬかい、えゝ安うしをるな、恃出して安うせい、安うしても戻らねばいねる內がないぢや、アハヽヽヽヽ。（ト樽を見て、）誰が居いでも、お前さへ居りや、何時でも御機嫌がよいのぢや、目出たいぢやないか、目出たい〳〵。目出たい祝ひに、さらば一杯御對面仕らう。

〽又引かゝへ吞まんとする、女房見兼ね走り寄り、

ト此の文句の內、五斗兵衞樽より酒を吞まんとする、此の時關女德女を連れ出て居て、此の體を見て

思入あつて、

關女　コレ五斗殿。（トきつと言ふ。）

五斗　何ぢや、びつくりするわい。

關女　びつくり所か、時も時、折も折、一世一度の出世の場所へ出ながら、喰ひどれの醉どれのと、追ひ立てられて無念にはないか、口惜しうは思はぬかいなあ。

へ夫思ひの貞實心、五斗はぢろりと打ち眺め、

五斗　コリヤかゝ、無念な。

關女　え。

五斗　無念な、ぢやによつて、たべたぢや。（ト輕くいふ。）

關女　さいなう、その喰べた故引き出され、赤恥をかいたぢやないかいなう。

五斗　そりや誰が。

關女　はて、おまへが。

五斗　いつイの。

關女　今日御前で。

五斗　よう嘘をつく奴ぢや。コレかゝ聞け、御前で錦戸兄弟が冷と燗とのなひまぜで、えらい振舞ひ、きつう醉つた程に、いんで休めとて首筋持つて引き出された。何とえゝか、コリヤ嬶とき

さま、お歸りなされたかと、何で挨拶せぬ、われも生白けた面ぢや、酒を呑め、酒を呑まにやあの人間の內ぢやないぞよ。コリヤ娘、明日からわれを飾り馬に乘せるわ。えゝか嬶、われは又餅打ちの乘物に乘せて、酒買ひにやるわ。何とえゝか、嬉しかろがな、この祝ひにまア一ぱいせう。

ト樽の口を拔き呑まうとする。

へ樽かたむくれば女房もぎとり、涙を浮べ、

鬪女 えゝ淺ましい、口はそれ程可愛いゝ物か、恥を恥とも思はぬ醉どれ、その樣にあろとは知らずに、娘を連れて嫁入りして、五年あまりの辛抱、又しても〱呑み過しての仕損ひ、ホツト愛想も盡き果てた、こなたが、何の以前が武士、竹の節か木の節か、鰹節でもあろまいかいなあ。

ト此の內五斗兵衞よろしく醉ひたるこなし、

へ恥つらかゝせどきよろりが味噌、

五斗 はゝゝ、こいつは面白い、えらう口合をぬかしてけつかる。アハヽヽ、が武士盡しの口合、どうも言へぬ。こりや面白いわ〱、とてもの事に小唄節でやつてくりよ。アヽ死なざ止むまい

我心、ぼろ〻ん〳〵。（トロ三味線をひくこなし。）こりや、きやらめ、相し居らぬかいやい。

〽しなだれかゝるを取って突きのけ、（ト闘女こなしあつて、）

闘女　え〻、そなたはナウ、とてもその根性では、女房子の面倒見届ける事はなるまい。よい加減に暇下さんせ、去状書いて下さんせ。

〽床の間の硯取る手も懲らしめに、態と手強き詞の角、娘は悲しく、

ト闘女ヤツキとなり、こなしあつて、有り合ふ硯箱を持ち來て、五斗兵衛に突き付ける。徳女五斗兵衛に寄り添ひ、こなしあつて、

徳女　モウシと〻様、今からふツつり思ひ切り、酒吞むまいと言うて下さんせ、コレ拜みます、拜みますわいなあ。

ト縋り思入、此の內五斗兵衛居眠り居る。

〽取付き縋り泣き居たる、母は娘を引きのけて、搖り起し、硯突き付け、

闘女　何の我身の言ふ事耳に入らうぞ、そつちへ退いてゐや。さうしてまあ何んの泣く事がある。そつちへ行きや〳〵。コレ、こちの人、もう〳〵〳〵千も萬もござんせぬ。え〻これ、どうぢやぞいなう、返事さしやんせ、これイなあ。此の樣に言はれるが腹が立つなら、ふツつり酒を止

めて下さんせ、今の樣に言ふのも、みんなお前を大事と思へばこそ。コレ返事さしやんせ、返事さしやんせいなあ。ムヽ返事のないは、どうでもわしを去る心かえ、サア早う去狀書いて下さんせ。但しは酒を止める氣かいなあ。ト無理に搖り起す。）

五斗　ヲヽとまる〱。

關女　アア、そんなら酒をふツつり留める氣かえ。

五斗　いゝや、今夜は爰にとまる。

關女　えゝ、知らぬわいなあ。（ト突きとばす。）

五斗　こりや、藁でたばねても男ぢやぞよ。

關女　知つて居るわいな。

五斗　知つてゐるなら突飛ばし樣がひどいぞよ。暇狀書けか、暇狀書けなら書いてやらう。おれも男ぢや、さう言はれたからは書かいでかえ、書くまいと思つて侮つてけつかるな。

關女　サア、早う書かしやんせいなあ。

五斗　アヽやかましう言ふな、書く間もあるものぢや。（ト懷を搜し、紙を落して來たさうな、かゝ、われが方から書いておこせ。

闘女　えゝ、去状といふものは、男の方から書いておこす物ぢやわいな。
五斗　そんなら、われが方へ取るばかりか。
闘女　あいなあ。
五斗　ハテ、女といふものは、利潤なものぢや、我方へ取るものなら、一枚はりこめ〳〵。
　　ト闘女こなしあつて、懐中の小松を出して、
闘女　サア、ちやつとこれへなと書かしやんせ。
　　と投げてやる。五斗兵衛取つて。
五斗　小さい紙を出しをつたな。
闘女　早う書かしやんせいなあ。
五斗　せわしない、今書きかけて居るものを、書け〳〵とかしましい。書き出しの事。
闘女　えゝ。（ト思入、五斗兵衛心付き）
五斗　しまつた、あんまりせわしなう言ふ故、書き損うた。氣の毒ながらまあ一枚おはりこみ。「去状の事、一つその許不緣に付暇遣はしゆ處實證なり、然る上は沙汰無く共、御入用の節はきつと返濟可申ゆ。」アハヽヽヽヽ、去状書くのに金貸しの證文書いてけつかる。不斷借り盡して居

る故、遂こんな事書いてのけた。アハヽヽヽヽ。

關女　ヱヽモ、さつさと書かしやんせいな。

五斗　やかましう言ふな、そないに言ふによつて、書き損ふのぢや、氣の毒ながら今一枚おはりこみ。

ト又別の紙へ、書く事、關女捨ゼリフよろしくあつて、

よつて如件。（ト書き終る事よろしく、）

〽ゆがみにじりに三行り半、

嚊、われが名は何と言うたな。（ト關女思入あつて泣く。）さうぢや、お關。知つてゐる／＼。不斷かゝかゝと言うてゐるため、遂忘れた。かゝの名を忘れるとは、あんまりあほらしい。（ト名書きをして、）これかゝ、これでよいか。したが、五斗が暇遣るにたゞやつては一分も半分も立たぬ。こりや此の匕首は親重代、三匁五分で買つたれど、暇遣る印、それ、持つて行け。

〽投げ出したも夢うつゝ、

とつとゝお歸り、

〽前後も知らず伏しにけり、（ト樽を枕に寢る。）

徳女　コレかゝさん、おまへはその樣な事さしやんして、わたしやどうせう、どうせうぞいなあ。
　　〽娘はぐわんぜ涙にくれ、おろ〳〵するを、
鬪女　これ徳女、此の去り狀はとゝさんへの懲らしめ、異見の爲にとつた暇、目が覺めたら元の通り、やつぱり變らぬ女夫の仲、泣く事はない。サアちやつとおぢや。
　　〽娘をすかし伴ひ出るを、高の谷が、
　　ト徳女を連れ、行かうとする。此の以前より高の谷出て居て、
高の　お內儀待つた。此の嫁ひどれを殘しおき、そなた衆ばかり歸らうとは、さうはまゐるまい。お連合ひも引き起し、連れていんで貰ひませう。
　　〽呼留められて五斗が女房、ムツとせき上げどつかと座し、
鬪女　コレ奧樣、イヤ和泉の三郞樣のおかもじ樣、こちの男が酒呑みたはひなしといふ事は、最初から知れてあるを、爰の御亭主が見込みがあるの取次ぐのと、滅多無性にそゝのかし、住み馴れた伏見の里、身代を疊せ、今ではどこにも居所のない、それに何ぢや、こつちのたは締めくゝりがよい故、和泉三郞とは言はぬ、擬ひのない平打紐と自慢たら〳〵、これがどこに締めくゝり、ひよんなお人に見込まれて、擧句の果には緣切つて去られましたわいなあ。去られたら他人

故、構ふ理屈はない筈、醉ひどれはあなたから呑み込んでの世話、厄介ついでにどうなと御勝手次第になされませ。

〽あた面倒なと出放題、言ひたい事を言ひやぶり、（トきつとこなしあつて德女を引き立て、）

サア娘、おじや。

〽さあ來い娘と引立て〻、氣強くは出たれど心もとなさ氣遣ひさ、しばし小蔭に彳めり。後にうつとり高の谷は、五斗が妻にやり込められ、むしやくしや腹の立居も荒く、

ト此の淨瑠璃にて、關女こなしあつて、德女の手を引き、門口へ思入あつて柴垣の蔭へ忍ぶ。跡に高の谷こなしあつて、

高の　さう手強う出やれば此の上は、こつちも意地、醉ひどれめを引き起してさうぢや。

〽引き起して歸さんと、肩を搖り手足を持ち、引けど正體なかりしが、酒の匂ひに鼻向けのならぬ上猶高いびき、石佛とも死人とも、例へがたなき有樣に、ほつととその身もせいつかし、

扨も〳〵御内儀の思ひ切り、これなら道理、よい〳〵此の上は、家來共に言ひ付け、叩き出すより外はない。ヤア誰かある。此の醉どれを引きずり出せ、早う〳〵。

〽呼ばゝる聲に一間より、（ト上手障子の内より）

和泉　ヤレ待て女房、用事あり。

〽鐵砲引提げ和泉の三郎、一間の内より立出でゝ、

ト和泉の三郎上下衣裳、大小にて、鐵砲を持ち出て、

彼が亂酒を知り乍ら、懇望して賴みしは、深く見込みし所あり、我眼力の違ひしや、實否を糺さん、そこ退け女房。（トきつと思入。）

〽火蓋を切つて狙ひもなく、どうと放す空鐵砲、響に五斗はムックと起き、

ト三郎鐵砲を打つ、本鐵砲の音にて五斗兵衞ムックと起上り、きつと思入あつて、

五斗　ハテ心得ぬ、今打ちし鐵砲は陰に放たれ陽に外れ、筒に音あつて向うに音なし。ム、扨は玉なき空鐵砲、何者の仕業なるぞ。

〽四方をきつと睨め廻し、勢ひ替つて立ちたるは、實に諺に言ひ傳ふ、心がけある侍は、轡の音に眼を覺すと、譬を引くもおろかなり、和泉の三郎ッ

と立ち寄り、

和泉　如何に五斗、今響きたる鐵砲の、五音の調子は如何に〳〵。

五斗　乾坤二つの間を抜け、離の卦に當つて中切れたり、御兄弟の御仲讒者の爲に絶ち斷られ、鎌倉の怒り強く、敵半途まで押し寄せたるぞ、御油斷あるな三郎殿。

和泉　ホヽウ、左程の御邊が何のために、錦戸伊達の計略の大酒に、正氣を亂されしぞ。

五斗　オヽそれこそは、病と知つて盛る酒の呑まずば却つて世を諂ひ祿を貪る族と言はれん。元より名利は望まぬ某、一旦の契約なれば、君の心は薄くとも、貴殿の忠義の厚きに免じ、いかで違背のあるべきぞ。

和泉　ハヽア頼もしゝ〳〵、然らば以前頼みし如く、一方防ぎ給はるべきや。

五斗　仰せにや及ぶべき。（トのりになり、）それがし大手を承はり、采配とつて下知なさば。

ヘ鎌倉勢を眼下に見下し、敵に臥龍の術あらば、われ又孫呉の智略のつくし。

變に應じて備へを立てん。

和泉　ホヽウ、勇ましゝ〳〵、我又羽翼の備へをなし、地理を選んで砦を構へ、寄手包んで攻め立てなば、

〽颪の木の葉か板家のあられ、露もたまらず一時攻め、

五斗　急いで御用意、

和泉　實に尤も。

〽心解け合ふ猛將勇士、一間の内へ驅け入つたり。高の谷は二度びつくり。

ト兩人こなしあつて奥へはひる。高の谷跡を見送り思入あつて

高の　ホンニマア、目利きした夫も、よつぽど高名ぢやわいな。揃ひも揃ひし弓矢取り、テモマアけうとい物ぢやなあ。

〽悦ぷこなたの小蔭には、五斗が妻も興醒め顔、かほど功ある武士と、知らで暮せし悔しやと先非を悔いて去状に、今更何んと言ひ寄らん、詞なければおづ／＼と、娘が手を引き差し足に、歩む疊の目に涙、俄に作る輕薄笑ひ、

闘女　オホヽヽヽ、これはまア／＼私としたことが、七八年も連れ添うて、あの樣に勇ましい男とは夢いさゝかも存じませず、ひよつとした腹立ながら、おまへ樣に迄言ひ過し、行く所もない身の上、常はなんぼう結構でも、退くの去るのと言うた後、直に詫も致し難い、お慮外ながらお詞をお添へなされて、仲直しして下されませうなら、有難う存じまする。

ト よろしくこなし、高の谷思入あつて、

高の　これ女中、女房の方から暇取つて、悪口言うたそなたが又、あの五斗殿が今ぞ誠の武勇を現し、大手の大將を承り、出世の身になつたとて、暇を取つた身が又添ひたいとて詫をしてくれい、こりや尤も、いや、御道理でござりまするわいな。したが最前おまへのおつしやる通り、こちらの夫和泉の三郎は、目の明かぬ男、その又女房に此の詫事をしてくれいかえ。

鬮女　サア、只今となつてあなたに申上げるも、面目がござりませぬ事ながら、最前の樣に申しましたは淺はかな女子の不束、御堪辨遊ばして、そこをよしなにお取りなしを。

高の　わらはに仲を結べと言はしやんすか。こりやさうありさうなもの、さり乍ら高いも賤しいも、女房の方から暇をくれと言ひかけて、あかれぬ夫を無理無體に退狀書かせて、又詫を願うてくれいとは、ようまあ言はれた事ぢやぞいなア。ホンに昔も唐土に、太公望呂尙といふ人、直なる針に餌もなく釣するを見て、妻はあきれて暇を取り、その後文王の招きによつて軍師となり、紂王を亡ぼし周の御代にひるがへし、高祿太夫に立身したと聞いて、とんとおまへの樣にいろ〳〵と、詫びたれど、覆水盆に還らずと譬を引いて、とう〳〵離別したとある。とりも直さず太公望は五斗殿、よもや、ツイおうとも言はれまいかと存じまする。

關女　サア、最前あの樣に申したのは、その只今おつしやりました、太公望とやらいふ人の女房とは大きな相違、さら／＼誠に申したのではござりませぬ。

高の　スリヤ、女房の方から暇をくれと言うたは、嘘僞りぢやと言はしやんすか、テモマア、僞りも事に寄つた物ぢやわいなあ。

關女　サア、その樣におつしやつて下さりまするど、私は[illegible]入りたい。眞實縁を切る心で、書かせて取つた去狀ならず、懲らしめに異見の爲、お詫びをお頼み申上げます。奥樣どうぞこれ、手を合せて拜みますわいな。

ヘ淚をこぼし頼むにぞ、傍に娘は聞くつらさ、怺え兼ねしが最前に、五斗が渡せし暇の印の匕首を、拔くより早く我咽喉へ、

德女　南無阿彌陀佛。（ト以前の懷劍にて自害する。）

ヘと突き立てる、なう悲しやと母親が、あわてふためき取付けば、高の谷も仰天し、

關女　コレ娘、そなたはまあ、何で死ぬるのぢや、死ぬるのぢやぞいなう。

高の　ほんに何故、此の自害、

〽こは何故の自害ぞと、そゞろ驚くそのひまに、こなたをひらき和泉の三郎、

ト徳女自害するを、兩人立ちより介抱する、徳女苦しき思入。

〽纐纈の鎧直垂、あなたの一間に五斗兵衛が、紫裾濃の割小ざね、小手脚當も華かに出でつ二人が形相は、めざましくも又潔し。手負は苦しき息の下、父を見上げ見下ろして、嬉しき内に涙ぐみ、

ト右の文句へ大小をかぶせ、上下の障子屋體より五斗兵衛、和泉三郎の兩人とも、陣立ての形に改め采配を持ち立出る。皆々見て思入。

徳女 えゝ淺ましい母樣、如何にこれ迄世渡りの、賤しき煙に苦しむとて、なぜそれ程に心まで、さもしうはならしやんした。たつた今迄父上を、喰ひどれの醉どれのと、おまへはようも言はしやんした、あづまにござる兄樣のお耳へ入たら嘸御腹立。

〽その上無體に去狀書かし、望んで暇を取りし身が、御出世の姿を見て、又添ひたいとの詫事を、聞き入れなき奥樣たのみ見ぐるしい追從、今ではほんの母樣より他人の父樣がわしやいとしい。

〽詫びする手にてさつぱりと、何故死んでは下さんせぬ。

わしやあんまりの悲しさに。

〽おまへに代つて死にまする、先立つ不孝は許してたべ。

モウシ父様、母様とは緣切れても、わしややつぱりお前の子、娘と言うて下さりませ。

〽思ひ出しては折々の御回向頼みあげまする、こればッかりが此の世の願ひ、

モウ物言はして下さりますな。

〽苦しいわいのとばかりにて、悶え歎くぞ哀れなり、聞くに關女は氣も狂亂、

關女　これ、わしも五斗兵衛が妻、恥を知らいで何とせう。最前自害と思ひしが、後でそなたが流浪が悲しさ、顏押し拭うて叶はぬ詫、いつそその時死んだなら、今此の憂目を見まいもの、思ひ過しが、結句仇となつたわいなう。

〽悔し涙に正體なく、前後もわかず泣き沈む。五斗も目にもつ涙を拂ひ、

五斗　親の未練を面目ないと、思ひつめて健氣な最期、先立つ身ながら不孝ではない大孝行、やつぱり子にして下されいとは、オヽよく言うた。

〽嬉しいぞよ。

未來永劫大事の我子、心の迷ひ打晴れて成佛せよ。

〽跡云ひさして、涙を見せじ知らせじと、怺える胸を三郎夫婦、推量しての貰ひ泣き、袂をしぼるばかりなり。いまはの徳女は目を開き、

徳女 その御言葉を聞く上は、最早此の世に望みはない。父樣さらば母樣さらば、吾妻にござる兄樣にも、御息災でと傳へてたべ。三郎樣御夫婦、もうお暇申しまする。

〽お名殘り惜しやとばかりにて、刀を抜けば魂の緒も、切れて果敢なくなりにけり、はつとばかりに母親は、死骸にひしと抱き付き、聲を限りに泣き盡す、涙を拂ひ押直り、

ト此の内よろしく德女落入る。閼女寄添ひ泣き居る。

閼女 とても娘がさげしみは、百千萬の言譯も、此の世では甲斐もあるまじ。此の身も共に、さうぢや。（ト思入あつて、）

〽刃物追取り、既に自害と見えければ、和泉の三郎聲をかけ、

和泉 これ／＼内室、娘と共に自害とは、恥のみ知つて義理に疎し、まこと貞女の道あらば、吾妻へ取られし兄大三、奪ひ取つて手渡しなさば、これにましたる貞心あるまじ。

〽いかに／＼と制すれば、高の谷も力を附け、

高の　その時はわれ〳〵夫婦、再び結ぶ妹脊の媒人、
　〽はやとく〳〵とすゝめられ、はッと歎きの死を止まり、
闘女　如何樣とも御夫婦のお指圖は背くまじ、たゞ此の上は、何事もよき樣に。
　〽歎きを隱し押しつゝみ、涙拂うて出で行くを、
五斗　ヤレ待て女。
　〽と五斗は呼び留め、
こりや、生死不定の忰大三、切腹するか但し又、頼朝の手にかゝりむなしくならば何とする、性根を定めて赴けよ。
　〽勵ます詞にはせ寄つて、和泉が最前打捨てし、鐵砲小脇にかい挾み、
　　ト有り合ふ鐵砲を取り上げ、
闘女　お尋ねにや及ぶべき、何れの道にも我子の大三、相果てしと聞くならば。
　〽その時こそは、頼朝は我子の敵、妹脊の仇。
　〽たとひ年月經るとても、鎌倉に徘徊し、

鎌倉武士は色好み、つゝと出かけて口藥り、咽喉の火蓋の引金も、工合あはせてうまみを見込み、

〽ぽんと言はする二つ丸、やはか仕損じ、申すべき。

〽氣遣ひあるなと勇み立ち、（トよろしくあつて、五斗思入あつて、）

五斗 出來した、行け。

〽一言が直に門出の餞別や、心はやたけにはやれども、娘の別れに後髮、引きは返さじ弓張の盡きぬ歎きを押し包み、出んとしては振り返り、

ト右の文句の通り、皆々こなしあつて、

鬮女 見るも見するも、なき魂よばひ、

和泉 無常の風のはげしくも、

五斗 吹き散したる會者定離。

高の 愛別離苦を、

四人 今こゝに。

〽残して出る都路や、

ト皆々こなし。高の谷死骸を見せる、鬪女つか〳〵と立ち戻る、五斗兵衞思入あつて、

五斗　はや行け。

鬪女　はア。

〽吾妻の空へ出て行く。

ト段切、双方引張りの見得よろしく、

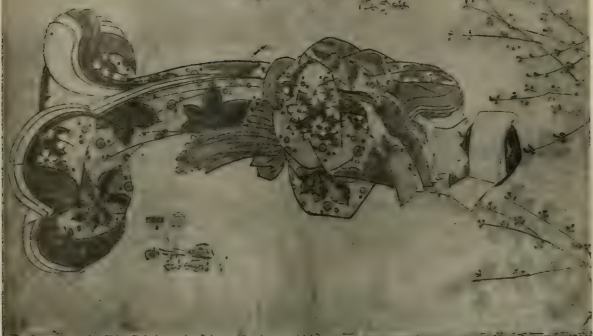
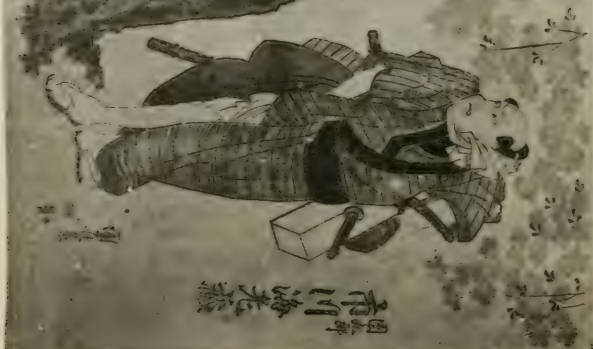
幕

五斗兵衞（終り）

新薄雪物語

しんうすゆきものがたり

新薄雪物語（園部左衛門 薄雪姫 三人笑―五幕）

發端

堀川捷合の場

役名　江間小四郎義時、園部の下部妻平、勝長長壽院、秋月大膳、園部左衛門、秋月大太郎、元谷三郎、津ケ谷四郎、實玉の八郎、萩野七郎、實朝公。幸崎の奥方松ケ枝、園部の奥方梅の方妹初花、北條義時の妹江島。

本舞臺三間の間一面の二重屋臺、上手金襖、下手網代塀、總て堀河旅館の體、爰に幸崎の奥方松ケ枝松に鎌鶴の嶋臺を持ちて立身、後ろに麻上下綺麗なる侍、三方に寶の箱を乘せ持ち控へ居る。此方に園部の奥方梅の方妹初花、菊に楓の付きし嶋臺を持ち立身、その後ろに寶の箱を乘せし、三方を持ちたる侍控へ、北條義時の姉江島控へ居る　此仕組下りはにて幕明く。と直ぐ管絃になり、

松ケ　此度賴朝公源二位に御昇を遊ばされ、其の御禮として御名代實朝公御上京の上、此程より則ち是なる堀川の、義時樣の御旅館に御逗留。

初花　今日しも平野へ御狩の御遊び、御歸館の後御機嫌を伺はん爲め、持參の嶋臺。

二人　お取次ぎ下されませう。

江島　これはまア、幸崎伊賀守様の奥方松ケ枝様、後室梅の方様のお妹初花様、ようこそお出で、兄義時事は若君様お迎ひとして他行故、數ならぬ此の江島、御挨拶を申上ぐるもおはもじ乍ら、まづ〱是へ。

松ケ　左様ならば初花様。

初花　まづあなたから。

兩人　お許しなされて下さりませう。（ト會釋して上手へ通る。）

江島　さうして、見ますれば、若君様へ見事な嶋臺、進ぜられ物、上覽に供へましたなら、嘸お悦びでござりませう。

松ケ　アノまア、仰しやる事わいな。ほんの盡きせぬ君ケ代を、

初花　千代萬代と壽し、心ばかりの獻上もの。

兩人　お笑ひなされて下さりまするな。（ト此時揚幕にて）

呼ビ　秋月大膳出仕。

ト太鼓、唄になり、花道より秋月大膳、後より秋月大太郎附添ひ來り、直ぐ舞臺へ來る、此内松ケ枝

初花二人の侍に思入する、侍は實の三方を渡し、下手へはひる。

大膳　見れば、園部幸崎兩家の婦人、

大太　お早いお出でござつたな。

松ケ　これは秋月大膳樣、大太郎樣。

兩人　まづ〳〵是へ。

大膳　御免下されい。（ト右の鳴物にて、兩人二重の上へ通る、女形三人は下手へ控へる。）早速申さうは、園部の左衞門殿には、先達て鎌倉殿より、長蘭の御劍の片代、影の太刀を新たに打て實輔卿御上京の砌り上覽に入れ、源家の長久祈りの爲め、淸水の觀音へ奉納致せよとの役目を蒙むられ、嘸後室方にも、お心遣ひでござらうな。

初花　大切な役目仰せ付けられしは、家の冥加と後室、首尾よく役目相濟むやうにと此頃の物忌み、それ故此初花を今日の名代、さりながら其影の太刀も打上り、卽ち今日園部の左衞門持參致しまするやうにござりまする。

大太　シテ又、兼ねて賴朝公より兩家へ預くる松蔭の硯に小枝の名笛、賴朝公上覽の上又改めて預けさせらるゝ由、お二人ともに其の品は、定めて持參でござらうがな。

松ケ　左様にございまする。お預かりの大切なる松蔭の硯、夫幸崎伊賀守持参の筈、折悪しく病中により、名代として手前が持参いたしてございまする。

初花　園部の家に預かりの、小枝の名笛、これもつて右の譯故、私が名代として則ち是へ持參いたしてございます。

大膳　スリヤ二品とも、アノそれへ、イヤナニ御兩所、是まで噂は聞き居れど、いまだ拜見いたさぬ重器、何と只今我々へ、見せさしやれては下さるまいか。（ト兩人思入。）

松ケ　秋月樣の仰せなれど、

初花　上覽に供へぬ先に、

兩人　どうも此儀は。

大膳　相成りませぬか。

兩人　まあ、左樣なものでございまする。

大太　コレ〳〵お二人、兄秋月大膳儀は鎌倉の聞えよろしく、禁庭守護を申し付けられ在京の諸大名は、お髭の塵を拾ひまするわ。望まつしやるこそ仕合せと、直ぐに見せべき筈の所、否み召るは近頃以て。

松ケ　假令慮外と仰しやつても、上覽なき內お目に掛けては、若君樣をないがしろに致せしやうにて何とやら。

大膳　スリヤ、どうあつても見せられぬとな。

初花　後刻御前で、共々に。

大太　イヤ、武士が一旦申出し詞が立たねば他聞のあざけり、是非とも此處で二品を。

ト兩人を引退け、寶の箱へかゝる。

松ケ　イヤ、めつたにさらは。（ト見せまいと立廻り、江島中へ入り双方をさゝへる、此時揚幕にて）

呼ビ　實朝公御歸館。

江島　モシ、若君樣の、早や御歸館。（ト大膳大太郎向うを見て、）

大膳　ハヽ、いらざる意地立、無益の至り。

大太　それぢやア兄貴。

大膳　ハテ、何事も、

江島　水に流して、

松ケ　言はず此の場は、

初花　是れぎりに、

五人　若君樣のお出迎ひ。

呼ビ　御歸館。

ト大太郎ムヽと思入、大膳コリヤと押へる。三絃入りの亂れになり、舞臺によろしく納まる。花道より實朝公、弓矢を持ち、後より元谷三郎、津ケ谷四郎、實玉八郎出て來る。後より江間小四郎、關部左衛門、關部の下部妻平附添ひ出て、

大膳　千幡君實朝卿には、今日な御狩の御遊。

大太　殊に快晴、獲物も嘸かしとおしはかられ。

松ケ　御機嫌よろしき御氣色を拜し、

初花　此上もなき悦びと、

江島　數なりませぬ私共まで、

五人　恐悅至極に存じ奉りまする。

實朝　鷹野は昔し泉州百舌野の狩に始まり、それより諸鳥を取らしめ、全く心を悦ばす私の興にあらず。

三郎　一ッは民の辛苦を哀れみ、田畑に生ふる穀物の。
四郎　ついばみ喰ふ愁ひを救ふ、その仁徳を思召し。
八郎　都に暫し御座の内、今日平野へ御狩の催し。
七郎　御遊終つてお歸りの、路の案内は館の御亭主。
小四　忝くも義時が旅館に此の程御逗留、今日の御狩に御機嫌も如何と、路次までお迎ひに發向致せし江間の小四郎。
左衛　折よく園部の左衛門も、御諚下りし役目に付き、參りかゝりし途中のお供。
妻平　虫同然な下郎にも、又とあるまい身の仕合せ、誠に恐れ入豆に花の咲いたるお目通り、有難う存じ奉りまする。
舞臺五人　實朝卿には、イザまづ是へ。
實朝　皆々來れ。
皆々　ハア。

ト右鳴物になり、皆々舞臺へ來る。實朝二重へ上る、左右へ小四郎、大膳その外よろしく、妻平下手へ控へる。江島二ッの鵜臺を實朝の前へ直し控へる。

江島　ハツ、此の島臺は幸崎園部の御兩家より、若君樣への獻上物、恐れながらお詞を。
實朝　父にて候右幕下頼朝、源二位に昇進ありしお禮の爲め、次男ながらも此の實朝、上京なして義時が旅館に暫し止まる間、在京の諸士が日毎の饗應、おろそかならぬその内に、幸崎園部が送りもの、實朝ほとんと悦ばしいわえ。
三郎　いかさま、此の程より種々さまぐ。
四郎　珍らしいもの見飽き喰ひ飽き。
八郎　此上たぼの獻上物があつて、
七郎　我々もお相伴致したら、
四人　福徳の三年目でござらうて。
小四　此の嶋臺は我が先祖が壽七百餘歳を君に捧ぐる、何よりの作りもの、又千歳の松に雛鶴は御子孫長く、榮華を祝す兩家よりの獻上もの。
松ケ　お笑ひ草とおつしやらず、拙なき品にござりますれど、
初花　御前よろしく義時樣、
兩人　御披露願ひ上げまする。

大膳　いかさま、どちらに優り劣りはないけれども、幸崎の奥方献上の松に雛鶴、どこやら優しい物好きと、此大膳は思はるゝ。ナア、弟。

大太　成程兄者人の云はるゝ通り、松に巣をくふ雛鶴は、定めし御息女薄雪姫の思ひ付きと見えまする。器量がよければ物好きまでがやさしがたでござる。然しながら松ヶ枝殿はあんなよい娘を持たしやれても、此の嶋臺と同じ事で褒め手がなけりやア詮がござらぬ。なんと、此の大太郎が水入らずで、仲人致さう、我等が兄の大膳殿へ女房に遣はされよ、知行と申し威勢といひ、縁組みしても不足はあるまい。サヽ、御返事なされ。ヲヽ、幸ひの嶋臺で、聟姑のかため杯、サどうでござる〳〵。

トせり立てる、松ヶ枝迷惑なる思入。左衛門妻平思入。

妻平　ハヽヽヽ、こいつはをかしい、アノ美しい薄雪様を苦虫をつぶしたやうな、澁い顔の大膳様へ嫁入りなどゝは、殊にお年もあんまり違ひ、分別ざかりに嫁ざかり、どうして是れが、ハヽハヽヽヽ。

左衛　コリヤ〳〵何を申す、控へをらぬか。

妻平　それでも、アレ〳〵お臍が煎茶を、ムヽヽ、ハヽヽヽ。

大太　ヤイ〳〵下司奴め、おのれお半長右衛門を存ぜぬか、遠くは蜀の劉備玄徳、五十に足をふん込んで、呉の孫權が妹の十七になる女と祝言、スリヤいくらもためしのある事、それに何ぞや高笑ひ、今一度笑つて見ろ、某が手は見せぬぞ。

松ケ　ア丶イヤ大太郎樣、成程思召しに任せまして、誰あらう大膳樣へ不束な娘薄雪、御媒介下されまするは、此方から願うてなりと、緣談の取結び致し度いものなれど、夫伊賀守へも申し聞かせ、其上にての御挨拶。

大太　イヤ〳〵、そりや罷なりませぬ。今日は幸崎殿の名代の其許なれば、取りも直さず伊賀守、ナリヤ此所で畏つたと、取極めの杯おしやれ。

三郎　我々もよい折から、

四郎　此所に居るこそ幸ひ、

八郎　後日の證據に、

七郎　君の御前で、

四人　口入れ仕らう。

大太　但し幸崎伊賀守殿の、名代にはござらぬか。

松ケ　サア、それは。

大太　名代なれば善は急げ、サヽ、幸ひの嶋臺。（ト手をかけるを小四郎のける。）こりや義時殿、何故に。

小四　お取結びの邪魔は致さぬ、大太郎殿、此の嶋臺はいづれから、いづれへの品でござる。

大太　ハテ知れた事、實朝卿へ。

小四　その獻上の嶋臺を、私に用ひても、秋月殿にはお構ひないか。

大太　サア、そりや。

小四　貴殿の粗忽は、大膳殿の越度となつて、兄弟共にいやでもお腹。

大太　ヱ。

小四　それでも此の品、用ひらるゝか。

大太　サア、それは。

小四　サア〳〵〳〵、何とでござる。（ト大膳きつと思入あつて、）

大膳　弟扣へい。ハヽヽヽヽ、義時殿御免なされい、君の御前も辨へず、まだあまつさへ若年者が、君への慮外は幾重にも御取りなし下されい。松ケ枝にもその通り、心に染まぬ某へ、薄

松ケ　雪姫を弟が押附け業の仲人口、お氣に障らば許しめされい。
大膳　イヤモ、左樣におつしやりましては。
松ケ　イヤ〳〵、大太郎が不調法、拙者お詫び仕る。（ト手を突く。）
大膳　それでは却つて。
賓朝　イヤモ、ずんとあやまり申した。たわけ面め。（ト大太郎を叱りながら、あたりへ思入。）
左衛　シテ、左衛門へ先達て父上より、仰せ越されし長蘭の影の太刀、鍛治を選み打上げさせしや。
賓朝　ハツ、御諚に依て所々方々、其儀に秀でしもの吟味仕る所に同國粟田口に住居致す來國行、當時是に優りし者是れなきの由承り、則ち彼れに申し付け、清淨の地鐵を選み今日打上させ、持參仕つてござりまする。イザ、御覽下さりませう。

ト刀の箱をうや〳〵しく實朝が目通りへ置く。

賓朝　いかにも、その來國行と申す鍛治、名譽の聞え鎌倉まで隱れなければ、定めて父にも滿足に思召されん。またかねてより、幸崎園部兩家へ預けおかるゝ所の、二品の寶、此儀も持參致せしや。
松ケ　成程、御檢分の上改めてお預けあらんとある。

初花　其の品これへ。

兩人　持參いたしてござりまする。

實朝　用意とあらば、とく〳〵是れへ。

兩人　畏まつてござりまする。（ト管絃になり、松ケ枝初花寳の箱を、實朝が目通りへ置く。）

松ケ　則ち奥州和泉ケ城の戰功を愛でさせたまひ、賴朝卿より幸崎の家にお預けなされし、御曹子義經公朝暮御秘藏ありし所の、小枝と名付し名笛。

初花　又唐の玄宗皇帝より、平家へ送りし松蔭の硯、重衡東へ捕はれの折から法然上人へ布施としてまゐらせ、今は源家に重器の一つ、勳功あるにより、園部の家に預けたまはる大切の品。

兩人　とくとお改め下されませう。（ト小四郎箱の内より、錦の帛紗に包みし二品の寳を出し。）

小四　イザ、御檢分遊ばされませう。（ト實朝取って押しいたゞき。）

實朝　聞傳へたる松蔭の硯、小枝の名笛。

大膳　よき折柄、我々も拜見致し祝着の至り、

大太　斯やうな重器を、預かりめさる園部幸崎、

皆々　お羨ましい儀でござるな。（ト此内實朝寳に添へし書物を出し見て）

實朝　父君の御誓ある上は、相違なき二つの寶、此まゝ兩家へ預くる間、心を附けて守護致せ。

兩人　有難う存じ奉ります。

小四　妹、二品を御兩所へ。

江島　畏まりました。（ト二ツの寶を松ケ枝初花へ渡す。）

實朝　此異聞の影の太刀は、勅ならねども、神佛の擁護に預くる例にならひ、奥にて園部左衛門に小鍛治能を勤させ、共備り檢分せん、左衛門用意致してよからう。

左衛　コハ、存じも寄らぬ君の御諚、何とて左衛門御前において。此儀ひとへに御宥免。

小四　アイヤ／＼左衛門殿、貴殿の樂舞堪能を聞し召れて君の御所望、御辭退[illegible]るゝは却て失禮。

左衛　左樣ではござれども、不束未熟の某が、如何致して此の役目。

初花　イヤナウ左衛門樣、御辭退なさるゝも事による、影の御太刀に吉事を祝して、奏づる小鍛治の能、勤むるは家の冥加。

江島　貴方の面目、何の御遠慮、假令どのやうな思召しでも、御存じなければ叶はぬ役目。

松ケ　ちつとも早うお受けなさるがよさゝうなものゝやうに存じられまする、なア、お二人樣。

左衛　ぢやと申してあまり憚り、

大膳　コレサ〳〵左衛門殿、其のやうに御辭退なされな。常々お心がけがあればこそ、百里へだてた鎌倉迄噂があるか、若君の御所望、お聞きなされい、我々も舞の一ト手も存じてをらうなら、願つてワキでも勤めませうに、武術ばかりを心掛け斯やうな時に後悔致す。

大太　左樣〳〵武術の家に生れては、遊藝はいらぬと親父が差止めました故、兄弟ながら能なぞも心がけがござらいで今日の殘念、侍の劍術柔術は、今時とんとはやらぬと見えますな。ムヽハヽハヽヽ。

妻平　アヽイヤ、憚りながら大太郎樣、御前と存じ何事も差扣へて居りまするが、あなたのやうに御意なさるゝと、手前の主人は遊藝ばかり心掛け、武士の道は知るまいと仰しやるやうなセリフ廻し、ちつと耳に障りまする。御若年とはいひ乍ら、チトおたしなみなされませ。

大太　こいつが〳〵慮外な奴め、わいらが存じた事でない、扣へてをらうぞ。

妻平　イヤ扣へますまい、なぜと仰しやれ、若旦那に侍の心掛けがあるかないかは、まア、試みに此奴めが、ちよつとお目に掛けますべいか。

大太　ナニ、あのわれが見事見せるか。

妻平　お望みならば。

左衛　コリヤ〳〵、妻平扣へぬか。

妻平　デモ餘りと申せば。

左衛　ハテ、何事も御前ぢやが、イヤナニ、大太郎殿、左衛門少々舞の一ト手稽古致してござれども、兵道は武士の嗜み、まんざら忘れも仕らぬ。

大太　イヤそりやお云ひあるな、其許の樣に猿樂師も及ぬ程に舞はうと思へば、是非武辨は捨てにやならぬ。さう兩道は參らぬものでござるて。

妻平　其の參らぬ御主人に、稽古を受けた奴めから、まア手の內を。

大太　何を小しやくな。（ト双方刀の柄に手を掛ける。女形心遣ひのこなし。）

小四　君の御前で尾籠の振舞、双方共に扣へませい。（ト是にて納まる。）

實朝　互ひの議論一理なきにもあらじ、既に平家に勇者と聞えし盛久も樂舞堪能、世こぞつてコリヤ人の知る所、左すればあながち彼を捨て、是を取るとも云はれはせじ。

小四　只何事も君の御諚、善惡共に其主の詞にそむかず仕ゆる、コレ臣たる者の道、左衛門殿にも心にさへず、能の役目を急いで用意。

左衛　然らば御意に隨ひまして、委細畏まりましてござりまする。

小四　若君樣には、イザまづ奥へ。

初花　隨分心をお遣ひなされてナ、御合點でござりまするか。

松ケ　左やうならば初花樣にも、イザ御一緒に。

江島　御案內致しませう。

四人　我々も、見物致さう。

小四　秋月殿御兄弟、

大膳 大太　義時殿にも、

實朝　方々來たれ。

皆々　まづお入りあられませう。（ト管絃になり、實朝先に松ケ枝初花賓の箱を持ち、皆々附いて奥へはひる。）

妻平　成程瓜のつるに茄子はならぬと、あの秋月大膳兄弟、藝なし猿のくせとして、人をさげすむ今の詞、そしてまア俺が旦那へ日頃から、お心のある薄雪樣を、大膳の女房イヤ嫁入りのと無理こぢつけ、番狂はせのない內、あのまがきと相談して、左衞門樣とお姬樣首尾してどうぞ。ハテ、よい思案がありさうな物だ。（ト考へる思入、花道よりせうぶ革の足輕走り出て、）

足輕　それにござるは、園部樣の御家來ではござらぬか、鎌倉より勝長長壽院樣が園部樣の御家來へ、

お預かりの寶の儀に付き御內談致し度くとの事、此通りお取次下されい。

ト引返してはひる、妻平思入。

妻平　お預かりの寶の事で、鎌倉より勝長長壽院が初花樣へ御面談とは、此奴はどうも合點が行かぬわえ。何は兎もあれ、初花樣へさうだ〳〵。

ト笛のひしぎになる、妻平下手へはひる。右能の次第になり、花道より勝長長壽院緋の衣にて輪袈裟を掛け、中啓と珠數を持ち、若黨麻上下にて附添ひ、中間附き出て來る。

長壽　鎌倉殿の御意を蒙むり、勝長長壽院罷り越す、園部殿の名代は、どれにおわするぞ、面談致し度い。

ト此時奥にて、

ト序の舞になり、奥より出て、

初花　園部の後室梅の方が名代、それへ參つてお目に掛るでござりませう。はツ、只今樣子承れば、鎌倉御所の仰せに依り、勝長長壽院樣にははる〴〵と、御上京なされし由、まづ〳〵是へ。

長壽　然らば御免。（ト重々しく上の方へ通る。）

初花　シテ私へ、御用の筋はな。

長壽　別儀でござらぬ、今般頼朝公四海一統しろし召れ、武將の御身とはいひながら、任せぬものは人の命、御臺政子の方、此程九死一生の御難病、醫療百謀盡すと雖も其しるしなきに依り拙僧へ嚴命下る、御壽命長久なさしめん祕符を求め給ふといへども、是れ容易の事にあらず、松は千歳の齢あれば源家への重器松蔭の硯を以て、祕符を認め差上るものならば、忽ち御病氣平愈と申上し所、其寶の儀はかねて園部に預けあれば、急ぎ上京の上硯を受取り、祕符を認め差上げよと、仰せに依つて夜を日につぎ、只今到着致してござる、仔細と申すは斯くの通り。

初花　それは何より捨置き難き、御臺所の御病氣。成程預かりをる松蔭の硯は、あなた樣へお渡し申すでござりませう。

長壽　そんなら、あの、松蔭の硯を。早速の承知、過分に存ずる。

初花　シテまア勝長長壽院樣には、今日是へ拙者めが持參せし事、御存じでお入りありしか。

長壽　サ、そりや、アノ、何でござる、そこが彼の大徳行法勝れし拙僧、折角御館へ參上しても、寶が内に無い時は、コレ無駄足と祕文を唱へ、其許是に居らるゝ事を、よう見極めて參つてござる。

初花　いかさま、左樣でござりまするか。

長壽　サア、急いてお渡し下されい。

初花　ハテ忙しない、まア御ゆるりと。

長壽　イヤ〱、早く受取、旅宿でゆるりと休息が致し度い。

初花　左様ならば、兎も角も、イヤ何妻平、大切な品急いで是へ。

妻平　畏まつてござりまする。

ト又序の舞になり、下手より妻平以前の寶の箱を持ち出て、初花の前へ置き下手へ控へる。

お預かりの松蔭の硯、持参致してござりまする。

初花　ハツ、是ぞ源家に傳はる所の大切の重器、イザお受取り下さりませ。

長壽　スリヤ、アノ、是が松蔭の硯となア、慥に愚僧が受取つた。わざ〱上京致したも、是れ故の用事なれば、最早歸宅致すでござらう。兵衛殿にもよろしうお傳へ下されい。

ト此箱を持ち、歸らうとする、初花妻平顏を見合せ思入あつて。

初花　アイヤ、暫くお待ち下されい。

長壽　遠路でござれば、心がせきます。

初花　サ、如何にお心急きぢやとて、大切な其品を、改めもせず其儘にて、もしも寶がそでない時

は、お互ひの難儀、一度中を改めてお歸りなされい。

長壽　成程是は愚僧があやまりでござる。折角受取る松陰の硯、芝居などでは、よく僞物が有り度がるもの、ドレ／＼（ト小戻りして箱のふたを取り、改め見て何も無き故びつくりして）ヤア、コリヤ此内には何も無いわ。

妻平　めつたに渡してたまるものか。

長壽　そりや又何故。

妻平　かたりの曲者、そこ動くな。

長壽　何が愚僧をかたりとは。

初花　斯樣な事を頼朝公仰せ付けらるゝ程ならば、未だ當所に御座なさるゝ實朝卿へ御沙汰もある筈、最前改めお預けありしを。

妻平　殊に壽命を延ばせばとて、松は千歳の齡故、松陰の硯にて秘符を認め上げるなぞとは、こじ附けた餘りをかしさ、一杯喰はせた手箱の内も改めず、取ると其儘逃足ひろぐは、かたりの證據。

長壽　サ、それは。

妻平　但し誠の上意なら。

初花　是れといふ、きつとした。

兩人　證據があるか。

長壽　サアそれは。

兩人　サア〳〵〳〵

長壽　コリヤ、斯うしては。（ト逃出すを引戻し、よろしき立廻りにて取つて押へ）

妻平　動きをるな。（ト早繩を掛ける。是にて供は驚き、下手へはひる、立廻りの内衣脱げてしたそぼろとなる）

初花　サア、何者に頼まれて、大切の硯騙りにうせた。

妻平　サア、きり〳〵と白狀ひろげ。

長壽　エ、いま〳〵しい、所詮斯うなつちやア仕方がねえ、その頼み人を言つてしまふと言つた所が、矢つ張り、俺だ、どうやら金になりさうな代物故に騙りに來たが、誰にも頼まれた覺えはない。サア、白狀は此通り、サ、うろんに思はゞ責めるとも、拷問するとも勝手次第。

妻平　エヽ、イケしぶとい泥棒め、云はにやア奴が斯うしてなりと。

ト繩目へこぢりを入れる、此時後ろへ大勝出る。

初花　妻平、待うや。
妻平　何故お留めなされまする。
初花　實朝公の御座近く、殊になか〱一應や再應で白狀はせまじき奴、屋敷へ召連れその上にて。
妻平　如何さま。サ、きり〱立たう。（ト引立てんとする。）
大膳　イヤ、其料人、まア待つた。
初花　ヤ、貴方は秋月大膳樣。
妻平　何故あつて、此の料人。
大膳　委細は後ろで承つたが女儀ながらも後室の妹御程ござつて、あつぱれお目高。然し園部の後室には、影の太刀の事にてまだ物忌の其内に、彼奴が糾明召るゝも如何と存じ、此の大膳が預かつて、白狀致させ進上致さう。
妻平　スリヤ、貴方が此の者を。
大膳　きつと白狀致させ見せう。
妻平　イヤさうはなるまい、大切な松蔭の硯騙りにうせた横道者、火水の責で頼み人を白狀させたらどのやうな、お身に祟りが行かうも知れぬ。此盗人は大膳樣へ、めつたにお預け申されませ

ぬ。

大膳　そんなら身共が、其の科人、白狀させ兼ねうかと思うて、それ故か。

妻平　さうではござらねど。

大膳　然らば彼奴めは大膳が、きつと預かり糾明遂げるわ。

妻平　其の頼み人も明らかに。（トいふを初花妻平をへだてゝ）

初花　それ程迄に仰しやる事、否と申すも何とやら、如何にも繩はお預け申さう。（ト妻平思入。）

妻平　スリヤ、大膳樣へ此の曲者を。（ト行かうとするを初花止めて）

初花　コレ。

妻平　エヽ口惜しい、盜人を大膳樣が。サア、熨斗を附けてしつかりとお渡し申す。

初花　左樣ならば、秋月樣には。

大膳　後刻面談。

妻平　みす〳〵それと。

初花　コリヤ。妻平來れ。

妻平　ネイ。

ト管絃になり、初花大膳へ心を殘し、妻平思入あつて奥へはひる、大膳後を見送り、長壽院が繩目を解き、あたりへこなし、

長壽　大膳樣。

大膳　コリヤ。（ト管絃になり、あたりへこなし、）兼ねて頼みし、松蔭の硯、

長壽　まんまと旨くしくじりました。

大膳　此處へ初花めが、持つてうせたを幸ひに、騙り取らせる手段も、空しく見出されたら是非がない。とても幸崎園部の兩家滅亡させるには二つの寶をこつちへ巻上げ、それを科に、小枝の笛は天野一角、折を見合せ盗み取る筈。

長壽　此上は松蔭の硯、首尾を見合せいつその事、寶藏へ忍び込み、人知れず奪ひ取り。

大膳　時節來るまで汝が方に。

長壽　そんなら此の儘、大膳さま。

大膳　人の見ぬ間に此處を、

長壽　ふけつて樣子を。

大膳　久藏、ぬかるな。

長壽　合點だ。

ト舞になり、長壽院尻引からげ花道へ走りはひる。前より江島後ろに窺ひ居て、此時出て、

江島　折を見合せ雨家の寶、奪ひ取らうと恐ろしい秋月樣の企みの樣子、兄上へお知らせ申して。

ト奥へ行かうとする。

大膳　スリヤ、最前からの樣子を殘らず。

江島　後ろで聞き取る此の江島、ちつとも早う。

大膳　それ知られたら、（ト出しぬけに切り掛る、江島は有合ふ鵜臺にて受留め。）

江島　めつたにさうは。

大膳　こやしくな女め。

ト又切りかける。合方になり立廻りよろしくあつて、トヾ江島を切倒して止めをさし、下手にて人音する、大膳死骸を手早く柴垣の後ろへ隱し思入、此時下手より大太郎出て來り、大膳に行き當り、

大太　兄者人ぢやござらぬか。

大膳　大太郎何事ぢや。

大太　モシ。（ト囁く、大膳呑込む、此時奥より、）

呼び　若君の御歸館。

トゝ兩人思入、下りはになり、奥より以前の實朝先に、小四郎。三郎、七郎、松ケ枝、初花、妻平出て、それ〳〵に彳む。小四郎刀の箱をたづさへ、左衞門も控へる。

實朝　聞きしにまさる園部が堪能、小鍛冶を奏し其内に影の御太刀を見し所に、鍛へ鐵色燒刄まで、あつぱれの名作、奥にて申渡せし通り、急ぎ明日清水の觀音へ奉納なし、源家の武運を祈念致してよからう。

左衞　有難うぞんじ奉る。

小四　すべて貴人へ新刀を捧ぐる折は、上覽に備へし後、やすりを入れ銘を切ると故實に習ひし來國行、明日召連れ萬事首尾よく、役目の越度是れなきやう、又目附役には天野一角、仰せを蒙むる事なれば、隨分共に心を附け、ナ、御合點か。

左衞　委細承知仕つてござりまする。

大太　然しながら實朝卿へ大太郎めが一ツのお願ひ、

實朝　ナニ、願ひとは。

大太　ハツ、此度園部左衞門へ仰せ付けられたる影の御太刀、今日上覽濟みし上、明日清水の觀音

奉納の役目又ぞろ仰せ付けられてござれども、先刻より申せし通り遊藝ばかりに心をゆだねし左衞門殿、いまだ源家へ恨みをふくむ、木曾平家の殘黨其折を窺ふ時節なれば、武運祈りの奉納の場所、どんな狼藉なさんも知れず。其時武術の覺えなければ勤まらぬ大事の役目、拙者に仰せ附けられて下されうなれば、如何程か有難う存じ奉りまする。

小四　コレサ〲大太郎殿、最前と申し今といひ、貴殿のやうに申さるゝと闇部氏を嫉みそねむ、サ、めさるゝ心はござるまいが、どうやら左樣相聞え、人の思わく何とやら。

大太　イヤ全く以て左樣な儀ではござらぬが、大切の役目にもしもの事がござつては源家の不吉、そこを存じて拙者めが。

大膳　そりやハヤ大太郎の申す所一理あり、何卒此儀は弟が願ひを。

左衞　アイヤ〲大膳樣、スリヤ其許樣御兄弟には、武術未熟と左衞門を思召されて此役目、覺束ないと仰せらるゝか。

大膳　表立つた武士の役目は、

大太　お能の役目は見事に勤められやうが、武士の役目は何として〲。」

三郎　如何樣、コリヤ秋月樣の仰せの通り、

四郎　モシ役目、仕損ずれば、
七郎　いやでも腹を切らずばなるまい。
八郎　それよりいつそ、大太郎殿を。
四人　頼まつしやるが、身の爲でござらう。
妻平　イヤ何れも樣、チト控へなされ。いかに大太郎樣、お旦那が音なしく聞流してござればとて、一度ならず二度三度、人もなげなる惡口雜言、筆章遊藝は御用の業くれ、武士たる者が武藝を忘れてよいものでござりまするか、チトおたしなみなされませ。
大太　此奴が〳〵、下司奴の分として、小しやくな一言、過言ぬかすと眞二つだぞ。
妻平　ウハヽヽヽ、其舌の根は仰しやらずと知れてある二合半、然し貴方の手の内ぢやア、ちつと手強い此奴、サア、から申すがお氣に障らば、槍でも棒でも竹刀でも、お望み次第にお相人になり兼ねは致しますまい。
左衞　ヤイ〳〵、主をさしおき入らぬ腕立て、御大身の貴方へ對し、無禮な奴め。
初花　そちが身體に慮外があれば、主の難儀といふ所へ心が附かぬか。
妻平　それでも餘り、

左衛　控へて居らうぞ。

妻平　成程拙者が不調法、誤り入つてござりまする。

左衛　大太郎殿、下郎が無禮、お氣に障らばお赦しの程、幾重にも、左衛門お詫び申す。

初花　モシ松ケ枝樣、あなたもよくお詞を、お添へなされて。

松ケ　ほんに後先、心の付かぬは下々の常と、大太郎樣御料簡なされて遣はされませ。

大太　いやでござる、武士たる者へ今の雜言、殊に君の御前といひ、料簡は罷りならぬと餘人では申さうが、松ケ枝殿の挨拶、成程許してやらうが其代りには最前申した薄雪殿の御緣組は、御承知でござらうな。

松ケ　サア、其儀は夫へも一應申し聞せた、その上にての御挨拶、

大太　そんなら此場で、奴が慮外を。

松ケ　サ、そこを私が御挨拶、

大太　然らば娘と、緣組みさせるか。

松ケ　サア、それは。

大太　奴の息の根打つ止めてくれるぞ。

松ケ　サア、それは。

兩人　サア／＼／＼。（ト此時左衞門つか／＼と妻平を引付けて）

左衞　慮外者めが、いらざるそちが差出口より、詞を添へられし幸崎の奥方迄が此場で心に染まぬ。イヤサ、心を盡してお詫有つたも、御得心なき大太郎殿、如何致してよからうやら、憎い下郎め、そこ立つてうせをらう。（トきつといふ、妻平思入。）

小四　アイヤ／＼左衞門殿、あまり左樣にお叱りなされな。最前より承はるに、あの下郎が詞では、滿更無手とも存ぜられぬ。何事もお慰み、君の御前で大太郎殿と竹刀打の勝負をせられい。

大太　ナニ、アノ奴と竹刀打。（ト思入。）

小四　如何にも左樣、貴殿のお詞も相立ちますやう、義時がはからひ。

大太　イヤ、そりや相成りますまい、高が歩中間、大太郎が相手に致す者ではござらぬ。此儀は御無用になされい。

小四　左樣でござらぬ、武藝は一途に御手練の御許樣御兄弟、お太刀筋の程若君へ御目に掛けるも身の面目、左衞門殿にも下郎へ左樣仰せ付けられい。

左衞
初花　スリヤ、あの御前におきまして、

松ケ　竹刀打の勝負となゝ

妻平　コリヤ有難い、大太郎様との竹刀のお相手、お太刀筋を奴が脊中へ、よく受け覺えて、後學に仕るでござりませう。

大膳　默れ下郎め、假令義時殿が如何やう申さるゝとも、身の程を顧みて辭退致す筈の所。

大太　有難いとは意外な奴、下司下郎は身の相手に致さぬわ。

小四　そりや又如何のお心でござる。戰場にて雜兵たりとも切つて掛るを、下司下郎は相手にせぬと、御兄弟は後ろを見せて逃召さるか。

大膳　サ、そりや。（ト兩人思入。）

小四　治平に居て亂を忘れず、貴賤を選ばず立合ひめされい。

大膳　然らば弟、用意致せ。（ト大太郎不承〳〵に。）

大太　心得てござる。

左衞　妻平、そちも用意致せ。

妻平　畏まつてござりまする。

小四　誰かある、竹刀を持て。（ト下手にて。）

侍　はア……（ト白囃子になり、下手より侍竹刀を二本持つて出る、松ケ枝初花受取り眞中へ直す。）

大太　サア奴め、支度がよくば爰へ來い。

妻平　いづれも樣、眞平御免下さりませう。（ト支度をし、皆々に辭儀をなし、眞中へ出る。）

大太　コレ、今此の竹刀がわれが身體へ、一寸でも當ると忽ちに、うぬが五體はくだけるぞよ。

妻平　そりやもう、奴が覺悟の前、貴方の竹刀で打殺されゝば、此身の本望。

大太　その息の根を。（ト打て掛るを受留め）

妻平　どつこい、さう旨くは參りますまい。

ト是より三味線入り白囃子になり、兩人面白き立廻りいろ〳〵ある内に、大太郎度々あやふき事あり大膳あせる思入、トヾ大太郎竹刀を打落され、散々に打据えられる。皆々思入、左衛門はツカ〳〵と妻平をへだてる。大膳ウムと思入。小四郎留めて、

小四　コリヤ大膳殿、いかゞめさるゝ。

大膳　イヤサ、今の勝は勝でござらぬ。

妻平　何と。

大膳　すべて貴人の御前にて、兵術を試すには、まづ太刀先を貴方の方へ向けぬやうに立廻るが第一の心得、大太郎には兼ねて此儀覺悟致して罷りあれば、あしらひ居るをよい事と、故實も知ら

ぬめつた打ち、勝だと思ふはかたはら痛い。

小四　イヤ、彼が故實を存ぜぬとは申されぬ。則ち竹刀の柄革一寸ばかり手の内にてくつろげ、そらざやの心にて、貴人を恐れぬ武術の習ひ、それでも下郎がめつた打でござるかな。

大膳　イヤサ、その儀は。

小四　勝負は時によるとやら、餘り心を勞されまするな。

左衞　大太郎殿にも、必らずとも、心におさへ下さるな。

大太　何の、是が弘法にも筆のあやまりでござらうて。

四人　左樣々々、負けるは勝とたとへの通り、

實朝　然らば左衞門影の御太刀は、明日奉納致してよからう。

左衞　畏り奉つてござりまする。

實朝　園部幸崎兩家へ預けし、二つの寶大切に。

松ケ　心を附けて寶藏へ。

初花　秘し置きまするでござりませう。

小四　然らば此まゝ。

左衞　松ケ　若君樣。

大膳　とは云ふもの〻、

妻平　何がどうした。

小四　コリヤ、お立ち。

賓賴　皆々退出。

皆々　はア。

ト松ケ枝初花實の箱を持つて立上る。左衞門も刀の箱を持て行かうとする。大膳大太郎拔きかけるを、大膳を小四郞ちよつとさ〻へる。大太郎は松ケ枝へだてる。妻平をば初花留める、左衞門よろしく式distance

序幕　洛東淸水觀音の場

役名　園部左衞門、刀鍛冶園九郞、奴妻平、來太郞國俊、秋月大膳、來國行、淺川藤馬、淸水寺住職。薄雪姫、腰元まがき、其他。

淸水觀音の場。本舞臺三間の間、上の方石垣の上へ三社の鳥居、玉垣、音羽の瀧、瀧壺、是に續いて誂への石段、正面に朱塗りの高欄、紅色の觀音堂、舞臺前誂への臺みき、上下段幕を張り、日覆より櫻の釣枝二段におろし、總て淸水觀音の體。爰に同宿二人中間一人、竹箒を持ち、手桶などを持ち、掃除をし、居る、此の見得双盤にて幕あく

同宿　サア〳〵、是で掃除もよいといふものぢや。角內、一ぷくしたがよい。

中間　イヤ、西念樣、けふは朝からのはき掃除、殊に方丈樣の忙しさ、コリヤまア何事でございます。

同〇　おぬし達が知らぬも尤も、けふはお上から園部の兵衛殿の御子息左衛門樣が、影の劍とやらを奉納においでなさるとの事ぢやわいの。

同△　其中に又幸崎の姬君とやらが、御參詣との事、それ故方丈樣から嚴しい言附ぢやわいの。

中間　左樣なら、お上からお客樣がお出でござりまするか。

同〇　それ故我々迄が、掃除の手傳ひ致すのぢや。

中間　其替り、お布施は十分でござりませう。

同〇　何を馬鹿な。

三人　ハヽヽヽヽ。（ト向うを見て、）

同△　とから云ふ内、アレ〳〵向うへ見ゆるのは、慥か幸崎の姫君樣。

同○　ホンニ、さうぢや方丈樣へお知らせ申さう。

同△　サヽ、來やれ〳〵。

大勢　ハイホウ。

ト行列出の鳴物、お先揃への唄になり、絹羽織袴股立の供侍六人、此後に女小性兩人、守袋定家文庫を持ち出る、此次に薄雪姫、廣振袖のこしらへ、此後へまがきひらり帽子、腰元のなりにて、日傘をさし、其後より腰元皆々出て、よろしく本舞臺へ來て、

腰一　お供廻りは別當所にて、休息しや。

皆々　はゝあ。（ト供廻り皆々上手へはひる。後薄雪姫、まがき、腰元皆々宜しく住ひ、）

まがき　モウシ姫君樣、今日は空ものどかに春のうらゝか、お部屋の櫻は咲きたれど、庭木はどうやらかたづまつて、氣が晴れぬに、幸ひとけふの花見、櫻の名所は多けれど、取分け地主の花盛り、木の下蔭を宿として暫し床几に。

薄雪　ヲヽ、そなたの云やる通り、櫻は花の王としいへば、いづれに替りは無けれども、庭木に勝る御寺の景色、今を盛りの櫻花、何とよい詠めではないかいなう。

ト此内皆々毛氈を敷き、薄雪姫床几にかゝる。

腰一　イヤ申し姫君様、枯れたる木にも花咲くと、清水寺の花盛り、咲も残らず散りもせず、一入のよいお慰み、吉野初瀬も及びなき此の風景、私共も共々に、よい春を致しましたわいなア。

腰二　それいなア、浮舟さんの云はしやんす通り、まだつぼみやらほころびぬ、花に例へし御器量を小町櫻と室戸川。

腰三　揚貴妃櫻と夕櫻、かざす扇の檜櫻と、皆一様に花のもと、

腰四　思ひ合せの糸櫻、結ぶ妹脊の神かけて、中吉原の里の花

腰五　兎にも角にも知る人ぞ、匂ひ櫻の長命寺、

腰六　三めぐりあかぬ花の雲、櫻の庭に一様に、

腰七　歌の手に葉はしほがまの、八重九重の隅田川、

腰八　なに白髭の私らは、花より團子が弘福寺、

腰九　金龍山の餅かけて、ほんのり酒の色好み、大慈大悲とたゞ賴む、

腰十　誓ひの綱の目に掛る、よい折からにいほ崎や、けふのお供は初櫻、

腰十一　見る花よりも團子より、まだ好物の殿御の顏、

腰八　見たり見せたりしのゝめの、

腰九　夜明けぬ内から樂しみに、待ちこがれたる千本の櫻、
腰十　詠めもあかぬぢや、
皆々　ござんせぬかいなア。
薄雪　皆の者の云やる通り、柳櫻をこきまぜて、都ぞ春の綠なる、世にたぐひなき此詠め、腰元共、料紙持ちや。
腰二　畏りました。（ト合方になり、料紙硯箱を持つて來る。薄雪姫短冊を出し、歌を書く事まがき取つて。）
まが　「春毎に見る花なれど今年より、咲初めたる心地こそすれ、」モあつぱれのお歌、面白い事でござりまする。
腰八　ホンニ、もう／＼お歌といひ、御器量といひ、今の世の小町さま。
腰九　せう／＼の殿御の、御氣に入らぬもお道理でござりまする。
腰十　然しおかたいまがき樣、あつたら情所を、かうしてお置き遊ばすは。
腰十一　譬の通り寶の持ぐされ、惜しいものでござりまするなア。
まが　何を云はしやんすぞいなア。モウシ薄雪樣、アノ短冊を何處ぞの枝へ附けましては、どうでござりませうなア。

薄雪　どうなとよいやうにしてたも。

まが　左樣なら、どこぞの枝へ。（トまがき腰元一へ短冊を渡さうとするを、腰元出て、）

腰八　モウシ浮舟さん、わたしに附けさして下さんせ。

腰九　是はしたり、附けるとは戀の禁句、どこぞそこらの枝へ、結んで置かしやんせ。

腰八　ヲツト、それなら呑込んだわいの。

ト腰元八捨ゼリフを云ひ乍ら、誂への臺みきに短冊を結び付ける。

まが　サア、是からは姫君樣、觀音樣へ御參詣。

薄雪　そんなら皆も、とも〴〵に。

まが　まづ、御參詣、

皆々　遊ばされませう。（ト床の竹本になり、）

〽心を附くるお手車、舞臺へ上り觀世音、頼む心は餘所目から、よい殿御をぞありそ海、深き願ひの數々を暫し拜みて見晴らせば、（ト聖天になり、此人數舞臺へ上り、皆々向うを見て思入。）

腰三　サア申しお姫樣、此の舞臺から方々に見ゆる山々を御覽なされませ。それは〳〵よい風景でご

ざりまする。

腰十　したが道芝殿、向うに見ゆる山は、どこぢやぞいの。

腰三　あれは大方、稲荷山であらうぞいの。

腰十　ナニ稲荷山だえ、そんならアノ松茸のたんと出る山だね。

腰十一　さうして此のあたりにかすかに見ゆるのは、どこであらうぞいの。

腰四　ホンニ、あれはどこぢやぞいの。（ト此内薄雪姫思入あつて）

薄雪　コレまがき、向うに見ゆる、アノ美しい山は、ありやどこぢやぞいの。

まがき　お待ち遊ばせ。爰でこそ用意して來た遠目鏡、サア／＼早う、ソレ腰元衆。

皆々　畏りました。（ト腰元六、目鏡を出し捨ぜりふにてまがき見て）

まがき　アレ、向うに見ゆる愛宕山、手に取るやうに見えまするわいな。

腰一　ドレ、私にもちよつとお見せなされませ。（ト遠目鏡を見て）ヲヽ、咲いた／＼、まツ盛り、八坂は右、東寺は左り。

腰五　アレ、まがき樣御覧じませ、あれが大阪京橋とかいふ所、かすかに見えまするわいなア。

ト此内薄雪姫こなしあつて、腰元八に向ひ、

薄雪　コレ、此の遠目鏡をそなたに貸す程に、四方の景色を見やいなう。

腰八　何と仰しやります、此遠目鏡をお貸しなされますか。へイ／＼有難う存じまする。サア／＼、是からは下を通る男の見あき、（ト目鏡を取つて）目の正月を致しまする。

ト腰元八いろ／＼下を見るこなし、聖天になり、仕出し思ひ／＼のこしらへにて、上下へはひる。腰元八見て、捨ゼリフあつて、腰元九前へ出て、

腰九　是はしたり、まんがちな、私にもちつと見せて下さんせ。

ト腰元九捨ゼリフにて、目鏡を見る、やはり仕出し出る事。

腰十　モウシ／＼末廣さん、私にもちつと見せて下さんせ。

ト無理に取つて見る事、又仕出し出て上手へはひる、又腰元十一も見て、

腰十一　ホンニまア、さつきから、どうぞよい男の見あきをせうと思うたに。

腰八　目の痛む程見詰めても、醫者に法印俳諧師、

腰九　あるひは順禮古手買、

腰十　せき候にまで身をやつし、

腰十一　エヽ、何を云はしやんすぞいなア、よい男と添ひ度いわえ。

ト此時まがき思入あつて、

まが　おゝ、其のよい男で思ひ出した。モウシ姫君樣、先日のお能の時花子をなされた園部の左衞門樣、よい殿御といはうか、母御樣が御覽なされて、姫に聟を取るならば此人ならではと御意遊ばした、ア、お目にかゝり度いものぢや。ヲ、幸ひけふは此清水へ、大切なお刀を奉納にお出での筈、三ツ傘のまん中に、山といふ字の紋所、脊高からず低からず、お腰の物は坂田風にさしこなし、

腰八　色白にしてくつきりと、三分もすかぬ當世男、

腰九　おツつけお出でのその時に、よく氣を附て御覽じませ。

腰十　ホンニもう、たまつたものぢや、

四人　ござりませぬ。

〽云はぬ先から物見高いは女中のくせ、のび上り〳〵、（ト皆々のび上り腰元八目鏡にて向うを見）

腰八　ヤア〳〵、向うへ評判の左衞門樣が。

腰九　ドレ〳〵、（ト同じく目鏡を見て）ほんに、爰へ來られまする〳〵。

皆々　モシ〳〵、お出でなされますといな〳〵。

ト皆々立騒ぐ、やはり聖天になり、花道より浪人の仕出し、編笠を冠り出て來り、舞臺へ來る。

腰十　それ〳〵、そこへ來るが左衛門樣。

腰二　アレ〳〵、姫君樣、ちやつと御覽遊ばしませ。（ト薄雪姫下を見る事。）

腰八　アレ〳〵御覽なされませ、姿形もよしや風、

腰九　腰まき羽織長刀、女子の思ひも深編笠、

腰十　内ぞ床しき殿御の顏、

腰十一　早う見度いぢや、

四人　ないかいなア。（ト此内仕出しの浪人編笠を取り、舞臺を見上げて上手へはひる。）

腰八　末廣さん見やしやんせ、今のは、アリヤ物貰ひぢやわいなア。

皆々　ホヽヽヽ。

腰一　左衛門樣とは、きつい違ひで、

皆々　ござんすわいなア。

まが　エヽモ、お前方ではらちが明かぬ。ドレ〳〵、私が替つて見ようわいの。

ト遠目鏡を出し、向うを見て、

アレ〳〵、向うへ見ゆる三人連れ、目水晶、あれが誠の左衛門樣。姫君樣、是で御覽遊ばしませ、したが櫻の枝でお顏が見えぬがお氣の毒、お顏をお見申したいが、ハテ、困つたものぢやなア。

皆々　どうぞ仕樣はござんせぬかいなア。

〽詞の花の木のもとへ、あゆみ來かゝる園部の左衛門、其身は鍛冶にも名も高き國行もろとも奉納の、御劒を妻平に取持たせ。

ト聖天、謠への合方にて、花道より園部左衛門、羽織衣裳大小深編笠、來國行ふけたるこしらへ、後より奴妻平繻子奴にて、謠への刀箱を持ち、出て來り花道へ留り、

左衛　歌のてにはに櫻をば、雪か雲かと疑ひも、晴れてのどけき彌生の空、

國行　咲揃ふ花に觀音へ、あゆみを運ぶ諸人の、歸りも知らぬ法の庭、

妻平　けふのお供に下郎めが、氣ものび〳〵と春の日の、こがれ〳〵て淸水に、うさを忘るゝ花見時、

左衛　一目千本吉野路の、

國行　花も及ばぬ御寺の景色、

左衛　ハテ、風情ある、

當人　眺めぢやなア。

〽參詣あれば、清水寺の住僧出迎ひ、（ト三人舞臺へ來る、上手より住職緋の衣にて同宿伴ひて出る。）

住職　これは〳〵、左衛門様には只今お越し、先以て今日の御參詣私ならぬ公用、近頃御苦勞に存じまする。

〽といんぎんにのべらるれば、

左衛　仰せの如く此度の御劍、是なる來國行に仰せ付けられ、則ち影の刀を差上げよとの御諚、大切なる御劍の手本と定めし此刀、おろそかに成り難ければ、清水の觀音に奉納せよとの仰せに依つて、いよ〳〵御劍成就の御祈念願ひ奉ると、先達て申通ぜし故、推參と存ぜしに是迄のお出迎ひ、恐れ入つてござりまする。國行には、いまだ御對面申すまじ。

住職　ア、成程〳〵、拙僧は當清水寺の住職、シテ御家名はな。

國行　ハツ、私儀は粟田口の住人、來國行と申す者、園部の家には御家來同然、以後はお見知り下さるべし。

〽互ひの挨拶聞えねど、姿形を取寄する遠目鏡にて一心不亂、左衞門の顏を見るよりも、身にしみ渡る戀風の、そよと詞にあらはれて、

ト此内始終遠目鏡にて、薄雪姫左衞門を見ることあつて、

薄雪　ナウまがき、情らしうて位高うて、ホツそりとしてしやんとして、どつこに一ツ云分ない、元服した業平樣。

〽抱かれて寢たれば口許も、はづるゝさうで可愛らし、下には挨拶事終り、

左衞　然らば、此の御劍を寶前へ献上は、國行と貴僧に頼み奉る。ソレ妻平、それなる劍を住僧へ。

妻平　ネイ〱、畏つてござりまする。

〽劍の箱を御弟子に渡し、控ゆれば、

ト妻平刀の箱を同宿に渡す。

左衞　只今も申入るゝ通り、餘り見事の櫻の詠め、花曇りとは申しながら、今にも降りなん雲の景色、雨なき内に暫しが程、佛の庭とは申しながら、大慈大悲の花なれば、一枝折て家づとに。

住職　ア、苦しからず、いか程なりとも。おツつけお出でを待ち申す。イデ、此上は國行樣には。

國行　是れなる御劍寶前へ、献上申すに御同道。

住職　祈念は後かた仕らん。

左衛　然らば住職、

住職　左衛門樣、後程御目にかゝりませう。

〽國行諸共登る坂、おりる所體も亂れたる薄雪姫は戀の路、園部は斯くとも露知らず、有合ふ床几に腰打ちかけ、

ト此文句の内、住職先に國行同宿附いて、段を上りはひる。是れと同時に薄雪姫、まがき、腰元等皆皆平舞臺へおりて來る、左衛門妻平入替つて顏を見る事、まがき妻平を見て、

まが　モシ。

妻平　ヤ、爰へはどうして。（ト左衛門を見て思入あつて、）エヘン〳〵。

ト眞面目になり居る。此内薄雪姫、上の方の床几にかゝる

左衛　何と妻平、取分けて是れなる櫻は見事ではないか。

妻平　御意の通り、いつ〳〵よりも、盛りが見事でござりまする。

左衛　成程々々、最前住持に所望致しておいたれば、手折つて歸らん。

妻平　ハテ、どの枝に致しませうな。

〽それか是れかと見廻す内に、短冊見附け吟じ返し、（ト左衞門櫻に附けし以前の短冊を見て。）

左衞「春每に來る花なれど今年より、咲初めたる心地こそすれ。」ハテ面白き此の歌、主は誰とも知らねども、結び留めたる此一枝、妻平手折れ。

妻平　ネイ〱〱。

〽枝を手折れば、姫は嬉しく、（妻平短冊の附きしまゝ、櫻の枝を折取つて來る。）

薄雪　コレ、まがき。（ト薄雪姫、まがきに思入あつていふ。）

まが　ヲツト、皆迄おつしやりますな、私次第になされませ。

〽人知れず二人契りし、妻平がそばに立寄り、物もう。

妻平　どうれ。（ト眞中へ出る。）

まが　モウシ、奴さん。

妻平　コレ女中、何ぞ御用でもござりますかな。

まが　アイ、チト申さねばならぬ事。

妻平　アノ身共にかな。

まが　イヽヱ、あなたに。（ト左衞門にこなし。）

妻平　ナニ、あなたに、イヤ、あなたといへばやつぱり俺ぢや。

まが　イヱ〳〵、あなたぢやわいなア。

妻平　ア、あなたとは、ハヽア、御主人さまか。

まが　アイなア。

妻平　そんなら早くお傍へ行つて、云うたり〳〵。

まが　左樣なら、眞平御免なされませ。（ト左衞門の傍へ來り、間の惡き思入にて、）ホヽ。

左衞　ハヽ

まが　ホヽ

兩人　ホヽヽヽハヽヽヽ。

まが　モウ此樣に申しましたれば、物とがめする女中ぢやと、お叱りもあらうが、その一枝は主ある花、折つてお歸り遊ばすは落花狼籍、元の樣についでお返しなされませ。

〽無理云ひ掛くるも、戀の仕掛と知らぬ園部の左衞門おとなしやかに、

左衞　イヤ是れは當寺の住僧に、一ト枝は折つて歸れと許されしを、花もの云はぬ色なれば、御存知なきは御尤も。

まが　イヤモウシ、お詞の先折るは、花を折るより不躾ながら、まア枝にこそ依つたもの、私が御主人幸崎の姫君薄雪樣、あまり色よき此花を人に折らせじさはらせじと、封の替りの短冊ぐるめ、あなたが折れと仰しやるとて心なき奴どの、サア、元の樣にして姫君の、御機嫌の直るやうにして下さりませ。

へ詞に左衞門氣の毒顏、

左衞　其儀なれば拙者があやまり、餘り面白き歌といひ手跡といひ、屋敷へ歸らば母にも見せ、お慰みの爲めと存じ、思はぬ不作法、眞平御免下さりませう。

まが　アイ、それなれば薄雪樣の、御堪能遊ばすやうに直々に仰しやつても御耻辱にもならぬ事、御苦勞ながら、なアモウシ、奴さん。

妻平　ヲヽさうとも〳〵、モウシ旦那樣、コリヤござらずばなりますまい。

左衞　アヽイヤ〳〵、最前から見受けるに男とては一人もなく、女中ばかりの眞中へ、若輩者の參るべきやうは無し、親共より物堅き格式なれば、參るまじではなけれども誰が見まいものでもな

い、人の口には戸が立てられぬ。覺えなき身に浮名を立てられ、互ひの難儀になるまいとは云はれぬわいの。

妻平　ぢやと申しまして。

〽云ふにいらへもこちらへすぐ、（ト此中まがき薄雪姫の方へ來て思入、腰元一こなしあつて。

腰一　さつても堅い、戀知らず、

腰二　廣い世界もせまい氣な、

腰三　姫君樣のお心にて、

腰四　戀慕ふのも無理ならねど、

腰一　云譯せずと色も香も、

腰二　深き心をツイおうと、

皆々　仰しやつたがよいわいなア。

〽口々小聲に薄雪も、もし此戀が叶はずば何とせうどうせうと、思ひ彌增す戀の歌、人に知らさじ知るとても、口なし色の短册に、筆の立どもわかちなく、

ト此内薄雪姫思入あつて、硯引寄せ短册にさら〳〵と書くことあつて、

まが　モウシ姫君様、何とぞ遊ばしましたかえ。

薄雪　コレ此歌はやう〳〵と詠みかけしが、肝腎の下の七文字がなるかならぬか知れぬ故、いつそ苦労に成るわいなう。

　　〽苦になるわいのとありければ、（ト薄雪姫思入あつてまがきへこなし、腰元五思入あつて。）

腰五　千歳どの、姫君様が下の七文字がならぬというて、アノ様に御苦労なされておいで遊ばす。お前方そこへよいやうに、頼むわいなア。

腰一　アイ〳〵、合點でござんす。モウシお姫様、その下へ斯うおつけ遊ばしては、如何でござりませう。「枝高き花の梢も折れば折る、及ばぬ鯉の瀧登りかな。」

皆々　エヽモ、何を云はしやんすぞいなア。（トまがき思入あつて、）

まが　ヲヽ、お姫様、よい事がござります。そのやうにきな〳〵思召されずと、まア、私次第にしておゝきなされませ。モシ皆さん、私は爰にお附き申して居る程に、四邊の花が盛りであらう、早う行つてな、見やしやんせいなア。（ト思入あつて妻平の傍へ行き、）物もう。

妻平　どうれ。

まが　又參りました。

妻平　何ぞ御用かな。

まが　さア用と申しますは只今の通り姫君へ申したれば、なか〳〵そんな事では、堪忍が仕にくい、爰へ來るがいやならば、此歌の下の七文字、よからうやうにお附けなされて下さりませ。

妻平　そりや左衞門樣に申上ぐる迄もない、其歌の下の七文字は、俺が附けてやらう。

まが　ナニ、おまへが附けて下さんすかえ。

妻平　此の妻平が附けてやらう。

まが　アノ、おまへが。

妻平　ヲイヤイ、其歌は何といふ。

まが　早う付けて下さんせいなア。

妻平　コレ急いては事を仕損じる、とくと斯う腕を組んで。コウツト、何でも早いが勝ぢや。おぬしもそこで考へてくれ。

まが　アイ〳〵、私も爰で考へるわいなア。

妻平　何であらうか。ヲヽ、出た。（ト大きくいふ。）

まが　エヽ、モ、びつくりするわいなア。

妻平　ホイ、引込んでしまうた。

まが　ヱヽ、何のこつちやぞいな。

妻平　イヤ、おぬしが餘り大きな聲故、ツイ引込んでしまうた、靜にせい〳〵。（ト思入あつて）出たぞ。

まが　出たかいなア。

妻平　どつこい〳〵、待つたり〳〵。靜にせぬと又引込むは。

まが　さうして、何とぢやぞえ。

妻平　ヲヽ、歌の下は何とかいふな。

まが　「叶はぬ戀も」ぢやわいなア。

妻平　ナニ、戀もぢや。ヲヽそれ〳〵こいも長いもさつまいもはどうぢや。」

まが　ヱヽ、何を言ふのぢやぞいの。

妻平　ハヽヽヽ。

まが　コリやお前ぢや埒が明かぬ、やつぱり左衛門様へお願ひ申しませう。ヘイ〳〵、只今お聞きの通り、此歌の下の七文字を、よろしい様にお附けなされて下さりませ。

〽差出せば手に取上げ、（ト左衛門短冊を取上げ、）

左衛　ム、「枝高き花の梢も折れば折る、及ばぬ戀」と書かれしは、深き思ひのあるやらん。

〽心休めと筆取つて、さら〳〵と書認め、（ト思入あつて腰の矢立を取出し、短冊に認めて、）

サ、憚りながら。（ト出す、まがき短冊を見て、）

まが　「枝高き花の梢も折れば折る、及ばぬ戀も成るとこそきけ。」え丶嬉しや〳〵（と薄雪姫の傍へ來り、）

サア〳〵、此の上は直々に、「なるとこそきけ」の一口のお禮を、コレモウシ、何も恥しい事はござりませぬ。善は急げぢや、サア〳〵、ちやつと。

〽ちやつと〳〵と押しやられ、恥しいやらこはいやら、どきつく胸を押し静め、しづ〳〵あゆみ左衛門が、裾ふむ迄に立寄れど、うつむくばかり下紐の、まだ解初めぬ薄雪姫差しうつむいて詞なし。

ト此内まがき無理に薄雪姫を左衛門の傍へ附きやる、薄雪姫もぢ〳〵して居る、まがきこなしあつて、

ヲ、しんきな事やの、其のやうに恥しうて、是がまア濟むかいな。とはいへ恥しいも道理、まづ序の始まりはまがきが役、肝腎の三段目は姫君樣、とツ附き引附き仰しやりませ〳〵、早う〳〵。

薄雪　それぢやというて。
まが　エヽ、もどかしい。（ト思入あつて、）物もう。
妻平　どうれ。又御用かな。
まが　又参りました、左衞門樣に、チトお願ひがござりまする。
妻平　願ひとあらば、直々に、ずつと云つたり〳〵。
まが　左樣なら御免なされて下さりませ。モウシ左衞門樣、お前樣をふと見上げまして、姫君樣のお願ひ、お聞きなされて下さりませう。
左衞　何がさて、武士と見込んで願ひとは、身に叶ひし筋なれば。
まが　左樣なら、とてもの事に御誓言を、承り度う存じます。
左衞　ハテ淸水の觀世音、地主權現の御照覽、僞りは申さぬ。
まが　それ聞いて落着きました。アノ、姫君樣のお願ひは、お氣に合ふかあふまいか、お前と女夫になり度いと、なみ〳〵ならぬお賴みでござりまする。
左衞　コレ〳〵女中、何と仰しやる、薄雪姫は誰あらう幸崎の御息女ではござらぬか、それに何ぞや女夫などゝ、如何な儀でござる。

まが　イヤ申し、幸崎の御息女ならば、あなたに惚れなといふお觸がござりましたか、地主權現の御照覽と、お侍が噓仰しやつても、大事ござりませぬか。

左衞　サア、それはな。

まが　ツイおうと、ヱヽしんきな、モウシ愛なお子も、物仰しやりませいなア。
へあせる中にも妻平が、顏見合せて云ふ事も、顏と仕方で知らせ合ふ。

妻平　コレ奴どの、是程こちらがいふ事を、取持たうとは仕はせいで、何を詠めてうつかりひよん、コレいなア、お前も共々、そこはよいやうに賴むわいなア。
是は又迷惑な事をいふ。まゝよ、てんぽの皮だ、取持つて進ぜう。然しながら旦那が何と仰しやるか知れぬが、まア俺次第にまかしておきやれ。（ト左衞門の傍へ來て、）へイ〱、旦那樣へ申上げます樣にござりまする、最前からいさいあれにて承つて居りましたが、それではあなた樣あまり石部金吉と申しますもの、先づ第一手入らずのお姬樣が、殊に女の方からあの樣に持ちかけるものを、いやだなんぞと仰しやるは、女冥利が惡うござります、下世話にも七十五日生延びると申す初物を、召上らぬなぞとは、いやはや、お堅いも程のあつたもの、とつくりと御思案の廻らされ、是非其お姬樣の願ひを、お叶へなされておやり遊ばしたが、

左衞　だまれ。
妻平　よからうやうに存ぜられまする。
左衞　だまれ。そち達が同じやうに、後先の考もなう如何致したものぢや、きつとたしなみやれ。
妻平　ネイ〳〵、恐入りましてござりまする。（トこちらへ來る。）
まが　首尾はどうぢやえ。
妻平　まんまと首尾よう、やり損なつた。
まが　なんぢやぞいなア。
妻平　もう此上は、所詮埒が明かぬ、もう〳〵旦那の事はふツつりと。
まが　エ。
妻平　サア、ふツつりと、ソレ、思ひ切らせましたがよからうぜ。
ト仕方にて敎へる、まがき薄雪姫に飮み込ませる。
まが　そんならどうでも叶はぬか、モシ姫君樣、何とせう此のまゝでは、一分が立ちますまい、サアお覺悟遊ばしませ。
〽云ふを誠と涙乍ら、聞えぬ辛わ胴慾やと、

薄雪　さうぢや。

　へと拔放せば、（ト薄雪姫、左衞門の差添を拔き、自害をしようとする。）

左衞　これはしたり短氣千萬、危なうござるわいなう。

　へ刀ばひ取り、鞘に納める手を取つて、（ト左衞門刀をもぎ取る、薄雪姫其手にすがり。）

薄雪　及ばぬ戀となま中に、死なうと思ひ定めしを、斯うお留め遊ばすは、お叶へなされて下さると
　いふお心でござりまするか。

左衞　サア、それは。

まが　叶はぬ事なら、やつぱり放して、お姫樣。

薄雪　覺悟極めて居るわいなう。（ト又死なうとする。）

左衞　コレ、危いわいなう。

まが　そんなら叶へて、おやりなされまするか。

左衞　サア、それは。

薄雪　お返事無いは、死ねとの事か。

左衞　サア、それは。

まが　お叶へなされて下さりまするか。
左衞　さア、
兩人　さア、
三人　さア〳〵、お叶へなされて下さりませいなア。」
左衞　如何にも、願ひを叶へました。
薄雪　エヽ、お嬉しうございまする。（ト薄雪姫其まゝ左衞門の傍へ寄る。）
「何としてやら妻平の、にがり切つたる顏つきにて、
妻平　あゝ若旦那、やくたい〳〵、親旦那より物堅いお家の格式は何處へやら、女中をとらへてじやらくらと、チトおたしなみなされませ。（ト是にて兩人ほぐれる。）と申すは先刻のおほむがへし、薄雪樣と二人のお仲、千秋萬歳お目出度うございまする。サア是で相談が極つたといふもの、サア此上はお姫樣、又もや御意の變らぬ內、日頃の思ひの有丈を、あなたの口から左衞門樣へ、直々に仰しやつたがよろしうございまする。
薄雪　それぢやというて、恥しうて。
妻平　ハテ、其樣な弱い御料簡では中々生物が召上がられるものではございませぬ。サア、ちやつと

お言ひなされませ〳〵。（ト薄雪姫を突きやれども行かぬ故）

まが　アヽコリヤ、困つたものでござんすわいな。

左衛　コリヤ〳〵、妻平々々。

妻平　ネイ〳〵、御用でござりまするか。

左衛　サア、から打解けは解けたれど、どうしてよいやら戀路には一向暗き某故、何と其方教へてはくれまいか。

妻平　是は又迷惑な事でござりまする。

まが　ハテ、何をするのも忠義の爲め、何と爰で御傳授申したがよいわいな。

妻平　成程、それもそんな物かえ、そんなら二人が手本になつて。

まが　戀のいろはの御師匠番、

妻平　さらばお教へ申さうか。（ト誂への合方になり、妻平まがき捨ゼリフにて、左衛門薄雪姫に飲込ませ、）

まが　モシ、こちの人、と仰しやるのでござりまする。

薄雪　モシ、こちの人と仰しやるのでござりまする。

まが　あゝモシ、その仰しやるのでござりまするは入りませぬわいな。さア、今度はよろしうござり

ますするか。モシこちの人え。（ト妻平の傍へ行く。）

薄雪　モシ、こちの人え。（ト左衞門の傍へ行く。）

妻平　ヤア／＼。

左衞　ヤア／＼。

まが　私やお前に、話があるわいなア。

薄雪　私やお前に、話があるわいなア。

妻平　話があるなら、もつとこつちへ、寄つたり／＼。

左衞　話があるなら、もつとこつちへ、寄つたり／＼。

まが　アノ、斯うかえ。（ト寄り添ふ。）

薄雪　アノ、斯うかえ。（ト添り寄ふ）

妻平　サア、何なりと、云つたり／＼。

左衞　サア、何なりと、云つたり／＼。

まが　アノナ、今日の様な嬉しい事は、ないわいなア。

薄雪　アノナ、今日の様な嬉しい事は、ないわいなア。

妻平　嬉しくば、爰へ來て、
左衞　嬉しくば、爰へ來て、
妻平　手を取れ〳〵。
左衞　手を取れ〳〵。
まが　アノ、かうかえ。
薄雪　アノ、かうかえ。
妻平　もつとぐつと〳〵。
左衞　もつとぐつと〳〵。
まが　アノ、かうかいなア。
薄雪　アノ、かうかいなア。
妻平　アヽ可愛い奴の。
左衞　アヽ可愛い奴の。

ト此の模樣よろしくあつて、兩手を取りて抱へる。此以前より所化上手へ出て是を見て石段より落ちる。是にて四人ほぐれて、

妻平　エヽ、びつくりするわえ。コリヤどこやらから、小坊主が降つて參りました。

所化　ハツ、左衞門樣へ申上げます。國行樣にもお待兼ね只今おいでなされませと、お師匠樣の云附でござりまする。

左衞　御念の入つたその御使ひ、只今參ると申してくりやれ。

所化　畏まりました。（ト石段の途中まで行きこ）薄雪樣と左衞門樣と、ほうやらほやら〳〵。

トはやし乍ら上手へはひる。

妻平　エヽ子供といふものは、仕方のねえものだ。

薄雪　そんならあなたは、もうおいでなされますか。大事なくば爰にいつまでも（トまがきに思入ある。）

まが　イヤ申し姫君樣、假令爰にござつても、肝腎の所がとんと埒が明きませぬ、コレ。

〽コレから〳〵と耳に口、（トまがき薄雪へ耳に囁く。）

薄雪　どうしてまア、恥しうてそんな事が。

まが　でも仰しやらねば、濟まぬ事、ちやつとイノウ。

〽せけばせく程言ひ兼て、わしが使ひは此の硯といはぬ思ひをのべがみに、はんじものやら痴話文やら、筆の立どもしどけなく、キリ〳〵しやんと櫻の枝

に、かけたはなんぞ、

ト此内薄雪姫懐中ののべ紙へ、あり合ふ硯引寄せてよろしく書いてまがきに渡す、直に櫻の枝へ結び付け。

左衛　さあ、是が姫君よりあなたへの、口で云はれぬ心の約束。刄を蓋きし其下に、心といふ字、下の三日に園部の左衛門様參る、谷影の春の薄雪、ムヽ、すりや忍べといふ判じ物。

薄雪　其時こそは、人知れず打解けて、

左衛　仰せは石より忝い。

薄雪　必らず待つぞえ。

左衛　忍ぶぞや。

薄雪　まア、それまでは。

左衛　薄雪どの。

薄雪　左衛門どの。

左衛　おさらばでござりまする。

〽袖ふりわけて行く後に、（ト左衞門こなしあつて石坂を登りはひる。）

まが　コレ妻平どの、私も下の三日の夜、必らずさうぢやぞえ。

妻平　ヲヽサ、呑込んだ〳〵、旦那の夜食のおせうばん、今日のお晝の珍物より、又一ト入のお振舞、ヱヽいつ喰つても喰飽きねえ。

まが　何ぢやぞいなア。

妻平　イヤ、ドッヤ花を見捨て、イヤ、花見て來ようかえ。

〽笑うてこそは別れ行く。（ト妻平此文句にて石坂の上へはひる。薄雪姫別れを惜しむ思入。）

〽薄雪姫は本意なげに、影見えぬ迄見送りて、櫻もさらに目に付かず、

薄雪　モウシ左衞門樣、まア〳〵お待ちなされませ

〽心そゞろに打見やる。

まが　コレ申しお孃樣、下の三日の其夜さりは、

薄雪　必らず忍ぶと、あれ程に、

五　仰しやつてゞござりますぞえ。

一　モウお願ひが叶うたも同じ事、

二　お姫様がお惚れ遊ばすも無理ではない。

まが　モウシ〳〵、千歳どの〳〵。

〽まがきはそれと囁けば、（腰元の一に囁く。）

一　アイ〳〵、合點ぢやわいなア。（ト腰元の一、腰元の五に囁く、皆々よろしくあつて）

まが　左衛門様が方丈にお出でなされた事なれば、

五　妻平どのを、呼び出して、

六　首尾を見合せ、

皆々　どうなりと、

まが　必らずともに、頼んだぞえ。

〽さア、方丈までおひろひと、まがきがすゝめ附添ひて、姫の戀路のしをりして、同じ思ひに妻平に、忍びおほせの橋渡し、伴ひ連れて入りにける。

トよろしく薄雪姫に附添ひ、腰元皆々はひる。まがき腰元の五へちよつと囁く事あつて思入　まがき殘り、又聖天になり、

ほんにまア、お年の行かぬ事ぢや故、もどかしいは無理ならねど、さりとはおぼこな姫君様、

ヤレ〳〵ほつとしたわいなア。それはさうと、妻平さんにちよつと爰へ來てと千歳さんを頼んだが、早う爰へ來はせいで、さりとはしんきな事ぢやなア。
〽一人待ち居る人ならで、秋月が家來澁川藤馬、主人の先ぶれ入來り、それと見るより、
ト此内澁川藤馬、上下衣裳股立にて、下手より出て來り、まがきを見附け、
藤馬　どつこいしめたぞ。（ト捕へる。）
まが　アレ、誰ぢやえ〳〵。
藤馬　ヲヽ、俺ぢや〳〵。
まが　さう言はしやんすは、
藤馬　ヲヽ、藤馬ぢや〳〵。
まが　エヽモ、藤馬樣とした事が、いつ迚も惡いてんごうばかりさんして、聲を立てまするぞえ。
藤馬　イヤ〳〵、聲を立てうが鮹を立てようがかまはない。コレまがき、イヤまがきどの、むごいぞよ〳〵。妻平ぢやとて藤馬ぢやとて、そんなに男に變りはない、又俺が方が妻平よりは、どこぞよい所があらう、まアたつた一ト切喰つて見やれ、コレサ〳〵。

〽コレサ〳〵とまとはりて、手籠め無體の荒をのこ。（藤馬まがきにすがるを、まがき其手を押へ）

まが　サア〳〵、よいわいな〳〵。
藤馬　イヤ、まだよくはあるまいが。
まが　イヽヱイなア、まア爰を放して下さんせ。
藤馬　ムヽ、放せと言やれば隨分放すが、放せばそちが逃げる故、放されぬ。
まが　私がやうなものでさへ、其やうに惚れたというて下さんすは、誓文嬉しうござんすが、
藤馬　妻平があるといふのか。
まが　何のいなア、まアいつたい常から、どうぞしてと思つてはゐるし。
藤馬　おれとか〳〵。コリヤたまらぬ。（トしがみ付き、頰摺りをしようとする。）
まが　ヱヽ汚な。
藤馬　汚ないとは、どうぢや。
まが　イヽヱイなア、汚ない私がやうなものを。
藤馬　勿體ない事をいふものだ。

まが　兎やかういうて下さんす、お前の事、男ぶりなら氣立なら、いや味がなうてしやんとして、外の殿御とくらべたら、

藤馬　ム、、くらべたら、

まが　たとへの通り、

藤馬　すつぽんと。

まが　お月樣程、違ふわいなア。

藤馬　そんなら身共は、お月樣だな。

まが　何の、妻平どのぢやわいなア。

藤馬　ヱ、、さう聞いては。

まが　あたひつこい、放しなさんせ。

〽いや放さぬと抱きつくはずみ、床几の端にけし飛んで、つまづくはずみさゝへる日傘、

ト此文句にて、立廻つて床几に掛り、まがき有合ふ日傘にてさゝへる、是へしがみ付くと手を放す、藤馬日傘に抱き付く事、此の仕組よろしく。

ヘ舞臺をさして走り行く。

トまがきよろしくはひる。藤馬思入あつて、

藤馬　アイタ、、、、、。

ヘ腰を撫で〳〵起上り、

エヽいま〳〵しいとちあまめ。よし〳〵此上は彼れと妻平が乳くり合ひ、其上園部の左衛門と慥かに薄雪姫と譯あるに違ひない、それをおとりに左衛門をば、亡き者にする時は大膳様の戀も叶ひ、妻平は扶持の喰ひ上げ、さすればまがきはこつちの物、何は格別大膳様が兼ねての企て、密事の儀も團九郎へ頼みおけば手つがひよし、最早主人のお入りに間もあるまい、何か様子を、さうだ〳〵。

ト思入あつて下手へはひる。

ヘ水の流れと人の身の、先非を悔みて詮方も、千手のちかひかけ頼む、國行が一子來太郎國俊は、父の勘氣を許されんと、心に願ひの瀧詣で、

ト花道より國俊、深あみがさ黒の着附、一本ざし浪人の拵へ、しきみの入りし花手桶を提げ出て來り、

國俊　祇園清水智音院、音羽の瀧に地主の櫻、放下僧の謠にも、世に時めける花春のくんじゆ、それ

に引替へ我身の上、親の赦氣の赦免をば、願ひの爲めの日毎の步行。瀧の元にて心を淸め、薩埵の功力をさうぢやく。

〽念彼觀音の御名を唱へ、手にはしきみの一ト枝に、受くるや淸きのりの水、

ト此文句の內、舞臺へ來り、瀧の水にて手水をつかひ、よろしく拜禮をする。

〽七度結びて親になる父の國行、非時の馳走に醉ざまし、坂を下りふし國俊が、爰に居るとも白糸の瀧のもとに立寄つて、

ト此文句の內、國行以前のなりにて出て、坂を下り來て、瀧のもとに行かうとして兩人顏見合せ、

國俊　ヤ、あなたは。

國行　そちは。

〽言はんとせしが押し靜め、

ハヽア、南無三、此の瀧は汚れた、瀧を見るも目のけがれ。

〽尻目にかけて引返す。（ト行掛るを國俊引留めて袖にすがり、）

國俊　親父樣、まづ暫らく〳〵。

國行　ヤア、親父樣とは誰が事、此國行子は持たぬ、假令子があつてから、面押出して親と呼ぶ覺え

はない、若い人ぢやが、粗相はありがち、そこ放されよ。
〽そこ放されよと他人むき、ふり切れば又引留め、

國俊　ハヽア、有難き親の慈悲、許由と云ひし唐人の、けがらはしきこと聞いたりとて、耳を洗ひし
えいせんの、
〽潁川の瀧の流をだに、
けがれしと見し巣父が例を。
〽目のあたり。
御勘當の國俊に、敎へ下さる御高恩。
〽そも此の上の候べき、
若氣とは申しながら、色に迷うて親を忘れ、御勘當うけてより、」
〽語らひし女も相果て、
天罰といふ事が一日〳〵に身にせまり、誰を頼みてお詫び申さん便りもなき親子の緣、枯れた
る木にも花開く、觀世音に立願なし。

〽七日に滿ずる今日只今、
父の御目に掛る事、
〽有難し忝し、
此上のお慈悲には、御勘氣御赦免下さるべし。
〽涙と共にかきくどく、(トよろしく思入。)
〽國行もなかぬ顏、

國行　ム、、さうなうては叶はぬ筈、こりやヤイ、掛けがへもなき一人の子を、勘當する親の心子知らずといふ世の諺、合點が行からうがな、勘當して早や六年、朝夕の看勤にも、そちが身の上安穩にと、祈らぬ日もなく、云出さぬ日とてもなく、案じわづらひ、母は一昨年死にめさつた。
〽今わの際にも何卒して、根性が直りなば、
許してやつて下されと、母が末期の頼みには本心を見上ぐる上は、勘當許すと言ひ度いが、
〽儘ならぬ義理世界、

さいつ頃六波羅へ召出されし其砌り汝が噂、不器用らしき馬鹿者故、勘當して寄せ付けずと云放したは武士の眞中、今いふ通り許さぬはわれが可愛さ、役に立たずと指さゝすまい爲ばかり、國々に鍛冶も多けれども取りわけ我家、其家の子が刀一口得打たいで、どうも勘當許されぬ。何れの鍛冶へも立入つて、なまくらものでも打覺え、國俊と銘をきつて見せたらば悦ぶまいか、嬉しうなうてか。世間晴れての親子も親子、我子よと云はれてくれ、コリヤ、親が悼むぞよ。

〽老のくり言くり返す、胸の思ひは音羽山、瀧や涙にまけぬらん。

ト兩人よろしく愁ひの思入、風の音、時の鐘になり、

國俊　其のお歎きは此身の銹より起る事、本心のぬり砥にかけ、血をわけ給ふ稀代の直燒あらはすは今の事、現在親の傍に居て、親と得云へぬ子の心、御推量下さるべし。

國行　ヲヽ、我とても我子を我子と得云はぬつらさ、そちが思ひの十倍ぞや。必らず無事で、

國俊　親父樣、御無事でござつて下さりませ。

〽いふ内も人や聞かんと、あたりへ氣兼ね、

國行　人目に立たぬその内に、ヱヽ、歸れ。（ト金包みを投げてやる。）

國俊　ぢやと申して、此まゝには。

國行　エヽ、未練な事を。サヽ、歸れ〳〵。

國俊　スリヤ、此まゝに。

國行　身共は坊へ。（ト兩人こなしあつて、別れる。）

〽引別れたる別れの涙親子一世の別れとは、後にぞ思ひやられたり。

ト御詠歌になり、こなしあつて國俊早足に花道へはひる。國行もこなしあつて、石坂を上り、上手へはひる。

〽團九郎は正宗が家に傳へし筋違やすり、常に智つて逆さまに陽をかけて左をさげ、陰に通じて右をあげ、金克木に命をたち、火克金は世を亂す、鑢のすりかた、天下安穩長久を、忽ち先につかゆる早業、思ふさまに調伏し、

ト此内團九郎堂の内より出て、刀を取出し、やすり目を入れる思入あつて、白鞘の柄をはめ、箱の内へ納める事よろしくある。

國行　コリヤ團九郎、何をめさるゝ。

團九　サア、是れは。

國行　是れはとは。

團九　銘作の御劍なれば、後學の爲めチト拜見と存じて、今明けようとした所、

「ヘ　ぬつぺりと間に合口、

國行　イヤ、其儀ならば苦しからず、貴殿の父正宗は拙者が父國茂が弟子なれば、元は同じ家筋、執心あらば尋ねられよ。さあ、刀を出してとくと見られよ。

ヘ　ト云はれて敗亡、

團九　イヤモウ、それには及ばぬ事。

國行　及ばぬ事とはぶしつけ、いで取出して見せ申さん。

ヘ　箱の紐を解かんとするに、見附けられては百年目、

團九　コリヤモウ、いつそ。

ヘ　後より切りかくるを、心得たりとさそくの國行、かいくゞつて拔合せ、

ト團九郎切掛るを突廻し、ちよつと立廻つて拔合せる。

國行　仔細は問はぬが、汝の惡心。

團九　何を。

一
〽観念せよと無二無三、上段下段團九郎叶はじとや思ひけん、高欄よりがけづくりへ、

ト團九郎高欄より飛びおりようとする、國行引留めて、

國行　やア、逃げるとて逃がさうや

〽あしらふ折から來合す秋月大膳、目早き男子すわ一大事と、手練の手裏劍、小柄取る手も見せばこそ、國行が肝のたばねうんとのつけにどうと落つ、あへなき最期ぞ是非なけれ。

ト國行團九郎と立廻る内、花道より秋月大膳好みのなりにて出て來り、此體を見て、手早く小柄を手裏劍に打つ、國行是にてウンと落入る、大膳こなしあつて、よろしく舞臺へ來る、團九郎見て、

團九　やア、あなたは秋月大膳樣。

大膳　コリヤ。（ト音樂になり、大膳笠を取り、）シテ〳〵首尾は、どうぢや。

團九　お氣遣ひなされますな、思ふやうに調伏のやすり目、元のやうにして置く所を、此老ぼれが出さうとして、あぶない所でござりました。

大膳　出來した〳〵、然し此死骸、後日に知れなば大望の妨げ、ソレちつとも早く舞臺の下のちり落

しへ。

團九　心得ました。

〽まつかせ合點と引抱き、ちり落しへまつさかさま、打込む後から引抜いて振上げれば飛びしさり

ト團九郎國行の死骸を舞臺の下へ入れる、大膳後ろよりだしぬけに斬付ける、ちよつと立廻つて、

やア聊爾なさるな大膳樣、お望みの通り調伏のやすり目入れ、御用にこそたて仕落はない、コリヤなんとなされまするナ、命がけの此の働らき。

大膳　サア、やすり目入れたる事を、他言されては大望の妨げ、われを殺せば此事外に知つたものはない。

團九　そんならわしを、切らしやるか。

大膳　非道と知つても一大事。

團九　スリや、どうあつても。

大膳　くどいわえ。

團九　ヘイ。（ト本釣鐘を打込み風の音にて散花ちる）ハテ是非に及ばぬ、お手打なされませ、人間僅か五

十年。（トどつかり居て思入。）

大膳　スリや、身が手に掛るを得心して。

團九　御念に及ばぬ、すつぱりとやらつしやい。

大膳　ヲヽよい覺悟だ、今が最期だ。とはいふものゝ、あたら若者、散行く花と諸共に。

團九　念佛なしに切らつしやい。

大膳　ヲヽ、いふにや及ぶ、（ト大膳いろ〳〵ためしみる事あつて、）心底見えた。

團九　エヽ。

大膳　命を助ける。

團九　スリや、大事を知つた私を、お助けなされて此まゝに。

大膳　他言は致さぬ心底は、此大膳が見屆けた、當座の褒美は汝が命。

團九　そんなら此まゝ。

大膳　此場を早く。

團九　忝けない。

大膳　行け。

團九　ハッ。
〽はッとばかりに團九郎、故郷をさして立歸る。（ト團九郎こなしあつて花道へはひる。）
〽牛は牛連れ、（ト石坂より以前の藤馬出て來り、）
〽うまい〳〵と澁川藤馬、
藤馬　日那、お首尾は。
大膳　コリャ。咲いたわ〳〵。（ト望天になり、）
〽と二人ばうなづき合ひ、（ト兩人こなし、管絃のかしらを打込む。）
扨て〳〵、櫻が咲いた〳〵。
〽と見廻して、櫻に附いたる判じもの、（トこなしあつて、以前の判じ物を見附け、）
藤馬　何やら是れに。
大膳　ドレ「下の三日に園部左衛門さま參る、谷影の春の薄雪より、」忍に心と書いたるはム、、扨ては彼奴等がくさり合ひ、忍び合ふ合圖の艶書、斯うあらうと思うたわえ。
ト大膳思入、藤馬もこなしあつて、

藤馬　是はしたりお旦那、お心が小さい〳〵、今日是へ園部を初め姫も參り居るこそ幸ひ、園部めを打殺して。

大膳　ヤアだまれ、藤馬、何事も某が胸にある。コリヤ。

〽かう〳〵と心の秘密。（ト藤馬に囁き、以前の判じ物を懷中してにつたり思入）

藤馬　スリヤ、あなた樣には、此まゝに。

大膳　立歸つた上手筈を定める、汝は是れに殘り居て。

藤馬　園部、薄雪兩人が、逐一樣子を見屆けませう。

大膳　見事ぬかりのなき樣に、

藤馬　大膳樣。

大膳　きつと申渡したぞ。

〽悠然として立歸る。（ト大膳こなしあつて花道へはひる。藤馬殘り思入。）

藤馬　お旦那の云附けで、後へ殘つて兩人が樣子を見屆け立歸るときは、誠にこつちの願つたり、叶つたり、どうぞ今日こそまがきめを。然し、あのけんまくでは中々手強いあの女。何であらうと別當へまかり越し、姫と二人が樣子をば、さうだ〳〵。

〽一人うなづき行きけるが、向うへ來かゝる女中達、

ト こなしあつて、藤馬向うへ行かうとする、此時以前の腰元の一、二出て來り、

腰一　どなたかと思うたら、

腰二　あなたは澁川藤馬樣。（ト聖天になり、）

藤馬　ヲヽ、こなた方は幸崎の奧女中、ハヽア、さては薄雪どのゝお供をして。さうしてまア姫は、どれにお渡りなされる。殊に今日は園部の左衞門、是も參り合せし筈だが、方丈に居らるゝか、但し本地堂の東なるか、客殿にお渡りか、どうぢや〳〵。

腰一　ナニ、どん〳〵橋を狐が渡るえ。ヱヽモウ、あなた何を御意遊ばす。

藤馬　ヱヽ、そちこそ何を申すのだ。本坊か客殿かと申すのだ。

腰二　金龍山の客殿とは、助六のせりふでござりまする。

藤馬　さて〳〵情ない、常談ではござらぬわえ。

腰一　ひやうたんから駒が出るかえ。

腰二　白山から駒込とは、惡い口合でござりまするなア。

藤馬　これはしたり、身共心が急くわえ。そなたが主人の姫の薄雪殿、園部の左衞門兩人共に、方丈

の座敷におゐであるなら、ちつと身共が用事があるゆゑ承るのだ。

腰一　成程、姫君様はおいでなされまするが、

腰二　園部様はとつくにお屋敷へ、お歸りなされましたわいなア。

藤馬　ナニ、左衛門は歸つたか。ヱヽさて／＼殘り多い、シテ／＼腰元のまがきは居るか。

腰一　あなたが、まがき殿を付けつ廻しつなさる故、

腰二　お心を察して、それで私等二人が、

兩人　連立つて來たのぢやわいなア。

藤馬　さては、取持つてくれる心ぢやな。

腰一　實はとうから思うて居れど、

腰二　女子の常の恥かしさ、

藤馬　ムヽ、スリヤまがきが身共をば。

腰一　イヽヱイなア、私等二人、

兩人　藤馬さんを。（ト寄添ひ、いやらしき思入。）

藤馬　ヱヽ、情ない。

腰一　まがきさんの替玉に、
腰二　私等二人を。
兩人　まア一口に喰べてごらん。
藤馬　これはたまらぬ。
兩人　イヱ〳〵、逃がしはせぬわいなア〳〵。
藤馬　あゝ許せ〳〵。
腰一　何であらうと、
兩人　放しはせぬぞえ。（トよろしく附きまとひ藤馬へしなだれる事あつて、）
藤馬　まがきにくらべて見る時は、お月様と、
腰二　すつぽんの味は。
兩人　違ふぞえ。
〽逃さじものとしなだれる、しぶ〳〵顔に澁川が奥を目がけて行く後へ、とりつくすひつくかぢりつく、ひつくゝつて餅につく、豚の油の風味には、箸取り兼ねて見えにけり。

ト三人こなしあつて、此文句にて藤馬は行かうとするを、兩人引きとめいやらしきこなし、

ヘ折から姫のお立ぞと、まがきが知らせに、（ト是にてまがき出て來る。）

まが　モウシ〳〵千歳さん、末廣さん、姫樣のお立ぢやぞえ。

兩人　ハイ〳〵。

まが　藤馬さん、まだ爰にござんすか。サアお二人さん、早うござんせ。

兩人　參りませう〳〵。

腰一　それに付けても、胴慾な藤馬さん。

腰二　戀知らず情無し男、

兩人　覺えてござんせ。（ト思入あつて奧へはひる。）

藤馬　戀知らずとはまがきが事、よく最前も身共を。又行逢つたは觀世音の導きたまふものならん。

まが　それどころぢやござんせぬ。

藤馬　何と言はうと、もうたまらぬ。

ヘもうたまらぬと寄添うて、

ト駒鳥の合方になり、まがきを追廻す、此内腰元の一、二こなしあつて逃げてはひる。藤馬まがきを

捕、、捨ゼリフにて無理に押へつけようとする。

〽折しも爰へ妻平が、主人の仰せに國行を、

トバタ〳〵になり、妻平走り出て此中へはひり、藤馬を見て、

妻平　ヤア、あなたは藤馬樣。

藤馬　ム、妻平めだな。

まが　よい所へござんした。

藤馬　ヱヽ、惡い所へうせをつたな。

妻平　お前樣も私なりやこそよけれど、餘人の目に掛つては御人體のすたる事、チトおたしなみなされませ。ム、、さうして最前から、爰におゐでなされたからは、國行樣にお逢ひなされは致しませぬか。

藤馬　ナニ、國行に。（ト思入。）

まが　御存じでござりまするか。

藤馬　イヤ、知らぬ〳〵、國行は慥かうたの中山清閑寺の方へ參るのであらう。鳥羽か伏見か淀竹田の邊で逢うたと、人の噂で聞いたばかり、知らぬ〳〵。

妻平　エヽ何を仰しやりまする。さアまがきどの、早うそこをござりませ。
〽又の仰せをそれ〳〵と、目顔で知らせ。
藤馬　ヲツトヽやらぬわ。
妻平　エヽ、是れはしたり。（トへだてる事あつて）
〽別れ行く。（トまがき上手へはひる。藤馬むつとして）
藤馬　あくまで身共の邪魔ひろぐ下司奴め、われが爰に居るからは、薗部の左衛門薄雪姫、兩人共に隱れ居て、不義ひろいだに違ひない、さアいづくに居るか有體にぬかせ。
妻平　エヽ、お前樣は途方とてつもない事を仰しやります。
藤馬　何と陳じ爭ふとも、疾よりも隱し目附を入置いて、見屆けおいたのだわ。
妻平　二人は不義でござりますかな。
〽行かんとするを、
藤馬　コリヤ待て、妻平。
妻平　まだ何ぞ御用がござりまするか。
藤馬　ある段か〳〵、澤山ある、此方が首たけのあのまがき、持居つたな〳〵、女房に。

妻平　そつちが平たく云出すからは、有様に云つてしまはう。如何にもまがきはわしが女房、女房に持ちやあどうしようと思ふのだ。

〽身強く出ればのしかゝり、

藤馬　こいつが〳〵、おとがいのえらい奴めだな。何ぼ強い顔をしても、まがきはあなたに上げますと、取持て〳〵。

妻平　まアさうはなるまいわえ。

藤馬　さうぬかしやア仕方がねえ、是迄のよしみだけに。

妻平　どうせうと思ふのだ。

藤馬　女房も又花聟へ、若水祝つてやるべいか。

妻平　どうしたと。

藤馬　奴ども、花聟さんといはつしやれ。

〽聲を合圖に水汲共、てんでに手桶一様に、（ト渡り拍子になり。）

大勢　女房よんだら、川へぶちこめ。

ト云ひながら立廻りの人數好みの一様のなりにて、手桶を持ち出て來り、花道附際に並ぶ。妻平よろ

しくきつと見得。

妻平　ムヽ、扨はわいらは秋月の家來だな。仲間づくだと義理張つて、銘々持參の水手桶、

奴一　いかにも並んだ一樣は、

奴二　玄關前の打水に、

奴三　時雨櫻も花ぐもり、

奴四　晴れて駿河の三國一、

奴五　此嫁入りの行列は、いさんで狐の日照雨。

奴六　ふるとは奴のお定まり、

奴七　だい傘なげて鳥毛の槍、

奴八　一番立引きたて笠は、

奴九　わざ〳〵爰へ來たからは、

奴十　すつぽり濡れた花の雨、

奴十一　蛙の面へ水手桶、

奴十二　よい女房を持ちまへの、

奴十三　腕もすぐつた一樣は、
奴十四　二字の段々段かづら、
奴十五　戀の石段白糸の、
奴十六　瀧の若水わつさりと、
奴十七　妻平、われに、
皆々　祝つてやるのだ。（ト妻平を中へはさみ、よろしく居並ぶ。）
〽妻平ふつとふき出し、
妻平　ム、ハ、、、、、。そりや近頃忝い、所も爰は清水の觀音堂で女房に、持たれぬ事と暑くなり、關の清水のせき込んで、のぼせた面のあかの水、柳の水に流すのが、そつちの爲にも吉水だがたつてぬかしやあ臑骨に、かけて蹴上げの水なぶり、末期の水を呑ませてくれうわ。
〽尻ひつからげ大肌ぬぎ、（ト妻平身づくろひをしてきつと見得。）
藤馬　奴めに水くらはせ、ほえづらをかゝせろヨウ。
皆々　合點だ。
ト誂への賑やかなる鳴物になり、妻平皆々を相手に手桶の立廻りいろ〳〵あつて、

〽双方一度にざんぶとかけるを身をひらけば、互の身體は濡鼠、よろめく利腕左右より、もぢり喰せて打附ける。

ト又地へ取りて、けはしき立廻りよろしく、皆々一度に掛つて見事に返る。此時藤馬出て、

藤馬　もう此上は。

〽ぬきつれかゝる藤馬が刀、（トよろしくあしらふとのりになり、）

妻平　まツかせ手桶のそこらには、なかなかぬからぬ此男、片手桶にも足らぬ奴こんりん五りん五體の桶かわ。

〽こなみじん、よわみそ桶とつかんで投付けふみつけて、

トよろしして立廻つて、又大勢掛る事、此内藤馬の刀打落され、上手の石段へ投付ける、是を又鳴物になり、大まくしの立廻りよろしくあつて、皆々叶はず逃げてはひる。

〽皆叶はぬと逃げて行く。

イデ此上は、國行どのを。

〽爰に死骸があるぞとは、いかで知るべきとよみたりし、歌の中山志し、足に任せて急ぎ行く、奴のなのなの此のわかもの。（ト此内藤馬起上りて、）

藤馬　われをやつては。（トかゝるをよろしくあしらひ立廻つて、）

〽手づよいもの器量ものと、ほめぬものこそ、

トちよつと兩人立廻つて、此時以前の立廻りに出し奴の内六人程出て、

六人　どつこい。（ト妻平を眞中に藤馬を留めて、）

〽なかりける。

ト片シャギリにて、よろしく

幕

二幕目　幸崎邸の場

役名　幸崎伊賀守、園部の兵衛、園部左衛門、葛城民部、秋月大膳、澁川藤馬、珍才、薄雪姫。幸崎の奥方、まがき、こし元等。

本舞臺正面三間の間、高足の二重、舞臺向う銀襖、上の方九尺の塗骨障子屋體、上下柴垣、いつもの所枝折戸、此の内よき所櫻の臺みき、すべて幸崎伊賀守舘の體。二重の下に前幕の腰元ハ三歌がるた

の箱を持ち、左右に腰元六、七、八扣へ、茶道珍才十徳を着て、何れも毛氈の上へ歌がるたを並べ、
これを取つて居る。此見得琴唄にて幕あく。

腰三　逢ひ見ての後の心にくらぶれば、

腰六　昔は物を思はざりけり。(ト取つて前へ置く。)

腰七　チト私が替りまして、讀みませうわいなア。

腰三　イヱ〳〵、それはなりませぬ、此頃では一字や車附で、皆さんに揉まれましたせゐか、どのやうなむづかしい字でも讀めまする。

珍才　お前の事を、お茶の間で皆さんが、

腰三　祐筆だと申しまするか。

珍才　何サ、無筆だと申しまする。

腰三　何をお言ひなさる。

腰八　サア〳〵、後をお讀みなされませいなア。

腰六　來ぬ人をまつほの浦の夕なぎに、

腰七　やくやもしほの身をこがれつゝ、

珍才　サア、そのこがるゝはお姫様、左衛門様の男ぶり、くつきりとして色白で、何處に一つ云分ない殿ぶりなれど、どこから見てもこり〳〵と堅い所に惚込んだ姫君様、やがて女夫に末長う二人が仲もわびぬれば、今はた同じなにはなる、爰にござりまする、身をつくしてや逢はんとぞ思ふ。
腰八　姫君様が、お聞きあそばしたら、
腰六　嘸お悦びでござりませう。
腰七　ほんに、よい辻占で、
皆々　ござりますわいなア。
腰六　其辻占で思出す、姫君様がおこがれ遊ばす左衛門様、まがき殿の仲立にて、今宵逢ふとのお文の知らせ。
珍才　そんならいよ〳〵お二人は、變らぬ戀路と成りましたか、羨しい。
腰七　アヽ、コレ、殿様へ其樣な事が聞えたら、私等迄が濟まぬぞえ。
腰三　モシ〳〵、其樣な事は取置いて、私が讀むから早う歌がるたを取らしやんせ。コレ珍才どの、今度取らぬと約束通り、お前の顔へ墨を塗るぞえ。

珍才　そりや、お前方も其通りぢやぞえ。
皆々　ようござんすわいなア、サア／＼、早う讀みなさんせ。
腰三　逢ふ事のたえてしなくばなか／＼に。
珍才　ア、、お姫様には悪い辻占だ。
腰六　人をも身をも恨みざらまし。爰にあつたわいなア。
腰三　ソレ又鼻毛だ、墨ぬりぢや／＼。（ト有合ふ硯箱の筆を取つて、皆々珍才をとらへ墨を塗らうと爭ひ、）
珍才　コリヤモウ、たまらぬ／＼。（ト逃げようとするを、）
皆々　イヱ／＼、逃さぬ／＼。

ト皆々珍才を追廻す。調べになり、奥より薄雪姫、まがき後より子役の女小姓両人附き、二重の眞中へ褥を敷く。此上に薄雪姫住ひ脇息にかゝる。

へ爭ひなかば一間より、薄雪は何氣なく、まがき見るより聲をかけ、

まがき　お前方とした事が、別間へ洩るゝいさかひとは、あまり不行儀でござんせう、おたしなみなさんせいなア。それは格別姫君様には、日毎夜毎のお物案じ、其お心を晴らさんと、種々お慰め申せども、只前後忘れぬお氣の結ぼれ、それに付きまして私から、妻平迄人を遣はしまして

ござりまする。

薄雪　そりや、そもじから何かの事を、どうぞ能いやうに頼むぞや。

まがき　やがて御返事がござりませう。（ト此内腰元三人珍才の顔へ墨を塗る故、まがきこなしあつて、）これこれ珍才、其方の顔はどうしたのぢや。

珍才　イエ〳〵、是は皆さんがお姫様のお相手に、歌がるたをお取りなされました所が、私の鼻毛をおぬきなされました故。

腰三　お約束で、墨を塗つたのでござりまする。

皆々　ほんに、をかしいお顔ぢやわいなア。

腰三　皆さん見やしやんせ、猫又のお化ぢやわいなア。

珍才　ナニ猫又だ、お前の顔はふぐのよことびと來てゐる。

腰三　ナニ、私がふぐぢやとえ。（ト立掛る故、）

珍才　イエ〳〵、ふぐではない、たこ〳〵。

腰三　ナニ、蛸とはえ。

珍才　それ、たこが、アレ〳〵〳〵。（ト上手の霞の方へ指ざす。）

皆々　何の事ぢやぞいなア。
〽おどけまじりと打見やる初東風に、砂飛ぶ空に手をふる奴凧、
まが　ホンニ珍才どのが云はるゝ通り、町々でのぼすいかのぼり、姫君御覧遊ばしませ。
薄雪　サレバイなう、夕日に連れて人影も、朧ぞめなるしなかたち、綺麗な事ではないかいなう。
腰六　左様でござりまする、雲井はるかに飛ぶ鳥の、中を爭ふ奴凧、
腰七　ホンニ、妻平どのによう似た面ざし。
腰八　風になびいておもしろう、
皆々　ようまア上つた事ぢやぞいなア。
腰三　ヲヤ〳〵、アレまアお姫樣御覧遊ばせ、まがきさんも皆さんも御覧じませ、やアよう書きまし
た凧男、なりふり衣紋付はどちから見ても妻平どの、まがきさんの其中を結ぶは針の糸目口、
コレまがきさん、早う爰へ來て呼ばしやんせ、ヲヽイ〳〵、妻平どの〳〵。
〽呼べど招けど雲霞、（ト手招きして腰元の三凧を見る思入）
〽うわの空吹く風につれ、ふつと切れたる糸びんあたまの奴凧、風にまかせて
ふわ〳〵と、落つれば駈寄る腰元はした、

ト此文句の内よき程に、風の音はげしく、件の奴凧切れたる心にて吹がへの奴凧差がねにて下手の櫻の臺みきにかゝる。日覆の凧を是にて引上げる、皆々駈けよる。薄雪姫見て思入、まがき心嬉しきこなし、又調べになり、

珍才　アレ〳〵、凧が落ちました〳〵。

腰六　所にこそよれ、御寢所のお庭先、

腰七　爰へ落ちたは、よい辻占、

腰八　今宵の御首尾も、定めてよい事でござりませう。

腰三　左樣々々、妻平殿によう似た奴凧、まがき殿、しわにせぬやうに大事に抱いて寢やしやんせ。

まが　是はしたり又しても、其樣な事ばッかり、おまへ方もたしなましやんせ。其樣な噂がひよつとお上へ聞えたら、姫君樣も此まがきも、大抵の事ではござんせぬ、モウ〳〵其樣な話しは、決してして下さんすな。ハテ、合點の行かぬは、アノ切れ凧。

皆々　ホンニ何やら、糸口に、

腰三　ドレ〳〵、私が取つて參りませう。（トしのぶ摺の封じ文付たる件の凧を持來り、）モシ、お悦びなされませ、文がござりまするぞえ。（トまがき取つて開封して、）

まが　モウシ姫君樣、思ふお願ひが屆きましたやら、あなたの戀人左衛門樣より、いよ〳〵今宵忍べ

忍ぶと、歌に通はす合圖のお文。（ト件の文を薄雪姫に渡す。薄雪姫嬉しき思入。）

薄雪　そんならあなたは、逢ひなう。（ト文を見て）いよ／＼變らぬお心か。

まが　何と御覽じませ、御器量よければ、何から何まで、お氣に通つた左衞門樣。

腰三　アノ奴凧に文附けて、姫君樣のお傍まで通路さすとは、矢文は愚か雁金の文に勝つた御發明、誠に感心。

まが　御念が屆いたあなたへ玉章、嘸お嬉しう、

皆々　ござりませう。

〽云へば姫君嬉しげに、肌身に添へてうツゝなく、

薄雪　思ひ思うた左衞門樣、今宵逢ふとの約束は、結ぶの神の引合せ、暮れるというても今暫し、幸ひ月の朧影。

まが　何かの事も打解けて、寢物語りの板びさし、忍び逢ふ身の戀の關、

腰六　人目ふせぐはいつもの爪琴、

腰七　爪音高くまぎらして、

腰八　外へ洩さぬ、

腰三　工夫が肝腎、
まが　先づそれまでは姫君樣。
薄雪　そんならまがき、皆の者。
まが　まづ、
皆々　入らせられませう。（ト唄になり、薄雪姫先にまがき皆々附いて奥へはひる。腰元の三殘り、）
腰三　サア〳〵、是からはお姫樣の戀人を待つばかり、成程たとへに云ふ通り、男やもめにうぢとやら、女やもめに花が咲くとは、よう言うたものぢやなア。お姫樣には左衞門樣、まがき殿にはアノ妻平。（ト以前の鳳を取り）ほんにかういふ男なら、まがき殿が惚れるも尤も、繪で見てさへも惡うないなア。

ト見惚れる、此内珍才出て、後より腰元の三に抱きつく。

珍才　おれぢや〳〵、ちんだ〳〵。（ト顏を出す、腰元の三見て、）
　誰ぢや〳〵。
腰三　誰かと思へば珍才どの、ちんだ〳〵もないものだ、猫の化けたのめ。

ト振放し、珍才のあたまをびつしやり打つ。唄になり、腰元の三ツイと奥へはひる、珍才後に殘り、

珍才　アイタ、、、、うつかり常談も言へねえ。コレサ〳〵、俺も行かう〳〵。

ト後を追つてはひる。）

〽奥をさしてぞ走り行く、

〽はや入相の鐘の音も、合圖と定む園部の左衞門、（ト本釣鐘のかしらを打ち、唄になる、）

唄〽長閑なる春の心に誘はれて、花の下行く薄氷、解くるやきのふ今日は又人待つ宵の鐘の聲、

ト此琴唄の終り、花道より左衞門、好みのこしらへにて出て來り、あたりを見廻し、よき程に舞臺へ來て、枝折戸の外に佇む、

〽まがきはそれとさし心得、緣を放れて飛石傳ひ、（ト奥よりまがき出て、あたりを見廻し、左衞門を見て、）

まが　左衞門樣か。

左衞　ア、コレ。（ト押へ、左衞門あたりへ思入、）ひそかに〳〵。

トまがき枝折戸を明け、左衞門を内へ入れる。

まが　幸ひあたりに人目もなければ、今宵の御首尾も。さてまあけふのお文の御趣好、お姫樣にもこ

となないお悅び、誠に感心致しました。

左衛　さればサ、唐土の韓信は、いかのぼりで城內の道のりをはかりしかど、此の左衛門は凧にて薄雪殿の寢屋の內、踏分け來たれど館の樣子は。

まが　ハテ、お心遣ひ遊ばしまするな、其のお仲立は此のまがき、人の目つまにかゝらぬ爲め、思ひ付いたる此寢所、何事も私にお任せあつて、姬君のお傍へ早うお越しなされませ。

左衛　萬事物なれたそなた、よいやうに賴みます。

まが　サ、斯樣申す內も心がせく、少しも早う左衛門樣。

左衛　まがき殿。

まが　サア、お出でなされませ。

〽心利かしていそ〳〵と、立てきる障子みつ〳〵に、忍び逢ふこそわりなけれ。

トまがきこなしあつて、左衛門を連れ上手へはひる。

〽折も折とて入來る、秋月が家來澁川藤馬、

ト花道より澁川藤馬、衣裳上下大小顏へ膏藥を張り、出來り、

〽此頃の生疵にて、顏はまだらに膏藥だらけ、ちが〳〵と一ト間に通り、

ト舞臺へ來り、

藤馬　チト折入つて奧方に、密々お話し申度い儀がござつて參つた、誰ぞ取次いでくりやれ。

ト奧にて、

腰三　ハイ〳〵、畏まりました。（ト出て來る、藤馬よろしく住ふ。）どなた樣でござりまする、ヤ、あなたは澁川藤馬樣。

藤馬　ア丶イヤ、そなたでは用向が判らぬ、まがき殿を呼ばつしやい。

腰三　ハイ〳〵、まがきどの〳〵御取次がござんすぞえ。　ト奧へ向ひ言ふ、奧にて）

まが　只今それへ參りまする。（ト調べになり、出て來り、）

藤馬　イヤ、まがきどの、奧方に內々御談じ申し度い儀がござる故、夜中ながら參上致してござると、お傳へ下されい。（ト此內腰元皆々、燭臺煙草盆など持來り、）

〽思ひがけなき澁川に、まがきもはツと胸にてたへ、ひよんな所に藤馬面と、
思へどわざとそらさぬ顏、

まが　ヲホ丶丶、どなた樣かと思うたれば藤馬樣、お顏の疵でさつぱりと見違ひました、あなた、そりやまアどうなされたのでござりまするえ。

藤馬　されば聞きやれ、園部左衛門が奴めを、六波羅の御所で手ひどい目に逢はしたれば、其意趣返しを清水で出ツくわし、あつちは大勢こつちは某只一人、日頃手練なしたる當ての柔術で半死にさせたが、卑怯未練な奴め、組敷れながら俺が顔を熊鷹爪でかいて〳〵かきむしつたその疵跡、何ぼ兵法の達人でも、ア、やられては多勢に無勢と申すもの。

へ口から出次第まつかいな、面を抱へて間に合ひに、まがきもをかしさこらへかね、

まが　ほんにあなたも、日頃の御氣質にもお似合なされぬ、あちらからあなたへ疵を付けるなら、あなたも先を打すゑてあやり遊ばせばよいになア。

藤馬　サア、そこが下世話に申す、上手の手から水が洩るのたとへでござる。イヤナニ、まがきどの、それに就けても先達ては清水にて出逢うた故、よい折からと我等が心のたけ申入れしに、さりとては情ない、胴慾な、返す〳〵も恨みでござるぞ。イヤ然し、それは私事拙者が使者に參りし趣き、奥方へ申入れて下され、まがき殿、頼み申すぞ。

まが　畏まりました、只今お逢ひ遊ばされませう、其間あなたは是にてお煙草なと、御ゆるりと召し上りませ、ドレ、私は申上げて參りませう。

〽まがきは奥へ立つて行く、（トまがき腰元皆々附いてはひる、）

〽藤馬は座敷にとほんとして、（ト煙草を飲み、灰吹をはたき、）

藤馬　さて〳〵、返事の長い事、待たせるぞ〳〵、イヤ何方でも女中と申すものは、埒の明かぬものぢやテ。

〽見やる障子に、影法師、（ト上手の障子に灯り寫り、腰元皆々小聲にて、）

腰皆　サア〳〵、しつぽりとおしげり遊ばしませいなア。

〽左衞門樣姫君樣、女中の聲々聞ゆるにぞ、さてこそ噂に違はずと、聞耳立つる後より、幸崎の奥方まがき伴ひ立出る、

ト藤馬は手の障子へ目を附け、聞耳を立てる、此折奥より幸崎奥方打かけいせう、片はづしにてまがき附添ひ出て、

奥方　ヲヽ珍しや藤馬どの、夜中といひあわたゞしき彼の御入來、なんの御用で只今頃。

藤馬　アイヤその樣にお氣遣ひな事ではござらぬ。さつそく申上げ度き仔細と申すは外でもござらぬ、御息女薄雪樣の御身の上、かね〴〵主人申し受け度き望みなれば、身不肖なれども此の藤馬が仲人にて、御婚禮の取結び度い、御存じの通り、武藝に於ては肩を並ぶるものゝなき大膳

どの、聟に取つても不足はあらじ、拙者が此事申さん爲め、夜中ながらわざ〳〵參つた、何卒おうけのお詞を賜はらば、諸川も大慶、此段ひたすらお頼み申す。

〽いんぎんに相述ぶれば、

奥方　これは〳〵、何事かと存じましたれば、まづは承つて母の安堵、人並ならぬ娘を御懇望下さるは、親々の悦びいかばかり、さりながら夫伊賀守は佛參、歸り次第娘にもとくと云聞かせ、成る成らざるは此方から、あなたまで御返事を致しませう。

〽寄らず障らぬ挨拶に、藤馬は傍にゝじり寄り、

藤馬　憚りながらそりや惡い御合點、父御の御耳に入れてはもう表向き、娘は母に附くと下世話にも申せば、御母公の呑込みで、何卒只今宜しき返事承はり度い。

まが　でも殿樣のお留守、其御返事は御即答には。

藤馬　イヤサ、急に御返事承り度いと申すも、藤馬がお爲めを存ずるから。

奥方　此方の爲めとは、何が此方の爲めでござるか。

藤馬　さればサ、大名でも町人でも脊丈延びた娘には、えて虫が附きたがり、忍び男を拵らへ親々の顏を汚すは世間にまゝある習ひ、そこを拙者がお察し申して、急に御相談を申すは、何とお爲

めであるまいか。

奥方　ヤア默りをらぬか、さては娘薄雪に忍び男があると當附けて云はるゝか、幸崎伊賀守の娘粗相云うたら此の母が許さぬぞ。

藤馬　イヤお許しなされうがなさるまいが、まんざら無い事は申さぬ、お望みならばお目に掛けうか。

奥方　ヤア、推參なる娘の詮議、夜中といひ夫の留守、來るさへあるに屋敷の内を家さがしする氣か。

藤馬　さあ、さうでは無けれど。

奥方　見事して見よ、女ながらも手は見せぬぞ。

へ長押に掛けたる長刀おつとりかけ向へば、さしもの藤馬も奥方の、氣色を恐れ散亡し、

ト奥方むつとしたる思入、後のなげしの長刀を持ちきつとなる。是れにて藤馬二重よりおりてふるへる。

藤馬　ア、コレサ奥方、何も敢て詮議を致すとは申さぬ。腹立ちめさるな、モシ左様な不義がひよつ

と出來た時には、親御寮の難儀になる故、緣附かるゝがよろしからうと申したぢや。なにな
に、無理にと申した譯ぢやござらぬ、左樣ござらば拙者は是れよりお暇申す。

ト枝折戸の外へ出て、

〽いつさんに後を見ずして立歸る。（ト藤馬足早やに花道へはひる。）

〽母上長刀がらりと捨て、ツカ〳〵と駈け寄つて、障子さらりと引あけ給へば、
まがきははツと氣も消え〳〵、內には二人もぐんにやりと、思はず布團引披
り、二度の汗をぞ流しける。

ト奥方長刀を捨て、上手の障子を引あけると、左衞門薄雪姫結構なる布團夜着を着て、間の惡き思入。

奥方　アヽコレ左衞門殿、隱るゝ事はちつともない、娘も爰へちやつとおじや叱りはせぬ、ハテ、よ
い事をいうて聞しませう。

〽常に變らぬ母上の、詞にいとゞ薄雪も、左衞門ともに氣味惡く、顏も得上げ
ずひれふせば、

ヲヽ二人共に親も許さぬ忍び合ひを、此母に見咎められ、當惑は尤もぢやが、今の藤馬が云分

一々聞いてか知らぬけれど、娘を持つた親々のよい覺悟、此事世上へ聞えては闔部幸崎の家の瑕、そこを思うて此母が、今二人を夫婦にする。

兩人　エヽ。（ト兩人びつくりする。）

奥方　ヲヽ嬉しからう、母も嬉しいわいなう。

　　へ思ひがけなき一言に、娘もびつくり左衞門も、夢に夢見し如くなり、

左衞　御兩親のお許し受けしは格別、お許しなきに忍び逢ひしは我が誤り、眞平御免下さるべし。

　　へ恐れ入つてぞ詫びければ、

奥方　さればいの、娘がいとしがる左衞門どの、誤りにせまい爲め、今宵假の取結び。

まがき　モシ、お悦びなされませ、奥樣よりお許しうければ、世間晴れての御夫婦でござりまする。

薄雪　サア、母樣は其のお心なれ、父上が何とおつしやらうやら、私やそれが氣遣ひにござりまする。

奥方　アヽ、いやる事わいの、そこにぬかりあつてよいものか、よし又父御がいかやうに仰しやらうが、思ひ合うた仲、夫婦にするを何と仰しやらうぞ、表向きの祝言は追て、今宵はざつと內々の祝言を取結ばん。まがき、何はなくとも、銚子土器のし昆布。

まが　畏まりました、善は急げと申しますれば、ドレお盃の用意を致しませうか。

ト調べになり、まがき奥へはひると、引違へて腰元の六蝶花形の銚子を持ち、腰元の七も同じく銚子持ち、腰元の八のし昆布をのせ、持ち出て來り、眞中へ直す。

奥方　何はなくとも内祝言のまなび、娘が初めて聟殿へさしてたも。

へ詞に飾る大嶋臺、聲高砂や住吉の、濱松の聲も共々に。

まが　奥樣の御前で御祝言の御杯、

皆々　此樣なお目出度い事はございませぬわいなア。

奥方　目出度い。

ト薄雪姫杯を取上げ、飲んで左衛門にさす、兩方より腰元ついて、

へうたいさゞめく折からに、

ト杉戸の内より腰元の六ぼんぼりを點して出て、

妙六　御母上樣へ申上げまする、殿樣には御歸館遊ばしましてございまする。(ト左衛門是にて思入、)

左衛　ナニ、主人にはお歸りとな。

奥方　ハテ、何事も内々、殿のお歸りとあるからは、ソレ銚子土器を。

〽取片付くる折からに、主人幸崎伊賀の守、佛參戻りの禮服調へ、しづ〳〵と座に直り、

ト此文句の內、下手の杉戸より、伊賀守衣裳上下大小にて出て來り、

まが　殿樣には暮合迄には、お戻りあらうと存じの外、只今御歸館、

皆々　遊ばしましたか。

伊賀　されば聞きやれ、今日は取分け天氣もうららか、菩提所の境內の櫻を詠める內、老僧の招きにより、方丈に於て茶のもてなし、それ故に殊の外遲刻に及んだ。（ト左衞門を見て、）これはこれは左衞門殿、今日はようこそ入來、親御兵衞殿にも此の兩三日、面會も致さぬがお變りもなされぬか。

〽詞に左衞門取あへず、

左衞　ハツ、其許樣にも御壯健にて。

伊賀　何は然れ、ようこそお出で、サヽ是へ〳〵。イヤナニ左衞門殿、いつぞは其許へ申出さんと存ぜし所、幸ひよき折からなれば、さつそく乍ら申し入れる。兼て奧とも相談いたし、同じ嫁入

りさせるなら、園部氏へ遣し度く、此儀兵衛殿へ仲立を以て申入れようと存ぜしに、公用に取りまぎれ、未だ御親父へも申入れぬが、もし御縁もござつたなら、ふつゝかな娘なれど、此儀御得心下されうや。

左衛　これは／＼、数なりませぬ拙者めに、御愛女を下されんとの御厚志のお詞、忝うはござれども、父母許さねば嫁取らずと、父兵衛が詞次第、何しに違背致しませう。

奥方　娘聞きやつたか、今日からそなたの望み通り、

まが　ほんに粋な大殿様、お姉様ちやつとお禮を仰しやりませ。

〽つきやられても赤らむ顔、嬉しさ餘り詞も出ず、手を合すのが精一杯、悦び給ふ折からに、

呼ビ　上使。（ト呼ぶ。）

伊賀　なに／＼御上使の御入りとな。ソレ、お出迎ひの用意致さん。

奥方　ソレ、式臺より御上使の御案内。

腰元　畏まりました。（ト調べにて花道へはひる。）

奥方　まがきを始め腰元、御馳走の用意をしや。

まが　畏まりました。

〽皆々奥へ、

呼ビ　上使。

〽御上使ぞうと入來るは、六波羅の執權葛城民部、刀箱たづさへ秋月大膳、園部兵衛、それと見るより出迎ふ幸崎伊賀守、

ト序の舞になり、花道より葛城民部、衣裳上下にて刀箱をたづさへ、後より秋月大膳燕手衣裳、上下續いて園部の兵衛、衣裳上下にて出て、花道に居並ぶ。

伊賀　俄の御入來と承り、お出迎ひ仕る、御上使樣には先づ〳〵是へ、」

奥方　お通り下さりませう。

大膳　役目なれば罷り通る、イザ御兩所、

兵衛　まづ〳〵。

民部　許しめされい。

〽しづ〳〵と打通れば、奥方始め不審顔、思ひがけなき園部左衛門、俄に隠るる方もなく、御臺親子の人々もけしきに驚くばかりなり、民部席を改め、

今日六波羅より仰せを蒙り、斯く云ふ葛城民部之丞罷り越したる其仔細は、當家の娘薄雪姫、園部左衛門兩人に御詮議の筋あつて、園部の兵衛は館へ召寄せられ、お糺しありしその條々謹んで承れ。

〽さも嚴重に云ひ渡せば、

伊賀　園部の左衛門並びに娘薄雪が儀に付き、六波羅殿より御詮儀とは、輕からざる御仰せ、其の仔細つぶさに仰せ聞けられ下さりませう。

民部　イヤナニ兵衛殿、六波羅よりお咎めの段々、子息左衛門に御自分が云聞かさるゝか、但し民部が申し渡さうか。

〽聞きもあへず秋月大膳、

大膳　イヤ〳〵、それは入らぬ遠慮、殊に兵衛殿も我子の詮議は仕にくいもの、然し悪い所に左衛門が居合されて、云譯が立つまい、近頃笑止千萬な。

〽おため顔にて焚付くるを、耳にも入れず席を改め、左衛門に打向ひ、

民部　左衛門殿、サヽ是れへ〳〵、ハテサテ是へといふに。

左衛　ハヽヽツ。（ト本調子の合方になり、左衛門眞中におづ〳〵と出る、民部思入あつて、）

民部　いかに左衛門殿、承れば其方是れなる薄雪と心を合せ、天下を調伏せらるゝ由、何故かゝる事ども計らはれしや、サアまつすぐに白狀めされ。

左衛　コハ何故に、左樣な事が上聞に達せしやらん、左衛門身に取り、毛頭覺えござりませぬ。

民部　サア、其儀と申すは、此度六波羅の御用につき、來國行に打たせたる影の太刀、その方が調伏のやすり目に違ひなしと事極まり、何處の誰が謀叛に與して、鎌倉を恨み奉るぞ、有樣に白狀せよ、云譯あらば我々が聞屆け、其趣き言上なさん。（ト持來りし箱の劍を出し、）是れこそは其方が奉納したる影の太刀、サ、立寄つて篤と見られよ。

〽差出せば手に取上げ、よく／＼見ればこはいかに、以前見しとは違ひし鑢目、はつとばかりに氣も顚倒、初めて聞きし幸崎も、暫し呆れて詞なし、

ト民部左衛門の前へさし出す、左衛門取上げ、よく／＼見て思入。伊賀守こなし、

大膳　コレサ、左衛門、何をうぢ／＼、よも知らぬとは云はれまい。

民部　コリヤ左衛門、よつく承れ、鎌倉どのを調伏のやすり目、入れさせしは大罪とや云はん、言語に絕えし不屆者めが。然し未だ若年の其方、殊に薄雪姬を頼み、かゝる企み致すべきやうなし。サア、なぞとゆるがせの詮議にあらず。ナ、うろたへる所でないぞ、申開きの筋あらば、

性根をすえて申聞かせよ、ド丶、どうぢや。

左衛　御上使様の御意、いちく御尤もには御座れども、斯く納まりし世に、何恨みあつて調伏仕り奉らんや。弓矢神も照覧あれ、此の左衛門が身に取つてみぢん毛頭覺えなし。察する所某に、意趣ある者の仕業よな。

〽云はせもあへず父の兵衛、ツカく とさし寄つて、我子のたぶさ引つかみ、ぐつとねぢあげ、

ト兵衛こらへかね、ツカく と左衛門の傍へ寄りて引よせ、

兵衛　おのれ憎い奴、是れ程の事を仕出しながら、此期に及んで意趣ある者の仕業と、武士の口から未練な事ようぬかした。云譯なくばなぜ潔く云譯せぬ、アノ乭な、不所存者めが。

〽立派にいへど子を思ふ、心は同じ伊賀守、

伊賀　さな云はれそ兵衛殿、思ひも寄らぬ御子息の災難、察する所讒者の企み、又娘迄御詮議の越度と申すは證據ばし有つての事か。

大膳　遁れぬ證據、是れにあり。

〽懐中より姫の手跡を取出し、〔ト前幕の文を出し〕

これ見られよ、刄の下に心といふ字を書き、左衛門樣參る谷陰の薄雪より。是が左衛門と一緖といふ慥かな證據、御息女の手跡見覺えがあらう。

ヘと差出せば、姬は覺えの判じもの。

伊賀 姬、そちや覺えがあるか。(ト秋月大膳奧方の前出す、薄雪姬と顏を見合せこなし)

奧方 これ娘、大事の場所ぢや、氣を慥かに持ちや、覺えなくば云譯しや。

ヘ早う〱と心をあせり、突出せばやう〱に顏をあげ、

薄雪 皆樣の手前も恥かしい事ながら、是なる左衛門樣にふとなじみ、いつ〱の夜に忍び逢はんと書いて送る合圖の文、人の見るをいとひ刄を畫き下に心と書いたるは、忍ぶといふ字、谷陰の春の薄雪とは、打解けて忍び逢はんと心を知らする判じもの、愚かな女の筆ずさみ、お目に留まつてお咎めに逢はうとは、夢ゆめ知らぬ母上樣。

大膳 イヽヤ、その云譯暗い〱。斯ういへば大膳がいち先だつてさゝへこさへするやうなれど、御上意なれば猶以て宥免ならず。コレ此刄の下に心といふ字書いたるが、お咎めの第一、心は卽ちなかごと讀む、刀のなかごに調伏のやすり目を入れさする、互ひの相圖に逢ふまじ。左衛門樣參る谷陰の薄雪より、今こそは雪氷と谷かげに身をひそむるとも、後には雨あられとなつて、

名を萬天にあげよと左衞門を祝せし判じものと、六波羅殿の御眼力、ぐつともすつとも云譯あるか。

〽理を非に曲げる大膽が口先に云廻され、流石の母もハアハツと、娘に取付きすがり付き、

奥方　何と思うてあのやうな、大それた事をしてたもつた、モウ此上は外に云譯ないか、あるならばあると言や。無ければ咎めはのがれぬわいの。萬一そなたの身の上に、モシもの事があつたらば、此母はどうせうと思やるぞ。其方ばかりか父上まで、御身に凶事は知れてある、情ないこと仕出せしよなア。

〽膝に引寄せ抱きしめ、人目いとはず泣きたまふ、伊賀守詞を荒らげ（ト伊賀守こなしあつて）

伊賀　エヽ未練な女房、不所存な娘に何くり言、見苦しいそこ放せ。

〽にらみつければ、（ト此内左門門思入あつて）

左衞　イヤ、御息女の知られし事でなし、云譯立たねば科は左衞門たゞ一人、さり乍ら今となつて何を證據に云譯致さんやうもなし。此影の太刀を奉納の砌り來國行も同道、拙者が業でない事は

國行がよき證據、此の者も清水より何處へ行きしか、今に於て行方知れず、彼が在所を捜すまでを、何卒よろしくお取りなし。（トいろ〳〵頼むこなしあつて民部さま、御前よしなに。

民部大膳へこなしあつて、挨拶せざる故、

大膳 大膳樣、偏にお願ひ申しまする。

〽むじつの難に氣も消えて、途方に暮るゝばかりなり、大膳心に笑をふくみ、

大膳 斯程の事を企みながら、今更ら云譯なきまゝに、我々にとりなしくれよとは、何と民部殿、俗に申す盜人たけだけしいとは、左衛門めが事でござる。ムヽハヽヽヽヽ。

左衞 モウ此上は。

〽刀の柄に手を掛くれば、民部聲かけ、

民部 ヤレ待たれよ、左衞門、うろたへたか、今其方が切腹なせば、身の言譯が立つと思ふか。

左衞 サア、それは。

民部 腹切つて相果てなばいよ〳〵汝が罪となるわ。

左衞 サア。

民部 一途にはやるは尤も乍ら、今死ぬる命をながらへ、國行が在所をさがし、身の潔白申し開く所

存はないか。

左衛　ム、。

民部　ハテ、止まりめされい。

〽詞も終らぬ其所へ、案内につれて清水の、とゞろき坊の使僧、國行が死骸を戸板に載せて持來り。

トバタ〳〵にて、花道より同宿先に立ち、後より坊主二人國行の死骸を戸板に載せ荷ひ出て來り、

轟坊　ハツ、申上げまする。

民部　何事ぢや。

轟坊　此死骸本堂のちりおとしに捨置き候故、夜中ながら六波羅へ御注進申上げましたれば、此儀に就いて各々方、是へ御出張故持参いたせとのお差圖ゆゑ、其まゝ死骸持参仕つてござりまする。

〽と訴へれば、何事やらんと驚く人々、それと知らねど胸にこたへ、心ならねば左衛門立寄り、よく〳〵見て、

左衛　ヤ、、コリヤ國行が此の體は。詮議の綱も切れ果てたか、ハア、。

〽はツとばかりに泣きゐたる。

民部　誰そあるか、あかし持て。（ト奥にて、）

腰皆　ハア、。（ト兩人雪洞手燭を持ち出て下手に控へる。）

〽民部しづ〲下り立ちて、（ト死顔の傍へ手燭を出す、民部よく〲見て）

民部　コリヤ、粟田口の鍛冶、來國行にまぎれなし。

〽疵口とつくと改め見て、

はて心得ぬ、薄手も負はず死したる有樣、のんどに立ちしその小柄、どうやら覺えの、（トよく見て、）慥に大膳、イヤ、大膽不敵な曲者もあるものでござる。（ト大膳を尻目にかけ、）イヤナニ、寺僧達、早速の訴へ出來した〲。科人は追て此方より詮議せん。まづ死骸は其まゝ取片附けい。早く〲。

僧皆　ハア、。（と死骸を持ち花道へ皆々はひる。腰元兩人奥へはひる。）

〽民部が詞に隨うて、使僧は寺に歸りける、大膳片頰に笑をふくみ、

大膳　斯樣な事は昔よりまゝある事、佐々木三郎盛綱殿藤戸の先陣に臨み、浦人に淺瀬を習ひ、又もや人に語らんと手にかけ、海へ沈めしとは誰知らぬ者もない、此國行も其通り、調伏のやすり

目を入れさせ、密事を人に語らんかと切殺し捨てたりと、六波羅殿のお疑ひ、一をうつて萬を知るでござらう。是にて言譯の節も、さらりと切果てたわい。

〽聞くに左衞門胸とゞろき、頼みも力も落果てゝ、二人の父は默念と思案にくるれば秋月大膳、

二人の科と極まらば、其親たる園部幸崎親子は同罪、おことらへも疑ひは掛りゐるぞ。

兵衞　コハ存じ寄らざる其一言、倅が所存はいざ知らず、忠臣無二の園部の兵衞、御不審蒙むる覺えはござらぬ。

伊賀　伊賀守も其の通り、何恨みあつて天下を調伏致さんや、娘はいまだ幼年、何しに惡事を。

大膳　だまれ幸崎、薄雪姫は幼年でも、不義働いた園部左衞門、麻につるゝよもぎ、朱に交はれば赤くなる。不義密通は天下の御法度、男女七歳にして席を同じうせぬ聖賢の敎へ、不義の相手と其親が、同席するは胡散臭い、是れも言譯あるぢやまで。

伊賀　サア、それは。

大膳　サア、

兩人　サア〳〵。

大膳　悪事につながる園部の兵衛、言譯あらば致してお見やれ。

〽あくまで募る佞辯に、兵衛は悴をかつとねめつけ、

兵衛　云譯なきもおのれ故、親の許さぬ不義徒ら、かゝる椿事を引出す曲者、兵衛が手にかけ拷問するぞ。

伊賀　某とてまつその如く、悪事の疑ひうけたる娘、餘人の手から白狀させては、猶々以て家の恥辱。ハツ御上使へ申上げまする、疑うけたる娘薄雪。

兵衛　御不審蒙むる悴左衞門、互ひの親へお預けあらば、

伊賀　日數百日の其間に、事明白に相糺さん。

兵衛　御上使樣の御賢慮にて、

伊賀　此儀偏に

兩人　願ひ奉りまする。

〽聞きもあへず、

大膳　イヤ、そりやなるまい。子の詮議を親がなして、もしもの事のある時は、詮議の筋を失ふ道理、又ゆるがせになる時は、人の疑ひ立ち申すぞ。中を取つて兩人とも此の大膳が預かり、隨

分といたはり、白状させんがよき分別。

〽おのれが得手に引きかけて、ふわとのせてものらぬ民部、

民部　ムヽ、成程言分尤もなれども、親々が願ひもだし難く、某が存ずるには、左衛門は幸崎の家に預け、娘は園部の家と、両人の子を取替へて詮議あらば、依怙贔屓の沙汰もなく、双方の願ひも立つ道理、何と左様ではござらぬか。

大膳　イヤ、假令取替へ預けても、親々の詮議では白状さす事覺束ない、矢張り二人は拙者が預かり、きつと詮議致すでござらう。

民部　ハテ、貴殿がたつてと云はれては、どうやら日頃の意恨、イヤ、日頃の懇志、却つて詮議が仕にくうござらう。

大膳　デモ、親々へ預けた上、モシ取逃しでもした時には。

民部　ハテ、其時には此民部、切腹致すぶんの事、貴殿の不念にやさせ申さぬ。

大膳　デモ、それでは。

民部　ハテ、いらぬ差配控へめされい。

〽流石の大膳言句も出ず、面ふくらしてにがり切つてぞ控へゐる、二人の親も

心を感じ、忝け涙にくれければ、母上娘に取付いて、

奥方 そんならそなたは、園部殿へ行きやるか、産れてより此方一日片時も親の手を放さぬに、随分云譯して、目出度う再び此母に、息災な顔見せてたもや。

〽涙の限り聲限りなげゝば共に薄雪も、母に取付きすがり付き、どうと伏して泣居たる、まがきは一ト問をまろび出で、涙の隙より手をつかへ、

ト此文句の內、上手よりまがき出て思入あつて、

まがき 兵衛樣へお願ひ申しまする、何卒あなたのお情にて、姫君の御介抱私も共にお連れなされて下さりませ。此上のお慈悲お情けでござりまする。

〽手を合すれば、

兵衛 ヲヽそれ程の事は苦しかるまじ、願に任せ召連れ行かん。

〽何思ひけん民部、

民部 イヤナニ、左衞門、薄雪兩人共是へ。

兩人 ハアヽ。（ト小鼓の入りし本調子の合方になり、兩人へこなしあつて）

民部 いかに、若年と云ひながら、大膽なる事仕出して親々へ難儀をかける不所存者めが。そこらあ

たりに調伏などゝは、恐ろしの企て事、定めて誰ぞ頼み手が無くては叶はぬ、ぢやによつて兩人共に、引分けて親々へ預ける間、とつくりと思案致して、イヤサ、たつて罪に落さん其時は、そりや親々の威光を以て、詮議おどしも致されう。ナソレ、少しも早く白狀めされ。（トこなしあつて兩人に手を取らせ）「忘るなよ、ほどは雲井をへだつとも、空行く月のめぐり逢ふまで」。ナ、合點がいたか。

ト大膳と顏見合せ、取らせたる二人の手へ扇をかざす、兩人よろしくこなし、

コリヤ。（ト押へて）科人しかと（ト左衞門を伊賀守の方へ、薄雪姬を兵衞の方へ突きやり）預け申したぞ。

〽情もこもる民部が計らひ、兵衞詞を改めて、

兵衞 イヤナニ幸崎殿、民部殿の料簡にて、互ひに我子を取替へ歸るが、お身見事件左衞門が詮議仕りめさるか。

伊賀 おんでも無い事、云はずば拷問にかけて、此の幸崎が白狀さする。手前が娘薄雪も、御自分きつと召させるか。

兵衞 言ふにや及ぶ、火水の責にて言はして見せう。

伊賀　見事貴殿が、
兵衞　其許が、
伊賀　互ひに、
兵衞　互ひに、
兩人　云はして見せう。
ヘおもてはいらだつ親々も、しをるゝ心を取直し、互ひに我子を取替へて、引立て出づる園部の兵衞、
ト此内兵衞薄雪姫を引連れ、こちらへ來り思入あつて、薄雪姫兵衞の上へ廻る。兵衞民部大膳へこなし
兵衞　御上使には、先づ／＼お先へ。
民部　然らば左樣仕らん。大膳殿、イザ御同道。
ヘ云へど大膳空うそぶき、挨拶もなく目禮ばかり、引別れ行く親子のなげき、娘も園部も顏とかほ、じつと見るのが暇乞ひ、泣く／＼、
ト奥方左衞門をさゝへ、上手へ民部愁ひのこなし、大膳花道へかゝる。しをれたる薄雪姫を引立て兵

衞まがき附いて花道へかゝり、左衞門薄雪姫顔見合せ、思入あつて是を兵衞伊賀守奥方へだて、双方宜しく、

ト三重引張りにて、キザミ、

〽館を立つて行く。

幕

ト幕引付けると、幕外にて思入。三重の送りへ時の太鼓を冠せ、花道へはひる。後シャギリ。

三幕目　園部邸三人笑の場

役名　幸崎伊賀守、園部の兵衞、同左衞門、奴妻平、刎川兵藏。園部の奥方お梅の方、腰元まがき、幸崎奥方、薄雪姫、腰元等。

本舞臺三間の間、中足の二重舞臺、正面きれいなる襖、上の方九尺白骨障子屋體、いつもの所にたすきの入りし小高き枝折門、下手網代塀の見切り、柴垣、總て兵衞屋敷の體宜しく。爰に腰元まがき花桶を置き、花盆の山吹つゝじを活けて居る、左右に腰元一、二、三、四、何れも幸崎家の腰元にて居並び、合方四つの時計にて幕あく。と合方流し、腰元まがき花をためて居る。

一　何と浪路殿、月日の立つは早いもの、此のお中屋敷へお姫樣のお預かりにおなり遊ばしたは、此頃の樣に思うて居たが、其の花を見やしやんせ。

二　すべて草木心なしとは昔のたとへ、時節來たれば日影の桃も芽をふくとやら。

三　わたし等迄が此樣に、お附人に參りしも、お姫樣の身の上に、お煩らひでも出やうかと、朝夕お案じ申しまするわいなア。

四　ほんに、いつぞや清水で見た花とは事替り、まがき殿には嘸お心遣ひでござんせうなア。

まが　皆さんも知つての通り、最初お預かりにおなり遊ばすと、直に其場よりお附添ひ申し、參つて見れば座敷牢、私一人でもしもの事があつてはと、兵衛殿へお願ひ申し、皆さんもとも〴〵の御介抱、どうぞお身のあかりも立ち、早うおゆるしあるやうと清水の觀音樣へ、御願望の花拵へ、御利益あつて近々に、御歸館がありませうわいなア。

〽あす知らぬけふの命ぞたのみなき、とりわけ園部兵衛が御簾中お梅の方のもの思ひ、

ト合方になり、奥より園部の奥方梅の方打かけ衣裳にて、出て來りまがきを見て、

梅　皆の者は薄雪殿の傍を放れて花拵らへ、イヤナウ、嫁は子といひ預かりもの、モシ煩らひも

出ようかと、日に幾度か樣子を見舞ふ。コレまがき、心の付かぬ・續松、十種香、歌合せなどして、何故薄雪殿の氣をなぐさめぬのぢや、どうしたものぢやぞいなう。皆のものは次へいて、早う其の花拵へして、姬の心をなぐさめたがよいわいなう。

腰一　左樣なれば私共は、お次にて、

腰二　花拵らへを致しまして、

腰三　姬君樣のお心を、

腰四　なぐさめまするで、

四人　ござりませう。

〽打連れ奥へ入りにけり。（ト四人花を持ち奥へはひる。）

梅　コリヤまがき、けふは薄雪殿には、機嫌よいかや。

まがき　さればでござりまする、此のお屋敷へお出で遊ばしてより、どうぞお氣の結ぼれより御病氣を出すまいと、いろ〲となぐさめ申しましたれど、兎に角若殿樣の事ばかりおつしやつて、おむづかり遊ばすを、お諫め申してはゐるものゝ、お歎きあるもお道理ぢやと、心に思うて朝夕に、お付き申してをりまするが、おいたはしうてなりませぬわいなア。

梅　ヲヽ、さうあらう〳〵、またわしが逢うて姫の心の落着くやうに云ふ程に、サヽ、是へ伴うて
おじや。

まが　畏まりました。

〽問音づれて、明くる一ト間の座敷牢、日影さゝねど薄雪の、消えも果つべき
其の風情。

ト是れにて左右へ障子を引明る、内に薄雪姫[illegible]に住ひ、唐机にて書物を見て居る體、梅の方と顔見合せ、

梅　ヲヽ、薄雪どのか、機嫌のよい顔を見て、わしも嬉しうござるわいの。

薄雪　母御様、長々の御養育、親々の許さぬ不義いたせしが元のおこり、憎いやついたづら者と、お叱りこそある筈を、却つてやさしいそのお詞、生みの親とも思はれて、わたしや爰へ消えたうござんすわいナア。

梅　そりやモウ、血こそ分けねど嫁ぢやもの、何のわけへだてが有つてよいものか、さりながら名こそさゝねど、氏も正しい大悪人、調伏の謀叛人と恐ろしい企み事、何の薄雪どのゝ知らうやうはない。又我子を褒むるではなけれど、左衛門に限り道ならぬ悪事をせぬ心は、此母が知つてある、まことの無實災難とは鏡にかければ分かる事、小唄にも北山しぐれ曇りなければ晴れ

はぬがよいわいなウ。

て行くと、やがて世を廣うさゝんざ唄うて、互ひに身祝ひしませう程に、かたらずきな〳〵思

〽とありければ、

薄雪　モウおつしやつて下さりまするな、お舘へ移つてから、毎日毎夜のお心遣ひ、お情け餘つて冥加ない、道を申さば私こそお宮仕へを申す筈、却つてこちらへさかさま事、萬一言譯立たぬ其時は、いかなる罪に逢ふとても左衞門樣のお名は流すまい、笑はれまいと心に覺悟極めたればば、苦にする事はなけれども、今一度お顏が見たうござりまするわいなア。

〽聲より涙が先立てば、

梅　道理ぢや、尤もぢや、ありやうはわしも逢ひたい見たいわいなう。聞えませぬは、清水の觀音樣、よそ外の事でもあることか、眼の前で起つた大難、左衞門夫婦のものは知らぬ、これ〳〵ぢやと、ツイ一口おつしやつて下さつたら、此憂き目をば見まいもの。

ト泣き伏してこなし。

〽かゝる涙の折柄に、園部の兵衞しづ〳〵と立出で、

ト調べなり、奥より園部の兵衞、袴、大小にて出て來り、二重の上に住ひ、

兵衛　姫、昨夜より逢ひ申さず、替る事はなかりしか、さてお身達が落着、この程よりつく〴〵思ふに、こんりん奈落の底迄も、お身や倅が業でなく、斯様々々と訴へし、秋月大膳がけつく物臭しとは察すれども、それと云ふべき證據もなく、うか〳〵日數をふる内に、御沙汰きびしく六波羅どのゝ手に渡りては、いかなる責を受け、科なき身をやみ〳〵と、責殺されんも計られず、此頃心に此事ばかり、奥ともとつおいつ分別し、竊に此所を落す所存に一決せり、まがきも供の用意いたせ。妻平々々。

〽召さるればはッと答へて杖わらんぢ、旅の調度を取りしたゝめ、はや支度して畏まる。

ト妻平なまこえりの合羽、脚絆一本ざし、菅笠、杖、わらぢを持ち出て來る、兵衛見て、

妻平　仰せ付けられましたる通り、旅の用意調ひましてござりまする。（ト控へる。）

奥方　姫聞きやつたか、預かる方は一家一門多けれども、知行頂戴の衆へはやらぬ。婆はさもしい奴なれど心を見込んだ左衛門が、草履とらせた此の妻平、在所は大和當麻寺の近所ぢやげな、心安うあれが在所にいつ迄も。とハいふものゝ近い内よい便り聞かせませう、早う爰を退いてたも。サヽ妻平、まがき、諸共用意しや。

へ氣はせけど、しとやかに手をつかへ、

薄雪　末の末迄思召して、落ちよとある有難い其のお詞、あだおろそかには存じませねど、左衞門樣にうきめを見せ、わたくし一人助かつて、何ンとながらへをられませう、ならう事ならわたしがとゝさまと談合なされ、左衞門樣も一緒に落しまして下さんせ。（トすがることなし。）

梅　これはしたり、いかに年端が行かぬとて、愚かな事いやるぞいなう、そもじを大切に世話やくも、可愛い左衞門がいとしがる人ぢやによつての事、あれを殘して何のうきめを見しよぞいなう、その案じは氣遣はずと用意しや。コレまがき、何を其樣に思案顏、早う勸めて支度させぬか。

トまがき妻平に急いで云ふ、まがき思入あつて、

まが　イヽヱ、さうは。（ト立ちかゝる。）

梅　さうとは、姫を連れて落ちぬ氣か、ナゼ云付をそむくのぢや。

まが　ハツ、御氣をそむくではなけれども、姫君のお心にもなつて御覽遊ばせ、お預かりの姫が逃げかくれ致したら、お上のたゝり、殿樣の下手人は知れた事、よしまた駈落致しましたと申してお言譯が立つからが、取逃した越度にて、末程のお咎めはあなたさまのお身にかゝるは必定、

其辨へのない殿樣ではなけれども、嫁は娘ぢやと思召し、跡の難儀をお厭ひなされぬお慈悲心、親御樣の道は立つとも、嫁と云はれて一日の御孝行お宮仕へも申さず、大それたお世話の其上に又ぞろや、跡の御難儀に成る事を知つて、何と落ちられませう。お供せいとおつしやつても、モシ此事が御主人のお耳に入つても、よう落ちた、よう供したとは申されませぬ、やつぱり此儘さしおかれ、姫がかね〴〵所存の通り、生きるも死ぬるも左衛門樣と、御一緒の願ひを叶へて、お上げなされて下さりませ。

薄雪　ヲヽまがき、ようい うてたもつた。お志しをもどくではなけれども、こればつかりはお許されて下さりませ。

〽落つる氣色もなか〳〵に、云ひ出しては奥方も、重ねて詞なかりけり、兵衛は聲を上げ、

兵衛　ヤア、入らざる氣遣ひ、コリヤよめを娘と思へども、舅を親と思はずして、申す詞を聞かぬからは、もはや親子の緣を切り、七生迄の勘當ぢやぞ。

梅　アヽモシ、其のお腹立は御尤も乍ら、マア〳〵お待ちなされて下さりませ。コレ、薄雪どの。
ト立ちかゝるを、兵衛思入あつて梅の方に呑込ませる。

梅　娘と思うておつしやるを、いやぢやの何のといふと、それ又とゝ樣のお腹立、アレ〳〵アノお目を見や、あのやうにとゝさまがこはい顏して、おいで遊ばす程に、よう聞きわけて落ちてたも、それともたつて聞きわけなければ、わしもとも〳〵、親子の緣を切りますぞ。

ト薄雪姫思入あつて、

薄雲　ハアヽ。（ト泣落す。）

兵衛　ほえる程かなしくば、分別して落ちる氣か。

薄雪　サア。

兵衛　まがき、そちもすゝめぬか。

まがき　サア。

兵衛　サアとは、親子の緣切らするか。

梅　そんなら落ちるか。

兩人　サア〳〵。

兵衛　返答いたせ、ドヽどうぢや。

おどしかくれば、

まが　成程、お供いたしませう。

薄雪　ハイ、落ちまする程に、御機嫌直して、嫁ぢやとおつしやつて下さりませ。

〽どうと伏して泣き居たる。

梅　スリヤ、得心して落ちてたもるか。

薄雪　アイ。

兵衛　得心とあれば、早く支度させい。

梅　サヽ、早う支度しや、支度しや。

〽とり〳〵に心付け、ゆう〳〵庭におり立つて、歩むもあしのうらわかき、大事の姫を頼むは妻平、かねてまがきと二人が中、知らぬではなけれども、若いものゝある習ひと、許しおいたもけふの幸ひ、夫婦のもの、しつかりと預くるぞ。

ト妻平まがき嬉しき思入あつて、

妻平　コハめうがない奥様のお詞、若旦那様の奥様をお預けなされ、まがきどのと不義御赦免、女夫の者とはあんたる事、首と胴とは放ればなれになるとても、姫君様に指もさゝせることつちやアございませぬ、憚り乍大船に乗つたと思うてござりませ。

梅　ヲヽ、落着きやつたらとりあへず、そのまゝ無事の便りをしや。
薄雪　そんなら父上、母上様。
まが　かならず共に、御機嫌よろしう。
　　トまがき薄雪姫の身拵へをして、妻平付いて門口へ出て、
　さやうなれば、是より直に。
兵衛　コリヤ娘、無事で居やれよ。
三人　おさらばでござります。
　　〽影見ゆる迄のび上り、見送る名殘り行く名殘り、心ぼそさはより糸のわかれ
　　わかれと出て行く。
　　ト時の鐘、送りになり、まがき薄雪姫の手を引き、妻平付いて花道へはひる。兵衛梅の方跡を見送り
　　思入あつて梅の方兵衛に向ひ、
梅　ナウ我夫、お詞に随ひ、姫は首尾よく落せしが、あすにもお上より御沙汰あらば、一人殘つた左衛門は、何と至しませう、逃さうにも落さうにも、人手にあれば、もがいてもあせつても思うたばかり、モシ悲しいめを見ようかと、案じすごしがせらるゝわい。

兵衞　〽云ふも涙に曇り聲、兵衞ゆび折りて日をかぞへ、明日は辰の日禁中のお徳日、明後日は先君智覺院殿の御命日、此の兩日は裁斷の氣遣ひなし、此間に伊賀守に出會ひ姫が逃げたやら此方から逃したやら、いかやうにもてだてをめぐらし、對談の所いか程もあるべし、案じまい歎くまい。

ト梅の方愁ひのこなし、

〽と制する折から、當番の取次まかり出で、

ト花道よりバタ〳〵にて、袴侍一人出來り、花道にて、

侍　ハツ、申上げます、幸崎伊賀の守樣より御使者まゐりて、お次に控へてをりまする。いかゞ計ひませうや。

兵衞　ムヽ、それ氣遣はしい。是れへと申せ。

侍　ハツ。（ト引返してひる。）

兵衞　さて〳〵、思ひ寄らざるお使者。コリヤ〳〵、其方も隱れて居て、口上の趣立ちぎゝせられよ、茶の間のものどもへ、茶煙草盆の用意、早く〳〵。

梅　ハヽアイ。（ト奥方合點の行かぬこなしあつて、奥へはひる。）

〽待つ間程なく伊賀の守が使者、刎川兵藏、刀箱たづさへ出て來り、

ト鼓鼓調べになり、花道より兵藏衣裳上下大小にて、刀箱をたづさへ出て來り、直に本舞臺へ來て上手に住ひ、

〽兵衞が前に手を仕へ、

刎川　主人申越し候は、御預かりの左衞門殿御事、何とぞ申譯も立ちお命に別條なきやうと明暮願ひし所、今朝思ひ寄らず、影の御太刀に天下調伏の鑢を入れしは我業なりと、明白の白狀に寄つて、則ち調伏の太刀を持つて只今首を打つ、其の太刀の血の付きたるまゝ持たせ上げし上は、急ぎ其方の姫も同罪のがれず、此の太刀を以て首をめさるべし、おツつけ御貴宅へ左衞門殿の首を持參し、姫の首諸共六波羅へ差上ぐべしとの事なり。

〽聞いて大きに仰天し、（ト兵衞びつくりこなし。）

〽しなしたりとばつかりに、泣くも泣かれずたゞおろ〱、いかにと見ゆる奥方も、たもちかねてぞまろび出で、前後をわかず泣きたまふ。

ト奥より梅の方出て來り、兵衞と顏見合せ泣落す。

〽兵衞は心をしつかと定め、

兵衞　お使者立歸つて申されうは、御口上の趣承り、遣されし太刀たしかに落手仕る。おツつけ御出でと候へば、御返答は仕らず、姫が首打つて待ち申すと傳へられよ。

剣川　委細承知仕つツてござる。最早お暇仕つる。

兵衞　お使者大儀、

〽とありければ、使者もなく〳〵かへりける。

ト剣川兵藏こなしあつて、花道へはひる。

〽奧方涙をしやくり上げ、

奧方　テモマア情なや、定まる過去の因果ぢやと悲しい中に諦めて、料簡して見ても恨めしいは姫の父御伊賀どの、罪も同じ罪、預かるも同じ親と親、こつちは嫁を娘と思うて、影隱させ命助けんと世話をやく、其日もかへずあちらでは、首を切るとはとり〴〵の人心、よしや白狀したりとも、ナゼ打消して聞く程にはして下さらぬ。コレ聟は子ぢやないかいの、ヱヽ無得心なむごたらしい、是此の太刀の是れが、アヽ左衞門が血かいなう。（ト件の刀を引寄せ、血糊を見る事）

アヽ可愛いや〳〵なう。

〽あゝ可愛いやとばかりにて、二目と見もやらず、前後不覺に見えけるが、

南無阿彌陀佛の聲もろとも、（ト件の刀にて自害しようとする。）

さうぢや。

〽すでに自害と見えければ、兵衛おどろき刀もぎとり、

兵衛　ヤア死なうとはうろたへもの、子を殺された悲しみはそちばつかりか、兵衛は嬉しからうか ヤイ現在伊賀の守は子の敵、其上に又姫の首打つて待てといふ憎い奴、よし／＼面當てに追手をかけて、薄雪を目の前でかき首、きやつも一緒に、コレ、此の太刀で。

〽相伴させんと刀を見、（ト兵衛刀をきつと見て、）

ム、、是は左衛門が血、左衛門を切つた刀で薄雪も一緒に切る、科は同罪とはよく云つた。

〽立派に云へどまたゝきの、數いやまさるばかりなり、折から知らす表の方、

ト此時花道の揚幕にて、

呼ビ　伊賀守樣お入り。

梅　なに、伊賀守とや。（ト立つを止め、是にて兵衛きつとなり、）

兵衛　ム、、スリヤ幸崎の入來とな。コリヤ奥、御身是れにて挨拶致せ、恨みがましい卑怯な詞、必ずお言やるな、追手をかけて歸り次第、首討つて對面せん。（ト立上り、）泣顏なぞして、夫に

恥辱をとらすなよ。きつと申し渡したぞ。
へ叱りつけ、太刀引さげて入りにけり。（ト兵衛奥へはひる。）

呼ビ　お入り。
へ案内につれて伊賀守、實に武士の奥深く燒野のきゞす夜の鶴、居所の羊の歩み兼ね、首桶かゝへ座敷に通り、（ト伊賀守内へはひり、梅の方と顏見合せ、上手へ通る。）

伊賀　扨奥方、此程は御目にかゝらず、最前使者を以て申せし通り、あへなき次第嘸お歎き、兵衛殿には姫が首打ち召されしか、それ聞きたし。（ト梅の方だまつて居るゆゑ、）コレサ、とかうのいらへもなく、奥方どうでござる。われも姫が最期の體、未練にはなかりしか、承つて安堵致したい。なんとでござる。
へ氣をせく程面憎さと悲しさと不承々々にうなづくばかり、いかな返事もせざりけり。
ト梅の方默つて居るゆゑ、伊賀守思入あつて、
ムウ聞えた、左衛門を某が手にかけし鬱憤、もの云ふもむやくしと思召すか、尤も〳〵、物申すまい、何も御尋ね申さぬ。

〽と手をこまぬいてわき目もふらず、ぐつとも言はねばすつとも云はず、ひざを並べて座したるは、たゞ木像の如くなり、（ト兩人よろしく思入。）

〽折もこそあれ園部の左衛門、我家の内も我ながら我身を忍ぶ頰冠り、

ト時の鐘、花道より左衛門着流し大小頰冠りにて出來り、

〽門のそともに佇みて、聲をほそめて、

左衛　たそ居らぬか、左衛門が竊に參りしと、母人に申してくれ、誰れも居らぬか。

ト枝折戸をのび上り、覗くこなし、

〽端々を風が取次ぐ親子の緣、母は耳に聞きとつて、（ト梅の方合點の行かぬこなし。）

梅　ナニ、左衛門とや。

〽と立寄るを、

伊賀　コレ〱奧方お待ちなされ、左衛門は某が手にかけ首は此の首桶に、なんの〱立歸り來るもぞ、萬一見えたらばそれは狐狸、かならず寄せまい。それ〱まゐるまいとの契約を背きしは、人間ではあるまい、幽靈か、ヤア左衛門の馬鹿幽靈、最期に伊賀が勸めし一句忘れしか、

何んに迷うて爰へ來た、成佛の道を忘れしか、娑婆に名殘が惜しいか、うろたへ幽靈なくなれ、かへれ。

〽大音上げてよそに知らせば、打ちうなづき、折角來ながらすご／＼と、詞も交さず顏も見ず、親にも永離三惡道、行方も知らず出て行く、（ト左衞門にて引返し、花道へはひる。）

〽園部の兵衞、首桶ひんだかへ立出て、

ト兵衞奥より、首桶たづさへ、しづ／＼と出て來り、伊賀守を見て、

兵衞　ヤア伊賀どの、最前より嘸お待ち兼ね、先刻の口上に仰せ越されし通り、やう／＼只今支度いたした。

伊賀　ナニ、支度なされたとは、姫が首お打ちなされしか。

兵衞　お差圖でござるもの、打たいでか。

伊賀　ド、どれ、其の首お見せなされ。

兵衞　イヤ、先づ其許の御手にかけられし、倅左衞門が首から見たい。

伊賀　ハテ、異な事を辭讓する人、平にまづお見せなされ。

兵衞　イヽヤ、そこもとから。（ト双方より眞中へ首桶を出して）
伊賀　イヤ、貴殿から。
兵衞　イザ、
伊賀　イザ、
兵衞　然らば、一緒に。
伊賀　見つ、
兵衞　見せう。
伊賀　ヲヽ、兎も角も仕らん。
　〽二人の中に首桶ならべ、蓋引明くればこはいかに、互に一通入れたるばかり
　雨方首はなかりけり、伊賀守につこと笑ひ、（ト双方あきれし。思入）
　ヤレ、暫し、もしやと心苦しめしが、扨は使ひの口上をさとり、娘をいづくへか。
　　ト云ふをおさへ、
兵衞　アヽコレ、其あとは申さぬ事、其許の御心底の通り、現在たつた今、うら門まで。
伊賀　アヽコレ〳〵、其儀も云はぬこと、子を思ふ親心、是れ程割符が合ふものか、御恩は忘れぬ兵

衞殿。
兵衞　伊賀どの、御禮申上げる。
伊賀　イヤ、此方より。
兵衞　此方より。
〽イヤこれは〳〵。
いたみ入る。
伊賀　其の首桶に入れられしは、預かりものを取逃せし替り、親が一命召されよとの、願ひ書でござらうがの。
兵衞　いかにも、我首を入れる爲めの此の首桶、貴殿もさこそ。
伊賀　おんでもない事、かくの通り、シテ〳〵出仕のお支度は。
兵衞　ヲヽ、是ごらんぜよ、只今支度仕る。
〽片肌くつろげ胸おしわけ、兩肌ぐつとぬぎければ、腹かき切つて底の口、しつかと卷いてひつくゝり、肌着もあけに染みなせり。（ト兵衞肌をぬぐと、下に腹帶入れてあり、好みの通りになる。）

〽奥方おどろき、（ト奥方兵衛に縋り、）

梅　ナウ情けない、支度々々とお上下でも召す事かと思へば、そりや支度ぢやない死ぬのぢや、預り人を取逃して腹切らば伊賀さまも又同じ腹、あなた一人が早まつて、逃げたらよいでつい濟んだら、それこそお腹の切り損、死に損。

〽半分云はさず、

兵衛　ヤイ〱、だまれ。かりそめにも天下調伏といふ罪科、逃げたらよいで濟まうと思ふか、姫を逃さんと思ふそも〱より、腹切らんとは覺悟の前、兵衛一人腹切つたりと思ふか。ヤイ最前伊賀殿より送られし、影の太刀、左衛門が首を打ち血の付たる儘持たせやるとの口上、首討つたる太刀ならば物打より鍔元迄も、のりが付くべきに、切先に僅かののり、扨は首討つたりとはいつはり、命を助け代りに伊賀どののお腹を召されしとは、一ト目見てはや知つたり、お身も其の太刀手に取りながら、其氣も付かでよまひ事、それ程理にくらうて兵衛が女房と云はれうか。たはけ者め。

〽目に角立つれば、

伊賀　イヤさうでない、奥方の不審尤も、伊賀が支度も見せ申さん。

〽肩衣引のけ両肌ぬげば、同じく〳〵引巻いたり、

ト伊賀肌をぬぐと同じく腹の切口を布にて巻いたるなりよろしく

〽奥方いとゞ目もあかれず、（ト梅の方びつくりして泣きしづむ。）

梅　両方お心の合つた事、竹をわつて合せた様なと申さうか、子ゆゑに命をお捨てなされ、あなた方は恩愛もあり、慈悲もあり。

〽此の母には何がある。

親といふ名はありながら、是程も子に愛想なく、傍に居ながら我夫のお腹召したも夢うつゝ、子には慈悲なく夫婦の情は皆かける、後に残つて子に逢うて、云ひ譯は何とせん。

〽夫子を思ひ身をかこち、心の限り口説き立て取りつき縋り泣きければ、兵衛はことば押拭ひ、

ト梅の方すがり泣き落す、兵衛思入あつて、

兵衛　扨々二人を取替へ預かつた其夜より、今日迄の心苦しさ、笑ひと云ふ者とんと忘れた、伊賀殿もさこそあらん。

伊賀　心がゝりの子供は落す、かやうに覺悟極めたる只今の心安さ。

兵衛　六波羅殿への出仕は、直に六道の門出。
伊賀　イザ、悦びに一ト笑ひ、笑ふまいか。（ト梅の方泣伏して居る。）
兵衛　夫レよからう奥も笑やれ。イヤ推参もの、何吠へる事がある、夫の詞そむくのか。
　ハヽヽヽ、
　〽にらみ付けられ叱られて、涙一緒に、（ト三人一緒に顔見合せ。）
梅　ホヽヽヽ、
伊賀　ハヽ、
三人　ウフハヽヽヽ、（ト三人涙を隠して笑ふ。）
　〽虎溪の三笑と名も高き、唐土の大わらひ、
兵衛　それも三人、
伊賀　これも三人、
　〽劣りはせぬと打笑ふ、兵衛心づき、
兵衛　幸崎どの、時刻がうつる。
伊賀　イザ御同道仕らうか。

〽と立上れば、これナウ我夫待つて、これナウ暫しと引きとむるを、

兵衛　ヱヽ未練ものめ。

〽叱りつけるを。

伊賀　アヽこれ、兵衛殿、さなあらけなくしたまふな。（トなだめるこなし。）

〽倶にしをるゝ袖の露、萩叢の影よりも伊賀の守の奥方まろび出で、

ト此時下手柴垣の影より伊賀守奥方うちかけなりにて走り出で、

奥方　お話の次第はさつきにから、垣越しに皆聞きました。兵衛さま奥方様、娘をお助け、忝い。

梅　サア、其のお禮は此方からも同じ事、奥様何と思召す、此あじきないお姿を、知らぬ互ひの子が可愛さ。

奥方　せめて子供が世に出る迄、

梅　生きてござつて、

兩人　下さりませ。

〽互ひにとり付き付かるゝも、詮方なく〳〵時鳥、

ト是にて伊賀守の奥方は伊賀守、お梅の方は兵衛に縋る。

へ倶に血を吐くうき思ひ、涙にむせんで立ちけるが、きつと目と目を見合せて、
疵の痛みによろめく足も、よわる心を取直し、

兵衛
伊賀　イザ、

へ聲かけつき放し、見返りもせぬ弓取りの死ぬるを的に、

ト兵衛伊賀、お梅の方、奥方をつき放し、双方へ立別れる。お梅の方、奥方是にて眞中に、兩人顏を見合せ泣落す。兵衛、伊賀は顏を見合せ、ホロリと落る涙をすゝり、突き袖をする、此仕組よろしく、

へ出て行く。

ト三重よろしく、

幕

四幕目　刀鍛冶正宗内の場

役名　刀鍛冶團九郎、下男吉介實は來太郎國俊、澁川藤馬、組頭、五人組三人、職人、捕手、刀鍛冶正宗。正宗娘おれん、薄雪姫、腰元まがき、下女お杉其他。

本舞臺三間の間、常足の二重、正面のれん口、誂への神棚、押入、上の方一間の障子屋體、いつもの所門口、爰に職人三人刀の新身を鑢にておろしてゐる。すべて大和の國刀鍛冶正宗内の體、職人三人立ちかゝり、テンツヽにて幕あく。

職一　コレ權七、われが親方の團九どのは、さつきにから見えぬが、何をして居るな。

職二　さつきちつと細工場に見えたが、大方晝寢でもしてござるであらうわい。

職三　自分のなまけは取り置いて、親父さまを勘當するとは、あんまりな人ぢやアねえか。

聽一　それよなう、子が親を勘當するとは、珍らしい事ぢやアねえか。

職三　イヤ珍らしいといやア、爰の内のお娘、鍛冶屋の娘には惜しいものだ。

聽一　さうよ、アノお娘にならう事なら、目針を一本打込み度いなア。

職二　何を馬鹿な、お庭の櫻だ。

三人　あはゝゝゝ。（ト合方になり、奥より下女お杉丸盆に茶碗を載せ持ち出來り）

お杉　サア皆さん、お茶をお上り。（ト出す。）

職一　アイお杉どん、かまひなさんな。

お杉　サア、私も面倒だから、構ひ度くないが、お前達も職人のはし、手間取りだと思ひなさるかし

て、お蓮さんが大事になさんす故、奉公人の悲しさ、仕方なしに茶でも汲んで來るのさ。

職一　おいてくれ、御親切は有難いな。然しア、美しいお娘に大事にされるとは、嬉しいぢやアねえか。

職二　さうだ〳〵、何でもお娘がおいら達に氣があると見えて、大分氣が附くの。

お杉　何の氣があるの無いのと厚かましい、ちつと鏡でもお見よ、何でお前方に氣があるものかね。

職三　コレ、いくら氣をもんでも無駄だ、もう蟲が付いてゐるわ。

職二　ヲ、それ〳〵、アノ内の吉介よ。

お杉　コレサ、お前方はまア、きいた風な事をお云ひでないよ。吉介だの下男だのと、そんなに大ふうな事を云ふと、罰があたるよ。

職一　コリやアをかしい、吉介といやア、何で罰が當るのだ。

三人　それが聞きてえ〳〵。

お杉　知れたことサ、私といふおツこちがあるよ。

職三　何だ、おツこちだ、其のなりでおツこちたら、直ぐによい〳〵だ。

お杉　ナニ、よい〳〵だ、此がり〳〵野郎め。（トお杉職人三にしがみつく。）

三人　此のおたふくめ、飛んだ事をしやアがる。

ト角兵衛獅子の鳴物になり、四人ごつちやにたゝき合ふ。此時組頭羽織着流しにて出て來り、此中へはひりよろしく制して、

組頭　これはしたり、お前方もどうしたものだ、團九郎殿も留守といひ、殊に今日は親父どのゝ詑事ぢや。今にも組合の衆が打揃うて來たら、何とせうと思はつしやる。

お杉　それでも私の事を、よい〳〵ぢやの何のと、アノ野郎どもが。

組頭　これはしたり、それが惡うござるわいの、職人衆をとらへて、野郎ぢやの何のと、どうしたものぢや。イヤナニ、皆の衆も腹立つたでござらうが、わしが挨拶、まア〳〵料簡して下され。

職三　イヤモ、お前さんの御挨拶、面目次第もござりませぬ。

職一　ホンノ心安立の此の間違ひ、必ず惡く思つて下さいますなえ。

組頭　何の惡く思ひませう。イヤ然し、そつちこつちする內、團九郎殿も歸るであらう。

職三　成程、團九郎殿の歸らぬ內、爰らを片附けておきませう。

組頭　ヲヽ、さうぢや〳〵、親父殿も留守なれば、よう氣を附けさつしやれ。

ト捨ゼリフにて門口へ出て、

イヤ、噂をすれば影とやら、團九郎殿が向うへ見えるわ、ドリヤ親父殿の迎ひに行かう。

ト下手へはひる。

お杉　ナニ團九郎さんがお歸りぢやえ。（ト向うを見て、）ほんにお歸りぢや、コリヤ大變、アノ大きなお目玉をくはぬ內、私が役目の茶釜の下でも焚付けませうか。（ト奧へはひる。）

職一　ドリヤ、そんならわしらも奧へ行て。

皆々　一ぷくやらうか。

〽打連れ奧へ入りにけり、折から此家の團九郎、しぶ〳〵顏にて立歸る、續いて年寄五人組打連れてこそ來りける。

ト皆々奧へはひる、花道より團九郎、五人組三人附添ひ出て來り、花道にて、

組一　コレ團九郎どの、今日は是非とも親父どのゝ詫。

皆々　聞入れて貰ひませう〳〵。

團九　ア、往來でやかましいわいの、用があらば內へござれ。

〽口々に詫びるも耳に聞入れず、ヅッと通つて、

ト皆々舞臺へ來て團九郎先に皆々內へはひる。

妹、今歸つたぞよ。そして、見りやアおれが居ぬといつもこいつも、のらばかりかわさやアがるな。

〽わめき散らして大あぐら、

コレ、吉介は何處へ行た、おれん〳〵。（ト呼ぶ奥にて）

れん　あい〳〵、今それへ行くわいなア。（ト合方になり、おれん出て來り）ヲヽ、兄さん、今戻つてゞござんすか。皆さんも打揃つて、此間から父さんの事に就いて、いかいお世話でござりまする。

組一　ヲヽサ、今日は何でもわしらが寄つて、ぶッつけるつもりぢや。

皆々　まア〳〵、さう思うてゐやしやれや。（ト此時下手より組頭出て、門口へ來て）

組頭　ヲヽ、皆の衆も揃うてか、最前からこちの親父どのもわしらが内に待つてぢや、ちよつと爰へ呼んで來ませう。ヲイ五郎兵衛殿〳〵。（ト呼ぶ、下手にて）

正宗　ハイ〳〵、只今それへ參りまする。（ト門口へ來る、皆々見て）

皆々　サア〳〵、こつちへはひらつしやれ〳〵。

〽見るより娘はかけ寄つて、

れん　ヲヽとゝさん、ようまア戻つて下さんした。御無事な顔見て落着いた。どうぞ皆さん、よいやうに、詫事なされて下さりませ。

ト取付き縋り泣き居たる。

組頭　ヲヽ、サ〳〵、斯ら私らが掛るからは、必らず氣遣ひさつしやるな。

組一　コレ團九郎殿、道々もいふ通り、子が親を勘當するは、どうか勝手が違うて仕にくうござるて。

組頭　なれども餘り見る目が氣の毒故、此のやうに云合せて、押掛つての詫事でござるわいの。

組二　それ〳〵、親父殿もだん〳〵しをれたからは、子の慈悲も思ひ知られたでござらうわいの。

組三　何事も是までの事は、料簡さつしやれて、

組一　まア今度は我々に免じて、勘當許して、

皆々　やらつしやりませいなう。

團九　捨ておいて下され、大抵や大方で根性の直る親仁ではござらぬ、まア、たはけのせいらつ、聞いて下され。（ト合方になり、）まア知つての通り正宗といつては隠れもない刀鍛冶、一枚打つてしたゝかな金になる結構な手を持ちながら細工嫌ひ、これがたはけの第一番、たま〳〵刀を打

てば内證で金をくすね、六十の蓆破りから傾城狂ひ、さういふ惡い親を持つた子の身にもなつて見さつしやれ。其上にまだ十筋の白髪を床で日髪ぢや、俺が常々白い齒を見せいでさへ齒磨きの何の彼のと、洒落くさり、どうでまだ二三十年だい／＼の數を重ねずば、あの根性は直るまい、さて／＼子に世話を燒かす不孝親父ぢやわえ。

〽數へ立つる憎て口、正宗たまらず、（ト是にて正宗前へ出て）

正宗　ヤイ悴め、親のせりふをかい取て、あんまり物言ふな。じたいおのれを勘當せうと思うたに、へそが強さに勘當されて無念なわい。皆の衆も聞いて下され、おれが身體でおれが刀鍛へて、おれが金取つておれが遣はうが、傾城買はうが、何の構ふ事があらう、勘當されいでも大事ないわい。

〽こぶしを握り腹立ち涙、

團九　アレ見さつしやれ、皆の衆が世話燒いて詫事なかばに、もう此通りのやんちやん、中々あれでは直らぬわいの。

組一　成程是では團九殿が、腹立てしやるも、皆尤もでござるわいの。

組頭　コレ親父どの、たしなまつしやれ。まア親の身として子に口答へするといふは、惡うござるわ

いの。

組二　ひつきやう、こりや親子の仲の心安だてが、餘つての出そこなひでござらうわいの。

組三　さうぢや〳〵、此の通り皆打揃つての詫事ぢやによつて、まア今度の所は、

皆々　料簡さつしやれや。

團九　サア、指が汚ないとて、切つても捨てられず、性根を直して細工を精出す所存ならば、何れもの詞は背かぬ。

組一　デござるかな。そりや忝ない。コレ五郎兵衛殿、息子殿の言ふこと背いては、詫びしたこちとらが濟まぬぞや、隨分ともに梶を取らつしやれ。

組頭　まづは團九郎殿、早速得心して下すつて、詫に掛つたこちとら迄も、一分が立つといふものでござるわいの。

組一　コレ親父殿、必らず夜あるきせまいぞや。そして持藥を呑むというて鰻や玉子はよさつしやれ。

組二　兎角息子どのゝいかい世話、アヽこれを思へば世の中に、親は三界の首かせぢやなア。

皆々　アハヽヽヽヽ。

組頭　ときに、詫事も早速濟んだれば、

皆々　ヲヽさうぢや、わしらもお暇申しませう。

れん　これは何かと皆さん、御苦勞さま、有難う存じまする。

皆々　何のお禮に及びませう。

組一　そんなら其內、逢ひませう。

れん　ようおいでなされました。

皆々　サア、行きませう。

〽互ひにおいそれそこ〳〵に、打連れてこそ歸りける。（トテンツヽになり、皆々花道へはひる。）

〽團九郎納戸より、刀箱ひんだかへ立出て。（ト團九郎立上り、押入の內より刀箱を出し來て）

團九　コレ親父どの、此方は仕合せものぢやぞえ、今ちよつと勘當ゆるす筈はなけれども、鍛冶の秘密口傳刀の湯加減まで、我子に敎へぬしぶとい根性から、死ぬるまで敎へはせまいと俺も分別しておいた。其敎へぬがわごりよの果報、急に打たす刀があつて、手詰になつて許した勘當、

其刀とて外ではない、先達て秋月大膳の取次ぎせられし六波羅どのゝ御用の刀、是が即ち園部の左衞門が國行に鑢目を入れさせ清水へ奉納したる、調伏の影の太刀、此の刀を形にして、急に打たせいと六波羅どのより直々の仰せ、これ見られよ。

〽さし出せば蓋押し開き、刀を取出し、はじき元よりずつと鑢目とくと見て、

ト此文句の內、正宗箱の內より刀を出し、よく〱見て、

正宗　フウ成程、來國行が打ちたる影の太刀、燒刄鐵色あつぱれ見事、此の正宗も是程には及ばぬ及ばぬ。及ばぬながら刀鍛冶は、はげみある職なれば、隨分違はず此の通りに鍛へ打たん。

團九　ヲヽ、それなれば、隨分云はいでも六波羅殿より將軍家に献上の刀なれば、おろそかにはなるまい。ヤイ〱吉介、云付けた細工所の掃除はよいか、傾城狂ひに身の汚れた親父、風呂が湧いたらさつぱりと淸めさせい。アヽ結構な親父に掛つて、どつかりと氣くたびれ。ドレ、とろとろと遣らかさうか。

〽あたりけちらし入りにける。（ト團九郎こなしあつて奥へはひる。）

〽妹は父に取付き、すがりつき、

れん　さつきにから、嘸ぞ腹が立つたであらう。今度に限らず常々から、知れてある惡黨な兄さん、

お前も因果な子を持つたと思ひあきらめ、どんな憎て口云はれうとも、堪忍して内より外、どつこへも行て下さりますなえ。

〽手を合すれば、

正宗　ヲヽ殊勝な、よう云うた、したが必ず氣遣ひすな、そちが孝行にしてくれるのより、アヽ悪者めが可愛わいの。

〽涙ぐめば、

れん　アヽ嬉しや、其お心を聞いたれば、何も案じる事はない、風呂の湧くにも間があらう、其間に奥でお腰なと、さすつて上げうわいなア。

正宗　ヲヽ、そんなら娘、久しぶりで打ちくつろぎ、話しせうかい。

れん　サア、ござんせいなア。

〽連れて奥にぞ入りにける。（トおれん正宗思入あつて、奥へはひる。）

〽折ふし表に人聲して、當所の代官瀧川藤馬、案内もなく入り來り、

ト時の太鼓になり、花道より瀧川藤馬、中間附添ひて直に門口へ來て、

藤馬　團九郎は宿に居るか、團九郎〳〵。（ト呼ぶ、奥にて）

團九　ハイ〳〵、どなたでござります。(ト云ひ乍ら出て、藤馬を見て) 是は〳〵、藤馬樣、御用あらばお召寄せなされいで、御自身のお出で恐れ入奉りまする。

藤馬　イヤナニ團九郎、今日わざ〳〵參りしは別儀でない、園部薄雪此邊にかくれ居る由、大膳殿お聞きなされ、それ故毎日詮議に廻る。其方には刀の儀に就いて用事あり、少しも早く邸へ來れ。

團九　左樣なら、刀の御用につきまして、お邸のお召し、かしこまつてござりまする。

藤馬　身共は詮議の筋もあれば、暫時休息致し、後より參る程に、其方は家來と同道しやれ。コリヤ〳〵宅介、團九郎を邸へ案内しやれ。

家來　畏まりました。

團九　左樣ござらば、藤馬樣。

藤馬　片時も早く。

團九　ドリヤ、行て參りませう。

ト羽織引きかけ出て行く。(中間先に團九郎花道へはひる、藤馬思入あつて)

藤馬　コリヤ、誰か茶を一ツくれぬか。(ト手を打つ、奥にて)

お杉　はい〳〵。(ト茶を汲んで持出て來り、)これはどなたかと存じましたら、藤馬樣、よう入らつしやりました。(ト茶を出す、落馬受取る。)

藤馬　イヤ、お杉か、いつも〳〵美しい事ぢやなア。ア、、氣の惡い事だ。

お杉　又藤馬樣の御常談ばツかり。

藤馬　常談ばつかり毛十六、ハ、、、、イヤ其の十六七が可愛らしい、ア、お娘のおれんは内かな。

お杉　ハイ、慥か奥でござりました。

藤馬　それはてうど、

お杉　エ、

藤馬　サア、じやう〳〵參つて世話になる故、奥へいてお娘に禮を申さう。お杉、案内しやれ。

お杉　それは御丁寧な、サアかうお出でなされませ。

〽下女が案内に澁川は衣紋つくろひ入りにける。

トこなしあつて奥へはひる。知らせにて道具廻る。

本舞臺正面二間中足の二重、庇、本縁付き、向う腰張りの茶壁、暖簾口、上手建仁寺垣下手誂への風呂場。正面開き戸、横手に金襖、好みの通りに飾り付け、此脇柴垣、いつもの所、枝折戸よろしく道具納まる。

〽同じ下世話の奉公も、弟子と久三を掛け持ちに、一荷に荷ふ吉介が、濡れより濡るゝ濡仕事。

ト此内上手より、下男吉介實は來太郎國俊、水の手桶を荷ひ出で思入あつて、

吉介　ヤレ〱、忙がしや〱細工所の掃除せいと云ふかと思へば、ソレ風呂へ水入れい焚付けいと、相槌打つより水を汲んだり、これがほんの火水の責であらうわいの。

〽つぶやきおろす荷ひたご、水も洩らさぬ親と子の話ししまうて娘のお蓮、心しよき〱いそ〱と、ゆかた片手に、

ト此内吉介、下手の風呂へ水を入れる事よろしく、此内奥よりお蓮浴衣を持ち出て來り、

れん　そこに居やるは、吉介ぢやないか。

吉介　ホンニ、あなたはおれん樣。

れん　そなたは爰に何してぢやえ。

吉介　今風呂へ水を入れるのでござりまする。
れん　アノ、用がある程に、ちよつと來てたも。（ト吉介の袖を引く。）
吉介　アヽもし、着物が濡れまする。
れん　濡れても大事ない、コレ吉介。
吉介　何でござりまする。（トなまめきたる合方になり）
れん　まア悦んでたも、兄さんの機嫌も直り、とゝさんもお歸りなされたからは、此のやうな目出度い、嬉しい事はない。
吉介　イヤモ、私とても大旦那樣がお歸りなされ、此やうな目出度い、嬉しい事はござりませぬ。
れん　サア、目出度い嬉しい返事を、私に聞かしてたもいなう。
吉介　ナニ、嬉しい返事とは。（トおれん思入あつて）
れん　コレ、こちの吉介。
吉介　エヽ、何でござります。（ト眞面目にいふ、おれんこなしあつて）
れん　何でとは、ソリヤ聞えぬ、わしが心を常々から知つて居ながら、其のやうにへだてる心は胴慾ぢやわいなう。

吉介　又其やうな事御しやりまする。私めは奉公の身の上、貴方は此家のお娘御、其の内相應な御縁もあらば、それへお出でなさるであらうに。

れん　エヽ又其やうな事を言うて、人をぢらすが殿御の癖、初めて逢うた目見得の時、

へいとしらしいと思うたが、味な縁の千代結び、どうぞ女夫になるやうと、無理な願ひも出雲の神、それ程までに思ふもの、情なうして何時までも、なぶらしやんすが樂しみかと、やいの〳〵と寄添へば、

吉介　アヽ勿體ない、親方の娘御、願うてもない仕合せ。お前樣がそれまでに思うて下さりますれば、ハテ、私とても人の端、お前の詞は背きませぬ。

れん　そりや、眞實。

吉介　誓文、相槌打たぬ法もあれ。

れん　其の誓文がほんなれば、早う女夫になつてたもいなう。

吉介　それは又あんまりさつきやく過ぎる、まア下地をとくとつくらうて。

れん　イヤ〳〵、つくろふ事も何にもない、見やる通り兄樣の、アノ氣では永うとゝさんも一ツには置かれぬ、三人一緒に取つて退いて、一日なりとも早う樂しみがこしまし度い。それぢやによ

吉介　つて、どうぞ女夫になる思案を。急にせいと仰しやるのか。そりや、私も合點なれども、内方へ弟子奉公に來て、半季そこらで、鎚の打ちやう鑢のすり樣は大がい覺えましたけれども、肝腎の燒刄の湯かげん、暑いか温いか知る事ならず、それではどうも正宗樣を、養ひませう當てがござりませぬ、というて父御樣に仕事させましては、女夫が養はるゝも同然、爰が相談、どうぞお前の云ひなしで、親旦那より大事の湯かげんお傳へなされて下さらば、誓文其時は、物の見事に養ひまする、此の分別はどうでござりまする。

〽わりなく語るに打ちうなづき、

れん　さればいの、我子でも心を見立てぬ内は鍛冶の道は傳へぬと、兄樣にさへ教へなされぬ事なれば、どうあらうやら、そなたはわしの聟なら子も同然、ツイお教へなされるであらう、いつぞはとゝさんの機嫌を見て云ふわいなう。

吉介　そりや、眞實でござりますか。

れん　其の代り今いうた事、忘れてたもんなや。

吉介　はて、承知致して居りまする。

れん　吉介。
吉介　おれん樣。
れん　エヽ、嬉しいわいなア。（ト兩人寄添ふこなし）
　　〽話しなかばへ澁川藤馬。（トのれん口より澁川藤馬出て、此體を見て）
藤馬　旨いな〳〵。（ト是にて兩人びつくり飛退き）
吉介　是は藤馬樣には、いつの間に。
れん　惡い所へ。
藤馬　ヤ。
れん　ようお出でなされました。（トおれんの傍へ藤馬來て）
藤馬　エヽ腹の立つ事であるわい。コレお連ぼう、わが身は情ないぞや〳〵。（ト合方になり）わしが來る度毎に、手を替へ品を替へ口說けども、ぴんしやん〳〵するも道理、あのやうな虫があるからぢや。コレ吉介、われもわれぢや、なんぼわしよりそなたの方が、少しばかり男がよいというて、さう見せ付けるものぢやないぞよ。
吉介　是は又あられもない事、私は此家の弟子、お主の娘に何のまア。

れん　エヽ、又主あしらひかいの。
吉介　サア、ナアお主。（ト呑込ませ、）サアお主樣の娘御に不義致してよいものでござりませうか、ナアお蓮樣。
れん　ほんにそれ〳〵、吉介に限りそのやうな事はござりませぬ、それは〳〵氣立がようていやみがなうて、しやんとしてよい殿ぶりぢやと。
吉介　何ぢやと。
れん　サア、よい弟子を持つたとゝさんの、常々いうてゞござんしたいわいなア。
藤馬　ヲヽ、それが眞實ほんとうなら、身共も安堵いたす。コリヤ吉介、そんならいよ〳〵其方とお蓮ばうと何でもないな。然らばお蓮ばうを身共へ取持つてくりやれ。
吉介　エヽ。
藤馬　エヽとはいやか。
吉介　サア、それは。
藤馬　さては矢つ張り兩人は、不義して居るな。
吉介　どう致しまして。

藤馬　そんなら身共を取持て。」

吉介　サア、それは。

藤馬　サア、

吉介　サア、

藤吉　サア〳〵。

藤馬　早う取持つてたもいなう。（ト吉介思入あつて、）

吉介　如何にも、お取持いたしませう。

れん　ア、コレ、めつたな事をいうてたもんなや。

吉介　サアよろしうござりまする。何事も私が呑込んで居りまする。

れん　それぢやというて。

吉介　ハテ、悪いやうには致しますまい、まアお任せなされておおきなされませ。イヤ申し藤馬様、貴方にはお蓮様を御懇望なされますが、随分お取持ち致しませうが何をいふにもいまだ年若、顔と顔とを見合せては、恥しいのが先に立ち、とんと埒明きませぬ。そこで早速話しの出来ます思ひつきが。

藤馬　ヲヽ、その話の出來る思ひ付きがあるかな。

吉介　サア、その思ひ付きと申しまするは、何と貴方目隱しをなされては如何でござりませうかな。

藤馬　然らば身共に、めんない千鳥を致せかな。

吉介　左樣でござりまする、さうするときは、互ひに顏を見合はぬ道理、

藤馬　成程、お蓮ばうさへ應と得心するなら、心中代りに何なりと。

吉介　そりやもう、早速きまりと申すもの。左樣ならかうなされませ。（吉介手ぬぐひにて藤馬に目隱しをする。）サア、かう致しますれば、くらやみも同じ事、恥かしい事はござりませぬ、ナモシ、お蓮樣。

トおれんへこなし。

藤馬　サア／＼、話はどうぢやな／＼。

吉介　ヘイ、今もう少しでござりまする。イヤ、もう少しと申せば、今に二人が世間晴れ、女夫になつた其時は、お蓮樣ではない女房共。

れん　さうなる時はこちの人。

藤馬　おゝ／＼、三度の飯も取膳で。」

吉介　人目かまはず、
れん　氣兼ねせず、
藤馬　寢たり起きたり。
吉介　ヤ。
藤馬　ヱヽ、旨いこツちやな。
吉介　モシ、色男樣め。
藤馬　ヱヽ、おだてゝくれるなえ。（ト吉介おれんを引寄せる。）
れん　おゝ嬉し。（ト抱付く、藤馬こなしあつて）
藤馬　ヱヽ有難い。（ト嬉しき思入、此時奥にて）
お杉　吉介どん〳〵。（ト呼ぶ、是にて兩人ほぐれて）
吉介　はい〳〵、只今それへ參りまする。
藤馬　コレ〳〵、お蓮ばう今のを聞いてはどうもたまらぬ、顏は見ずともちよつとこちらへ。
　ト藤馬さぐり寄つて、おれんの袖を引く。
れん　アレ、着物がほころびるわいなア。（ト振放す。）

藤馬　これはしたり、ほころびる、モウ、肩上もとうに下し、もうほころびてもよい時分、コリヤ餘りおほこ過ぎるといふものぢや。（トおれんへ寄り添ふ、此時奥にて）

お杉　吉介どん〳〵、旦那樣がお呼びなされる。

吉介　アイ〳〵。

れん　アレ、人が來るわいな、惡い事をなされまするな。コレ吉介や、そなたをとゝさんが呼んでぢや程に。（吉介に囁き〔〕）ナ、わしは風呂場に待つて居る程に、用をしまうたら早うおじやヤ。

ト奥にて又呼ぶ。

お杉　吉介どん〳〵。（ト呼び乍ら出て來る）旦那樣が呼んでぢや、早うござんせ。

吉介　はい、只今參る所なれど、爰にちよつと。（ト思入あつて〔〕）幸ひお杉どの、コレ。（ト囁き〔〕）なア、頼んだぞえ。

お杉　合點でござんす、早うござんせ。

吉介　そんならお二人、一寸行て參りまする。

〽勝手口より湯殿口、しめくゝりなき年ばひも、戀の機轉は格別なり、

ト此内におれんに入替り、お杉住ふ。吉介は奥へはひる。おれんは拔足して湯殿の中へはひる。

〽跡に藤馬はぞく〳〵顏、（ト藤馬おれんと心得、思入、合方になり）

藤馬　これはしたりお蓮ぼう、もうあたりに人も居ず、ちとくだけたがよいわいの。（引寄せる。）コレそなたにぞつこん惚れゝばこそ、武士の堅氣もがらりと捨て、兩手を下げて仲立賴み、先づ是までは漕ぎ付けたといふものぢや。したが、又此の藤馬樣の心に隨へば、仕合せぢや、どうぢやな〳〵。

トしなだれかゝる、お杉をかしき思入にて、だまつて居る。

これはしたり、わしにばつかり口を聞かせ、そなたはなぜ默つてばかりゐやるぞいナウ。ハヽハア、どうでも矢つ張り恥しいか、ヲヽ、尤もぢや〳〵然らばちよつと手附に口を。（ト寄添つて無理に口を吸ひ）あゝどうでも顏が見えいで、勝手が惡い。（手拭ひを取つてお杉を見て）ヤ、今のはわれか。

お杉　はい、貴方はまア、人を捉へてどうなされましたのでござります。

藤馬　ヱヽ、胸の惡い、コリヤ吉介〳〵。（トあたりを見て）コリヤお蓮めも何處へやら、さりとは〳〵憎い奴、誰有らう此の澁川を甘く見てよくも〳〵嘲弄したな。うぬ覺えて居らう。（ト行からするを止め）

お杉　まア〳〵待つて下さんせいなア。

藤馬　何をおのれが、すつ込んで居らう。（お杉を蹴たふし、）

〽あたり蹴散らし行く後に、（藤馬はひる。）

お杉　アイタヽヽヽ、ヤレ情ない、人のお情所を蹴るといふは、ほんに情知らずの侍ぢやなア。

〽納戸へこそは入りにける。（トお杉こなしあつて奥へはひる。）

〽吉介はとつかはと、（ト吉介出て來り、）

吉介　ヤレ〳〵、悪い所へ邪魔が來て、旨い話の腰折つたわえ。それはさうとお蓮樣は、風呂場に待つてござるとの事、まだ仕殘した話あり、人の來ぬ間にちつとも早く。

〽風呂の戸明けるも不遠慮と、（ト湯殿の傍へ來て、）

モウシお蓮樣、ツイ行て來いと仰しやつたは、何の御用、私もそこへ參りませうか、お蓮樣、

モシお蓮樣、

〽云へば答へず、

コリヤどうぢや、コリヤ持たせぶりでござりまするか、その過怠には手ぬぐひをかうつくね、かう丸めて、美しい其顔へ、

〽どんと明けたる風呂の中、娘にあらで親正宗、はツと驚き敗亡なし、絞りかけたる手ぬぐひも、手持無沙汰に見えにける。

ト吉介風呂の戸を引明ける、内に正宗腰かけて居る、吉介びつくり思入、

正宗　ヲヽ吉介、其の着物取つてくりやれ。

〽と何氣なき詞に、少し氣も落着き、

吉介　はい、モウお上りでござりまするか、お脊中でも流しませうに、お早いお上りなされやう。

正宗　ヲヽ、俺もさう思うたが、まだ水放れがしたばかり、是へはひると風を引く。然しそちもさう思うてなら、そこへ焚付けてくりやれ。

吉介　へイ、畏まりました。

〽畏まつたと、釜の前、へト合方になり、吉介釜口へ來り焚木をさしくべる事、正宗思入あつて、

正宗　そちも俺が家へ來て、半季ばかりも居るに、俺が風呂へはひる加減を知らぬか。

吉介　左樣でござりまする、今の先水を汲み込み、お知らせ申さぬは私が不念、御免なされて下さりませ。

正宗　つかぬ事ぢやが、そちが生國は慥か山城ぢやと申したな。

吉介　はい、左様でござりまする

正宗　ムヽ、慥にそちが生國に、來と名のつく刀鍛冶がありしが、そちは知つて居るか。

吉介　ハイ知る人ではござりませねど、兼て聞き及びました名でござりまする。

正宗　ムヽ、其の又國に銘人がありながら、わざ〳〵鎌倉へ下りしはどういふ譯ぢや。

吉介　ハイ、未だ其頃は身持放埓、やうやく此頃心付き、思付いた刀職人、何分お頼み申しまする。

正宗　シテ、そちはいくつになる。

吉介　ハイ、私はとりまして、二十七になりまする。

正宗　ハヽ、二十七ぢや。（ト指を折り考へる思入あつて、）丁度十八九年程、アヽ思へば、一タ昔ぢやなア。

吉介　ソリヤ、アノ何が。

正宗　イヤサ、月日の立つは早いものぢやといふ事。イヤ、吉介まだぬるい、もつとたけ。

〽年寄りのいら〳〵と、湧きかへる湯に手をさし込み、

ト此内國俊薪をさしくべる事、正宗風呂の湯へ手をさし入れ、思入あつて、

ヲヽ是で丁度よい、吉介爰へ來やれ。そちも是から風呂焚なら、おれが入りかげんは此位ぢや

程に、よう試みて覺えて居よや。
〽吉介が腕くび取り、湯桶へぐつとつきこみ、
ト正宗、國俊の手を取り、風呂の中へさし入れ、
どうぢや、おれが風呂の入りかげん、よう覺えたか。（ト國俊不審のこなし。）
吉介　ハイ、よう覺えましてござりまする。
正宗　サア、正宗が秘密の湯かげん、覺えたか。
吉介　や。（トかけ寄り、風呂へ手を入れる、正宗その手をおさへ〔〕）
正宗　イヤサ、この湯かげん手に覺えずと、とつくりと心におぼえ、再び鍛冶の名を上げい、コリヤ
來太郎國俊。
〽と突放せば仰天し、
國俊　スリヤ、其風呂の湯かげんが、正宗殿の刀の湯かげん、ホヽ。
〽あきれて詞なかりしが、
あつぱれ、某は來國行が悴國俊、われ若氣のあやまり、家業にうとく、傾城に身を持ちくづし、勘當受けたる其内に、何者とも知れず父を討たれし其悲しさ、先非を悔いても返らずと、

何卒刀鍛冶の秘密を知り、親の家名を立てるのが、せめて不孝の罪亡ぼしと此家へ奉公、思はずも大事の秘密を某へ傳へ給ひし正宗どの、ハ、有難う存じまする。（トこなし、是にて正宗前へ出る、國俊心付き。）

正宗　イヤ、其樣に禮受くる覺えはない、たゞ風呂の湯かげん教へるばかり。

〽手の舞足の踏み所望み叶うて吉介が、悦び勇むも道理なり。

國俊　さにあらず、かゝる大事の秘密をば、お傳へ下さるのみならず、どうして我を國俊と御存じありし其仔細は、

〽仔細ぞあらんと問へば、

正宗　ヲヽ、愚な事をいふ人ぢや、性は道によつて賢しといへば、こなたが身の上も國行殿がお死にやつたも、知つてゐるわいなう。

國俊　何とおつしやりまする。（ト床の合方。）

正宗　いつぞやそなたが刀鍛冶に、奉公望みに參りし折、器量骨柄よい男ぢやに、ナゼ職人に奉公するぞ、見れば見る程さな顏に、見知りある來太郎國俊、扨は此家を便つて刀鍛冶の秘密を知り、絕えたる來の家を取立てる心よな、アヽ若いが、氣の毒やと、我子の惡者に引きくらべ、

〽心ざしをば感ぜしが、心を感じたばかりでは、家業の大事は教へられぬと、
元此の正宗はそちの祖父來國吉が弟子、幼少より奉公せしかば我子の如くに不便をかけ、一子相傳の秘密を殘らず我に傳へられしが、子より外へ傳へじと神文にもしたれども、

〽風呂の湯かげん教へまじと、誓紙も出さねばせいごんも立てず、
今日只今不思議にも、師匠の孫にめぐり逢ひ、風呂の湯かげん教ふるが、

〽師匠への恩がへし、
殊に我が娘とも、サア、まんざら他人の樣にもなし、かならず兄の惡者めに、此事沙汰せられな。

〽沙汰せられなとありければ、聞くに嬉しく國俊も、再び來の家を興し、

國俊　冥土の父に勘當許さるゝも、偏に正宗殿の御高恩と、有難う存じまする。

〽大地に額をすり付け〳〵、かたじけ涙にくれゐたる、折から納戸に聲高く、

ト奥にて、

團九　親父どん〳〵。（ト呼ぶ、正宗こなしあつて）

正宗　アリヤ悴の聲、目付かつては事むづかし。コレ、吉介。

〽とさあらぬ體にもてなせば、（ト團伜浴衣をたゝみゐる、是にて奥より）

團九　親父どん／＼。（ト出て來り）ヲヽ爰であつたか、サア／＼急に忙がしくなつて來た、けふ中に刀を打つて六波羅へ差上げよと代官所よりきびしい云ひ付、片時も油斷はならぬ、サア／＼早く早く。

正宗　〽せけどもせかぬ名人かたぎ、こんな事もあらんかと、かね／″＼用意したる鍛へおろし、燒刃を渡す迄の事、いつもの通り兩人は、相槌の用意せよ。我も靜かに裝束せん、兩人來やれ。

兩人　ハツ。

〽打連れてこそ入りにけり。

ト正宗先に團九郎、國伜付添ひ、奥へはひる。これにて此道具廻る。

本舞臺三間の間平舞臺、一面の板羽目、左右共板戸、眞中よき所に鞴を直し、鍛冶細工道具一式、正面に誂への注連を張り廻しあり、よろしく道具納まる。

〽細工場に注進引き渡し、弟子と息子を右左り、中央には五郎兵衞正宗、

ト謠への鳴物になり、眞中に國俊、侍烏帽子素抱のなり、金床に刀をのせ、幣を持ち、上手に團九郎、下の方に正宗、同じく、附烏帽子素抱のなり、長き柄の槌を持ちて控へ居る、此の見得よろしく眞中へせり上る。

〽素抱の袖も淸らかに、淨めの火打きりかけ〳〵、鞴に寄り金床に刀を据ゑ、天地四方を禮拜し、

ト三人よろしくこなし、のつとになり

國俊　仰ぎ願はくば鍛冶の氏神、天目一箇の神慮に叶ひ、われ又今拵刀にて、悪魔降伏なし給へ。

〽心中に祈念すれば、二人は槌をとり〳〵に、てう〳〵てん〳〵陰陽の、數に合してゝてん〳〵からり、てん〳〵天下にきたいの名鍛冶、秘密を凝し打ち納む。

ト此時鳴物にて、刀をうつ事あつて、

〽すでに燒刃の湯かげんと、刀を湯舟にさしいるれば、夕紅の日に海をそゝぐる如く、湯けむり四方に立登り、ものゝあいろも見えざれば、

ト國俊件の刀を水槽の中へ入れる、是にてパッと湯けむり立つ。

團九　正宗が家に傳はる燒刃の湯かげん、覺えるは今此の時、しめた。

〽槌投げ捨て團九郎、燒刃の湯槽に手をさし込み、湯かげんさぐつて見る所を、不孝の悴おのれに秘密傳ふかと鍛へおろしふりあげて、右手の小がひな打落せば、うんとのツけに反り返り、苦しむ聲に妹が仰天、一間を走り出て、

ト此内團九郎舟へ手をさし入れる、正宗びつくりなし、手早く鍛へおろしにて腕を切る。國俊忍入、奥よりおれん走り出て、

れん　ヤヽ、兄さまかいとしや、いかに仕落があればとてあんまりむごい、モシ、とゝさま。

〽と見れば見かはす父の怒りのかんばせに、國俊も詞なく、手負ひをいたはるばかりなり、深手に屈せぬがむしやもの。

團九　こりや親父、此の團九郎に何科あつて、此樣に切りやつたのだ。コレ世間の親はナ、子に家業を讓りたがるに、貴樣は我子に刀の湯かげん知らすまいとて、此腕を切りやつたか。おれがためには地獄の獄卒、もう此上は子でも何でもないわ。

〽とむしやぶり付くを引ぱづし、たぶさをつかんですり付け〳〵、

正宗　ヤイ悴め、何の科で切つたと、ようも〳〵ぬかしたな、おのれは常々澁川藤馬と狀通なし、合

點が行かぬと思ひしが、大膳が惡事に與し、園部左京の兩家をつぶし、國行が死骸はおのれが業であらうがな。

園九　親父、そりや何を云やる、園部左衛門が國行に調伏の鑢目を入れさせ、清水へ奉納したは誰知らぬものはない、是れ程に慥な事を、おのれが仕業とは、何を證據に。

正宗　ヤイ〳〵、ぬかしをるな、云ふに及ばぬことなれども、來の家では四筋にて横やすり、最前國行が打つたる預かりの大刀を見れば、三筋にて正宗が流の筋違鑢、右をあげ左りを下げて逆にするが調伏の鑢目、我家の秘密、外に誰知るものがあらうか、大膳に頼まれて、汝が業に極まつた、何とそれでもあらがふか。

〽其の惡い事をしたほてゞふしを、打切つたはあやまりぢやあるまいがな。

アノ惡い事した其ほてゞふしを切るも親の慈悲、然し乍ら惡い事は覺え易いもの、どうした事にか調伏の鑢目覺えて、大それた事しだす奴に秘密の湯かげん教へなば、まだ此上に大きい惡事に與し、腕切る斗りか、コレ其首が落ちようも知れぬ。

〽親はそれが悲しさに、手を切つたは情ぢやわヤイ。

ふだんおのれが根性の、直らぬを見ぬいた故、六十に餘つて傾城買の眞似をして、金銀を貯へ

たも、此の妹が可愛ゆさ。

〽子がなうて泣くものないと、下世話に言ふに違はず、屈竟な子がある故に、後生一ぺん、願ひはせず、涙ばつかりこぼすわヤイ。

〽なげゝば娘も共涙、覺えある罪科に、團九郎も身を悔み、あやまり入りたる風情なり、始終を聞くより國俊も感じ入り、

國俊 御親父の心底驚き入る、いかに我子の爲なればとて、きりも切つたり鍛へたり、鍛へおろしで是程に切られしは銘作、業といひ心といひ、又たぐひなき正宗どの、只今の物語にて、父が無もそんならいよ〳〵。

正宗 ヲヽ、大膳が所爲と言ひ乍ら、其方がためには悴めも親の敵同然、爰が一つの國俊殿へ頼み、親の氣といふものは惡い子程なほ不便な、子の手を切るは一命を取る程悲しい、其手を切つたは親子の手を切つたも同然親子の手を切るからは、この團九郎と其妹は赤の他人、敵の妹を女房に持つたと言はるゝ事もあるまい、子の手を切つた代りに、娘と仲よういつ迄も夫婦の手を、必らず〳〵切つて下さるな。兄めも疵本復して根性も直つたら、おれが目を塞ごとも、そなたがおれになり代り、庖丁でも打たしててんぽう正宗となりとも、どうぞ言はして下され國俊ど

の。

〽老のくり言取交ぜて義強き親父もたもち兼ね、わつとばかりに泣く涙落ちて流れて鞴場の、炭火も消ゆるばかりなり。

ト皆々よろしく愁ひの思入。

〽かゝる所から表の方、姫を伴ひ腰元まがき、息を切つてぞ走りつく。

ト ばた〳〵にて花道より、まがき薄雪姫の手を取り出來り、直に門口へ出て來て、

まが　卒爾ながら、チト御無心が申したい、御覧の通り女子連れの者、道にて惡者に出合ひ、甚だ難儀いたすもの、暫く預かつて隱して下さらば、有難う存じまする。

ト是れにて國俊こなしあつて、

國俊　それは定めて御難澁、どれ〳〵。(ト門口へ來て、まがきと顏見合せ〕たしかにそなたは、まがきどの。

まが　おゝ、さういふお前は國俊さま、こゝにはどうして。

國俊　さうして、それにござるは、姫君樣ではござりませぬか。(ト正宗見て〕

正宗　まことに息女、薄雪さま。

國俊　何はともあれ、先づ〳〵これへ。

〽上座へこそは請じける。(ト まがき薄雪姫を上手へ通し、こなしあつて)

申すも便なきことながら、兩家のお館騷動よりかゝる御難儀、我父までも討たれたるお家へ仇なす大惡人、それと聞きしはたつた今、正宗殿に承はる。

團九　いや、その仔細は團九郎が、まツ直に申上げん。

〽疵痛みせぬがうぎ者、流るゝ血しほおしぬぐひ〳〵、

ト 此內團九郎の腕の疵を、おれん介抱して、手拭にてくる〳〵まき、思入あつて前へ出て、

團九　定めてお見知りもあらん、拙者は正宗が倅團九郎、當春六波羅へ下されし時、非道とは知り乍ら、慾に耽り大膳が惡事に與し、

〽御兩所を科にとつておとさんため、影の刀に調伏の鑢目を入れさせ、

其場にて人知れず、國行を討つたるも、大膳が仕業。

〽この事他言いたさじと、

誓ひをたつたれども、御らんの通り腕を切り、父の諫めは骨身に染み、本心に立返つたる此身のさんげ、

〽さんげに人々案堵の思ひ、
正宗　スリヤ、本心に立返つたか。
團九　おとつさん、本心になつた〳〵。
まが　悪事につよき團九郎どの、善にもとづく上からは。
薄雪　左衛門さまや我身の上、とかくよしなにたのむぞや。
國俊　お氣遣ひ遊ばすな、おかくまひ申しまするでございませう。
〽聞くにまがき姫諸共・悦びあふぞ道理なり。時しも表へ澁川藤馬、大ぜい引連れどつとかけ付け、
トドン〳〵になり、藤馬りゝしきなり、捕手四人付き出來り、門口へ來て、
藤馬　ヤア〳〵、者共承はれ、園部左衛門薄雪姫、やう〳〵尋ね捕へんと思ひの外に雲をやみ、逃げうせて駈込んだは、こつちの味方の團九が家、袋の鼠の二人の奴等、物な言はせずからめとれ。
ト捕手皆々〳〵內へはひらうとする、國俊立ちかゝつて、
國俊　ヤア、成らぬ〳〵、おのれが主の悪事、今日只今明白に現はれたり、こつちよりおのれから、

覺悟ひろげ。

へと身がまへたり。

藤馬　ヤア、小ざかしい覺悟呼はり、惡事とは、そりや何が。

團九　オヽ、其の證據は爰に居る、大膳が片腕とも賴まれたる團九郎なれど、肝腎の片腕を切落され、ありのまゝに白狀した、主從ともに首さし延べて觀念しろ。

へ觀念しろと呼はつたり。

藤馬　扨は團九郎めが二心にて、もうこの上は彼奴めぐるめに討つてかゝれ。

捕手　合點だ。

へ兩人得たりと影の太刀鍛へおろしを打ふり〳〵、親々の打ちし刀の切味試みよと、ひらめき渡る太刀風に、火花を散してうちあふたり。

トドン〳〵に成り、捕手皆々國俊團九郎へうつてかゝる、國俊は影の刀を持ち藤馬へかゝる、此内正宗、まがき、薄雪姫、おれんは奥へはひる。ト國俊藤馬を奥へ追込み、團九郎四人を相手に立廻りきつと見得、是れより誂への鳴物になり、仕抜きの立廻りよろしくあつて、團九郎正面の注連をとり、立廻りの間にたすきをかけ、鍛へおろしを左に持ち皆々を切りたふし、きつと見得、此時以前の藤馬、

國俊立廻りながら飛出て來り、跡より正宗、薄雪、まがき出來り、國俊、藤馬を切り倒し、とゞめを刺す。

正宗　出來した〳〵。

まが　イザ、此上は左衛門さまへ申上げ、大膳が非義非道、六波羅へ訴へ、敵討を願ひ、亡き父君へお手向けあれ。

〽と勇み立つれば國俊も、

國俊　左衛門様もろとも、本意を遂げ、再び歸つて舅どの、始終の御禮申すべし。先づそれ迄は正宗どの。

正宗　聟どの、モウお行きやるか。

團九　おツつけ、目出たう、吉左右を。

れん　必らず待つぞえ、こちの人。

國俊　ヲヽ、氣づかひせられな、おの〳〵方、大膳いかほど逸るとも。

〽我又神力應護を以て、不倶戴天の父の仇、習ひ覺えし直燒刄、鍛へにきたふ金あじにて、敵の首を討ちおとし、つき添ふ奴ばら片端から、從横無盡に切

りまくり、
やがてぞ本望、
まが　本領安堵は、幸崎園部。」
正宗
圓九　急いで出立、
國俊　さらば。
皆々　さらば〳〵。
〽詞に折なくきずもなく、姫を伴ひ國俊は、勇みすゝんで、
ト此時捕手一人出てかゝるを、國俊見事に投げつける。
皆々　さらば。
〽急ぎゆく。
ト双方思入よろしく、
幕

新薄雪物語（終り）

大正十四年十二月八日印刷
大正十四年十二月十一日發行
大正十四年十二月十三日三版

編纂者檢印

『時代狂言傑作集』第二卷
定價金參圓

編輯者 河竹繁俊
　　　 濱村米藏
　　　 渥美清太郎

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　 和田利彥

印刷者 東京市神田區松下町七番地
　　　 佐藤磨

印刷所 東京市神田區松下町七番地
　　　 明治印刷株式會社

發行所 東京市日本橋區通四丁目五番地
　　　 春陽堂
電話大手五一、四二二〇番 振替東京一六一七番

日本はし
春陽堂版